兵庫県文化財調査報告書　第72－2冊

七日市遺跡(I)

―第2分冊―

(弥生・古墳時代遺跡の調査)

―― 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(Ⅻ－2) ――

1990

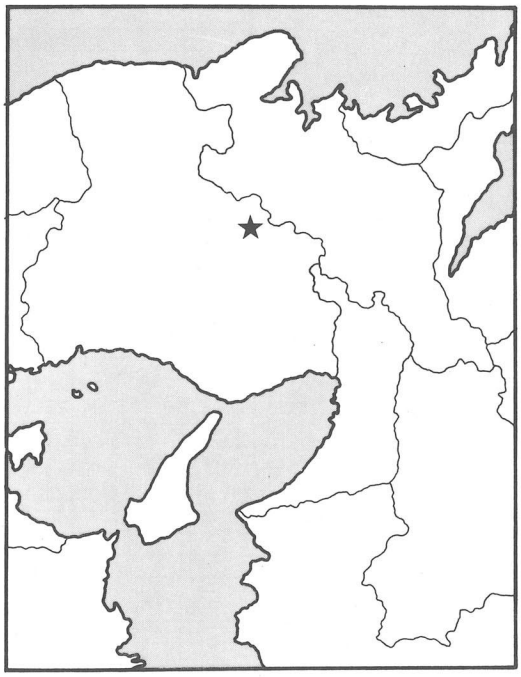
兵庫県教育委員会

七日市遺跡(I)

―― 第 2 分 冊 ――

(弥生・古墳時代遺跡の調査)

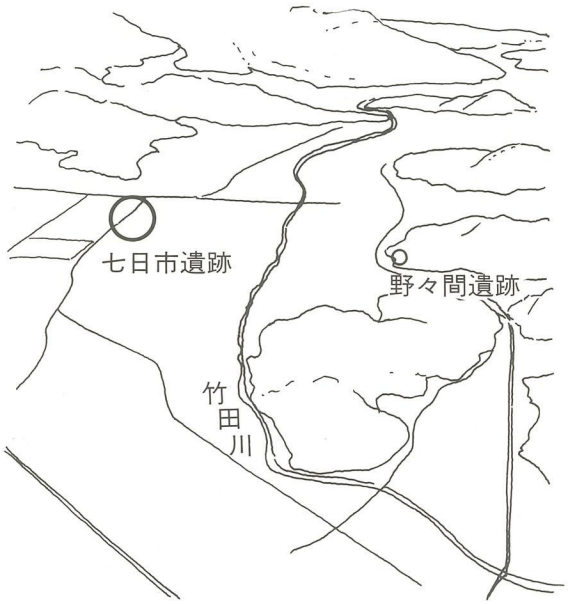
―― 近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(Ⅻ－2) ――



1990

兵庫県教育委員会

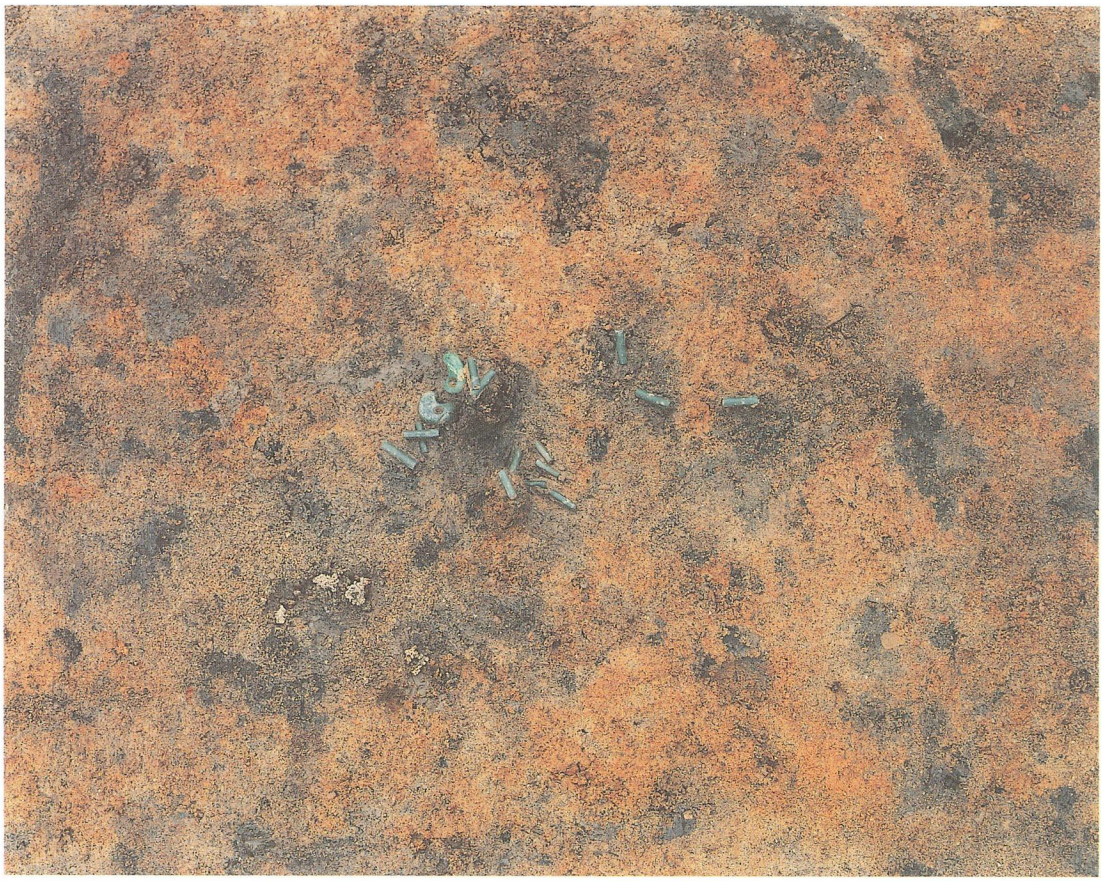
1．遺跡遠景(南から)
1982年 撮影



1．遺構群（O地区）

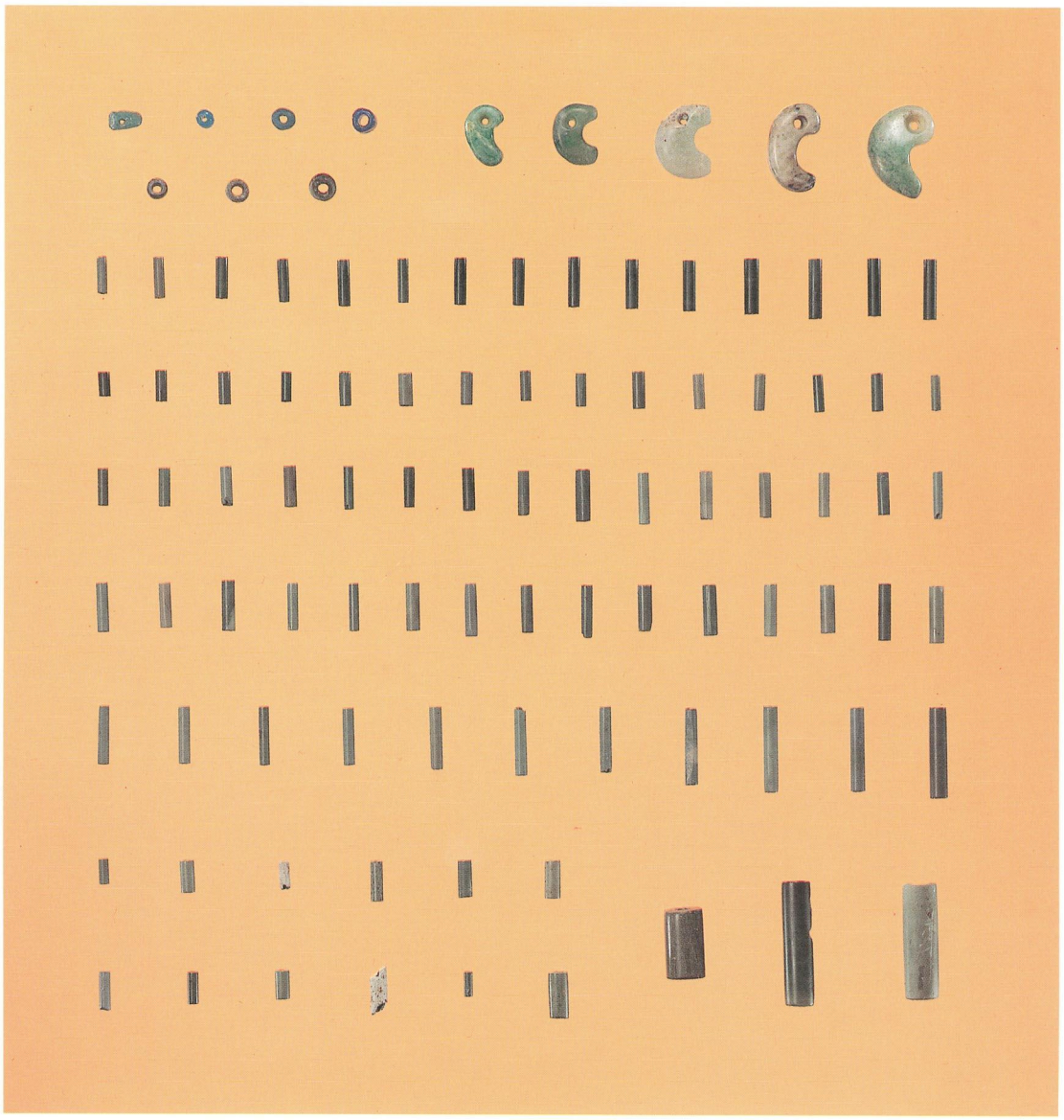
2．旧河道 2

1．ＳＫ181



2．ＳＫ181(玉類出土状況)

１．土　器



２．玉　類

例　言

1．本書は、兵庫県氷上(ひかみ)郡春日町七日市(なのかいち)・棚原・野村に所在する、七日市遺跡の発掘調査報告書(Ⅰ)　第２分冊（弥生・古墳時代遺跡の調査）である。
ここでは、弥生時代から須恵器出現以前の古墳時代までを対象として取り扱う。

2．発掘調査は、近畿自動車道舞鶴線建設（現舞鶴自動車道）に伴い、日本道路公団の委託を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。

3．発掘調査の期間および担当者は、下記のとおりである。

全面調査	1984年６月～1985年10月	
担当者	主　査	井守徳男
	技術職員	種定淳介
	技術職員	村上賢治
	技術職員	平田博幸
	技術職員	久保弘幸
	技術職員	山田清朝
	技術職員	藤田　淳

4．本文･図版中に記載する方位は、特に注記を行わない場合、座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水面（ＴＰ）を基準とした海抜高度である。

5．遺構写真は調査担当者によるものであるが、遺物写真は森　昭氏の手を煩わせた。

6．本書の執筆と編集は種定が行った。また、不定形石器に関する記述の一部は藤田によるものである。さらに、第１章と第２章の一部は『七日市遺跡(Ⅰ)(旧石器時代遺跡の調査)』と重複する点が多い。

7．整理作業は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施し、調査担当者および下記の嘱託職員他が行った。
阿部不二・井川佳子・岡崎輝子・香川フジ子・金山恵子・木村淑子・苔口春子・小林弥生・中納久美代・野村佳陽子・古谷章子・前田千栄子・松本久美子・本窪田英子・森山恭子・吉田佳子・吉田由起子

8．発掘調査にあたっては、下記の諸氏に調査の指導、および調査補助員として御助力いただいた。
青木哲哉・國井和哉・土井基司・中川和哉・松永幸男・水ノ江和同・宮井善朗・綿貫俊一

9．調査で出土した遺物や、作製した写真・図面などは兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において保管している。

本 文 目 次

第１章　遺跡の位置と環境 …… 1

第１節　地理的環境 …… 1

第２節　歴史的環境 …… 4

第２章　調査の経緯 …… 8

第１節　調査にいたる経過 …… 8

第２節　調査の方法と経過 …… 9

第３章　遺　　構 …… 10

第１節　概　要 …… 10

第２節　住居址 …… 12

第３節　掘立柱建物跡 …… 29

第４節　土　壙 …… 32

第５節　溝 …… 49

第６節　旧河道 …… 50

第４章　遺　　物 …… 52

第１節　概　要 …… 52

第２節　土　器 …… 52

第３節　石　器 …… 73

第４節　玉　類 …… 87

第５節　土製品 …… 89

第６節　金属製品 …… 91

第５章　ま　と　め …… 92

第１節　遺　構 …… 92

第２節　遺　物 …… 111

巻首図版目次

巻首図版　1　　遺　跡

1．遺跡遠景（南から）1982年撮影

巻首図版　2　　遺　構

1．遺構群（O地区）

2．旧河道2

巻首図版　3　　遺　構

1．SK181

2．SK181（玉類出土状況）

巻首図版　4　　遺　物

1．土　器

2．玉　類

挿　図　目　次

第１図　遺跡周辺地形分類図
第２図　遺跡周辺の微地形等高線図
第３図　周辺遺跡分布図
第４図　野々間遺跡出土１号銅鐸（左）・２号銅鐸（右）
第５図　野村出土銅剣形石剣
第６図　調査区設定図
第７図　基本層序
第８図　遺構配置模式図
第９図　住居址配置模式図
第10図　掘立柱建物跡遺構配置図
第11図　掘立柱建物跡遺構図
第12図　土壙配置模式図
第13図　土器分類図１（壺）
第14図　土器分類図２（甕）
第15図　土器分類図３（高杯・器台・鉢・蓋）
第16図　型式別石鏃の長さと幅
第17図　石鏃の型式別組成
第18図　石鏃重量の単純度数分布
第19図　管玉の長さと口径
第20図　住居址の平面形態による分類
第21図　長方形住居址の比較
第22図　住居址の変遷模式図
第23図　住居址の組成
第24図　住居址柱間長の単純度数分布
第25図　住居址床面積の単純度数分布
第26図　住居址の床面積と柱間長の相関
第27図　木棺墓の分類模式図
第28図　木棺墓の法量計測位置
第29図　木棺墓の組成
第30図　墓壙の長さと幅
第31図　棺体の長さと幅
第32図　木棺墓の埋葬主軸方位
第33図　遺構の変遷(1)（旧石器時代）
第34図　遺構の変遷(2)（Ⅰ～Ⅱ期）
第35図　遺構の変遷(3)（Ⅲ～Ⅳ期）
第36図　遺構の変遷(4)（Ⅴ期）
第37図　遺構の変遷(5)（Ⅵ～Ⅶ期）
第38図　遺構の変遷(6)（奈良～平安時代）
第39図　遺構の変遷模式図
第40図　土器編年試案
第41図　石庖丁紐孔の磨滅の痕跡
第42図　石庖丁の２種
第43図　近辺出土の銅剣形石剣
第44図　石器組成比率の対比

表　目　次

第１表　住居址一覧表
第２表　木棺墓一覧表
第３表　出土石器一覧表
第４表　管玉計測値一覧表
第５表　土製円板・紡錘車計測値一覧表
第６表　出土石器数量一覧

付　　図

1　七日市遺跡遺構図(1)
2　七日市遺跡遺構図(2)

図　版　目　次

図版 1　遺構配置図 1
図版 2　遺構配置図 2
図版 3　遺構配置図 3
図版 4　遺構配置図 4
図版 5　遺構配置図 5
図版 6　遺　構 1　(住居址 1)
図版 7　遺　構 2　(住居址 2)
図版 8　遺　構 3　(住居址 3)
図版 9　遺　構 4　(住居址 4)
図版 10　遺　構 5　(住居址 5)
図版 11　遺　構 6　(住居址 6)
図版 12　遺　構 7　(住居址 7)
図版 13　遺　構 8　(住居址 8)
図版 14　遺　構 9　(住居址 9)
図版 15　遺　構10　(住居址10)
図版 16　遺　構11　(住居址11)
図版 17　遺　構12　(住居址12)
図版 18　遺　構13　(住居址13)
図版 19　遺　構14　(住居址14)
図版 20　遺　構15　(住居址15)
図版 21　遺　構16　(住居址16)
図版 22　遺　構17　(住居址17)
図版 23　遺　構18　(住居址18)
図版 24　遺　構19　(住居址19)
図版 25　遺　構20　(住居址20)
図版 26　遺　構21　(住居址21)
図版 27　遺　構22　(住居址22)
図版 28　遺　構23　(住居址23)
図版 29　遺　構24　(住居址24)
図版 30　遺　構25　(住居址25)
図版 31　遺　構26　(土壙 1)
図版 32　遺　構27　(土壙 2)
図版 33　遺　構28　(土壙 3)
図版 34　遺　構29　(土壙 4)
図版 35　遺　構30　(土壙 5)
図版 36　遺　構31　(土壙 6)
図版 37　遺　構32　(土壙 7)
図版 38　遺　構33　(土壙 8)
図版 39　遺　構34　(土壙 9)
図版 40　遺　構35　(土壙10)
図版 41　遺　構36　(土壙11)
図版 42　遺　構37　(土壙12)
図版 43　遺　構38　(土壙13)
図版 44　遺　構39　(土壙14)
図版 45　遺　構40　(土壙15)
図版 46　遺　構41　(土壙16)
図版 47　遺　構42　(土壙17)
図版 48　遺　構43　(土壙18)
図版 49　遺　構44　(土壙19)
図版 50　遺　構45　(土壙20)
図版 51　遺　構46　(土壙21)
図版 52　遺　構47　(土壙22)
図版 53　遺　構48　(土壙23)
図版 54　遺　構49　(土壙24)
図版 55　遺　構50　(土壙25)
図版 56　遺　構51　(土壙26)
図版 57　遺　構52　(土壙27)
図版 58　遺　構53　(土壙28)
図版 59　遺　構54　(土壙29)
図版 60　遺　構55　(土壙30)
図版 61　遺　物 1　(土器 1)
図版 62　遺　物 2　(土器 2)
図版 63　遺　物 3　(土器 3)
図版 64　遺　物 4　(土器 4)
図版 65　遺　物 5　(土器 5)
図版 66　遺　物 6　(土器 6)
図版 67　遺　物 7　(土器 7)
図版 68　遺　物 8　(土器 8)
図版 69　遺　物 9　(土器 9)
図版 70　遺　物10　(土器10)
図版 71　遺　物11　(土器11)
図版 72　遺　物12　(土器12)
図版 73　遺　物13　(土器13)
図版 74　遺　物14　(土器14)
図版 75　遺　物15　(土器15)
図版 76　遺　物16　(土器16)
図版 77　遺　物17　(土器17)
図版 78　遺　物18　(土器18)
図版 79　遺　物19　(土器19)
図版 80　遺　物20　(土器20)
図版 81　遺　物21　(土器21)
図版 82　遺　物22　(土器22)
図版 83　遺　物23　(土器23)
図版 84　遺　物24　(土器24)
図版 85　遺　物25　(土器25)
図版 86　遺　物26　(土器26)

図版 87　遺　物27　（土器27）
図版 88　遺　物28　（土器28）
図版 89　遺　物29　（土器29）
図版 90　遺　物30　（土器30）
図版 91　遺　物31　（土器31）
図版 92　遺　物32　（土器32）
図版 93　遺　物33　（土器33）
図版 94　遺　物34　（土器34）
図版 95　遺　物35　（土器35）
図版 96　遺　物36　（土器36）
図版 97　遺　物37　（土器37）
図版 98　遺　物38　（土器38）
図版 99　遺　物39　（土器39）
図版100　遺　物40　（土器40）
図版101　遺　物41　（土器41）
図版102　遺　物42　（土器42）
図版103　遺　物43　（土器43）
図版104　遺　物44　（土器44）
図版105　遺　物45　（土器45）
図版106　遺　物46　（土器46）
図版107　遺　物47　（石器１）
図版108　遺　物48　（石器２）
図版109　遺　物49　（石器３）
図版110　遺　物50　（石器４）
図版111　遺　物51　（石器５）
図版112　遺　物52　（石器６）
図版113　遺　物53　（石器７）
図版114　遺　物54　（石器８）
図版115　遺　物55　（石器９）
図版116　遺　物56　（石器10）
図版117　遺　物57　（石器11）
図版118　遺　物58　（石器12）
図版119　遺　物59　（石器13）
図版120　遺　物60　（石器14）
図版121　遺　物61　（石器15）
図版122　遺　物62　（石器16）
図版123　遺　物63　（石器17）
図版124　遺　物64　（石器18）
図版125　遺　物65　（石器19）
図版126　遺　物66　（石器20）
図版127　遺　物67　（石器21）
図版128　遺　物68　（石器22）
図版129　遺　物69　（石器23）
図版130　遺　物70　（石器24）
図版131　遺　物71　（石器25）
図版132　遺　物72　（石器26）
図版133　遺　物73　（石器27）
図版134　遺　物74　（石器28）
図版135　遺　物75　（石器29）
図版136　遺　物76　（石器30）
図版137　遺　物77　（石器31）
図版138　遺　物78　（石器32）
図版139　遺　物79　（石器33）
図版140　遺　物80　（石器34）
図版141　遺　物81　（石器35）
図版142　遺　物82　（石器36）
図版143　遺　物83　（石器37）
図版144　遺　物84　（石器38）
図版145　遺　物85　（石器39）
図版146　遺　物86　（石器40）
図版147　遺　物87　（玉類）
図版148　遺　物88　（土製品）
図版149　遺　物89　（土製品・金属器）
図版150　遺跡航空写真
図版151　遺跡遠景
　1　遠景　（南から）
　2　遠景　（南東から）
図版152　遺跡近景１
　1　近景　（北から）
　2　近景　（北東から）
　3　近景　（北から）
図版153　遺跡近景２
　1　近景　（西から）
　2　近景　（南東から）
　3　近景　（西から）
図版154　遺　構１　（住居址１）
　1　ＳＢ01　（東から）
　2　ＳＢ01　（東から）
　3　ＳＢ01　（北から）
図版155　遺　構２　（住居址２）
　1　ＳＢ01，02　（東から）
　2　ＳＢ02　（北から）
　3　ＳＢ03　（南から）
図版156　遺　構３　（住居址３）
　1　Ｃ地区　（西から）
　2　ＳＢ04　（南から）
　3　ＳＢ05　（南から）
図版157　遺　構４　（住居址４）
　1　ＳＢ06，07　（南から）
　2　ＳＢ08　（北から）
　3　Ｇ地区　（北から）
図版158　遺　構５　（住居址５）
　1　ＳＢ10，11　（東から）
　2　ＳＢ10，11　（東から）
　3　遺物検出状況

図版159　遺　構６　（住居址６）
　　１　ＳＢ12　（北から）
　　２　ＳＢ12　（北から）
　　３　ＳＢ12　（東から）
図版160　遺　構７　（住居址７）
　　１　Ｈ地区　（北から）
　　２　ＳＢ１３　（北から）
　　３　ＳＢ13　（北から）
図版161　遺　構８　（住居址８）
　　１　ＳＢ14　（東から）
　　２　ＳＢ14，15　（南から）
　　３　ＳＢ14　（中央坑）
図版162　遺　構９　（住居址９）
　　１　ＳＢ15　（東から）
　　２　ＳＢ16　（南から）
　　３　Ｈ地区　（南から）
図版163　遺　構10　（住居址10）
　　１　ＳＢ17，18　（東から）
　　２　ＳＢ19　（西から）
　　３　ＳＢ20，21　（西から）
図版164　遺　構11　（住居址11）
　　１　ＳＢ22　（東から）
　　２　ＳＢ22　（南から）
　　３　ＳＢ24　（東から）
図版165　遺　構12　（住居址12）
　　１　ＳＢ25　（東から）
　　２　ＳＢ26　（西から）
　　３　ＳＢ27　（南から）
図版166　遺　構13　（住居址13）
　　１　ＳＢ28　（東から）
　　２　ＳＢ29　（東から）
　　３　ＳＢ30　（東から）
図版167　遺　構14　（住居址14）
　　１　ＳＢ31　（東から）
　　２　ＳＢ32　（東から）
　　３　ＳＢ33　（東から）
図版168　遺　構15　（住居址15）
　　１　ＳＢ34，35　（東から）
　　２　ＳＢ34　（東から）
　　３　ＳＢ35　（東から）
図版169　遺　構16　（住居址16）
　　１　ＳＢ36　（東から）
　　２　ＳＢ36　（東から）
　　３　ＳＢ37　（北から）
図版170　遺　構17　（住居址17）
　　１　ＳＢ38　（西から）
　　２　ＳＢ40　（西から）
　　３　ＳＢ41　（東から）
図版171　遺　構18　（住居址18）
　　１　ＳＢ42　（東から）
　　２　ＳＢ43　（東から）
　　３　Ｏ地区　（南から）
図版172　遺　構19　（住居址19）
　　１　ＳＢ４４　（東から）
　　２　ＳＢ４６　（西から）
　　３　ＳＢ49　（東から）
図版173　遺　構20　（住居址20）
　　１　Ｏ地区　（北から）
　　２　Ｏ，Ｔ地区　（北から）
図版174　遺　構21　（土壙１）
　　１　ＳＫ016　（北から）
　　２　ＳＫ018　（南から）
　　３　ＳＫ060　（西から）
図版175　遺　構22　（土壙２）
　　１　ＳＤ11，12　（北から）
　　２　ＳＫ051　（東から）
　　３　ＳＫ071　（南から）
図版176　遺　構23　（土壙３）
　　１　ＳＫ065，069　（西から）
　　２　ＳＫ065　（北から）
　　３　ＳＫ069　（北から）
図版177　遺　構24　（土壙４）
　　１　ＳＫ087　（南から）
　　２　ＳＫ087　（西から）
　　３　ＳＫ129　（北から）
図版178　遺　構25　（土壙５）
　　１　ＳＫ092　（西から）
　　２　ＳＫ103　（東から）
　　３　ＳＫ126　（南から）
図版179　遺　構26　（土壙６）
　　１　ＳＫ116　（北から）
　　２　ＳＫ182　（北から）
　　３　ＳＫ161　（南から）
図版180　遺　構27　（土壙７）
　　１　ＳＫ195　（北から）
　　２　ＳＫ195　（北から）
　　３　ＳＫ195　（西から）
図版181　遺　構28　（土壙８）
　　１　ＳＫ170　（南から）
　　２　ＳＫ191，193　（西から）
　　３　ＳＫ194　（東から）
図版182　遺　構29　（土壙９）
　　１　ＳＫ115　（北から）
　　２　ＳＫ124　（北から）
　　３　ＳＫ125　（北から）

図版183　遺　構30　（土壙10）
1　ＳＫ145　（北から）
2　ＳＫ146　（北から）
3　ＳＫ188　（西から）
図版184　遺　構31　（土壙11）
1　ＳＫ142　（北から）
2　ＳＫ147　（北から）
3　ＳＫ148　（東から）
図版185　遺　構32　（土壙12）
1　ＳＫ149　（北から）
2　ＳＫ168　（南から）
3　ＳＫ199　（南から）
図版186　遺　構33　（土壙13）
1　ＳＫ181（北から）
2　ＳＫ181（東から）
3　ＳＫ217（北から）
図版187　遺　構34　（土壙14）
1　ＳＫ220　（北から）
2　ＳＤ51,52,53　（西から）
図版188　遺　構35　（旧河道１）
1　旧河道２　（北から）
2　旧河道２　（東から）
図版189　遺　構36　（旧河道１）
1　旧河道２　（Ａ－Ｂ）
2　旧河道２　（Ｃ－Ｄ）
3　旧河道２　（Ｅ－Ｆ）
図版190　遺　物１　（土器１）
図版191　遺　物２　（土器２）
図版192　遺　物３　（土器３）
図版193　遺　物４　（土器４）
図版194　遺　物５　（土器５）
図版195　遺　物６　（土器６）
図版196　遺　物７　（土器７）
図版197　遺　物８　（土器８）
図版198　遺　物９　（土器９）
図版199　遺　物10　（土器10）
図版200　遺　物11　（土器11）
図版201　遺　物12　（土器12）
図版202　遺　物13　（土器13）
図版203　遺　物14　（土器14）
図版204　遺　物15　（土器15）
図版205　遺　物16　（土器16）
図版206　遺　物17　（土器17）
図版207　遺　物18　（土器18）
図版208　遺　物19　（土器19）
図版209　遺　物20　（土器20）
図版210　遺　物21　（土器21）
図版211　遺　物22　（土器22）
図版212　遺　物23　（土器23）
図版213　遺　物24　（石器１）
図版214　遺　物25　（石器２）
図版215　遺　物26　（石器３）
図版216　遺　物27　（石器４）
図版217　遺　物28　（石器５）
図版218　遺　物29　（石器６）
図版219　遺　物30　（石器７）
図版220　遺　物31　（石器８）
図版221　遺　物32　（石器９）
図版222　遺　物33　（石器10）
図版223　遺　物34　（石器11）
図版224　遺　物35　（石器12）
図版225　遺　物36　（玉類13）
図版226　遺　物37　（石器14）
図版227　遺　物38　（石器15）
図版228　遺　物39　（石器16）
図版229　遺　物40　（玉類16）
図版230　遺　物41　（土製品）
図版231　遺　物42　（土製品・金属器）
図版232　遺跡の現状　黒井城よりのぞむ

第１章　　地理的・歴史的環境

第１節　　地 理 的 環 境

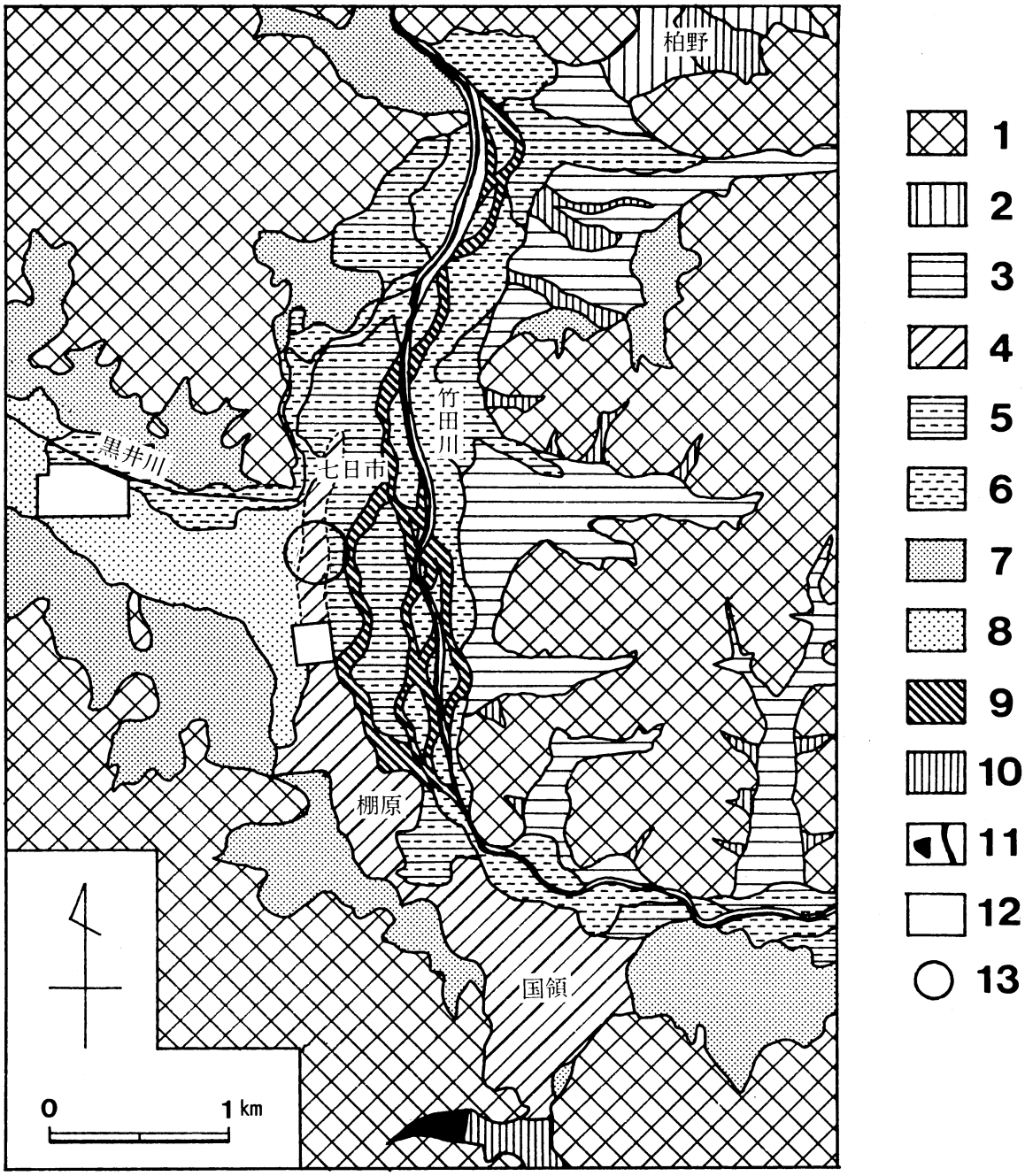
氷上、多紀、桑田、船井、何鹿、天田の６郡からなる丹波は山陰道に属し、北を丹後、若狭、西を但馬、南を摂津、播磨、東を山城と接する。現在では、６郡のうち氷上と多紀が行政区画として兵庫県に属している。ただし、山陰に位置づけられるとはいえ、河川を通じて概観すれば、この両郡は瀬戸内海沿岸地域斜面の内陸部と考えられるのが一般的である。

氷上郡は、丹波の最西部そして兵庫県の東北部にあたり、春日町は由良川の支流である竹田川の上流域に位置し、氷上盆地の一角を占めている。氷上盆地は加古川と由良川の上流一帯の低地帯の総称であり、その大半は埋積谷を形成している。また、この埋積谷に堆積した礫層は数10mに達し、河川上流の堆積層としては非常に厚いものと言われている。

さて、七日市遺跡の近傍にある竹田川は、東中付近から西流し、国領付近で北方へ流路を変えて、遺跡地の東側を流下する。そして、いくつかの支流を合わせながらさらに北方へ緩やかに曲流し、福知山付近で由良川に合流する土師川に流れ込む。また、この竹田川は周囲に山地が迫った幅500m～800mの狭長な谷中を流下しており、そこには５面の段丘（本稿では上位のものから段丘Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、ⅣおよびⅤと呼ぶことにする）と現氾濫原が認められる。これらの地形のうち、段丘Ⅰ、ⅡおよびⅤは断片的ではあるものの竹田川のほぼ全流域にみられるのに対して、段丘Ⅲは下流域に、段丘Ⅳは上流域にのみ分布している。

竹田川の上流域すなわち七日市遺跡の周辺には、竹田川の他その支流となる黒井川が流れており、それぞれの流域で地形の様相が異なる。遺跡の東側にあたる竹田川の流域では、段丘Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ及び現氾濫原が認められる。段丘Ⅰは、柏野付近に分布し、竹田川の現河床よりおよそ10m高い。この段丘は、およそ３万年前以前とされる由良川と加古川の河川争奪が起こる直前に形成されたものであるとされている[1]。段丘Ⅱは、竹田川の左岸に認められ、現河床より7～8mの比高をもっている。この段丘は、主に竹田川の小規模な支流がつくった谷中に分布しており、支流の上流から下流に向かって緩やかに傾斜している。遺跡の周辺にのみ認められる段丘Ⅳは、国領付近において下河床との比高約６ｍである。しかし、この段丘はここから現河床よりも急傾斜で徐々に高度を下げ、遺跡付近で段丘Ⅴ面下に埋没する。これより下位の段丘Ⅴは、竹田川の両岸に分布しており、比較的連続性がよい。これは、現河床よりおよそ４ｍ高く、現氾濫原と1.5～２ｍの崖で接している。この段丘面下にみられる現氾濫原は、竹田川の両岸に沿って細長く分布しており、ここでは旧河道が多数認められる。

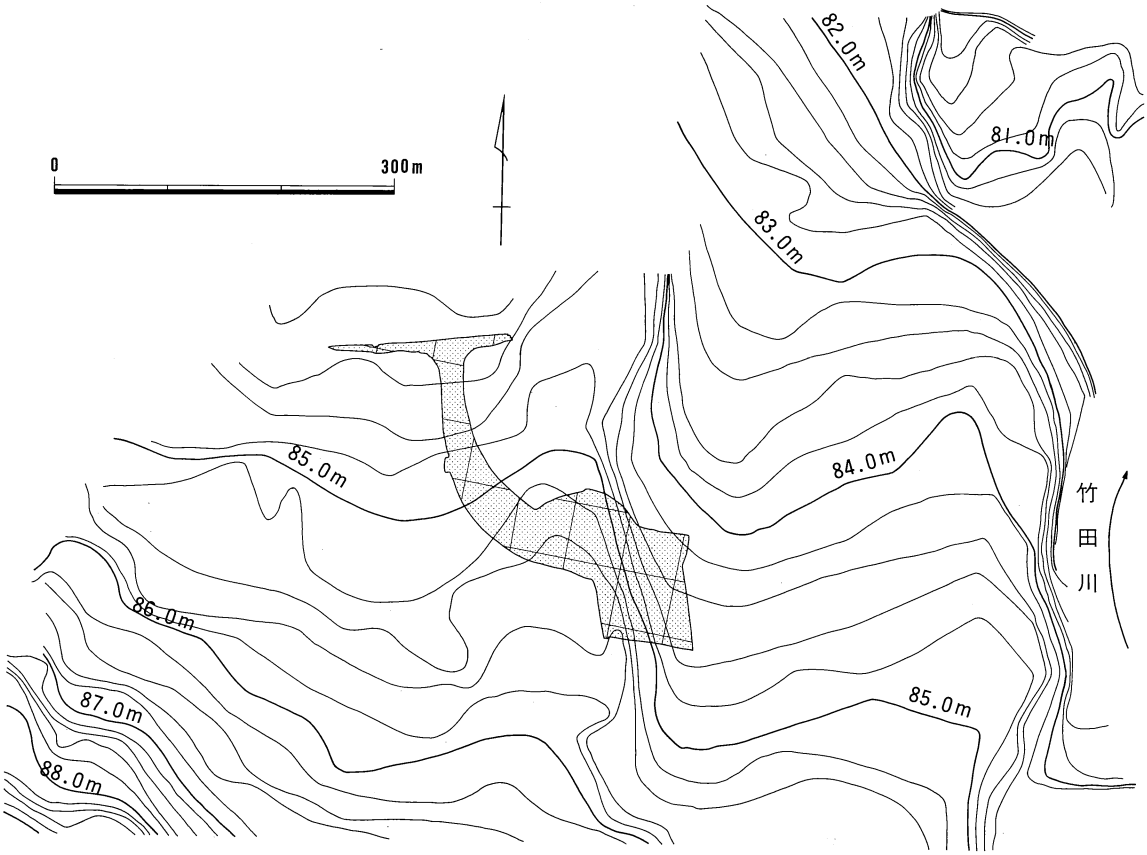
一方、黒井川の流域すなわち遺跡の西側には、現氾濫原と扇状地が分布している。現氾濫原は、黒井川が小規模であるため、川に沿ってわずかにみられるにすぎない。これに対して、この川が流れる谷中の大部分は扇状地によって占められており、これは谷の南北にみられる山地から緩やかに発達している。遺跡の西側においては、特に南から黒井川に向かっての扇状地がよく発達しており、この扇状地は段丘Ⅳの西崖と接している。



1．山　地　　2．段丘Ⅰ　　3．段丘Ⅱ　　4．段丘Ⅳ（境界線が破線の部分は埋没している）
5．段丘Ⅴ　　6．現氾濫原　　7．崖錐・土石流　　8．扇　状　地　　9．旧河道
10．開析谷　　11．溜池・河川　　12．人工改変地　　13．七日市遺跡

第1図　　遺跡周辺地形分類図

遺跡周辺の20cm等高線図をみると、遺跡地の中央部に比べて西部と東部がやや低くなっており、さらに東部ではわずかな凹地が南北に帯状に認められる。現地観察によると、中央部と西部ならびに東部との境界には50～80cmの小崖がみられ、東部の凹地はおよそ50cm低くなっている。これらの微起伏はそれぞれ遺跡の西部が扇状地、中央部が段丘Ⅳ、東部が段丘Ⅴそして東部の凹地が段丘Ⅴ面にみられる旧河道に相当すると考えられる。七日市遺跡は、このように段丘Ⅳ、Ⅴおよび扇状地にまたがって立地して



第２図　遺跡周辺の微地形等高線図（等高線は20cm）

いるのである[2]。

さて、若狭湾に向かって北流する由良川の支流である竹田川は、播磨灘に注ぐ加古川の支流である佐治川と氷上町石生（いそう）において谷中分水界を形成している。石生は谷幅約700m、標高98mの沖積面で連続しており、本州島における中央分水界の中の最低部をなしている。国道175号線が176号線に合流するＴ字路には、「水分橋」と名付けられた橋が現存しており、ここを流れる高谷川が岾部神社の前で南北に分流し、それぞれ加古川と由良川にいたると言われる。すなわち、太平洋斜面と日本海斜面の水系が、石生の高谷川右岸堤防の「水分（みわか）れ」の谷底平野で連続していることになる。このようにみれば、加古川と由良川は低分水嶺を結節点として連続し、山陰と山陽を繋ぐ歩廊地帯の様相を呈していることになる。地形的には「氷上回廊」[3]とも呼称される所以であり、この回廊を利用すれば険しい山地を越える苦労もなく、瀬戸内と日本海を結ぶことが可能である。こうした地理的特異性は物流の利便性を必然的に促進させ、交流の活性化をもたらしたと容易に想像されるのであり、古来より絶好の交通路であったと考えられるのである[4]。

〔註〕

（１）岡田篤正・高橋健一「由良川の大規模な流路変更」『地学雑誌』第78巻第１号　1969年

（２）本節の地形分類とその様相については、七日市遺跡（Ｉ）（旧石器時代遺跡の調査）第１章第１節から引用した部分が多い

（３）藤田和夫『日本の山地形成論－地理学と地形学の間－』　1983年

（４）種定淳介「加古川と由良川－モノの移動について」『生産と流通の考古学Ｉ』横山浩一先生退官記念論文集　1989年

第2節　歴史的環境

春日町の考古学的資料が増加したのは、1980年代以降のことである。圃場整備事業と高速道路建設によって多くの知見が得られたが、同時に遺跡は消失してゆくといった皮肉な結果をもたらしたことも事実である。

旧石器時代の様相は、七日市遺跡（Ⅰ）（旧石器時代遺跡の調査）に報告したとおりである[1]。姶良Tn火山灰の純粋堆積層の下層に広がるシルト層から9個所の大ブロックが検出された。遺物はナイフ形石器を中心とし、石材は大半がチャートであり、サヌカイトは全体の1％にも満たない。局部磨製石斧や砥石の検出も注目される。西紀町板井・寺ケ谷遺跡[2]とともに、標識遺跡と評価される。

縄文時代の遺跡としては、国領遺跡から草創期の遺構と遺物が良好な状況で検出された[3]。国領川の河川改修と圃場整備事業の2回にわたる調査の結果、退化した様相を呈する有舌尖頭器が石鏃を伴って出土している。剥片や砕片とともに未製品を主体としており、尖頭器の製作址である可能性が高い。土器こそ伴出していないが、6基の土壙が検出されている。

多利遺跡の小向地区では縄文時代後期の粗製深鉢が出土している[4]。全面調査を実施したが、遺構や他の遺物は検出されなかった。また、山南町では石棒が単独で発見されている[5]。

弥生時代にはいると、七日市遺跡をとりまくように遺跡が集中してくる。集落遺跡としては、南約1㎞に位置する国領遺跡がある[6]。弥生後期に営まれた遺跡であるが、集落の継続時期は短期間で、遺構の密度も低い。さらに多田でも弥生土器の散布が知られているが、詳細は明らかではない。盆地周辺の山裾にあたる微高地には、こうした中小規模の集落の存在が予想される。

七日市遺跡の東約2㎞の妙見山麓の野々間（のの・ま）からは、1981年に銅鐸が2口発見されている[7]。径約2～3.5mのテラス状に整形された埋納壙に据え置かれた状況が保たれたまま検出された希有の遺跡である。銅鐸は外縁付鈕2式4区袈裟襷文銅鐸と扁平付鈕式4区袈裟襷文銅鐸で、いずれも高さ21㎝前後の小型のつくりである。銅鐸はそれぞれ約1.8mの間隔をもって、埋納壙底部から浮いた状態で検出された。七日市遺跡との関連性は極めて高いと考えられよう。なお、銅鐸出土地からは山裾の稜線に視界を遮られて、七日市遺跡を見通すことはできない。

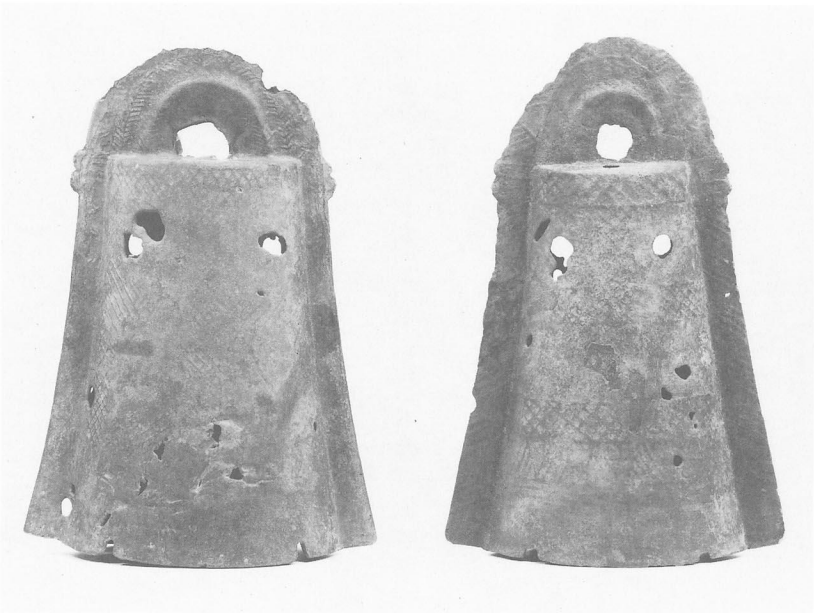
野村遺跡からは、全長32.3㎝の銅剣形石剣が発見されている[8]。水田で瓦粘土を採取した際の偶然の出土であるが、その地点は七日市遺跡の南端部と考えて差し支えない。このほかにも銅剣形石剣は七日市遺跡からも2点出土しており、銅鐸と銅剣形石剣の有機的な関連が想起される。

現在のところ、町内では前期古墳は知られていない。ただし、このことは後世に黒井城の出城として眺望のきく山頂や尾根に山城を築いたことと無関係とは言えず、その際に古墳が削平された可能性も考慮しなければなるまい。「水分れ」の分水嶺を望む位置に親王塚古墳がある[9]。明治32年頃発掘された径約30mの大型円墳で、その竪穴式石室からは大阪府紫金山古墳・奈良県新山古墳・山口県長光寺古墳と同笵の三角縁獣文帯三神三獣鏡が出土している。前方部が削平された前方後円墳である可能性も捨てきれない。また、近辺では箱式石棺を主体部にもつ古墳も多く、横田山古墳・淹山古墳群・長野（おさの）木戸古墳群などが周知されている[10]。

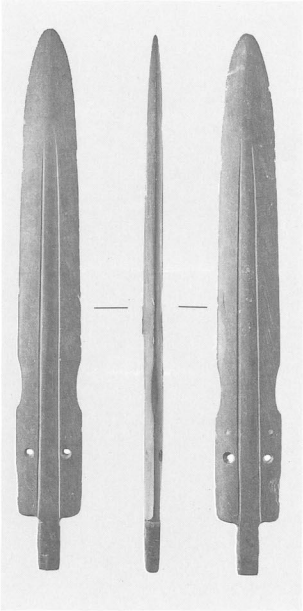
多利には、全長37mの前方後円墳である二間塚古墳がある。かつて石室が発見されたといわれるが、

1．七日市遺跡　2．野々間遺跡　3．野村遺跡(石剣出土地)　4．山垣遺跡　5．多田遺跡
6．国領遺跡　7．二間塚遺跡　8．向山古墳群　9．多利遺跡　10．松ノ本古墳群　11．柏野古墳群
12．鴨庄古窯跡群　13．三ッ塚廃寺　14．黒井城　15．河津館址　16．中山窯跡

第3図　周辺遺跡分布図



第４図　野々間遺跡１号銅鐸(左)・２号銅鐸(右)



第５図　野村出土銅剣形石剣

詳細については不明な点が多い。また稲塚にも大塚と称される前方後円墳があり、かつて馬具などを出土したと伝えられるが現存しない。

後期の群集墳としては、松ノ本古墳群[11]、多利向山古墳群[12]などがあげられる。いずれも５世紀末から６世紀にかけて築造された古墳群であり埋葬施設として木棺直葬の形態をとるものがほとんどである。横穴式石室を備える古墳は、方形プランをもつ古式の多利２号墳のほか、塩ケ谷古墳や棚原古墳など枚挙にいとまがない。

歴史時代に入り、市島町には三ッ塚廃寺を中心とした三ッ塚遺跡群が展開する[13]。三ッ塚廃寺は、金堂を二つの塔で挟み一直線で並ぶ常陸新治廃寺式の伽藍配置をとる奈良時代前半の寺跡である。この三ッ塚廃寺の背後の丘陵には天神瓦窯跡や鴨庄古窯跡群があり、６世紀末から９世紀にかけて大量の須恵器を生産していることが判明している。

七日市遺跡の南にあたる竹田川左岸では、山垣遺跡が調査された[14]。１辺40～50mの堀をめぐらせた奈良時代の建物跡が検出され、円面硯や墨書土器のほか21点の木簡が出土している。その木簡には「里長」の記載が認められ、このことから郡衙より下級の官衙である「里」に関連する遺跡であることが明らかになった。当時の行政組織の末端機関を考える上で重要な資料となろう。

七日市遺跡からも、奈良時代から平安時代にかけての遺物や遺構が多量に検出されている。なかでも掘形が１辺１mを越える大型の建物跡が整然と並び、また墨書土器、円面硯、緑釉陶器、人形、石帯なども出土している。山垣遺跡とあわせて、地方における律令時代の様相を知る上で興味深い遺跡であり、引き続き刊行が予定される七日市遺跡(Ⅰ)第３分冊で詳細が報告されることになる。

三尾山の中腹からは、平安時代の須恵器窯跡が発見されており、中山窯跡と呼称されている[15]。椀を中心に生産を行い、高台付椀や壺も少量焼成している。いわゆる丹波焼の成立とその系譜を考えるうえでも示唆的である。

中世では、建物群や土壙が検出された国領遺跡[16]や多利・前田遺跡[17]がある。特に多利・前田遺跡の土壙墓からは、青白磁小壺、合子、白磁皿、土師質小皿、和鏡、鉄製品が副葬されていた。

そして、黒井の北にそびえる標高356mの城山山頂には、黒井城、別名保筑城がある[18]。赤松貞範によって建武年間に築城され、天正７年に明智光秀によって落城するまでの約250年間にわたって存続した中世末期の典型的な山城である。山頂の本丸以外の付設部も保存状態が良好で、現在は国の史跡に指定されている。またこの黒井城をとりかこむように、三尾城、朝日城、野村城などの出城が点在している[19]。

〔註〕

（１）兵庫県教育委員会『七日市遺跡（Ⅰ）(旧石器時代遺跡の調査)』　1990年

（２）山口卓也・久保弘幸・藤田　淳「丹波地方西部における旧石器時代集落－春日・七日市遺跡と板井・寺ケ谷遺跡－」『第四紀研究』第27巻第４号　1989年

（３）兵庫県教育委員会『国領遺跡現地説明会のしおり』　1987年

（４）兵庫県教育委員会「多利・小向遺跡」『多利遺跡群発掘調査報告書』　1987年

（５）櫃本誠一・瀬戸谷皓『日本の古代遺跡　兵庫北部』　1982年

（６）兵庫県教育委員会、1985年調査

（７）春日町『野々間遺跡－兵庫県氷上郡春日町野上野所在銅鐸出土地－』　1990年

（８）余田邦夫「丹波春日町出土の磨製石剣」『考古学雑誌』第54巻第４号　1969年

（９）丹波史談会『丹波氷上郡志』1927年

(10) 註（５）文献に同じ

(11) 兵庫県教育委員会『松ノ本古墳群』　1985年

(12) 兵庫県教育委員会『多利向山古墳群』　1986年

(13) 高井悌三郎『丹波三ッ塚遺跡Ⅰ』　1973年、同『丹波三ッ塚遺跡Ⅱ』　1975年、同『丹波三ッ塚遺跡Ⅲ』　1981年

(14) 兵庫県教育委員会『山垣遺跡』　1990年

(15) 種定淳介「丹波・中山窯跡出土の須恵器」『中世土器の基礎研究Ⅴ』　1989年

(16) 註（６）文献に同じ

(17) 兵庫県教育委員会『多利遺跡群発掘調査報告書』　1987年

(18) 青木俊夫「丹波黒井城」『兵庫県の歴史』15　1978年

(19) 兵庫県教育委員会『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』　1982年

第2章　調査の経緯

第1節　調査にいたる経緯

1980年12月、大阪経済法科大学の村川行弘氏を団長として、近畿自動車道舞鶴線・春日インターチェンジ、およびインター進入路付近の農道、および排水路敷設に伴う遺跡確認調査が実施され、七日市遺跡が周知された。

またこの確認調査を実施している際に、調査区の北側と国道175号線との間の隣接した地域において圃場整備事業の工事が進行中であり、その工事現場に大量の土器片が散乱しているのが発見された。急遽関係機関で協議が行われ、村川氏を中心として調査団を組織し、1981年1月から3月にかけて緊急調査が実施された。この調査は期間や経費に様々な制約があったと言われるが、弥生時代から平安時代にかけての大規模な集落遺跡であることが明らかとなった。この調査成果は、『春日七日市遺跡－確認調査報告書－』として1984年に刊行されている。

ところが、1980年以前にはこの地に遺跡が存在することは地元でも注意されていなかったらしく、兵庫県教育委員会発行の『遺跡分布地図及び地名表』には記載されていない。また1982年に文化庁から発行された『全国遺跡地図兵庫県』に初めて「七日市・野上野遺跡」として記載されたが、その地点は遺跡の範囲からかなり東によった位置にあたり、遺跡が発見された1980～1981年以降も、当遺跡についての情報は正確には伝えられていない状況にあったようである。

ちなみに当遺跡付近では、それ以前にはわずかに銅剣形石剣の出土地として野村遺跡が周知されていたにとどまるが、1981年11月には遺跡の南東、野々間の山麓斜面で銅鐸が2口発見され、この銅鐸と七日市遺跡との関連が注目されるようになった。その後、圃場整備事業に伴う確認調査が氷上郡教育委員会によって実施されているが、成果が公表されるにはいたっていない。

今回の調査の対象となったインターチェンジ進入路部分は、先の遺跡発見の契機となった数箇所の確認調査と、周辺で実施された圃場整備事業に伴う発掘調査地点のほぼ中央にあたり、遺跡の中心部分を分断する位置にあたると考えられたため、兵庫県教育委員会によってインターチェンジおよび本線部分の確認調査が実施された。まず、1982年11月～12月にかけて七日市遺跡の東方への範囲確認調査として36個所でグリッド調査が行われた。この調査では明確な遺構は検出されず、わずかに自然流路状の落ち込みが認められたにとどまった。このため、1983年12月～1984年1月にかけて遺跡存在の有無を確認する目的の第2次確認調査が実施されたが、顕著な遺構・遺物は検出されなかった。また、1984年3月には、全面調査の範囲を限定するため先の確認調査地点の西側でさらに16個所のグリッドを設定して確認調査を行ったが、西端で多量の遺物を検出したものの、顕著な遺構・遺物はみられなかった。

以上の確認調査の結果、近畿自動車道舞鶴線建設予定地内における遺跡の東限が確定され、全面調査は国道175号線との取り付き部からインターチェンジにかかる料金所付近までの約17,000㎡について実施することになった。

第２節　　調査の方法と経過

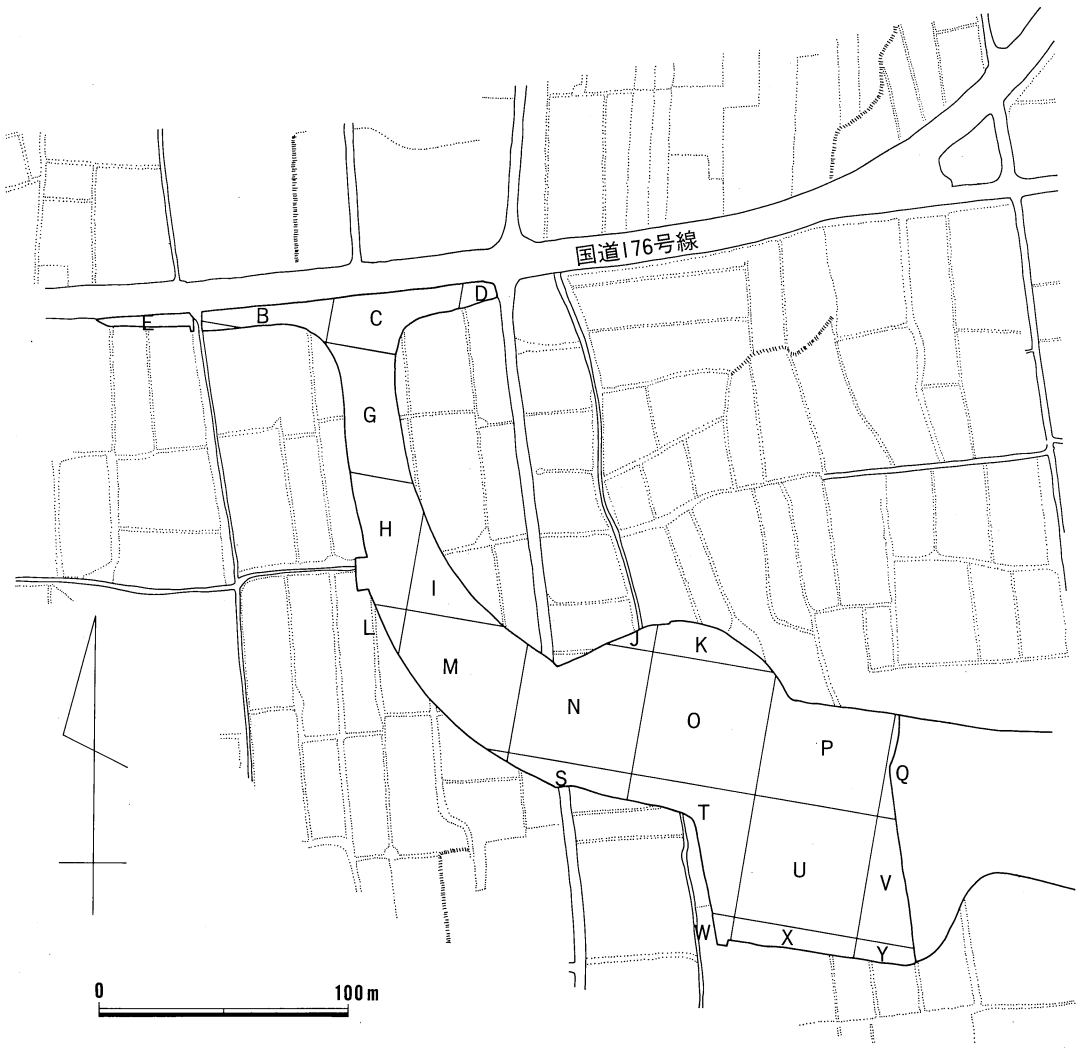
全面調査は、２ヵ月の準備期間の後1984年６月から実施した。調査区の中央に土砂搬出用の仮設道路を敷設し、国道175号との取り付き部から着手した。まず、重機によって表土と黒ボクを除去し、その後人力によって表面を精査し、遺構の検出に努めた。そして、遺構を人力によって発掘した。

調査区内の基準点測量は委託によって実施し、設置された国土座標（第Ⅳ系）を基準とした。その基準点を利用して、調査区を50m方眼で区画し、北西から南東の方向に従って、それぞれＡ地区、Ｂ地区……と呼称することにする。

検出した遺構は、航空撮影によって図化を行った。ただし、調査面積が広大であるため、1984年９月、同11月、1985年２月、同５月に４回に分けて実施した。

調査は、一部旧石器時代の調査と並行して実施し、1985年10月に終了した。またＪ、Ｋ、Ｎ、Ｏ、Ｓ、Ｔの各地区については調査終了後砂を搬入して埋没保存を図ることになった。

また、1984年９月、同11月、1985年２月の３回に分けて、現地説明会を行った。



第６図　調査区設定図

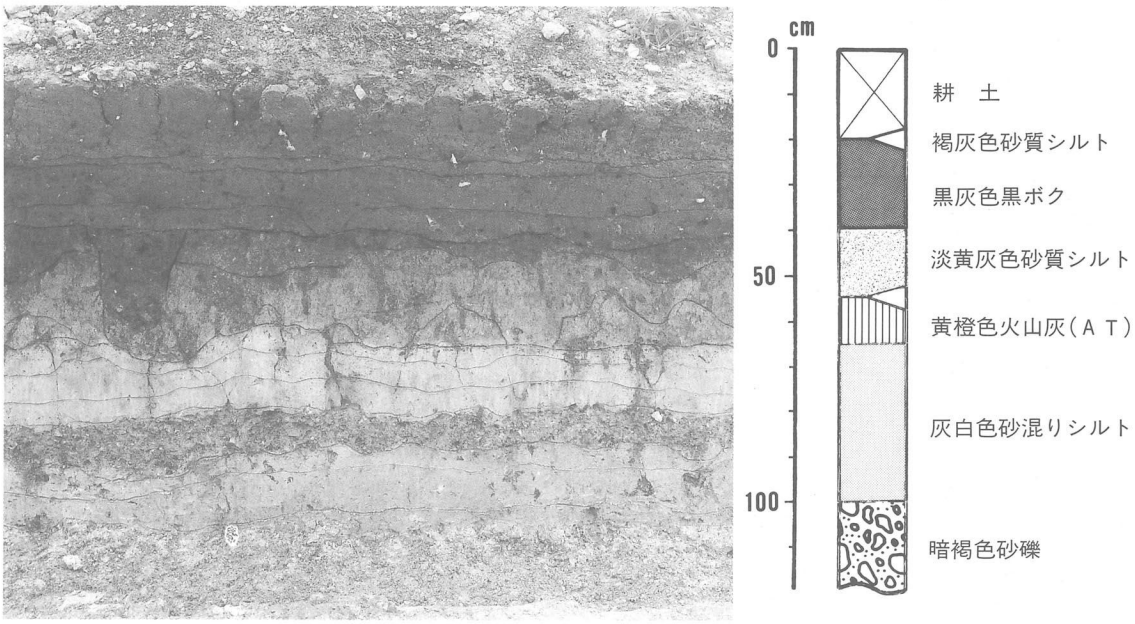
第3章　遺　　構

第1節　概　　要

第1項　基本層序

先行するトレンチ断面から七日市遺跡に分布する堆積物の色調や粒度、堆積構造などを観察した結果、基本的には下位のものから褐灰色の砂礫層、灰白色のシルト層(旧石器包含層)、ＡＴ火山灰、灰白色の砂混じりシルト層、黒ボクおよび耕土に分類されることが明らかとなった。灰白色の砂混じりシルト層は厚さが約10cmと薄く、それを被覆する黒ボクは下位の層と漸移して堆積しているために分層が困難である。

これらの層序のうち弥生時代の遺構を検出した面は、灰白色の砂混じりシルト層直上もしくはＡＴ火山灰直上面、またＡＴ火山灰が堆積していない地域ではその下層の灰白色のシルト層直上面である。すなわち、黄色の火山灰または灰白色シルトに構築された遺構に黒ボクが充填した状況で検出したことになる。しかし、その層序の直上面が当時の生活面ではなかったことも事実である。それは周辺の遺跡で確認された黒ボクの堆積状況と層位をみれば明らかである。例えば、松ノ本古墳群では６世紀の古墳の直下から黒ボクが確認されているし、野々間遺跡ではこの黒ボクを切って銅鐸埋納壙が構築されていることが判明している。盆地内に一様に堆積していると考えられる黒ボクが、はたしていつの時期に形成されたものであるかは明確にしがたいが、少なくとも古墳時代以前であることは疑いない。七日市遺跡



第７図　　基本層序

第 8 図　　遺構配置模式図

においては、この黒ボクの中に弥生土器が包含されていることを考慮すれば、その成立時期も弥生時代に遡る可能性を否定できないのであって、該期の生活面もこの黒ボク層の中にあることも事実であろう。こうした認識にたって、調査の当初から黒ボク層上面の平面精査を行い、そこに遺構を検出するよう努めたが、黒ボク層の中に黒ボクの充塡した遺構を確認することは事実上不可能であった。その結果、遺構の検出が容易である黒ボクの下層まで掘り下げて遺構を確認してゆくことになった。

第2項　概　　要

調査区の東端からは、弥生時代から平安時代の遺物を包含する幅約10mの旧河道を検出した。弥生時代の遺構は竪穴住居址、土壙、木棺墓、溝、柱穴からなり、その旧河道の西に高い密度で広がっている。調査区のほぼ中央部のH区でも南北に流れる自然流路を検出している。この流路の西、B、C、G、H区は扇状地にあたる。中央部のM区東半とN区は段丘Ⅳが地下浅所に埋没していることに影響されて高くなり、東部のO、P、U区は段丘Ⅴにあたりやや低くさらに旧河道にいたる。

住居址は調査区のほぼ全域にわたって検出されており、広範囲の生活空間を形成しているが、明らかに木棺墓と認められるものは中央部と東部に限定されるようである。掘立柱建物跡は、遺跡の西部において確認することができた。また圃場整備に伴う発掘調査では、国道175号線の南、C区の東では方形周溝墓が検出されているが、今回の調査区では検出されなかった。また調査区の北と西はわずかな低地が広がり、当時の水田が営まれていたと推測される。

調査区のほぼ中央のM地区を南北にはしるＳＤ33を境として、その東には奈良・平安時代の遺構が重複して確認されている。

第2節　　住　居　址

住居址は、全体に残存状態は悪く、周壁が検出できたものは少数である。周壁溝のみが確認できたものだけで50棟を数えるが、さらに周壁溝すら削平された住居址も多数存在すると考えられる。周壁溝の平面形から円形と正方形あるいは隅が円い正方形（隅円正方形）が主を占め、わずかに長方形のものも存在する。

遺構の密度は極めて高いために、個々の重複が著しく、帰属時期を決定することには困難を伴う。住居址と土壙などの他の遺構との切り合いも十分予想されるが、黒ボクのなかにそれを確認することができなかったため、住居址とそれと切り合う他の遺構との出土土器を明確に分離できない。このため、住居跡出土遺物を提示はするが、それがすべて住居址の時期を示すものではなく、汚染された遺物も存在すると思われる。

なお、主柱穴の記載については、図版に掲載した方向からみて、円形住居址の場合は最上位のものをａ、隅円正方形または長方形住居址の場合は左上をａとして、それぞれ時計まわりに順次ｂ・ｃ・ｄと仮称して記述することにする。

・ＳＢ０１（図版６上）

調査区の西北部のＥ地区にある。東西辺が5.5mの隅円正方形の住居址であり、南半は調査区外のため未調査である。周壁は５㎝程度残存していたのみであり、周壁溝は有していない。中心に設けられた中央坑は一辺0.6mであるが、大半部が未掘であるため詳細を明らかにしがたい。主柱穴は２個検出したが、未掘部分を想定して４本柱であったと考えられる。柱間長はａ－ｂで2.45mである。住居址の北辺から幅約１ｍの溝がはしるが、切り合いは不明であり、住居址の付属施設であるとは断定しかねる。

なお、床面積（50分の１に縮小した原図をデジタル・プラニメーターによって３回測定した平均値である。以下同じ。）は復元すると推定で21.1㎡である。

遺物は、甕底部（図版61－１，２）が出土している。

・**ＳＢ０２**（図版６下）

ＳＢ01の西、Ｂ地区に位置する。後述のＳＢ03と重複しているが、切り合い関係を確認することはできず、両者の早晩を決定することはできない。周壁は存在せず、わずかに残った周壁溝から住居址と判断される。平面形態は長方形を呈するが、西辺の周壁溝は残存していないために詳細は不明である。長方形の短辺となる南北長は、3.1mである。床面に柱穴は存在するが、主柱穴を特定するにはいたらなかった。あるいは、２本柱かもしれない。

遺物は、甕Ｂ、高杯Ｆ、蓋Ｂなど（図版61－３～７）が出土している。

・**ＳＢ０３**（図版７上）

Ｂ地区に位置し、ＳＢ02と重複する。周壁は存在せず、周壁溝の形態は１辺5.5mの隅円正方形となる。北辺の周壁溝は一部平行しており、建て増しが施された痕跡と考えられる。中心に設けられる中央坑は２段に掘りこまれた不整円形な形態で、径0.45m、深さ0.3mである。主柱穴は４個検出されている。

第９図　住居址配置模式図

柱間長はａ－ｂが3.2m、ｂ－ｃが3.1m、ｃ－ｄが3.3m、ｄ－ａが3.1m、平均柱間長は3.18mである。床面積は、29.1㎡である。

遺物は、甕Ｂと鉢（図版61－８～１０）のほか、図示していないが石鏃が出土している。

・**ＳＢ０４**（図版７下）

ＳＢ03から東へ10mのＣ地区にあたる。ＳＢ05と重複しているが、切り合い関係を確認することはできず、両者の早晩を決定することはできない。周壁は存在せず、周壁溝の形態は径約7.9mの円形住居址であると推定されるが、北半は調査区外のため未掘である。中央坑は中心に位置し、床面に径２mで幅約20㎝、高さ５～８㎝の縁辺を周堤状の盛り土を行った中心部に、径0.7m、深さ0.5mの坑を設けている。主柱穴は３個検出したが、未調査区にさらに１個存在し、４本柱であったと想定される。ａは調査区外であるが、柱間長はｂ－ｃが3.6m、ｃ－ｄが3.5mである。床面積は、一部復元すると43.1㎡と推定される。

遺物は、図示していないが中央坑の最上面から高杯C_2が出土している。また、図示していないが中央坑からは石庖丁片と石鏃が出土している。

・**ＳＢ０５**（図版８上）

ＳＢ04と重複してＣ地区にある。周壁は削平によって存在せず、隅円正方形を呈する周壁溝だけが残される。平面形態は東西辺5.2m、南北辺5.8mを測る。この周壁溝は、内側で一部が二重に平行している。中央坑は中心に位置し、径0.7m、深さ0.6mである。主柱穴は４個で、柱間長はａ－ｂが2.3m、ｂ－ｃが2.45m、ｃ－ｄが2.45m、ｄ－ａが2.25m、平均柱間長は2.36mである。床面積は、27.6㎡である。

・**ＳＢ０６**（図版８下）

ＳＢ05から東へ15mの、Ｃ地区に位置する。ＳＢ07と重複しているが、切り合い関係を確認することはできず、両者の早晩を決定することはできない。周壁は存在せず、周壁溝の形態は隅円正方をなしている。一辺の長さは7.9mで、東北辺と西北辺の周壁溝は二重に平行している。中央坑は中心に位置し、径は0.6m、深さ0.3mである。主柱穴は３個検出しているが、未調査区にさらに１個存在するものと考えられる。柱間長はａ－ｂが4.5m、ｄ－ａが4.4mである。床面積は、一部復元して58.4㎡と推定される。

遺物は、鉄器（図版149-５，８）やガラス小玉（図版147-４）が検出されたことも特筆される。

・**ＳＢ０７**（図版９上）

Ｃ地区にあり、ＳＢ06と重複している。周壁は存在せず、周壁溝の形態は径6.8mの円形をなしている。中心にある中央坑は、長径0.6m、短径0.3m、深さ0.2mの不整楕円形をなしている。主柱穴は４個で、柱間長はａ－ｂが3.0m、ｂ－ｃが2.9m、ｃ－ｄが3.0m、ｄ－ａが3.0m、平均柱間長は2.98mである。床面積は、一部復元して33.2㎡と推定される。

遺物は、壺Ａ、高杯、鉢、蓋など（図版61－11～15）が出土している。さらに石庖丁、石斧、砥石が出土しているが、明確に住居址に伴う資料とは断定しかねる。また、石庖丁未製品やサヌカイト剥片が出土しており、石器の生産を行っていた可能性が高い。

・**ＳＢ０８**（図版９下）

ＳＢ05の南10mの位置にあたる。周壁は存在せず、深さ５㎝に満たない周壁溝をかろうじて残すのみである。平面形態は東西5.9m、南北5.5mの隅円正方形をなしている。また、その内側にも東西5.0m、

南北4.8mの隅円正方形を呈する周壁溝が存在する。中心に位置する中央坑は、長径1.0m、短径0.7m、深さ0.6mの３段に掘りこまれた楕円形をなしている。主柱穴は４個で、柱間長はａ－ｂが2.9m、ｂ－ｃが2.8m、ｃ－ｄが2.8m、ｄ－ａが2.8m、平均柱間長は2.83mである。床面積は、内側の周壁溝で22.8㎡、外側の周壁溝で31.1㎡である。住居址の建て増しが実施されたと仮定するならば、床面積にして136％の増加率となる。

遺物は、平底の甕底部（図版62－23）のほか、管玉（図版147-87）も出土している。また、石錐（図版141-244）もこの住居址に伴う資料である。

・**ＳＢ０９**（図版10上）

ＳＢ08の南５ｍ、Ｇ地区に位置している。周壁は存在せず、直線的にのびる南辺の周壁溝だけが残されている。主柱穴と一辺のみ残存した周壁溝との関係から想定して、5.2m前後の隅円正方形を呈する住居址と考えられる。中心にあたる中央坑は、径0.5m、深さ0.25mの不整楕円形である。主柱穴は４個で、柱間長はａ－ｂが3.4m、ｂ－ｃが3.1m、ｃ－ｄが3.3m、ｄ－ａが3.4m、平均柱間長は3.3mである。床面積は、一辺を5.2mに復元して29.2㎡と推定される。

・**ＳＢ１０**（図版10下）

ＳＢ09の南に接し、ＳＢ11と重複しているが、切り合い関係を確認することはできず、両者の早晩を決定することはできない。周壁は存在せず、おそらくは隅円正方形を呈する周壁溝の北東角を掲出したにとどまり、大半は西の調査区外に残存すると考えられる。主柱穴は４個と想定すれば、検出している１個の柱穴はｂに相当するものである。ｂから北辺周壁溝の距離は1.2mであり、柱間長を３ｍと考えれば、一辺5.4m前後の住居址となろう。

遺物では、陽物状土製品（図版148-５）の出土が特筆される。

・**ＳＢ１１**（図版11上）

ＳＢ10とは主軸をわずかに西に振って重複している。周壁はわずかに数cm残存していた。周壁溝の平面形態は隅円正方形を呈する。北東部の角と南東部の屈曲部を検出したのみであり、大半は西の未調査区に残されている。この角と角の距離は6.5mである。住居址の中心は未調査区にあたるため、中央坑の存在は不明である。ただし東周壁溝に接する土壙を中央坑とみなせば、周壁の縁辺に付属する形態となる。床面積は、一辺を6.5mに復元すれば41.8㎡と推定される。

遺物は、平底の底部と器台Ｂ（図版62－30～31）が出土している。

・**ＳＢ１２**（図版11下）

ＳＢ11の南東５ｍに位置している。周壁は約５cm残存している。周壁溝は隅円正方形にめぐるが、南東角は消失している。一辺の長さは6.8mである。中央坑は中心に位置するが、溝によって切られているため残存部は半分以下の規模となる。主柱穴は４個で、柱間長はａ－ｂが4.0m、ｂ－ｃが3.9m、ｃ－ｄが4.0m、ｄ－ａが3.9m、平均柱間長は3.95mである。床面積は、南西部を復元すれば45.0㎡と推定される。

遺物は、甕Ｂ、高杯Ａなど（図版61－16～20）が出土している。また、サヌカイト剥片も検出している。

・**ＳＢ１３**（図版12上）

ＳＢ12の東５ｍのＧ地区に位置する。周壁は残存しない。周壁溝は不整の円形プランを呈するが、全周するものではない。径は6.2m前後に復元することができる。周壁溝は幅５cm前後、深さ３cmである。

中央坑は中心部にあり、長径0.85m、短径0.55m、深さ0.5mである。図示した土器（図版61－21）はこの中央坑から出土した脚部である。主柱穴は４個で、柱間長はａ－ｂが2.8m、ｂ－ｃが2.5m、ｃ－ｄが2.8m、ｄ－ａが2.8m、平均柱間長は2.72mである。床面積は、一部復元すれば29.8㎡と推定される。

中央坑からは、内面ヘラ削りを施した脚部（図版61－21）が出土している。この他に太型蛤刃石斧と石錐（図版141-248）が共伴している。

・ＳＢ１４（図版12下）

ＳＢ13の南20mに位置している。ＳＢ15と重複しているが、切り合い関係を確認することはできず、両者の早晩を決定することはできない。周壁は残存しない。周壁溝は隅円正方形を呈し、一辺は6.45mである。北辺の周壁溝から0.8m内側にも周壁溝がはしるが、南へは連続しない。本来は、住居址の内側を一辺4.7m前後の隅円正方形を呈する周壁溝として全周していたものと考えられる。中央坑に該当する遺構は、住居址の中央に位置する土壙か、もしくは南辺の周壁溝に接する土壙か断定しかねる。主柱穴は３個確認できるが、ｂは土壙と溝と切り合っているので、本来は４本柱であったと考えられる。柱間長はｃ－ｄが2.3m、ｄ－ａが2.4mである。床面積は、北西部を復元すれば37.8㎡と推定される。なお、内側の周壁溝が一辺4.7m前後でめぐっているとみなすならば、その床面積は20.2㎡と推定される。住居址の建て増しが実施されたとみなすならば、床面積の増加率は187％となる。

遺物は、甕Ｂ・Ｄ、高杯Ｃ、脚部など（図版61－22～29）が出土しているほか、鉈（図版149-８）も伴っている。

・ＳＢ１５（図版13上）

ＳＢ14と重複している。一部未掘部を調査区外に残している。周壁は残存しない。周壁溝は不整の円形プランを呈するが、全周するものではない。径は5.8m前後に復元することができる。周壁溝は幅15㎝前後、深さ３㎝である。中央坑は中心部にあり、長径0.7m、短径0.55m、深さ0.4mである。主柱穴は３個確認できる。ｄは調査区外にあるか、もしくはＳＢ14の周壁溝に切られていると考えられる。柱間長はａ－ｂが3.0m、ｂ－ｃが3.1mである。床面積は、径を5.8m前後で復元すれば27.4㎡と推定される。

遺物は、石鏃（図版141-228）が出土している。また、サヌカイト剝片も検出している。

・ＳＢ１６（図版13下）

ＳＢ14の東10mに位置している。東半部を未調査区に残している。周壁は残存しない。周壁溝は隅がさほど丸くない正方形を呈し、一辺は5.4mである。中心に位置する中央坑はほぼ半分を調査区外へ残し、規模は一辺が0.7m前後の隅円正方形で、深さは0.7mである。主柱穴は２個検出しているが、ｂとｃは調査区外である。柱間長はｄ－ａで3.0mである。床面積は、一辺を5.4m前後に復元して30.9㎡と推定される。

以上の16棟の住居址は、旧河道１とＳＤ32の西に立地している。

・ＳＢ１７（図版14上）

このＳＢ17以降ＳＢ50までの34棟の住居址は、旧河道１とＳＤ32の東に位置し、旧河道２の西にあたる。

ＳＢ17はＳＢ18と重複し、Ｍ地区の旧河道１とＳＤ32に接している。周壁は残存せず、わずかに残された周壁溝によって住居址であると知られる。図の中央の遺構を中央坑とみなせば、この中央坑の3.5m北に、南北にはしる直線の周壁溝が確認される。これを根拠に復元すれば、一辺約７mの比較的大型の隅円正方形の住居址になろうか。中央坑は長径1.3m、短径0.7m、深さ0.4mである。また遺構の密度が

あまりに高いため主柱穴を特定することはできなかった。あえて推定すれば、柱間長４ｍ前後のかなり長いスパンを考えなければなるまい。また床面積は、一辺を７ｍ前後と仮定すれば46.8㎡と推定される。

・ＳＢ１８（図版14下）

ＳＢ17と重複している。周壁は残存せず、わずかに残った周壁溝は全周はしないが隅円正方形に近いいびつな円形になる。径は約7.0ｍである。中心に位置する中央坑は径0.7ｍの円形で、深さは0.4ｍである。主柱穴は４個で、柱間長はａ－ｂが2.8ｍ、ｂ－ｃが2.8ｍ、ｃ－ｄが2.9ｍ、ｄ－ａが2.9ｍ、平均柱間長は2.85ｍである。床面積は、西半部を復元すれば29.1㎡と推定される。

・ＳＢ１９（図版15上）

ＳＢ18の東35ｍに位置する。住居址の中央を現代水路の掘方によって損壊を被っている。周壁は残存しない。周壁溝は直径5.3ｍの円形にめぐるが、南と北の２個所で途切れている。周壁溝は幅15㎝前後、深さ５㎝前後である。中央坑は中心に位置し、径0.6ｍの不整円形で、深さは0.4ｍである。主柱穴は４個で、柱間長はａ－ｂが2.5ｍ、ｂ－ｃが2.4ｍ、ｃ－ｄが2.4ｍ、ｄ－ａが2.5ｍ、平均柱間長は2.45ｍである。床面積は、21.6㎡である。

遺物は、土器の底部（図版62－43）と管玉(図版147-86)が出土している。

・ＳＢ２０（図版15下）

ＳＢ19の南10ｍに位置している。ＳＢ21と重複しているが、切り合い関係を確認することはできず、両者の早晩を決定することはできない。周壁は残存しない。周壁溝は不整な円形を呈し、径はほぼ5.0ｍである。中央坑は中央にあり、長径1.1ｍ、短径0.55ｍの楕円形を呈し、深さは0.7ｍである。この中央坑の南に接して、不整な楕円形土壙があるが、付随する遺構と考えてよかろう。主柱穴は４個で、柱間長はａ－ｂが2.4ｍ、ｂ－ｃが2.4ｍ、ｃ－ｄが2.5ｍ、ｄ－ａが2.3ｍ、平均柱間長は2.44ｍである。床面積は、19.4㎡である。

遺物は、土器の細片のほか石鏃(図版140-201)が出土している。

・ＳＢ２１（図版16上）

ＳＢ20と重複し、わずかに北にずれる。周壁は残存せず、わずかに周壁溝が認められる。この周壁溝は北部にのみ存在し、かつ一部に途切れる部分も存在しているが、径5.9ｍ前後の円形に復元が可能である。この周壁溝は、幅10㎝前後、深さ５㎝前後である。中央坑は中心に位置し、径0.45ｍの円形で、深さは0.4ｍである。主柱穴は４個確認したが、遺構の密度が高いために確証はない。提示した主柱穴では、柱間長はａ－ｂが2.1ｍ、ｂ－ｃが2.2ｍ、ｃ－ｄが2.2ｍ、ｄ－ａが2.2ｍ、平均柱間長は2.18ｍである。床面積は、径を5.9ｍ前後に復元して26.6㎡と推定される。

・ＳＢ２２（図版16下）

ＳＢ19の北25ｍに位置している。住居址の北部約４分の１は調査区外である。周壁は部分的に５㎝程度のこしているが、状態は良好とはいえない。周壁溝は円形を呈し、それが二重に重複している。重複する内側の周壁溝は、復元径約6.5ｍの円をなしている。中央坑は中心にあり、径約0.7ｍ、深さ0.2ｍの円形のものである。主柱穴は４個確認できるが、北の調査区外にさらに１個存在すると考えられるため、本来５本柱であった可能性が高い。調査区外に想定される主柱穴をａと、順次時計回りにｂ、ｃ、ｄ、ｅと呼ぶと、柱間長はｂ－ｃが2.9ｍ、ｃ－ｄが2.6ｍ、ｄ－ｅが2.9ｍとなる。

重複する外側の周壁溝は、復元径約7.3ｍの円をなしている。この周壁溝は同心円状に拡大して重複し

たものではなく、中心を南に約0.5m程度移動させた後に径を0.5m拡張して構築したもので、二つの周壁溝は北半部で重複すると考えられる。中央坑は中心にあり、先の中央坑と重複している。長径0.8m前後、短径0.6m、深さ0.15mの楕円形を呈するものと考えられる。主柱穴は先の主柱穴から放射状にのびる位置に4本確認できるが、調査区外にさらに1個存在すると想定されるため、同様に5本柱であったと考えられる。その調査区外の主柱穴をaとすると、柱間長はb－cが3.1m、c－dが2.9m、d－eが3.0mとなる。床面積は、内側の周壁溝で区画される部分が33.2m²となり、外側の周壁溝は北部の一部を復元すれば42.9m²と推定される。住居址の建て増しがおこなわれたと考えるならば、床面積にして129％の増加率を示している。

遺物は、土器底部と鉢（図版62－34，35）が出土している。また、床面から磨製石鏃（図版142-250）1点、そして土製円板（図版149-1）が検出されており、図示していないが石庖丁片3点も伴っている。また、サヌカイト剝片も検出している。

・**ＳＢ２３**（図版17上）

ＳＢ22の北東5mに位置している。周壁は西端で10cm程度残存しているが、東では消失している。周壁溝は西半部にのみ存在している。その南北辺は長さ3.2mであるが、東西長は不明である。平面形態は隅丸正方形と考えるのが妥当と思われる。中心にある遺構を中央坑とすれば、それを南北軸として線対照に展開して、東西長は4.4mと推定される。このときの平面形態は長方形となる。ただし、その中央坑を中心としても、主柱穴を確認することができないため、不確定な点を残している。4本柱にも2本柱にも復元することができない。

・**ＳＢ２４**（図版19下）

ＳＢ23の南10mに位置している。周壁は残存しない。周壁溝は隅円正方形を呈し、一辺は3.5～3.8mである。この周壁溝は、東北隅では確認できるが、残る3個所の隅では途切れている。また東辺の周壁溝は、幅が50cmになる部分も認められる。東辺より1m内側にも、南北方向に周壁溝状の溝がはしっている。中心に位置する中央坑は、長径0.9m、短径0.7mの楕円形を呈し、2段に構築され、深さは0.4mである。この中央坑の南東に接して、長さ1.1m、幅0.35mの長楕円形土壙があるが、住居址に付随する遺構であろう。主柱穴を4本想定することは困難であり、あえて復元すれば、中央坑を挟んで南北位置する2個の柱穴を該当させることが可能である。その間隔は、1.4mである。床面積は、一部復元すれば13.4m²と推定される。

遺物は、壺Ｆ（図版62－36）が出土している。

・**ＳＢ２５**（図版18上）

ＳＢ23の南10mに位置している。周壁は残存しない。周壁溝は西半部に残されているが、平面形態を確定することは困難である。東に残された長さ1mの周壁溝の一部が直線をなすことから考えて、一辺4.3mの隅円正方形の住居址と考えておく。周壁溝の西北辺は消失し、南東辺は若干いびつに湾曲しさらに二重にはしる。中心に位置する中央坑は、長径0.65m、短径0.5mの不整楕円形で、深さは0.4mである。主柱穴は4個で、柱間長はa－bが2.4m、b－cが2.4m、c－dが2.7m、d－aが2.6m、平均柱間長は2.53mである。床面積は、一辺4.3mとして復元すれば19.5m²と推定される。

中央坑から、上げ底の底部（図版62－44）が出土している。

・**ＳＢ２６**（図版19下）

ＳＢ25の15m東に位置する。平面形態は一辺4.7mの隅円正方形を呈するが、北西隅は一部周壁が崩壊

して原形を保つものではない。周壁は約30㎝程度残存しており、検出された住居址の中では比較的良好な保存状態を示している。周壁溝は認められない。ただし、北辺と南辺ならびに東辺の北隅と南隅は、幅10～15㎝、高さ10㎝の階段状の施設を設けている。また、西辺には周壁沿いに幅１～1.8mで、いわゆるベッド状遺構が付属している。この施設は、周壁西辺に平行して、床面と接する部分が直線を形成するものではなく、言うところの一般的なベッド状遺構とは形態を相違している。周壁に沿ったこれらの遺構は、いずれも地山を掘り残して設けられた施設である。中心に位置する中央坑は、径0.5mの不整円形を呈し、深さは0.1mで、周辺は加熱を被り赤変している。東辺の周壁に接して設けられた、径0.8m、深さ0.5mの遺構も、貯蔵穴などの付属設備であった可能性が高い。主柱穴は４個を確認している。いずれも径は20㎝前後であり、他の住居址の主柱穴と比較して若干小さいことを指摘しうる。柱間長はａ－ｂが2.6m、ｂ－ｃが2.4m、ｃ－ｄが2.6m、ｄ－ａが2.5mであり、平均柱間長は2.53mである。床面積は、23.7㎡である。

遺物は、壺Ａ、甕Ｂ・Ｃ、高杯Ｃ・Ｄ、蓋Ｂなど（図版62－46～54）が出土している。また、南西部の床面直上からは勾玉（図版147-11）が伴出しているほか、図示してはいないが砥石が３点と石鏃が２点出土している。また、サヌカイト剥片も検出している。

・**ＳＢ２７**（図版19上）

ＳＢ22の東15mに位置している。周壁は存在しない。周壁溝は、幅10㎝前後、深さ５㎝前後で、平面形態はややひずんだ円形を呈している。径は南北で6.1m、東西はやや張り出して6.7mで、復元すれば径6.5m前後になろう。この円形にめぐる周壁溝から、中心を等しくして、さらに半径を1.1m拡張して二重の周壁溝が設けられている。ただし、この周壁溝は全周するものではなく、一部途切れまた北半部は消失している。中心にある中央坑は、径1.0m、深さ0.4mの円形の遺構である。主柱穴は４個確認している。柱穴の検出面での径は、最大で0.6mを測り、底部で径を減じる円錐台形を呈していることが特徴である。柱間長はａ－ｂが3.7m、ｂ－ｃが3.4m、ｃ－ｄが3.6m、ｄ－ａが3.7mであり、平均柱間長は3.60mである。床面積は、内側の周壁溝では32.3㎡であり、外側の周壁溝では径を約8.6mと復元して48.3㎡と推定される。住居址の建て増しが実施されたとみなすならば、床面積にして150％の増加率となる。

遺物は、壺Ａ、甕Ｂ・Ｃ、鉢Ａ・Ｃ、蓋Ｂ（図版62－37～42）が出土している。このうち壺Ａ（図版62－37）と鉢Ｃ（図版62－42）が主柱穴から検出された土器である。また、図示してはいないが中央坑からは石庖丁の細片が２点出土している。さらに、石包丁未製品やサヌカイト剥片が出土しており、石器の生産を行っていた可能性が高い。

・**ＳＢ２８**（図版17下）

ＳＢ27の東10mに位置し、ＳＢ29と重複しているが、切り合い関係から両者の早晩を確認することは不可能である。周壁は存在しない。周壁溝は、幅15㎝前後、深さ５㎝前後で、平面形態は隅がさほど丸くならない隅円正方形を呈し、一辺は6.0mである。中央坑は中心にあり、径が0.6mの円形で、深さは0.6mである。主柱穴は４個を確認しており、柱間長はａ－ｂが3.0m、ｂ－ｃが3.1m、ｃ－ｄが2.9m、ｄ－ａが3.0mであり、平均柱間長は3.00mである。また床面積は、36.5㎡である。

遺物は、高杯Ａ（図版62－45）が出土している。

・**ＳＢ２９**（図版20上）

ＳＢ28と重複している。周壁は存在しない。周壁溝は東にわずかに残存しており、復元すれば径4.8m

前後の円形となる。中心にある中央坑は径0.6mの楕円形で、深さは0.5mである。主柱穴は4個で、柱間長はa－bが2.5m、b－cが2.4m、c－dが2.3m、d－aが2.4mであり、平均柱間長は2.40mである。床面積は、径を4.8mと復元すれば18.8m²と推定される。

・**SB30**（図版20下）

SB29の東5mの、O地区に位置する。周壁は存在しない。周壁溝は西にわずかに残存しており、復元すれば隅円正方形を呈する。中央坑を図示した場所に想定すると、この中央坑から西の周壁溝の距離を勘案して、一辺7.3m前後の住居址となろう。中央坑は長径0.6m、短径0.4mの楕円形で、深さは0.4mである。主柱穴は4個想定しているが、柱穴の密度があまりに高いために確証はない。類推できる柱間長はa－bが3.5m、b－cが3.6m、c－dが3.7m、d－aが3.6mであり、平均柱間長は3.60mである。床面積は、一辺を7.3m前後と復元すれば52.2m²と推定される。

・**SB31**（図版21上）

SB28の南10mに位置する。周壁は、西半部で30cm、東半部で10cm程度確認することが可能であり、検出された住居址の中で最も残存状況の良好なものである。平面形態は、径が7.0mの正円形を呈している。周壁溝は北西部に約4分の1周のみ検出された。幅は15cm前後、深さは5cm前後であり、この周壁溝の両端は楕円形上に拡張されて収束している。排水設備と想定すべきかもしれない。中央坑は中心にあり、径1.1m前後のほぼ円形を呈し、深さは0.4mである。 主柱穴は4個で、径が0.4mに達するものもあり、深さは0.3m前後である。柱間長はa－bが3.2m、b－cが3.4m、c－dが2.8m、d－aが3.0mであり、平均柱間長は3.10mである。また　床面積は38.6m²である。

遺構の残りが良いために、出土した遺物も比較的豊富であるが、住居址内で切り合った他の遺構に伴う遺物との分離は不可能であり、明確に住居址の時期を示すものは少ない。土器では、壺A・C、甕B、高杯A、器台D、蓋B、鉢B・Cなど（図版63～64－55～96）がある。これらのうち床面直上の資料は、図版63の55、57、58、61、66、67、68、69、70、73、図版64の77、82、83、87、88である。中央坑から出土した土器は、図版63の60と図版64の93である。また、図版64の84の鉢は主柱穴aから検出された資料である。このほかに、図示してはいないが石庖丁片1点、石斧1点、砥石3点が出土している。さらに、サヌカイト剥片も検出されている。

・**SB32**（図版21下）

SB31の東15mに位置する。周壁は15cm前後残存している。平面形態は隅円正方形を呈し、南西隅は溝に切られているが、一辺は東西が4.6m、南北が4.4mである。周壁に平行して内側には、平面形態と同様に隅円正方形の溝が設けられている。北辺と西辺では周壁の40cm内側に、東辺では周壁の20cm内側にあり、南辺では周壁に沿って設置されている。中央坑は中心にあり、径0.2m、深さ0.1mである。周囲は加熱によって赤変している。SB26と似た構造であるならば、東辺の周壁に接して、やや規模の大きな土壙が構築されているであろうが、溝に切られているため存在を確認することはできない。主柱穴は3個検出しているが、cは同じく溝に切られているために確認されないが、四本柱であることに疑いはなかろう。柱間長はa－bが2.3m、d－aが2.1mである。床面積は、一部を復元して20.1m²と推定される。

遺物は、鉢と底部（図版65－97，98）が出土している。鉢C（図版65－97）は床面直上の資料である。このほか、図示していないが石錐と砥石が出土している。さらに、土錘（図版148-4）もこの住居址から検出された遺物である。さらに、サヌカイト剥片も出土している。

・ＳＢ３３（図版22上）

ＳＢ32の南に接して位置している。周壁は10cm前後残存し、平面形態は円形で、径は7.5mである。周壁に沿って周壁溝が確認されるが、西では一部途切れている。幅は15～20cm、深さは10cm前後である。周壁の30cm内側にも中心を等しくもつ溝がめぐらされている。幅は15～20cm、深さは５cm前後である。中央坑は中心に位置し、長径1.4m、短径1.0mの楕円形を呈し、深さ0.8mである。主柱穴は４個を確認しており、柱間長はａ－ｂが3.0m、ｂ－ｃが3.1m、ｃ－ｄが3.1m、ｄ－ａが3.0mであり、平均柱間長は3.05mである。床面積は、45.2m²である。

遺物は、甕Ｂ、高杯Ａ・Ｃ、底部（図版65－99～104）がある。このうち、図版65－99と101の土器は床面直上の出土で、同100は内側の周溝の出土である。このほか、図示していないが砥石が共伴している。さらに、サヌカイト剥片も検出されている。

・ＳＢ３４（図版22下）

ＳＢ33の南３ｍに位置している。ＳＢ35と重複しているが、切り合い関係から両者の早晩を確認することは不可能である。周壁は５cm程度わずかに残存しており、平面形態は隅がさほど丸くならない隅円正方形を呈し、一辺は4.9mである。周壁溝は東北隅に東西2.7m、南北3.8mの「Ｌ」字状に、同じく南西隅に東西1.2m、南北1.8mの「Ｌ」字状に設置されており、他の部分には認められない。周壁溝は幅15～20cm、深さ10cm前後である。中央坑は中心にあり、径が0.25mの小型の円形の施設で、深さは0.6mである。その周囲は加熱を被って赤変している。東辺の中央、周壁に接した位置にある、径0.5m前後、深さ0.3mの施設は、ＳＢ26と同様に住居址に付属するものかもしれない。主柱穴は４個を確認しており、柱間長はａ－ｂが2.1m、ｂ－ｃが2.0m、ｃ－ｄが2.0m、ｄ－ａが1.9mであり、平均柱間長は2.00mである。床面積は、23.4m²である。

遺物は、甕Ｂと脚部（図版65－105～107）が出土している。また、臼玉２個（図版147-6,7）と管玉１個（図版147-97）が出土していることが特筆される。図示していないが、砥石も共伴している。

・ＳＢ３５（図版23上）

ＳＢ34と重複しているが、主軸方位は相違している。周壁は西半部で2～3cm程度残存しているが、東半部では消失しており、周壁溝も残してはいない。残された周壁の形態から、一辺6.0mの隅円正方形の住居址と判断される。西半部には周壁溝が確認できるが、北辺には存在せず、また北西隅では浅い土壙状となっている。中央坑は中心にあり、いくつかの遺構が切り合うが、径0.2mの円形のものである。その周囲は加熱を被って赤変している。南辺の中央、周壁に接した位置にある、一辺0.5m前後の隅円正方形をなし、深さ0.7mの施設は、ＳＢ26と同様に住居址に付属するものかもしれない。主柱穴は４個を確認しており、柱間長はａ－ｂが3.0m、ｂ－ｃが3.0m、ｃ－ｄが3.0m、ｄ－ａが3.1mであり、平均柱間長は3.03mである。床面積は、一辺を6.0m前後に復元すれば39.9m²と推定される。

・ＳＢ３６（図版23下）

ＳＢ35の南西５ｍに位置している。周壁は南半部で10cm程度残存しており、保存状態は比較的良好である。平面形態は、径4.1mのほぼ正円形を呈している。周壁溝は、一部他の遺構に切られるが、全周するものと考えてよかろう。中心に位置する中央坑は、径0.2mの円形で、深さは0.1mである。主柱穴は４個を確認しており、柱間長はａ－ｂが2.0m、ｂ－ｃが2.1m、ｃ－ｄが1.9m、ｄ－ａが1.9mであり、平均柱間長は1.98mである。床面積は、14.4m²である。

遺物は、甕Ｃ、器台Ｂ（図版65－108～112）が出土している。図版65-108の甕は、床面直上出土の資

料である。また、図示していないが、砥石も出土している。さらに、サヌカイト剝片も検出されている。

・ＳＢ３７（図版24上）

ＳＢ36の南10mに位置する。周壁は残存しない。東辺に幅10～15cm、深さ３cm前後の周壁溝がわずかに検出されているにすぎない。この周壁溝は南北に直線にのび、両端部が西に屈曲して0.5m延長されている。この周壁溝の東には、0.2m隔ててさらに周壁溝が重複している。周壁溝の南北長は2.75mを測るが、東西長は決定しがたい。ただし、推定される東西の主軸にかかる２個の柱穴を主柱穴と想定すれば、南北長は5.1mに復元される。すなわち、一辺が2.75mと5.1mの長方形プランの住居址になるものと考えられる。床面積は、一辺が2.75mと5.1mの長方形と仮定すれば13.8m²と推定される。

住居址に伴う遺物は出土していない。

・ＳＢ３８（図版24下）

ＳＢ28の東30mに位置し、旧河道２に近接している。周壁は西半部で20cm残存しているが、東半部では消失している。西南隅と北辺、西辺から推測すれば、隅円正方形の住居址と考えられるが、規模を知ることはできない。また、推定される住居址の床面に中央坑と主柱穴を特定することは不可能であった。

・ＳＢ３９（図版25上）

ＳＢ38の南に接している。周壁は西半部で20cm前後残存しているが、東半部では消失している。西辺には周壁に沿って周壁溝が設けられている。それは南北にのびたのち、両端部で東に屈曲してゆく。この位置では南北長3.1mを測るが、東西長を計測することは不可能であった。残存する部分から長方形の平面形態を呈すると考えられるが、定かではない。また、推定される住居址の床面に中央坑と主柱穴を特定することは不可能であった。

・ＳＢ４０（図版25下）

ＳＢ39の南に接し、旧河道２に近接している。周壁は残存していない。北西辺に幅10～20cmの周壁溝が確認されるが、南東辺は旧河道の影響を被ったためか消失している。この周壁溝は、やや外に張り出しながら西隅で屈曲しており、平面形態は隅円正方形を呈する可能性が高い。推定される住居址の床面から中央坑と主柱穴を見出すことはできなかった。

・ＳＢ４１（図版26上）

ＳＢ40の南30mに位置し、ＳＢ42と接している。西半部に３cm程度の周壁が残存している。この周壁は南北4.4mを測る。想定される床面の中心にある、径0.5m、深さ0.2mの円形の遺構を中央坑と考えれば、一辺4.4mの隅がさほど丸くならない隅円正方形の住居址が想定される。主柱穴を限定することは不可能であった。また床面積は、一辺を4.4m前後と復元すれば19.6m²と推定される。

・ＳＢ４２（図版26下）

ＳＢ41の西に接している。周壁は残存しない。全周はしないものの一部で確認される周壁溝は、東部では円弧をなすが、西部では不整形である。径が4.7m前後の円形住居址と考えておきたい。中央坑は中心にあり、長径0.9m、短径0.5mの楕円形で深さは0.3mである。この中央坑の西に長さ1.2m、幅0.3mの長楕円形土壙が設けられているが、中央坑と共伴する付属施設である可能性が高い。主柱穴４個確認しており、柱間長はａ－ｂが1.9m、ｂ－ｃが1.8m、ｃ－ｄが1.9m、ｄ－ａが1.8mであり、平均柱間長は1.85mである。床面積は、一部の周壁溝を復元すれば16.7m²と推定される。

遺物は、中央坑から石鏃（図版140-203）と石庖丁未製品が出土している。さらに、サヌカイト剥片も検出されている。

・ＳＢ４３（図版27上）

ＳＢ42の南東５ｍに位置する。周壁は西半部では10～15㎝程度残存しているが、東半部ではすでに消失している。周壁の残る北西辺と南西辺には、幅10～15㎝、深さ３㎝の周壁溝が確認される。周壁と周壁溝は接しており、直角に屈曲して直線的にのびる。推定される床面の中心にあたる、径0.4ｍ前後、深さ0.3ｍの円形の遺構を中央坑とみなせば、周壁溝の中軸垂線とこの中央坑を結ぶ距離の倍、すなわち約6.1ｍを一辺の長さとする隅円正方形の住居址と考えられる。主柱穴は４個を確認しており、柱間長はａ－ｂが3.1ｍ、ｂ－ｃが3.5ｍ、ｃ－ｄが3.3ｍ、ｄ－ａが3.5ｍであり、平均柱間長は3.23ｍである。床面積は、一辺を6.1ｍ前後と復元すれば37.1㎡と推定される。

遺物は、脚部と底部（図版65－113,114）が出土している。

・ＳＢ４４（図版27下）

ＳＢ43の南西５ｍに位置する。周壁は南半部で約10㎝程度残存しているが、北半部では消失している。平面形態は、径6.5ｍの円形を呈する。周壁の残る部位では周壁溝が確認され、さらに西半部では30㎝隔てて同心円の外側と内側に二重にめぐらされている。外側の周壁溝は、西半部では幅５㎝前後、深さ３㎝前後、東半部では幅10～20㎝、深さ５㎝前後、内側の周壁溝は西半部では幅15㎝前後、深さ10㎝前後、南半部では幅20～30㎝、深さ５㎝前後である。中央坑は中心に位置し、径0.8ｍ前後の不整な円形を呈し、深さは0.3ｍである。主柱穴は４個確認してる。図版にアミを落とした柱穴の柱間長はａ－ｂが2.6ｍ、ｂ－ｃが2.4ｍ、ｃ－ｄが2.5ｍ、ｄ－ａが2.4ｍであり、平均柱間長は2.48ｍである。さらに、それら主柱穴は中央坑を中心として半径1.7ｍの円上に配されているが、同じく中央坑を中心として半径2.3ｍの円上に時計逆回りに25～30°回転した位置にさらに主柱穴ａ’、ｂ’、ｃ’、ｄ’が確認される。この柱間長はａ’－ｂ’が3.3ｍ、ｂ’－ｃ’が3.4ｍ、ｃ’－ｄ’が3.4ｍ、ｄ’－ａ’が3.3ｍであり、平均柱間長は3.35ｍである。床面積は、外側の周壁溝の一部を復元すれば33.1㎡と推定される。この床面に相当する主柱穴は、後者のａ’、ｂ’、ｃ’、ｄ’の各柱穴が該当するものと考えられる。

遺物は、サヌカイト剥片も検出されている。

・ＳＢ４５（図版28上）

ＳＢ44の東５ｍに位置している。周壁は残存しない。周壁溝は全周するものではなく、東半部に確認されるが、途切れる部分もある。平面形態は、径6.5ｍの円形を呈している。中央坑は中心に位置し、径1.0ｍの不整円形で深さは0.5ｍである。主柱穴は４個を確認しており、柱間長はａ－ｂが2.9ｍ、ｂ－ｃが2.7ｍ、ｃ－ｄが3.1ｍ、ｄ－ａが2.9ｍであり、平均柱間長は2.90ｍである。床面積は、径を6.5ｍ前後と復元すれば34.4㎡と推定される。

・ＳＢ４６（図版28下）

ＳＢ45の南10ｍに位置している。周壁は４辺で約10㎝程度確認しており、残存状況は比較的良好である。周壁の平面形態は、南北の長辺が5.95ｍ、東西の短辺が4.55ｍの長方形となる。周壁溝は西辺の周壁に接する部分と、そこから屈曲して東に0.6ｍのびる北辺で確認できる。周壁溝の幅は10～15㎝、深さ５㎝前後である。中央坑は東の短辺の中点に接した位置に設けられている。遺構検出面は一辺1.0ｍの

第 1 表　住　居　址　一　覧　表

No.	地区	平面形態			周壁溝		主柱穴	
		形態	分類	規模 (m)	有無	位置	数	柱間長 (m)
1	E	隅円正方形	II b	5.5 × —	無		4	(2.45)
2	B	長方形	III a ?	— × 3.1	有	3辺のみ	2 ?	—
3	B	隅円正方形	II b	5.5 × 5.5	有	全周	4	3.18
4	C	円形	I a	(7.9)×(7.9)	有	南半部のみ	4	3.55
5	C	隅円正方形	II b	5.2 × 5.8	有	二重	4	2.36
6	C	隅円正方形	II b	7.9 × 7.9	有	北半部は二重	4	4.45
7	C	円形	I a	6.8 × 6.8	有	ほぼ全周	4	2.98
8	C	隅円正方形	II b	5.9 × 5.5	有	二重	4	2.83
9	G	隅円正方形	II b	(5.2)×(5.2)	有	南辺のみ残存	4	3.30
10	G	隅円正方形	II b ?	— × —	有	調査区では全周	4 ?	—
11	G	隅円正方形	II c ?	(6.5)× 6.5	有	調査区では全周	—	—
12	G	隅円正方形	II b	6.8 × 6.8	有	ほぼ全周	4	3.95
13	G	円形	I a	6.0 × 6.4	有	途切れる部分がある	4	2.72
14	G	隅円正方形	II c	6.45× 6.45	有	ほぼ全周 一部で二重	4	2.35
15	G	円形	I a	(5.8)×(5.8)	有	調査区でほぼ全周	4	3.05
16	G	隅円正方形	II b	(5.4)× 5.4	有	調査区でほぼ全周	4	(3.00)
17	M	隅円正方形	II b ?	(7.0)×(7.0)	有	西半部は消失	4 ?	—
18	M	円形	I a	(7.0)×(7.0)	有	西半部は消失	4	2.85
19	N	円形	I a	5.3 × 5.3	有	一部で途切れる	4	2.45
20	N	円形	I a'	5.0 × 5.0	有	ほぼ全周	4	2.44
21	N	円形	I a	(5.9)×(5.9)	有	北半部のみ 一部で二重	4	2.18
22	N	円形	I b	7.3 ×(7.3)	有	調査区でほぼ全周	5	2.80
23	N	隅円正方形	II	— × 3.2	有	東辺は消失	—	—
24	N	隅円正方形	II a	3.5 × 3.8	有	ほぼ全周 一部途切れる	2	(1.4)

中央壙		床面積 (m²)	出土遺物	備考
位置	規模 ( )内は推定値 L × W × D (m)			
中央	0.6 × — ×0.4	23.1	土器	北半部のみ発掘を実施
—	— × — × —	—	土器	東西辺の長さは不明
中央	0.45×0.45×0.3	29.1	土器・石鏃	ＳＢ02と重複する
中央	0.7 ×0.7 ×0.5	(43.1)	土器・石庖丁・石鏃	南半部のみ発掘を実施
中央	0.7 ×0.7 ×0.6	27.6		ＳＢ04と重複する
中央	0.6 ×0.6 ×0.3	58.4	土器・ガラス小玉・鉄器	ＳＢ07と重複する
中央	0.6 ×0.3 ×0.2	33.2	土器・石庖丁・石斧・砥石	
中央	1.0 ×0.7 ×0.6	外31.1 内22.8	土器・管玉・石錐	床面積では136％の増加
中央	0.5 ×0.5 ×0.25	(29.2)		周壁溝は南辺のみ
—	— × — × —	—	陽物状土製品	ＳＢ11と重複する 大半を調査区外に残す
縁辺	0.6 ×0.5 ×0.4	(41.8)	土器	大半を調査区外に残す
中央	— × — ×0.2	45.0	土器	
中央	0.85×0.55×0.5	29.8	石斧・石錐・砥石	
中央 縁辺	0.3 ×0.3 ×0.15 1.1 ×1.0 ×0.4	内20.2 外37.8	土器・鉄器	床面積では87％の増加
中央	0.7 ×0.55×0.4	(27.4)	石鏃	ＳＢ14と重複する
中央	(0.7)×0.7 ×0.7	30.9		西半部のみ発掘を実施
中央？	1.3 ×0.7 ×0.4	(46.8)		推定復元では長い柱間長になる ＳＢ18と重複する
中央	0.7 ×0.7 ×0.4	(29.1)		
中央	0.6 ×0.6 ×0.4	21.6	土器・管玉	現代水路掘方に切られる
中央	1.1 ×0.55×0.7	19.4	石鏃	ＳＢ21と重複する 中央壙に接して長楕円形土壙がある
中央	0.45×0.45×0.4	(26.6)		
中央	(0.8)×0.6 ×0.2	内33.2 外42.9	土器・石庖丁・磨製石鏃・土製円板	床面積では129％の増加
—	— ×	—		主柱穴・中央壙は未検出
中央	0.9 ×0.7 ×0.4	13.4	土器	中央壙に接して長楕円形土壙がある

25	N	隅円正方形	II b	(4.3)×(4.3)	有	西半部は消失	4	2.53
26	N	隅円正方形	II c'	4.7 × 4.7	無		4	2.53
27	N	円　形	I a	(8.6)× 8.5	有	内側は全周 外側は一部	4	3.60
28	O	隅円正方形	II b	6.0 × 6.0	有	全周	4	3.00
29	O	円　形	I a	(4.8)×(4.8)	有	東の一部のみ残存	4	2.40
30	O	隅円正方形	II b	(7.3)×(7.3)	有	西辺のみ残存	4	3.60
31	O	円　形	I a	7.0 × 7.0	有	西の一部のみ他はない	4	3.10
32	O	隅円正方形	II c	4.6 × 4.4	有	内側は全周 外は周壁のみ	4	2.20
33	O	円　形	I a	7.5 × 7.5	有	内側は全周 外側は一部	4	3.05
34	O	隅円正方形	II c	4.9 × 4.9	有	東西の隅にのみ残存	4	2.00
35	O	隅円正方形	II c	(6.0)× 6.0	有	東半部は消失	4	3.03
36	O	円　形	I a	3.4 × 3.4	有	全周	4	1.98
37	O T	長方形	III a	(5.1)× 2.75	有	東半部のみ 一部二重	2	(2.40)
38	O	—	II ?	— × —	有	西半部のみ	—	—
39	O	—	III a	— × 3.1	有	西半部のみ	—	—
40	O	—	II ?	— × —	有	西半部のみ	—	—
41	O	隅円正方形	II b ?	(4.4)× 4.4	有	西半部のみ	4 ?	—
42	O	円　形	I a'	(4.7)× 4.7	有	ほぼ全周 一部途切れる	4	1.85
43	T	隅円正方形	II b	(6.1)×(6.1)	有	西半部のみ	4	3.23
44	O	円　形	I a	6.5 ×(6.5)	有	ほぼ全周 一部途切れる	4	内2.48 外3.35
45	U	円　形	I a	6.5 × 6.5	有	ほぼ全周 一部途切れる	4	2.90
46	T	長方形	III b	4.55× 5.95	有	西長辺のみ 他はない	2	(2.70)
47	U	円　形	I	(7.5)×(7.5)	無		—	—
48	U	—	III ?	— × 3.8	有	西半部のみ	—	—
49	U	隅円正方形	II c	6.3 × 6.3	有	内側は一部 外側はない	4	内1.93 外3.10
50	U	—	II ?	— × —			—	—

中央	0.6 ×0.5 ×0.4	(19.5)	土器	残存する周壁溝から復元される平面形態はいびつである
中央 縁辺	0.5 ×0.5 ×0.1 0.5 ×0.5 ×1.0	23.7	土器・勾玉・石鏃・砥石	中央壙は赤変している 西辺に接してベッド状遺構を付設する
中央	1.0 ×1.0 ×0.4	内 32.3 外(48.3)	土器・石庖丁	床面積では150%の増加
中央	0.6 ×0.6 ×0.6	36.5	土器	ＳＢ29と重複
中央	0.6 ×0.6 ×0.5	(18.8)		
中央	0.6 ×0.4 ×0.4	(52.2)		
中央	1.1 ×1.1 ×0.4	38.6	土器・石庖丁・石斧・砥石	周壁は10～30cm残存する
中央 縁辺	0.2 ×0.2 ×0.1 — × — × —	20.1	土器・土錘・石錐・砥石	中央壙は赤変している 縁辺の土壙は溝に切られる
中央	1.4 ×1.0 ×0.8	45.2	土器・砥石	
中央 縁辺	0.25×0.25×0.1 0.5 ×0.5 ×0.3	23.4	土器・臼玉・管玉・砥石	中央壙は赤変している
中央 縁辺	0.2 ×0.2 ×0.15 0.6 ×0.6 ×0.6	(39.9)		中央壙は赤変している
中央	0.2 ×0.2 ×0.1	14.4	土器・砥石	周壁は10cm残存する
—	— × — × —	(13.8)		
—	— × — × —	—		
—	— × — × —	—		
—	— × — × —	—		
中央	0.5 ×0.5 ×0.2	(19.6)		
中央	0.9 ×0.5 ×0.3	16.7	石庖丁・石	中央壙に接して長楕円形土壙が位置している
中央	0.4 ×0.4 ×0.3	(37.1)	土器・石庖丁	
中央	0.8 ×0.8 ×0.3	33.1		
中央	1.0 ×1.0 ×0.5	34.4		
縁辺	1.0 ×1.0 ×0.3	26.6	土器・砥石	
—	— × — × —	(44.2)		
—	— × — × —	—		
中央 縁辺	0.2 ×0.2 ×0.1 1.0 ×0.8 ×0.5	内23.3 外39.5	土器・鉄器・石斧・砥石	中央壙は赤変している 床面積では170%増加
—	— × — × —	—		

方形を呈しているが、15cm掘り下げると径0.6mの円形となり、深さは0.3mである。主柱穴は2個確認している。住居址の南北の短辺の中点を結ぶ長軸上にあり、柱間長は2.70mである。北の主柱穴は径0.35m、深さ0.3m、南の主柱穴は径0.2m、深さ0.4mである。床面積は、26.6m²である。

遺物は、底部（図版65－115）が出土しているが、主柱穴以外の柱穴から検出されたものである。

・**ＳＢ４７**（図版29上）

ＳＢ45の東５ｍに位置している。周壁は西半部に深さ20cm程度で円弧状に残存するのみであり、大半は消失している。残された周壁から復元すれば、径7.5mの円形を呈すると考えられる。中央坑と主柱穴については不明である。また床面積は、住居址の径を7.5mとすれば44.2m²と推定されるが、確証は乏しい。

遺物は、図示していないが石庖丁未製品が出土している。

・**ＳＢ４８**（図版29下）

ＳＢ46の東15mに位置している。周壁は南西部で10cm程度残存しているが、北東部は消失している。他の遺構と切り合っているため不明の点が多いが、周壁溝は南西辺には残存しているようである。残された周壁と周壁溝から一辺は3.8m前後と想定されるが、これを一辺とする隅円正方形であるか、これを短辺とする長方形であるかは決しがたい。中央坑と主柱穴については不明である。

・**ＳＢ４９**（図版30上）

ＳＢ46の南東30mに位置している。周壁は４辺で15cm程度残存しているが、南東隅のみ消失している。平面形態は隅がさほど丸くならない隅円正方形を呈し、一辺は6.3m前後である。北辺と東辺は直線的にはしるが、西辺はわずかに湾曲している。周壁溝は認められなかった。中央坑は中心に位置し、径0.2m、深さ0.1mの円形の遺構である。周囲は加熱を被って赤変している。東辺の周壁の中点付近に接して設けられた、長径1.0m、短径0.8m、深さ0.5mの遺構も、この住居址に付随するものと考えてよかろう。主柱穴は４個を確認しており、柱間長はａ－ｂが3.1m、ｂ－ｃが3.1m、ｃ－ｄが3.1m、ｄ－ａが3.1mであり、平均柱間長は3.10mである。床面積は、南東隅を復元すれば39.5m²と推定される。この住居址の床面には、さらにもうひとつ周壁溝が認められる。北辺は直線にのびて、西隅で屈曲して南にはしり、南辺も直線にのびて、東西隅で北に屈曲している。中心は先の住居址と等しいが、主軸は北から約30°西に傾き、東西辺4.7m、南北辺5.1m前後のほぼ隅円正方形の平面形を呈する。この床面に対応する中央坑は、先の中央坑とほぼ重複し、径0.15m、深さ0.1mの円形のもので、これも周囲は加熱を被って赤変している。推定される東辺周壁溝の中位に接して、径0.5m、深さ0.4mの遺構がある。これも先の住居址と同じく付属施設であると考えておきたい。この周壁溝に画される床面には、主柱穴がａ'、ｂ'、ｃ'、ｄ'の４個確認される。この柱間長はａ'－ｂ'が1.8m、ｂ'－ｃ'が1.8m、ｃ'－ｄ'が1.8m、ｄ'－ａ'が1.9mであり、平均柱間長は1.83mである。床面積は、外側が一部を復元して39.5m²で、内側の周壁溝が一辺が4.7mと5.1mと仮定して23.3m²と推定される。住居址の建て増しが実施されたとみなすならば、床面積の増加率は170％である。

遺物は、甕Ｅ、高杯Ｅ、鉢Ａ、底部、脚部など（図版65－116～122）が出土している。このうち、図版65-118と119は床面直上の資料である。また、図示していないが、鉄片と太型蛤刃石斧片も共伴している。さらに、サヌカイト剥片も検出されている。

・**ＳＢ５０**（図版30下）

ＳＢ49の東５ｍに位置している。周壁は存在しない。西辺と南辺に直交する周壁溝が認められるが、

一辺の長さや、平面形態が隅円正方形であるか長方形であるかは断定しがたい。床面のほぼ中央部は他の遺構と切り合っているため、中央坑を特定することは不可能であり、さらに主柱穴も認定することができなかった。

第３節　　掘立柱建物跡

調査区には、実に数多くの柱穴が存在している。この中には、先にも述べたように、もはや周壁と周壁溝が削平を被った竪穴住居址が残されていることは想像にかたくない。ただし、そうした柱穴には、掘立柱建物跡に復元されるものがわずかながら認められる。しかし、あまりに柱穴が多いため、そのすべてを完全に復元しえたとは決して言いがたい。また、旧河道１とＳＤ33の東は奈良・平安時代の遺構と重複しているため、この地区で確認される掘立柱建物跡は弥生・古墳時代の所産とはみなさず、主として、旧河道１より西のＢ地区、Ｃ地区、Ｇ地区、Ｈ地区に限定せざるをえなかった。こうして復元された掘立柱建物跡は９棟を数える。

・ＳＢ１０１

Ｂ区にあり、一部ＳＢ102と重複している。桁行と梁行の間数は３間×２間で、それぞれ6.2m×2.1m前後である。桁行方位はＮ－34°－Ｅをなし、想定面積は約13.0m²である。柱間長は不安定で、西桁行は1.9～2.4m、東桁行は1.9～2.3m、また北梁行は1.0mと1.3m、南梁行は0.6mと1.5mである。

・ＳＢ１０２

Ｂ区にあり、一部ＳＢ101と重複している。桁行と梁行の間数は３間×２間で、それぞれ5.5m×2.2m前後である。桁行方位はＮ－36°－Ｅをなし、想定面積は約12.1m²である。柱間長は不安定で、西桁行は1.4～2.2m、東桁行は1.7～2.1m、また北梁行は0.9mと1.3m、南梁行は1.0mと1.3mである。

・ＳＢ１０３

Ｃ区にあり、一部ＳＢ04と重複している。桁行と梁行の間数は２間×２間で、それぞれ4.3m×3.5m前後である。総柱である可能性が高い。桁行方位はＮ－12°－Ｅをなし、想定面積は約15.0m²である。柱間長は不安定で、西桁行は2.3mと2.0m、東桁行は2.3mと2.0m、北梁行は1.7mと1.7m、南梁行は1.7mと1.9mである。

・ＳＢ１０４

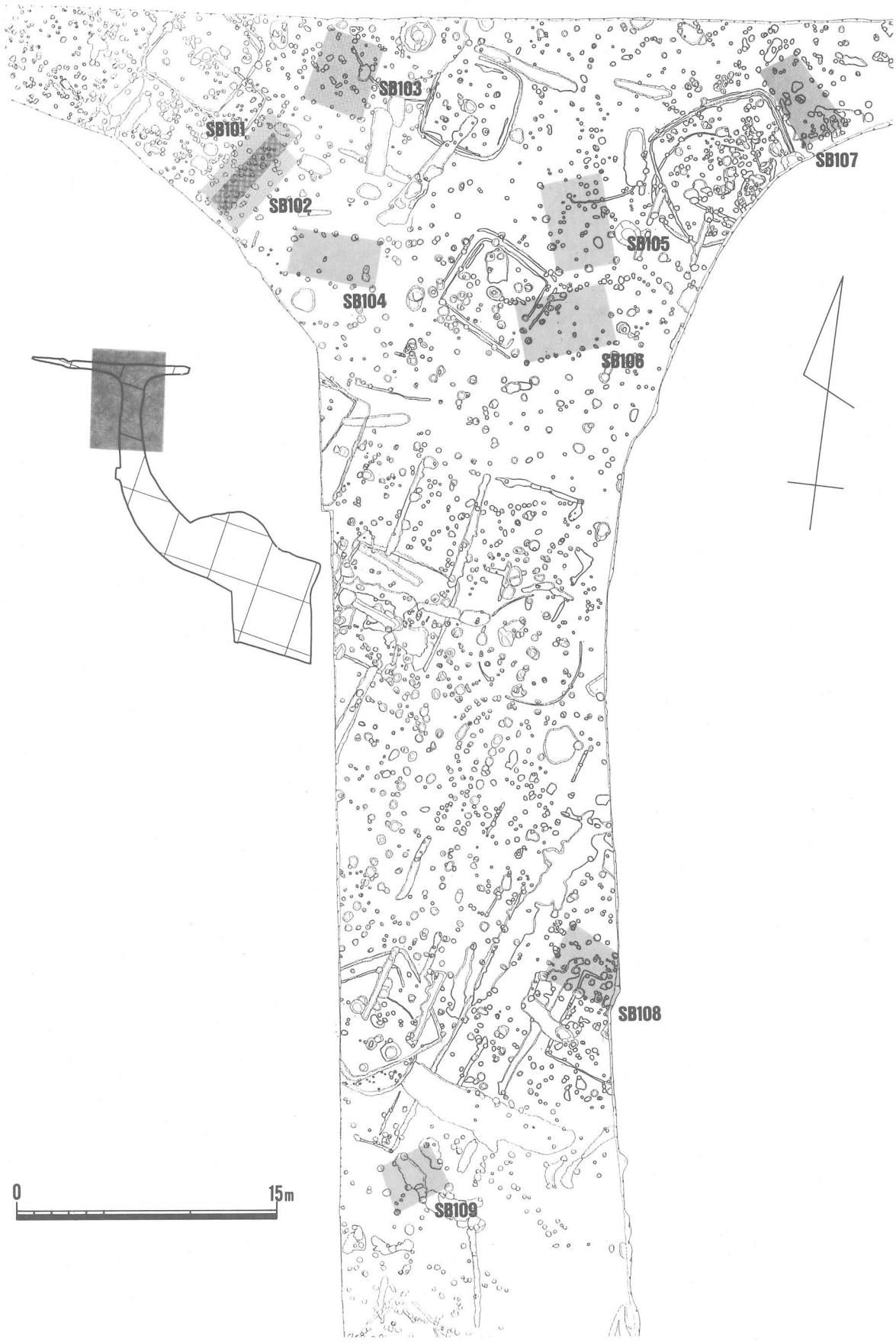
Ｃ区にあり、ＳＢ102の東に位置している。桁行と梁行の間数は４間×東梁行１間、西梁行２間で、それぞれ5.2m×2.8m前後である。桁行方位はＮ－87°－Ｅをなし、想定面積は約14.6m²である。柱間長は不安定で、北桁行は1.1～1.5m、南桁行は1.2～1.4m、東梁行は2.8m、西梁行は1.3mと1.5mである。

・ＳＢ１０５

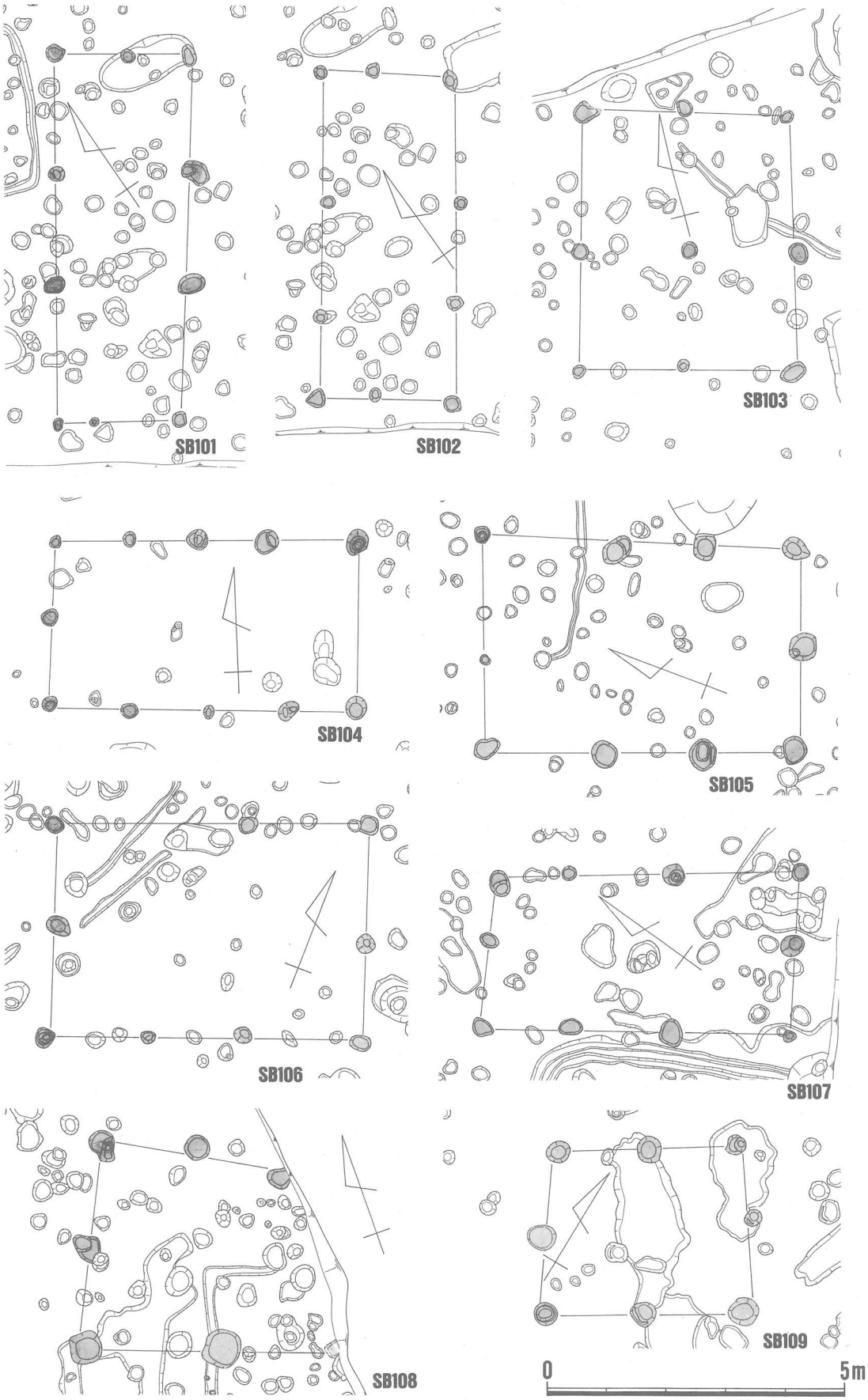
Ｃ区にあり、ＳＢ08の北に位置している。桁行と梁行の間数は３間×２間で、それぞれ5.3m×3.5m前後である。桁行方位はＮ－20°－Ｗをなし、想定面積は約18.6m²である。柱間長は不安定で、西桁行は1.6～2.0m、東桁行は1.5～2.2m、また北梁行は1.5mと2.1m、南梁行は1.7mと1.7mである。

・ＳＢ１０６

Ｃ区にあり、西は一部ＳＢ08と重複している。桁行と梁行の間数は東桁行２間、西桁行き３間×２間



第10図　　掘立柱建物跡　遺構配置図



第11図　　掘立柱建物跡　遺構図

で、それぞれ5.3m×3.7m前後である。桁行方位はN－70°－Eをなし、想定面積は約19.6m²である。柱間長は不安定で、北桁行は2.1mと3.2m、南桁行は1.6～2.0m、東梁行は2.0mと1.7m、西梁行は1.7mと1.9mである。

・SB107

C区にあり、SB06の東に隣接している。桁行と梁行の間数は3間×2間で、それぞれ5.2m×2.5～2.8m前後である。桁行方位はN－36°－Wをなし、想定面積は約14.0m²である。柱間長は不安定で、西桁行は1.5～2.0m、東桁行は1.2～2.1m、また北梁行は1.5mと1.0m、南梁行は1.6mと1.2mである。

・SB108

G区にあり、南は一部SB16と重複している。東の未調査区に東梁行が残存していると想定される。桁行と梁行の間数は2間以上×2間で、それぞれ4.3m以上×3.5m前後である。桁行方位はN－67°－Wをなす。柱間長は不安定で、北桁行は1.5mと1.5m、南桁行は2.4mと1.9m、また西梁行は1.7mと1.8m、東梁行は不明である。

・SB109

G区にあり、SB15の南に位置している。桁行と梁行の間数は2間×2間で、それぞれ3.0～3.5m×2.8m前後である。桁行方位はN－56°－Eをなし、想定面積は約8.9m²である。柱間長は不安定で、北桁行は1.5mと1.5m、南桁行は1.8mと1.7m、また西梁行は1.5mと1.2m、東梁行は1.2mと1.6mである。

第4節　土　　壙

いわゆる土壙も、調査区全域に多数検出されている。平面形態は不整形で、壙底が平坦ではないものが主体をなしているが、平面形態は長方形で、壙底が平坦な土壙も検出される。後者の中には、棺材こそ遺存していないものの、埋土の色調や粒度の相違から、組合式木棺が埋置されたと考えてよい遺構も存在しており、これらは木棺墓として記述し、後章でその類型について触れる。また、木棺が存在した確証は十分ではないものの、土壙の平面形態や壙底の様相から木棺墓と判断することが許されるであろう遺構も、木棺墓に準じる扱いを行い、型式不明の木棺墓とする。しかし言うまでもなく、それらの中には、墓壙を直接的に棺施設とする土壙墓も混在していると想定できるが、事実上両者の分離が不可能であったため、あえてそうした取り扱いとなった。

また、すべての土壙を網羅したものでもない。遺物を伴うものや、木棺墓と想定されるものを中心に記述を行う。

・SK003（図版31）

B区にあり、SB02の北東に位置する。長軸は1.6m、短軸は1.0m、深さは0.16mである。

・SK009（図版31）

C区にあり、SB06の北に位置する。不整な楕円形を呈し、長軸は2.0m、短軸は0.9m、深さは0.14mである。

・SK012（図版31）

C区にあり、SB06の北東に位置する。不整な楕円形を呈し、長軸は2.7m、短軸は1.2m、深さは0.12mである。

・ＳＫ０１３（図版31）

Ｃ区にあり、ＳＫ012と切り合う。溝状をなし、長軸は2.3m、短軸は0.5m、深さは0.10mである。

・ＳＫ０１５（図版31）

Ｂ・Ｃ区にある。楕円形を呈し、長軸は1.6m、短軸は0.7m、深さは0.06mである。遺物は、甕（図版66－123）が出土している。

・ＳＫ０１６（図版31）

Ｃ区にあり、ＳＢ03の東に位置する。楕円形を呈し、長軸は2.0m、短軸は0.9m、深さは0.16mである。

・ＳＫ０１８（図版31）

Ｃ区にあり、ＳＢ03の東に位置する。楕円形を呈し、長軸は1.4m、短軸は0.8m、深さは0.36mである。遺物は、甕底部（図版66－124）が出土している。

・ＳＫ０１９（図版31）

Ｃ区にある。溝状をなし、長軸は3.4m、短軸は0.6m、深さは0.22mである。

・ＳＫ０２０（図版32）

Ｃ区にある。不整な楕円形を呈し、長軸は3.4m、短軸は1.2m、深さは0.12mである。遺物は、砥石（図版132－120）が出土している。

・ＳＫ０２１（図版32）

Ｃ区にあり、ＳＢ06の北西に位置する。溝状をなし、長軸は2.6m、短軸は0.4m、深さは0.14mである。

・ＳＫ０２２（図版32）

Ｃ区にあり、ＳＢ07の南西に位置する。円形を呈し、長軸は1.5m、短軸は1.4m、深さは0.82mである。

・ＳＫ０２５

Ｃ区にあり、ＳＢ07のほぼ中央に位置する。楕円形を呈し、長軸は0.8m、短軸は0.6m、深さは0.14mである。

・ＳＫ０３１（図版32）

Ｃ区にあり、ＳＢ06の周壁溝と重複している。楕円形を呈し、長軸は1.3m、深さは0.24mである。未調査部分を調査区外に残している。

・ＳＫ０３３（図版32）

Ｃ区にある。楕円形を呈し、長軸は1.5m、短軸は0.9m、深さは0.62mである。２段に掘り込まれたような壙底となる。

・ＳＫ０３４（図版32）

Ｃ区にあり、ＳＢ08の中に位置する。不整な長方形を呈し、長軸は2.0m、短軸は1.2m、深さは0.14mである。遺物は、砥石が出土している。

・ＳＫ０３６（図版32）

Ｃ・Ｇ区にあり、ＳＢ08の西に位置する。不整な円形を呈し、長軸は1.4m、短軸は1.3m、深さは0.20mである。

・ＳＫ０３８（図版33）

G区にあり、ＳＢ11と重複している。溝状をなし、長軸は4.0m、短軸は0.6m、深さは0.16mである。

・**ＳＫ０４１**（図版33）

G区にあり、ＳＢ12と重複している。不整な長方形を呈し、長軸は1.0m、短軸は0.6m、深さは0.16mである。

・**ＳＫ０４２**（図版33）

G区にあり、ＳＢ12の中に位置する。楕円形を呈し、長軸は1.0＋αm、短軸は1.0m、深さは0.54mである。

・**ＳＫ０４４**（図版33）

G区にあり、他の遺構と切り合う。円形を呈し、径は0.7m前後である。遺物は、土器（図版66－126～128）のほか、砥石が出土している。

・**ＳＫ０４５**（図版33）

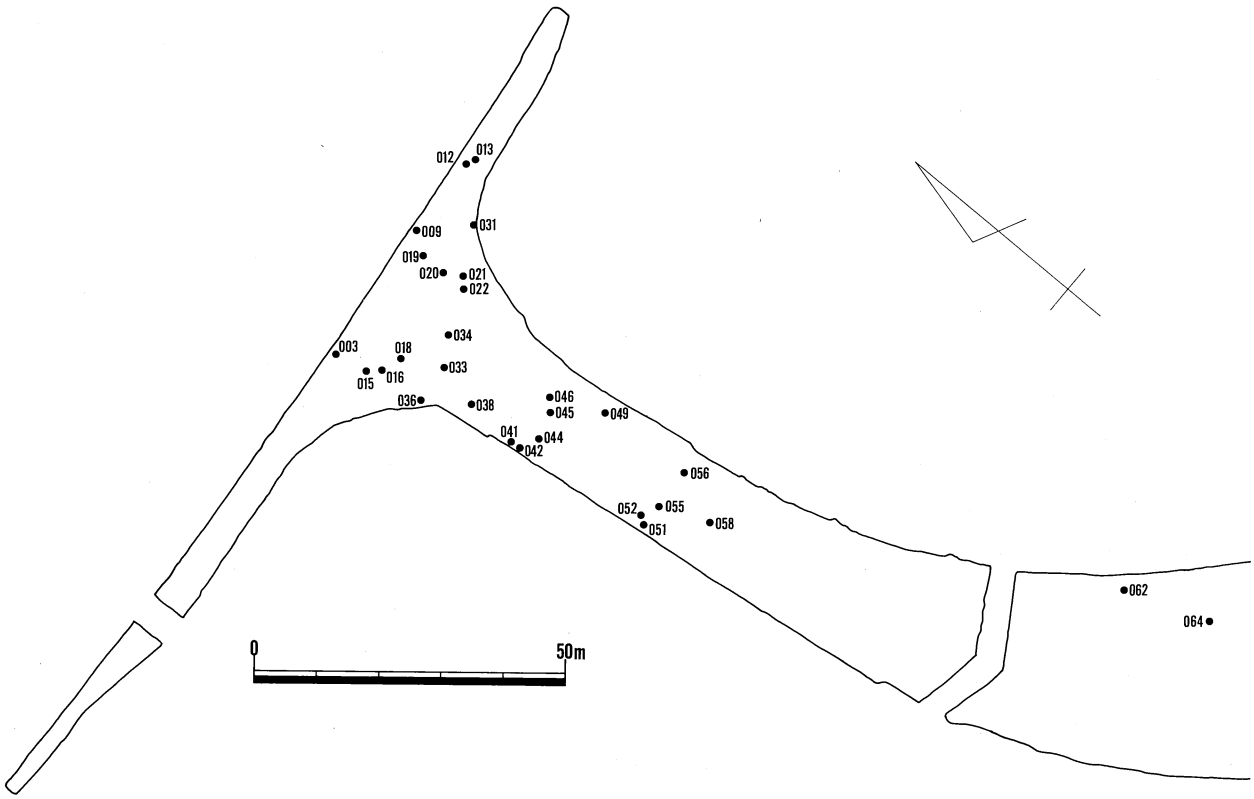
G区にあり、ＳＢ12の東に位置する。不整な楕円形を呈し、長軸は1.9m、短軸は0.9m、深さは0.10mである。

・**ＳＫ０４６**（図版33）

G区にあり、ＳＢ12の東に位置する。不整な正方形を呈し、一辺は0.8m、深さは0.24mである。

・**ＳＫ０４９**（図版33）

G区にあり、ＳＢ13の南東に位置する。不整な楕円形を呈し、長軸は2.3m、短軸は1.9m、深さは0.12mである。遺物は、甕底部（図版66－130）が出土している。



第12図　土壙配置模式図

・ＳＫ０５１（図版34）

Ｇ区にあり、ＳＢ14の中に位置する。不整な正方形を呈し、一辺は0.8 m、深さは0.90mである。壙底には握り拳大の河原石が充塡されていた。

・ＳＫ０５２（図版33）

Ｇ区にあり、ＳＢ14、15と重複する。溝状をなし、長軸は4.6m、短軸は0.4m、深さは0.46mである。

・ＳＫ０５５（図版34）

Ｇ区にあり、ＳＢ14、15と重複し、さらにＳＫ052とほぼ並行している。溝状をなし、長軸は4.7m、短軸は0.4m、深さは0.24mである。

・ＳＫ０５６（図版34）

Ｇ区にあり、ＳＢ16と重複する。不整な楕円形を呈し、長軸は3.6m、短軸は1.0m、深さは0.12mである。

・ＳＫ０５８（図版34）

Ｇ区にあり、ＳＢ16南西に位置する。不整な楕円形を呈し、長軸は2.1m、短軸は0.5m、深さは0.16mである。

・ＳＫ０６０

Ｈ区にあり、旧河道１と重複している。不整な楕円形を呈し、大半を調査区の外に残している。遺物は、土器（図版66－131～139）が一括で出土している。

・ＳＫ０６１

H区にあり、旧河道１と重複している。不整な楕円形を呈し、長軸は1.4m、短軸は1.3m、深さは0.2mである。遺物は、土器（図版67－140～144）が一括で出土している。

・**ＳＫ０６４**（図版34）

M区にあり、旧河道１の東に位置する。不整な楕円形を呈し、長軸は1.3m、短軸は1.2m、深さは0.36mである。土器（図版67－145）のほか、図示していないが石庖丁、砥石が出土している。また、磨製石鏃（図版142－255）が出土しているのもこの遺構である。

・**ＳＫ０６５**（図版35）

N区にある木棺墓である。ＳＤ37の東に位置する。墓壙は長方形を呈し、長軸は2.95m、短軸は1.20m、棺体も長方形を呈し、長軸は2.05m、短軸は0.70mである。箱形の木棺が埋置されていたと想定される。

・**ＳＫ０６９**（図版35）

N区にある木棺墓である。ＳＫ065の東に隣接している。墓壙は長方形を呈し、長軸は3.15m、短軸は1.45mである。木棺は側板が小口よりも突出する形態を示し、棺体の長軸は2.15m、短軸は0.65mである。

・**ＳＫ０７０**（図版35）

N区にあり、ＳＤ37の東に位置する。長方形を呈し、長軸は1.2m、短軸は1.0m、深さは0.20mである。

・**ＳＫ０７１**（図版34）

N区にある木棺墓である。ＳＢ19の北西に位置する。墓壙は長方形を呈し、長軸は1.60m、短軸は0.55mである。東の短辺に沿って、壙底には小口穴を設け、木棺小口を差し込んだ痕跡が認められるが、西辺では検出されなかった。小口を埋め込む形態の木棺墓であろう。遺物は、壺（図版67－146）が出土している。

・**ＳＫ０７４**（図版35）

N区にあり、ＳＢ19の北西に位置する。楕円形を呈し、長軸は1.7m、短軸は1.1m、深さは0.34mである。

・**ＳＫ０７５**（図版36）

N区にある遺構で、木棺墓の可能性もある。ＳＢ20の北に位置する。墓壙は長方形を呈し、長軸は2.40m、短軸は0.85mである。棺体は検出されなかった。遺物は、石鏃（図版139－183）が出土している。

・**ＳＫ０７６**（図版35）

N区にあり、ＳＢ20の西に位置する。他の遺構と切り合うが、おそらく楕円形を呈し、長軸は1.4m、短軸は1.1m、深さは0.20mである。

・**ＳＫ０７８**（図版36）

N区にある遺構で、木棺墓の可能性もある。ＳＢ20の南西に位置する。他の遺構と切り合うが、長方形を呈し、短軸は0.5m、深さは0.10mである。棺体は検出されなかった。

・**ＳＫ０７９**（図版36）

N区にあり、ＳＢ20の南西に位置する。溝状をなし、長軸は3.4m、短軸は0.7m、深さは0.16mである。

・ＳＫ０８０（図版36）

Ｎ区にある遺構で、木棺墓の可能性もある。ＳＢ20の南に位置する。墓壙は長方形を呈し、長軸は1.40m、短軸は0.90mである。棺体は検出されなかった。遺物は、石庖丁（図版139－183）と砥石が出土している。

・ＳＫ０８１（図版37）

Ｎ区にある遺構で、木棺墓の可能性もある。ＳＢ24の北西に位置する。墓壙は１短辺が直線、１短辺が弧状を呈し、長軸は2.80m、短軸は1.25mである。棺体は検出されなかった。

・ＳＫ０８２（図版36）

Ｎ区にあり、ＳＢ22の南に位置する。他の遺構と切り合うが、おそらく楕円形を呈し、長軸は1.5m、短軸は1.4m、深さは0.16mである。遺物は、不定形石器（図版135－143）が出土している。

・ＳＫ０８３（図版37）

Ｎ区にあり、ＳＢ24の北に位置する。他の遺構と切り合うが、おそらく楕円形を呈し、長軸は推定で4.0m、短軸は1.4m、深さは0.24mである。

・ＳＫ０８４（図版36）

Ｎ区にあり、ＳＢ24の北西に位置する。他の遺構と切り合うが、楕円形を呈し、長軸は2.0m、短軸は1.4m、深さは0.14mである。

・ＳＫ０８５（図版36）

Ｎ区にあり、ＳＢ24の南西に位置する。長方形を呈し、その西長辺は溝状となる。長軸は4.2m、短軸は1.4m、深さは0.10mである。遺物は、図示していないが砥石が出土している。

・ＳＫ０８６（図版38）

Ｎ区にあり、ＳＢ25の西に位置する。不整形をなし、長軸は3.2m、短軸は2.5m、深さは0.16mである。遺物は、壺（図版67－150）が出土している。

・ＳＫ０８７（図版37）

Ｎ区にあり、ＳＢ22の南東に位置する。楕円形を呈し、長軸は2.1m、短軸は1.25m、深さは0.34mである。遺物は、壺（図版67－152）が出土している。

・ＳＫ０８８（図版38）

Ｎ区にあり、ＳＢ22の南東に位置する。他の遺構と切り合うが、おそらく楕円形を呈し、長軸は推定で4.0m、短軸は1.8m、深さは0.22mである。遺物は、底部（図版67－151）が出土している。

・ＳＫ０９０（図版38）

Ｎ区にある遺構で、木棺墓の可能性もある。ＳＢ24の北東に位置する。墓壙は長方形を呈し、長軸は2.15m、短軸は1.05mである。棺体は検出されなかった。

・ＳＫ０９２（図版38）

Ｎ区にある木棺墓である。ＳＢ24の東に位置する。墓壙は西長辺が波状を呈するが、本来は長方形を呈し、長軸は1.90m、短軸は0.60mである。両短辺に沿って小口穴を設け、木棺小口を差し込んだ痕跡が認められる。小口穴は長さ0.50m、幅0.15m、小口の間隔は1.75mである。遺物は、管玉(図版147－92）が１点出土している。

・ＳＫ０９３（図版39）

Ｎ区にあり、ＳＢ24の東に位置する。楕円形を呈し、長軸は4.0m、短軸は2.0m、深さは0.26mであ

る。遺物は、甕底部（図版68－153）が出土している。

・**ＳＫ０９４**（図版39）

Ｎ区にあり、ＳＢ24の東に位置する。不整な長方形を呈し、長軸は1.9m、短軸は0.85m、深さは0.14mである。遺物は、甕（図版68－154）と石庖丁（図版108－17）が出土している。

・**ＳＫ０９５**（図版39）

Ｎ区にある遺構で、木棺墓の可能性もある。ＳＢ25の東に位置する。墓壙は隅円の長方形を呈し、長軸は1.90m、短軸は1.15mである。棺体は検出されなかった。

・**ＳＫ０９６**（図版40）

Ｎ区にあり、ＳＤ41と重複する。他の遺構と切り合うが、おそらく楕円形を呈し、長軸は推定で3.4m、短軸は1.7m、深さは0.24mである。遺物は、壺（図版68－155）と石庖丁が出土している。

・**ＳＫ０９７**（図版40）

Ｎ区にあり、ＳＫ096と重複する。他の遺構と切り合うが、おそらく楕円形を呈し、長軸は推定で5.8m、短軸は1.6m、深さは0.20mである。遺物は、土器(図版68－156,157)と不定形石器(図版135－140)が出土している。

・**ＳＫ１００**（図版41）

Ｎ区にあり、ＳＢ23の東に位置する。不整形をなし、長軸は2.4m、短軸は2.3m、深さは0.18mである。

・**ＳＫ１０１**（図版41）

Ｎ区にある遺構で、木棺墓の可能性もある。ＳＫ097の南に位置する。墓壙は長方形を呈し、長軸は2.00m、短軸は1.05mである。棺体は検出されなかった。

・**ＳＫ１０２**（図版39）

Ｎ区にある遺構で、木棺墓の可能性もある。ＳＫ101の南に位置する。墓壙は長方形を呈し、長軸は2.20m、短軸は1.70mである。棺体は検出されなかった。

・**ＳＫ１０３**（図版39）

Ｎ区にある木棺墓である。ＳＫ102の東に位置する。墓壙は不整な長方形を呈し、長軸は2.05m、短軸は0.70mである。両短辺に沿って小口穴を設け、木棺小口を差し込んだ痕跡が認められる。小口穴は長さ0.50m、幅0.10m、小口の間隔は1.35mである。遺物は、石斧（図版119－70）と石鏃（図版139－194）が出土している。

・**ＳＫ１０５**（図版41）

Ｎ区にある。不整形をなし、長軸は3.2m、短軸は1.8m、深さは0.24mである。遺物は、土器（図版68－158）と石庖丁、石斧、石鏃（図版140－225）が出土している。

・**ＳＫ１０６**（図版42）

Ｎ区にあり、ＳＫ105と切り合う。不整な楕円形を呈し、長軸は2.6m、短軸は2.2m、深さは0.18mである。遺物は、土器（図版68－159,160）と石庖丁、砥石が出土している。

・**ＳＫ１０７**（図版41）

Ｎ区にある遺構で、木棺墓の可能性もある。ＳＫ106の東に位置する。墓壙は不整な長方形を呈し、長軸は2.10m、短軸は1.10mである。棺体は検出されなかった。遺物は、壺（図版68－161）が出土している。

・ＳＫ１０８（図版42）

Ｎ区にあり、ＳＫ105の南に位置する。不整形をなし、長軸は3.1m、短軸は1.1m、深さは0.12mである。遺物は、石庖丁が出土している。

・ＳＫ１１０（図版42）

Ｎ区にあり、ＳＢ31の西に位置する。不整な長方形を呈し、長軸は3.0m、短軸は1.4m、深さは0.14mである。遺物は、甕（図版68－162）が出土している。

・ＳＫ１１２（図版43）

Ｎ区にある遺構で、木棺墓の可能性もある。ＳＫ110の南に位置する。墓壙は長方形を呈し、長軸は2.60m、短軸は1.45mである。棺体は検出されなかった。

・ＳＫ１１３（図版41）

Ｎ区にあり、ＳＫ112の南に位置する。他の多くの遺構と切り合い、長軸は推定で4.3m、短軸は0.8m、深さは0.24mである。遺物は、土器（図版68－163）が出土している。

・ＳＫ１１５（図版43）

Ｎ区にある木棺墓である。ＳＫ113の南に位置する。墓壙は長方形を呈し、長軸は2.20m、短軸は1.00mである。両短辺に沿って小口穴を設け、木棺小口を差し込んだ痕跡が認められる。小口穴は長さ0.50m、幅0.10～0.15m、小口の間隔は1.70mである。遺物は、壺（図版68－169）が出土している。

・ＳＫ１１６（図版43）

Ｎ区にある木棺墓である。ＳＢ26の北に隣接する。墓壙は不整な長方形を呈し、長軸は3.45m、短軸は1.35mである。小口はおそらく底板にのるために壙底に痕跡をとどめない。棺体は小口と底板が突出せず、長さ2.20m、幅0.80mの箱形をなしている。

・ＳＫ１１７（図版43）

Ｎ区にあり、ＳＢ26の東に位置する。不整な円形を呈し、長軸は1.2m、短軸は0.9m、深さは0.65mである。遺物は、土器（図版68－167,168）が出土している。

・ＳＫ１１８（図版44）

Ｎ区にあり、ＳＢ26の南西に位置する。不整形をなし、長軸は2.8m、短軸は2.5m、深さは0.20mである。遺物は、土器（図版68－164～166）と石庖丁（図版112－43）、不定形石器（図版138－165）が出土している。

・ＳＫ１１９（図版44）

Ｎ区にある遺構で、木棺墓の可能性もある。ＳＫ118の西に位置する。墓壙は長方形を呈し、長軸は1.90m、短軸は1.20mである。棺体は検出されなかった。遺物は、土器(図版69－170,171)が出土している。

・ＳＫ１２０（図版43）

Ｎ区にあり、ＳＫ118の東に位置する。楕円形を呈し、長軸は1.3m、短軸は1.1m、深さは0.12mである。

・ＳＫ１２１（図版44）

Ｎ区にあり、ＳＫ119の南に位置する。不整形をなし、長軸は2.5m、短軸は1.4m、深さは0.20mである。遺物は、石鏃（図版139－176）が出土している。

・ＳＫ１２３（図版45）

Ｎ区にある遺構で、木棺墓の可能性もある。ＳＢ26の南に位置する。墓壙は不整な長方形を呈し、長

軸は1.45m、短軸は0.75mである。棺体は検出されなかった。

・ＳＫ１２４（図版44）

Ｏ，Ｎ区にあり、ＳＫ123の東に位置する。他の遺構と切り合うが、おそらく長方形を呈し、長軸は推定で2.7m、短軸は1.2m、深さは0.26mである。

・ＳＫ１２５（図版45）

Ｎ区にあり、ＳＫ123の南に位置する。不整形をなし、長軸は1.7m、短軸は0.6m、深さは0.10mである。

・ＳＫ１２６（図版45）

Ｎ区にある木棺墓である。ＳＢ21とＳＤ31の南に位置する。墓壙は長方形を呈し、長軸は2.35m、短軸は1.30mである。両短辺に沿って小口穴を設け、木棺小口を差し込んだ痕跡が認められる。小口穴は長さ0.50m、幅0.10m、小口の間隔は1.50mである。遺構検出の際は、小口も側板も突出しない長方形の棺体を確認している。

・ＳＫ１２７（図版45）

Ｓ区にあり、ＳＢ25の南に位置する。不整形をなし、長軸は6.2m以上、短軸は2.4m以上、深さは0.10mである。

・ＳＫ１２９

Ｓ区にあり、ＳＫ130と一部重複している。不整形をなし、長軸は2.1m、短軸は0.8m、深さは0.20mである。遺物は、土器（図版69－172～174）が出土している。

・ＳＫ１３０（図版46）

Ｓ区にあり、ＳＫ127の東に位置する。不整形をなし、ＳＫ１２９と重複している。長軸は2.9m、短軸は1.3m以上、深さは0.20mである。

・ＳＫ１３１（図版46）

Ｎ，Ｓ区にあり、ＳＫ125の南に位置する。２段に掘りこまれた円形の土壙で、径は外側が1.4m、内側が0.7m、深さは0.32mである。遺物は、甕（図版69－177）が出土している。

・ＳＫ１３２（図版46）

Ｋ区にあり、ＳＢ28の北東に隣接する。他の遺構と切り合い、長軸は1.3m以上、短軸は1.3m、深さは0.16mである。

・ＳＫ１３４（図版46）

Ｋ区にあり、ＳＢ28の東に位置する。他の遺構と切り合うが、不整な方形を呈する。長軸は2.1m、短軸は2.1m、深さは0.21mである。

・ＳＫ１３５（図版47）

Ｋ区にある遺構で、木棺墓の可能性もある。ＳＫ134の南に位置する。墓壙は長方形を呈し、長軸は1.35m、短軸は0.90mである。棺体は検出されなかった。遺物は、土器(図版69－175,176)が出土している。

・ＳＫ１３７（図版46）

Ｋ区にある。不整形をなし、長軸は1.9m、短軸は1.6m、深さは0.06mである。遺物は、壺(図版69－178）が出土している。

・ＳＫ１３８（図版47）

Ｏ区にあり、ＳＢ30と重複する。他の多くの遺構と切り合い、不整形を呈する。長軸は2.8m、短軸は

1.5m、深さは0.12mである。遺物は、図示していないが石庖丁が出土している。

・ＳＫ１３９（図版47）

Ｏ区にある遺構で、木棺墓の可能性もある。ＳＫ138の東に位置する。他の多くの遺構と切り合うが、墓壙は長楕円形を呈する。長軸は2.75m、短軸は1.10mである。棺体は検出されなかった。

・ＳＫ１４０（図版47）

Ｏ区にあり、ＳＢ40と重複する。不整な楕円形を呈し、長軸は5.1m、短軸は1.9m、深さは0.26mである。遺物は、土器（図版69－180～184）と砥石が出土している。

・ＳＫ１４１（図版48）

Ｏ区にあり、ＳＢ31の東に位置する。「く」の字に屈曲する不整形を呈し、二つの土壙が重複した可能性もある。長軸は2.5m、短軸は1.2m、深さは0.30mである。遺物は、図示していないが石庖丁が出土している。

・ＳＫ１４２（図版48）

Ｏ区にある遺構で、木棺墓の可能性もある。ＳＢ31と切り合うが、墓壙は長楕円形を呈する。長軸は3.25m、短軸は0.70m以上である。棺体は検出されなかった。遺物は、管玉（図版147－91）と石庖丁が出土している。

・ＳＫ１４４（図版49）

Ｏ区にあり、ＳＢ31の南に位置する。他の多くの遺構と切り合い、長方形を呈する。長軸は3.1m、短軸は0.7m以上、深さは0.08mである。遺物は、図示していないが石庖丁が出土している。

・ＳＫ１４５（図版48）

Ｕ区にあり、ＳＫ144の東に位置する木棺墓である。墓壙は不整な長方形を呈し、長軸は2.55m、短軸は1.45mである。小口はおそらく底板にのるために壙底に痕跡をとどめない。棺体は小口と側板が突出せず、長さ1.60m、幅0.65mの箱形をなしている。

・ＳＫ１４６（図版49）

Ｏ区にあり、ＳＫ145の東に位置する木棺墓である。墓壙は長方形を呈し、長軸は3.20m、短軸は1.80mである。小口はおそらく底板にのるために壙底に痕跡をとどめない。小口は側板に挟まれて、側板が突出している。棺体は長さ1.90m、幅0.65mである。

・ＳＫ１４７（図版49）

Ｏ区にあり、ＳＫ146の東に位置する木棺墓である。墓壙は長方形を呈し、長軸は1.75m、短軸は0.85mである。小口はおそらく底板にのるために壙底に痕跡をとどめない。小口は側板に挟まれて、側板が突出している。棺体は長さ0.70m、幅0.50mである。

・ＳＫ１４８（図版48）

Ｏ区にあり、ＳＫ147の東に位置する。わずかに「く」の字に屈曲する不整な長方形を呈している。長軸は3.2m、短軸は0.9m、深さは0.24mである。

・ＳＫ１４９（図版50）

Ｏ区にある木棺墓である。ＳＢ32と切り合うが、墓壙は不整な長方形を呈し、長軸は2.35m、短軸は1.00mである。小口はおそらく底板にのるために壙底に痕跡をとどめない。棺体は西北半部が削平されているが、小口と側板が突出しない箱形のものと推定される。長さ1.10m以上、幅0.50mである。

・ＳＫ１５３（図版49）

Ｏ区にあり、ＳＫ116の北に位置する。長方形を呈し、長軸は1.5m、短軸は0.7mである。さらに２段に掘り込まれており、内側は長軸0.85m、短軸0.5mの長方形となる。深さは0.30mである。

・ＳＫ１５４（図版49）

Ｏ区にあり、ＳＫ153の東に位置する。不整形をなし、長軸は2.1m、短軸は1.1m、深さは0.24mである。遺物は、土器（図版70－185～188）が出土している。

・ＳＫ１５５（図版50）

Ｏ区にあり、ＳＫ153の南に位置する。不整な楕円形を呈し、長軸は1.8m、短軸は1.5m、深さは0.30mである。遺物は、土器（図版70－189,190）と石斧が出土している。

・ＳＫ１５６（図版49）

Ｏ区にあり、ＳＫ155の東に位置する。楕円形を呈し、長軸は1.1m、短軸は0.6m、深さは0.20mである。遺物は、土器（図版70－191）が出土している。

・ＳＫ１６０（図版49）

Ｏ区にあり、ＳＢ26の東に位置する。溝状をなし、長軸は5.4m、短軸は0.6m、深さは0.12mである。遺物は、土器（図版70－192）が出土している。

・ＳＫ１６１（図版51）

Ｏ区にある遺構で、ＳＫ160の東に位置する。木棺墓の可能性もある。墓壙は長方形を呈し、長軸は1.90m、短軸は1.00m以上である。棺体は検出されなかった。

・ＳＫ１６２（図版50）

Ｏ区にある遺構で、ＳＫ161の南西に位置する。木棺墓の可能性もある。墓壙は長方形を呈し、長軸は1.75m、短軸は1.15m以上である。棺体は検出されなかった。遺物は、土器（図版70－193,194）と砥石が出土している。

・ＳＫ１６３（図版50）

Ｏ区にあり、ＳＢ32の西に位置する。ほぼ正方形を呈し、長軸は1.2m、短軸は1.1m、深さは0.14mである。

・ＳＫ１６５（図版50）

Ｏ区にあり、ＳＫ163の南に位置する。不整形を呈し、長軸は1.6m、短軸は1.2m、深さは0.12mである。

・ＳＫ１６７（図版51）

Ｏ区にあり、ＳＢ33の西に位置する。他の遺構と切り合い、楕円形を呈する。長軸は1.3m、短軸は0.6m、深さは0.20mである。遺物は、石庖丁と不定形石器（図版137－164）が出土している。

・ＳＫ１６８（図版50）

Ｏ区にある木棺墓である。ＳＫ167の東に位置する。墓壙は他の遺構と切り合うが、長方形と推定される。長軸は1.00m以上、短軸は0.65mである。小口はおそらく底板にのるために壙底に痕跡をとどめない。小口は側板に挟まれて、側板が突出している。棺体は長さ0.50m以上、幅0.35mである。

・ＳＫ１６９（図版51）

Ｏ区にある遺構で、ＳＫ167の南に位置する。木棺墓の可能性もある。墓壙は長方形を呈し、長軸は1.20m、短軸は0.75mである。棺体は検出されなかった。

・ＳＫ１７０（図版51）

Ｏ区にある木棺墓である。ＳＫ168の南に位置する。墓壙は長方形を呈し、長軸は1.30m、短軸は0.60mである。小口はおそらく底板にのるために壙底に痕跡をとどめない。小口は側板に挟まれて、側板が突出している。棺体は長さ0.75m、幅0.30mである。

・ＳＫ１７１（図版51）

Ｏ区にあり、ＳＢ33の南に接する。楕円形を呈し、２段に掘り込まれている。長軸は1.4m、短軸は0.6m、深さは0.42mである。

・ＳＫ１７２（図版51）

Ｏ区にあり、ＳＢ33の北東に位置する。不整な溝状をなし、長軸は2.5m、短軸は0.5m、深さは0.10mである。

・ＳＫ１７３（図版51）

Ｏ区にあり、ＳＫ172の東に位置する。不整な長方形を呈し、長軸は2.0m、短軸は1.1m、深さは0.08mである。遺物は、図示していないが石庖丁が出土している。

・ＳＫ１７４（図版52）

Ｏ区にあり、ＳＢ34の北東に位置する。溝状をなし、長軸は3.7m、短軸は0.7m、深さは0.30mである。

・ＳＫ１７５（図版52）

Ｏ区にあり、ＳＫ174の北に位置する。不整な楕円形を呈し、長軸は1.6m、短軸は0.5m、深さは0.30mである。

・ＳＫ１７６（図版52）

Ｏ区にあり、ＳＫ174の東に位置する。他の遺構と切り合うが不整な楕円形を呈し、長軸は1.7m、短軸は0.8m、深さは0.14mである。

・ＳＫ１７７（図版52）

Ｏ区にあり、ＳＢ35の東に位置する。長方形に近い楕円形を呈し、長軸は0.9m、短軸は0.5m、深さは0.16mである。

・ＳＫ１７８（図版53）

Ｏ区にあり、ＳＫ177の南に位置する。不整な楕円形を呈し、長軸は1.7m、短軸は0.8m、深さは0.16mである。

・ＳＫ１７９（図版52）

Ｏ区にあり、ＳＫ178の東に位置する。ほぼ円形を呈し、長軸は1.2m、短軸は1.1m、深さは0.24mである。

・ＳＫ１８０（図版52）

Ｏ区にあり、ＳＫ179の東に位置する。長楕円形を呈し、長軸は1.7m、短軸は0.4m、深さは0.16mである。

・ＳＫ１８１（図版54）

Ｏ区にある木棺墓である。ＳＫ180の東に位置する。溝など他の遺構と切り合うが、墓壙は長方形を呈し、長軸は2.60m、短軸は1.30mである。棺体は小口がおそらく底板にのるために、壙底に痕跡をとどめない。小口と側板はそれぞれ接して、突出しない箱形のものと推定される。ただし、棺体の南西隅部

は側板が突出した痕跡をとどめている。長さは1.85m、幅は0.60mである。棺底の西からは、勾玉（図版147－８，９）２個と管玉（図版147－13～27）15個が集中して出土した。したがって、埋葬頭位は西向きと考えられる。

・ＳＫ１８２（図版52）

Ｏ区にあり、ＳＫ125の東に位置する遺構で、木棺墓の可能性もある。墓壙は不整な長方形を呈し、長軸は2.00m、短軸は0.95mである。棺体は検出されなかった。

・ＳＫ１８４（図版52）

Ｏ区にある。溝状をなし、長軸は5.0m、短軸は0.3m、深さは0.06mである。

・ＳＫ１８６（図版53）

Ｏ区にあり、ＳＢ35の南に位置する。不整な長方形を呈し、長軸は1.4m、短軸は1.2m、深さは0.14mである。

・ＳＫ１８７（図版53）

Ｏ区にあり、ＳＫ186の南に位置する。溝状をなし、長軸は3.4m、短軸は0.6m、深さは0.14mである。遺物は、図示していないが石庖丁が出土している。

・ＳＫ１８８（図版53）

Ｏ区にあり、ＳＫ187の東に位置する。長方形を呈し、長軸は2.6m、短軸は2.0m、深さは0.20mである。柱穴を４本検出している。奈良・平安時代に下る可能性が高い。

・ＳＫ１８９（図版53）

Ｏ区にあり、ＳＢ36の南に位置する。ＳＫ190と重複しているが、長方形を呈すると考えられる。長軸は0.7m以上、短軸は0.5m、深さは0.06mである。

・ＳＫ１９０（図版53）

Ｏ区にある木棺墓である。ＳＫ189と切り合うが、墓壙は不整な長方形を呈し、長軸は1.10m、短軸は0.60mである。小口はおそらく底板にのるために壙底に痕跡をとどめない。棺体は西北半部が削平されているが、小口と側板が突出しない箱形のものと推定される。長さ0.80m、幅0.30mである。

・ＳＫ１９１（図版53）

Ｏ区にあり、ＳＫ190の東に位置する遺構で、木棺墓の可能性もある。墓壙は不整な長方形を呈し、長軸は1.40m、短軸は0.70mである。棺体は検出されなかった。

・ＳＫ１９３（図版53）

Ｏ区にあり、ＳＫ191の南に位置する遺構で、木棺墓の可能性もある。墓壙は不整な長方形を呈し、長軸は1.30m、短軸は0.70mである。棺体は検出されなかった。

・ＳＫ１９４（図版56）

Ｏ区にある木棺墓である。ＳＢ36の南に位置する。墓壙は長方形を呈し、長軸は1.15m、短軸は0.65mである。壙底には、長辺に沿って幅0.1m前後の溝が検出された。この溝によって側板を固定し、これに小口を立てかけたものである。小口は側板より突出するか、箱形になるかは不明である。棺体は、長さ1.00m、幅0.55mである。

・ＳＫ１９５（図版55）

Ｏ区にある木棺墓である。ＳＫ194の東に位置する。墓壙は長方形を呈し、長軸は2.25m、短軸は0.75mである。棺体は小口がおそらく底板にのるために、壙底に痕跡をとどめない。小口と側板はそれぞれ

接して、突出しない箱形のものと推定される。長さは1.85m、幅は0.60mである。棺底の東からは、ガラス小玉（図版147－１）１個と管玉（図版147－28～83）56個が集中して出土した。したがって、埋葬頭位は東向きと考えられる。また、土器底部（図版70－196）と石斧も出土している。

・**ＳＫ１９６**（図版56）

Ｔ区にあり、ＳＫ184の南に位置する遺構で、木棺墓の可能性もある。墓壙は不整な長方形を呈し、長軸は2.15m、短軸は0.85mである。棺体は検出されなかった。

・**ＳＫ１９７**（図版56）

Ｕ区にあり、ＳＫ196の東に位置する。不整な長方形を呈し、長軸は1.9m、短軸は1.1m、深さは0.26mである。

・**ＳＫ１９９**（図版56）

Ｔ区にある木棺墓である。ＳＢ44の南に位置する。墓壙は長方形を呈し、長軸は1.45m、短軸は0.65mである。小口はおそらく底板にのるために壙底に痕跡をとどめない。小口は側板に挟まれて、側板が突出している。棺体は長さ1.15m、幅0.35mである。

・**ＳＫ２０３**（図版56）

Ｕ区にある遺構で、木棺墓の可能性もある。ＳＢ43の南に位置する。墓壙は不整な長方形を呈し、長軸は2.00m、短軸は1.30mである。棺体は検出されなかった。

・**ＳＫ２０４**（図版56）

Ｔ、Ｕ区にある。他の遺構と重複しているため、形状は不明である。長軸は1.3m以上、短軸は0.4m以上、深さは0.12mである。遺物は、白玉（図版147－５）が出土している。

・**ＳＫ２０６**（図版57）

Ｕ区にあり、ＳＫ203の南に位置する。他の遺構と重複しているが、不整形を呈し、長軸は1.5m、短軸は1.2m、深さは0.12mである。遺物は、土器底部（図版71－199）が出土している。

・**ＳＫ２０７**（図版57）

Ｕ区にあり、ＳＫ206の南に位置する遺構で、木棺墓の可能性もある。墓壙は長方形を呈し、長軸は1.10m、短軸は0.70mである。棺体は検出されなかった。

・**ＳＫ２０８**（図版57）

Ｕ区にあり、ＳＢ45の南に位置する。不整な正方形を呈し、長軸は1.4m、短軸は1.3m、深さは0.10mである。

・**ＳＫ２１０**（図版57）

Ｕ区にあり、ＳＫ208の南に位置する。不整な正方形を呈し、長軸は0.9m、短軸は0.9m、深さは0.20mである。

・**ＳＫ２１１**（図版57）

Ｔ、Ｕ区にあり、ＳＢ46の東に位置する。楕円形を呈し、長軸は0.7m、短軸は0.5m、深さは0.10mである。遺物は、土器底部（図版71－198）が出土している。

・**ＳＫ２１２**（図版57）

Ｕ区にあり、ＳＫ211の南に位置する。楕円形を呈し、長軸は1.1m、短軸は0.5m、深さは0.38mである。

・**ＳＫ２１３**（図版57）

U区にあり、ＳＫ212の東に位置する遺構で、木棺墓の可能性もある。墓壙は長方形を呈し、長軸は1.25m、短軸は0.70mである。棺体は検出されなかった。

・**ＳＫ２１４**（図版57）

T、U区にあり、ＳＫ211の南に位置する。北西半部は削平されているが、不整な楕円形を呈し、長軸は1.5m前後、短軸は1.4m、深さは0.12mである。

・**ＳＫ２１５**（図版57）

U区にあり、ＳＫ210の南に位置する。不整な楕円形を呈し、長軸は0.8m、短軸は0.7m、深さは0.12mである。

・**ＳＫ２１６**（図版57）

U区にあり、ＳＫ215の西に位置する。他の遺構と重複しているが、楕円形を呈し、長軸は0.8m以上、短軸は0.5m、深さは0.12mである。

・**ＳＫ２１７**（図版58）

U区にある木棺墓である。ＳＫ216の南に位置する。墓壙は不整な楕円形を呈し、長軸は1.80m、短軸は1.00mである。小口はおそらく底板にのるために壙底に痕跡をとどめない。棺体は小口と側板が突出しない箱形のものと推定される。長さ1.15m、幅0.80mである。遺物は、ガラス小玉（図版147－３）１個と管玉（図版147－90）１個が出土した。

・**ＳＫ２１８**（図版58）

U区にあり、ＳＫ217の東に位置する。不整な楕円形を呈し、長軸は0.8m、短軸は0.7m、深さは0.10mである。

・**ＳＫ２１９**（図版58）

U区にあり、ＳＫ216の西に位置する。不整な楕円形を呈し、長軸は2.6m、短軸は0.8m、深さは0.20mである。

・**ＳＫ２２０**（図版58）

U区にあり、ＳＫ219の西に位置する。不整な長方形を呈し、長軸は2.0m、短軸は1.2m、深さは0.08mである。遺物は、土器（図版71－202～209)が一括で出土している。

・**ＳＫ２２１**（図版59）

U区にあり、ＳＫ219の南に位置する。不整な楕円形を呈し、長軸は1.4m、短軸は0.6m、深さは0.12mである。遺物は、図示していないが石庖丁が出土している。

・**ＳＫ２２２**（図版58）

U区にあり、ＳＫ219の南東に位置する。他の遺構と重複しているが、不整な楕円形を呈し、長軸は2.1m、短軸は1.2m、深さは0.32mである。

・**ＳＫ２２３**（図版58）

U区にあり、ＳＫ222の東に位置する。他の遺構と重複しているが、溝状をなし、長軸は5.1m、短軸は0.3m、深さは0.05mである。

・**ＳＫ２２４**（図版58）

U区にあり、ＳＫ222の南に位置する。他の遺構と重複しているが、不整な楕円形を呈し、長軸は1.4m以上、短軸は1.4m、深さは0.22mである。

・**ＳＫ２２６**（図版59）

第2表　木　棺　墓　一　覧　表

No.	地区	類型	墓	壙	棺　体	出土遺物	備　考
			規　模　(m) 長 軸×短 軸	主 軸 方 位	規　模　(m) 長 軸×短 軸		
65	N	II a	2.95 × 1.20	N—75°—E	2.05 × 0.70		
69	N	II b	3.15 × 1.45	N—50°—W	2.15 × 0.65		
71	N	I	1.60 × 0.55	N—74°—E	— × —	土器	
75	N		2.40 × 0.85	N—39°—E	— × —	石鏃	
78	N		— × 0.50	N—30°—E	— × —		
81	N		2.80 × 1.25	N—90°—W	— × —		
90	N		2.15 × 1.05	N—61°—W	— × —		
92	N	I	1.90 × 0.60	N—16°—E	1.75 × 0.50		
95	N		1.90 × 1.15	N—90°—W	— × —		
98	N		1.40 × 1.05	N—70°—W	— × —		
101	N		2.00 × 1.05	N—88°—W	— × —		
102	N		2.20 × 1.70	N—69°—W	— × —		
103	N	I	2.05 × 0.70	N—60°—E	1.30 × 0.50	石斧・石鏃	
107	N		2.10 × 1.10	N—89°—E	— × —	土器	
112	N		2.60 × 1.45	N—85°—W	— × —		
115	N	I	2.00 × 1.00	N—84°—W	1.70 × 0.50	土器	
116	N, O	II b	3.45 × 1.15	N—77°—W	2.20 × 0.80		
119	N		0.90 × 0.55	N— 4 °—W	— × —	土器	
123	N		1.45 × 0.75	N— 1 °—W	— × —		
126	S	I b	2.35 × 1.30	N—74°—W	1.50 × 0.50		
135	K		1.35 × 0.90	N—13°—E	— × —		
139	O		2.75 × 1.10	N—20°—W	— × —		
142	O		3.25 × —	N—90°—W	— × —		
145	O	II b	2.55 × 1.45	N—81°—E	1.60 × 0.65		
146	O	II a	3.20 × 1.80	N—80°—E	1.90 × 0.65		
147	O	II a	1.75 × 0.85	N—60°—E	0.70 × 0.50		
149	O	II b	2.35 × 1.00	N—50°—W	— × —		
161	O		1.90 × 1.00	N—47°—W	— × —	土器	
162	O		1.75 × 1.30	N—34°—E	— × —	土器・砥石	
168	O	II a	— × 0.65	N—75°—E	(0.55) × 0.35		
169	O		1.20 × 0.75	N—76°—W	— × —		
170	O	II a	1.30 × 0.60	N—79°—E	0.75 × 0.30		
181	O	II b	2.60 × 1.30	N—81°—E	1.85 × 0.60	管玉・勾玉	
182	O		2.00 × 0.95	N—69°—W	— × —		

190	O	II b	1.10 × 0.60	N—88°—E	0.80 × 0.30		
191	O		1.40 × 0.70	N—88°—W	— × —		
193	O		1.30 × 0.70	N—15°—E	— × —		
194	O	III	1.15 × 0.65	N—10°—E	1.00 × 0.55	土器	
195	O	II b	2.25 × 0.75	N—78°—E	1.30 × 0.55	管玉・ガラス小玉・石斧	
196	T		2.15 × 0.85	N—29°—E	— × —		
199	T	II a	1.45 × 0.65	N—76°—E	1.15 × 0.35		
203	U		2.00 × 1.30	N—33°—W	— × —		
207	U		1.10 × 0.70	N—58°—W	— × —		
213	U		1.25 × 0.70	N—60°—E	— × —		
214	T, U		— × —	N—45°—W	— × —		
240	X		2.75 × 1.25	N—64°—W	— × —		

U区にあり、ＳＫ224の南に位置する。他の遺構と重複しているが、不整な楕円形を呈し、長軸は2.5m、短軸は1.4m、深さは0.20mである。

・**ＳＫ２２７**（図版59）

U区にあり、ＳＫ226の南に位置する。他の遺構と重複しているが、不整な楕円形を呈し、長軸は1.6m、短軸は1.0m以上、深さは0.28mである。

・**ＳＫ２２８**（図版59）

U区にあり、ＳＫ227の南に位置する。他の遺構と重複しているが、不整な楕円形を呈し、長軸は1.3m、短軸は1.1m以上、深さは0.14mである。

・**ＳＫ２２９**（図版60）

U区にあり、ＳＫ228の南に位置する。楕円形を呈し、長軸は1.4m、短軸は1.2m以上、深さは0.26mである。

・**ＳＫ２３０**（図版59）

U区にあり、ＳＫ229の南に位置する。他の遺構と重複しているが、溝状をなし、長軸は5.0m、短軸は1.0m、深さは0.16mである。

・**ＳＫ２３１**（図版60）

U区にあり、ＳＫ230の南に位置する。他の遺構と重複しているが、不整な楕円形を呈し、長軸は1.4m、短軸は1.4m以上、深さは0.10mである。

・**ＳＫ２３３**（図版60）

U区にあり、ＳＢ49の東に位置する。楕円形を呈し、長軸は1.2m、短軸は1.1m、深さは0.16mである。

・**ＳＫ２３４**（図版60）

U区にあり、ＳＫ231の南に位置する。他の遺構と重複しているが、楕円形を呈し、長軸は1.7m、短軸は1.1m以上、深さは0.10mである。

・**ＳＫ２３９**（図版60）

U区にあり、ＳＢ50の南に位置する。楕円形を呈し、長軸は1.6m、短軸は1.2m、深さは0.24mであ

る。遺物は、打製石剣（図版143—266)が出土している。

・ＳＫ２４０（図版60)

Ｘ区にあり、ＳＢ49の西に位置する遺構で、木棺墓の可能性もある。墓壙は長方形を呈し、長軸は2.75m、短軸は1.25mである。棺体は検出されなかった。遺物は、土器(図版71—210,211)が出土している。

第５節　溝

・ＳＤ０１

Ｂ区にあたり、ＳＢ02の南に位置する。長さは2.8 m、幅は0.9 m、深さは0.2 mである。遺物は、土器（図版72－212 ）が出土している。

・ＳＤ０４

Ｃ区にあたり、ＳＢ04の南に位置する。長さは3.9m、幅は1.2m、深さは0.2mである。遺物は、土器（図版72－213,214）が出土している。

・ＳＤ０５

Ｃ区にあたり、ＳＢ05の南に位置し一部重複している。長さは8.2m、幅は1.2m、深さは0.2mである。遺物は、土器（図版72－215～217）が出土している。

・ＳＤ１０

Ｄ区にある。幅は7.9m、深さは0.6mで、旧河道１と同一のものである可能性が高い。遺物は、土器（図版72－218～220）が出土している。

・ＳＤ２１

Ｇ区にある。ＳＢ14、15とＳＢ16の間隙をほぼ南北にはしる。不整形であるが、長さは13.3m、幅は1.2m前後である。遺物は、土器（図版72－221）が出土している。

・ＳＤ２５

Ｇ区にあり、西端が一部ＳＢ14、15と重複している。ＳＤ21や26とほぼ直交する。長さは10.4m以上、幅は2.3m、深さは0.1mである。遺物は、土器（図版72－224～227）が出土している。

・ＳＤ２６

Ｇ区にあり、ＳＢ16の西に位置する。ＳＤ21とほぼ平行する。長さは9.1m、幅は0.7m、深さは0.2mである。遺物は、土器（図版72－222,223）が出土している。

・ＳＤ３２

Ｍ区、Ｎ区、Ｓ区にまたがってのびる溝である。その北は旧河道１と重複し、南は未調査区を東に連続し、Ｗ区に再び検出される。幅はほぼ1.8m前後で一定しており、断面は逆台形を呈する。遺物は、土器（図版73,74－228～264）が出土している。

・ＳＤ３３

Ｍ区をほぼ南北に流れる溝である。奈良・平安時代の遺物が多く出土している。幅は1.3m前後、深さは0.2mである。遺物は、土器（図版75－265）が出土している。

・ＳＤ３７

Ｍ区、Ｎ区をほぼ南北に流れる溝である。ＳＤ33の東11mに位置し、ほぼ平行している。奈良・平安

時代の遺物が多く出土している。幅は2.2m前後、深さは0.2mである。遺物は、土器(図版75－267,268)が出土している。

・ＳＤ４０

Ｎ区にあり、ＳＢ19の西に位置する。長さは3.9m、幅は0.7m、深さは0.2mである。遺物は、土器(図版75－266）が出土している。

・ＳＤ４１

Ｎ区にあり、ＳＢ27の西に位置する。弧状をなし、ＳＤ42の東にあたる。長さは8.4m、幅は0.7～1.4m、深さは0.2mである。遺物は、土器（図版75－269～271）が出土している。

・ＳＤ４３

Ｎ区にあり、ＳＢ27の西に位置する。中央でわずかに屈曲し、弧状をなす。長さは6.5m、幅は0.7～1.1m前後、深さは0.2mである。遺物は、土器（図版75－273,274）が出土している。

・ＳＤ４７

Ｓ区にあり、ほぼ東西方向を示す。北にはＳＤ45、46があり、それらとほぼ平行している。長さは7.5m、幅は0.5m前後、深さは0.2mである。遺物は、土器（図版75－275）が出土している。

・ＳＤ６５

Ｕ区にあり、ほぼ南北方向を示す。長さは46m以上、幅は1.5m前後、深さは0.3mである。遺物は、土器（図版75－272）が出土している。

第６節　旧　河　道

人為的に掘削した溝と異なり、自然流路としての性格の強いものを旧河道とする。ここでは、遺跡の東を北流している竹田川の旧流路であったと想定される比較的規模の大きな河道について述べる。遺跡地内には、それぞれ北に流れていたと考えられる２本の旧河道が検出されている。

・旧河道１

Ｈ区、Ｉ区、Ｌ区、Ｍ区に位置し、北に流れる河道である。大きく２本の本流がＨ区で合流し、それぞれの支流が交錯している。西にあたる本流は幅2.0～5.8mで、合流部では幅11.4mとなる。深さは0.8m前後である。この本流は北に流れて、Ｄ区の西に認められる幅7.4mの河道と同一のものになると考えられる。

もうひとつの支流は、合流部から南に向けては大きく東に蛇行し、さらに南で分流してＳＤ32と重複する。幅は5.0～9.2m、深さは最深部で1.1m、ほぼ0.9m前後である。

旧河道の断面は、砂と泥土が互層となって堆積しており、流水と滞水が繰り返された状況があきらかである。

出土遺物は土器(図版76～80－276～373)が大半を占める。土器による限り、旧河道１の存続時期幅は比較的短く、その中心となる時期は弥生中期にあると考えられる。後期にはもはや活動を停止し、埋没していたと思われる。

・旧河道２

Ｏ区、Ｐ区、Ｕ区、Ｖ区に位置し、北に流れる河道である。遺跡周辺の微地形等高線図から判明する、段丘Ｖにある約50cmの凹地に該当している。この旧河道は調査区ではほぼ南北に流れるが、先の微地形等高線図によれば、凹地は北でやや東に向きを変えているため、それにのる旧河道自体も遺跡地の北部でやや東に流れを変えるものと考えられる。

調査区の北半では、本流から分流するためか幅を増して、東に向けて蛇行する気配をみせる。旧河道南半部は、幅10～13mと安定しており、深さは1.5～2.0m前後を測る。この部分で旧河道の西肩は、幅３m前後の平坦部を形成した後、傾斜を急にして底に到っている。また旧河道の西では、幅約20mにわたって遺構の疎らな地域が南北に存在している。この位置は水平ではなく、東の旧河道に向かって傾斜を有しており、河道の水位が上昇してオーバーフローした際に削平を被った部分なのかもしれない。

旧河道の断面は、砂と泥土が互層となって堆積しており、流水と滞水が繰り返された状況があきらかである。

出土遺物はそのほとんどが土器(図版81～99－374～776)であり、遺跡全体の出土土器量の半数をゆうに上回るものであった。そのほかに若干の石器も検出されている。なお、この旧河道２からは大量の須恵器・土師器も出土している。さらに、木器も検出されているが、いずれも第３分冊で報告されることになる。土器による限り、旧河道２の存続時期幅は長く、弥生中期以降奈良・平安時代にかけても活動していたことが知られる。

第4章　遺　　物

第1節　概　　要

七日市遺跡から出土した遺物には、土器、石器、玉類、土製品、金属器がある。その中では土器の出土量が最も多く、コンテナにして約400箱に相当している。土器の出土の多くは旧河道2からのものが大半を占めており、土器の出土量の過半数を越えている。このため、出土した全ての遺物の実測図を掲載したものではないことを予めお断りしておく。

なお、旧河道2からは木製品が出土しているが、時期の帰属が不安定であるため一括して第3分冊に収録することにする。同じく、旧河道2から土錘が出土しているが、同様の理由によりここには掲載していない。

第2節　土　　器

弥生時代に帰属する土器と、須恵器が出現する以前の土器を対象とする。概ね、数量の少ない第Ⅰ様式と第Ⅱ様式から、出土量が多くなる第Ⅲ様式、第Ⅳ様式　第Ⅴ様式と、庄内式並行期と布留式並行期までをおおう。

以下、記述の煩雑を回避するために器種の大別分類を行い、第3章で述べた遺構出土の土器について述べてゆく。編年についてはⅠ期からⅦ期に分期するが、詳細は第5章で触れる予定である。ただし、あらかじめ述べておかなければならないことがある。例えば、住居跡出土土器を図示した場合、単純にその土器の示す時間が住居跡の帰属する時間とは限らないのである。なぜなら基本層序を述べる際にも触れたが、遺構の埋土である黒ボクの切り合いを確認することは技術的に困難であり、遺構の密度から考えて、住居跡と他の遺構が重複していることは十分に予想されるのであるが、両者の土器を分離できなかったからである。このため、遺物の一括性に裏づけられた共伴関係に関しては、きわめて曖昧と言わざるをえない。

第1項　土器の分類

器種構成は、基本的には壺形土器、甕形土器、高杯形土器、器台形土器、鉢形土器からなり、このほかに壺や甕用の蓋形土器やミニチュアの土器などが付加される。

(1)　壺形土器

広口壺・二重口縁壺・細頸壺・短頸壺・長頸壺・無頸壺などがあり、文様や形態において細分がすすめられる。

・壺A　　いわゆる広口壺である。球形に近い胴部から、屈曲して頸部が開き口縁部にいたる。ほぼ

全期間を通じて認められるもので、形態は実に多様である。ここでは、主として口縁部の形態によって細分する。

壺A1　口縁端部は単純に丸くおさまるもの。胴部は球形で、長くのびる頸部から大きく開く口縁部に続く。

壺A2　口縁端部がつまみ上げられて、わずかに上方に肥厚したもの。

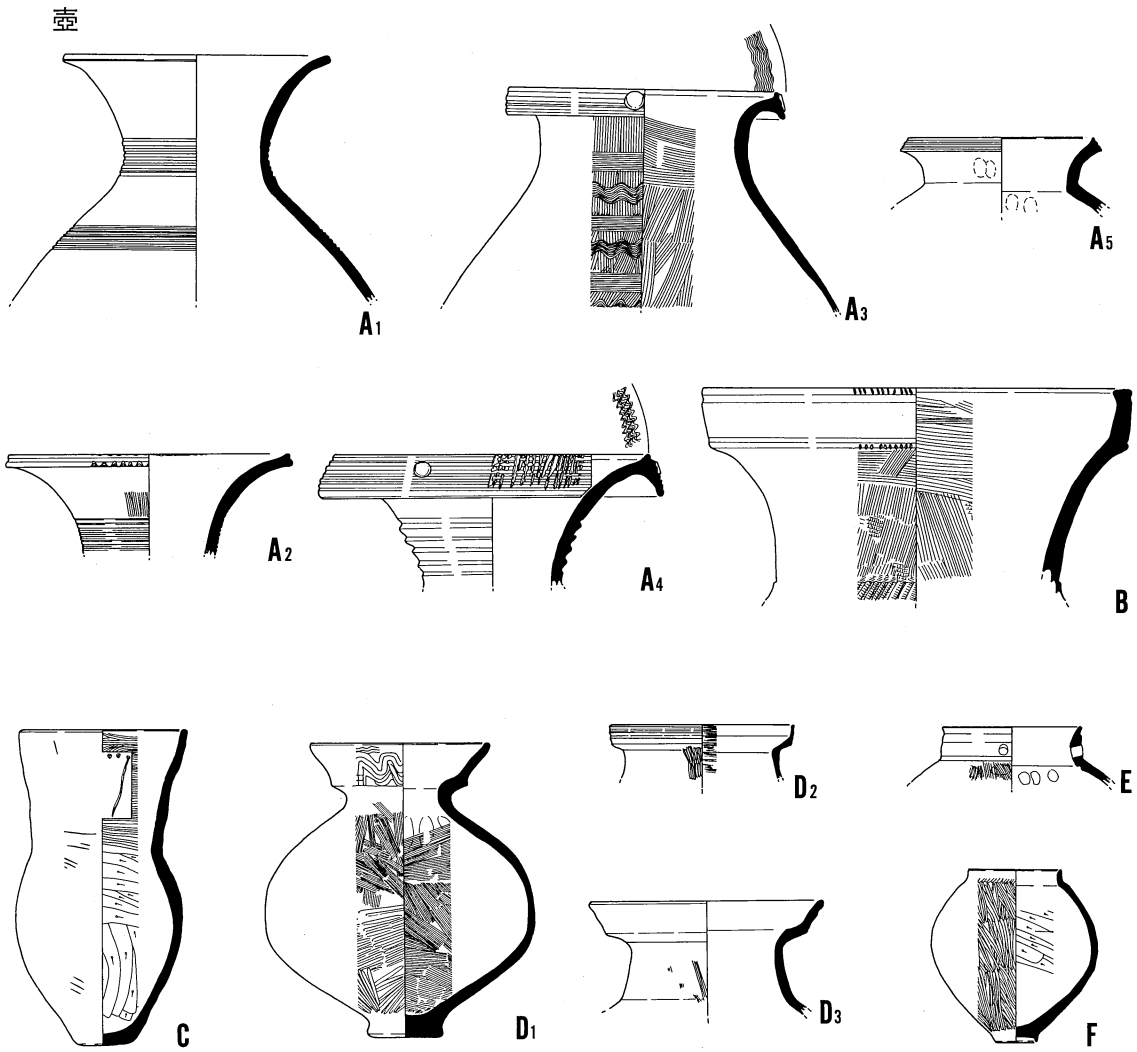
壺A3　口縁端部が上下に肥厚して、面をもつもの。

壺A4　口縁端部が上下に拡張し、特に大きく垂下するもの。口縁上端面に突帯をもつものも含む。口縁端部はもちろん、口縁内面も加飾される。

壺A5　口縁端部が上下に肥厚して、面をもつもの。そこに擬凹線文を施す。

・壺B　頸部が外に開いて立ち上がり、屈曲して口縁部が上方に立つものである。総じて大型の壺で、口径は30cmを越えるものが多い。口縁外面に櫛描文や凹線文を施すものがある。また頸部下端には、指頭圧痕を加えた突帯を巡らせるものもある。

・壺C　頸部が上外方もしくは垂直に単純に開く壺を、便宜上総称しておく。いわゆる直口壺、長



第13図　土器分類図　1　（壺）

頸壺、台付壺、水差形土器を含み、さらに細分されることが予想される。

・壺D　いわゆる二重口縁壺である。口縁部の形態から細分される。

壺D_1　口縁部が大きく外反し、その外面は無文もしくは波状文を施す。体部は球形に近く、丸底をなす。庄内式の壺を含む。

壺D_2　口縁部は広く外方にのび、そこに擬凹線文を施す。系譜は壺A_5に求められ、その発展形態を示している。

壺D_3　口縁部は屈曲して短くのび、端部は丸くおさめる。ただし、口縁部に擬凹線文を施さず、よこなでで仕上げる。

・壺E　短く立ち上がり、わずかに外反する口縁部をもつ、短頸壺の壺である。扁球形の大部をもち、台をつけるものもあるのかもしれない。

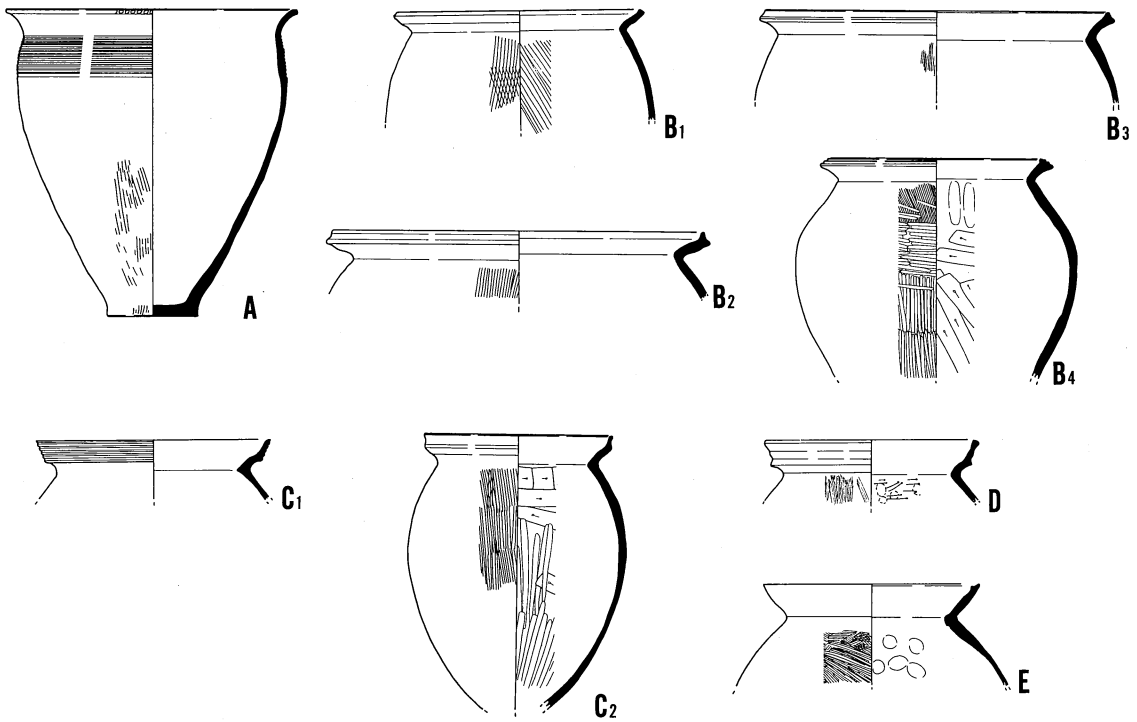
・壺F　いわゆる無頸壺である。鉢との区分が困難なものや、口縁部が短く屈曲した短頸壺も含まれる。

(2) 甕形土器

ほぼ全期間にわたって出現するが、壺に比べ形態の変化は乏しい。複数の系列の消長を確認することが可能であり、地域性も看取される。

・甕A　口縁部が緩やかに外反するいわゆる如意形口縁の甕である。口径は体部最大径を凌ぐものがほとんどである。体部の肩が張らないいわゆる倒鐘形の甕も含める。口縁端部はヘラ状工具による刻み目を施すものや、口縁部の数個所を波状に折り返した押圧を加えたものがある。口縁部下側

甕



第14図　土器分類図　2　(甕)

は櫛描文で飾られることもある。

・甕B　胴が張り、口縁部が「く」字状に屈曲する甕である。口縁端部の形態によって細分が可能である。

甕B_1　口縁端部が単純におさまり、丸くなるものと小さな端面をもつものがある。口縁部の数個所を波状に折り返した押圧を加えたものがある。しだいに体部最大径が口径を凌駕する傾向にあり、概して長胴化がすすむ。刷毛目で調整されるものが多い。

甕B_2　口縁端部を上方につまみ上げるもの。法量によっても細分が可能である。内面下半をヘラ削りを施すものも出現する。

甕B_3　口縁端部が上下に肥厚して、面をもつもの。

甕B_4　口縁端部が上下に肥厚して、面をもつもの。そこに擬凹線文を施す。内面のヘラ削りは、頸部に達する。

・甕C　口縁部を拡張した甕である。

甕C_1　口縁部を上方に拡張して、擬凹線文を施す。甕B_4からの系譜が明らかである。

甕C_2　口縁部を上方に拡張するが、そこに擬凹線文を施さず、よこなでで仕上げるもの。

・甕D　ほぼ垂直に立ち上がる口縁部は、いわゆる「5」字状口縁と称され、山陰系の甕である。

・甕E　「く」字状に屈曲して外上方にのびる口縁部の内側を肥厚させるものである。布留式に並行する甕である。

(3)　高杯形土器

七日市遺跡においては、III期以降に顕在となる器種である。杯部の形態によって分類する。

・高杯A　杯部から口縁部がのびるものである。

高杯A_1　杯部から屈曲または湾曲して口縁部が立ち上がるもの。

高杯A_2　杯部と口縁部の区分が明瞭で、口縁部は外反してのびるもの。

・高杯B　皿状の杯部から口縁端部が鍔状にのび出した後、垂下した高杯である。口縁内面には突帯をもつ。

・高杯C　「S」字状に屈曲する口縁部をもつ。

高杯C_1　口縁部の広い端面に擬凹線文を施すもの。

高杯C_2　擬凹線文を施さないもの。

・高杯D　椀状の杯部に、短く屈曲する口縁部をもつ。

・高杯E　ほぼ水平に広がる杯部から、屈曲して外上方へのびる口縁部をもつ。

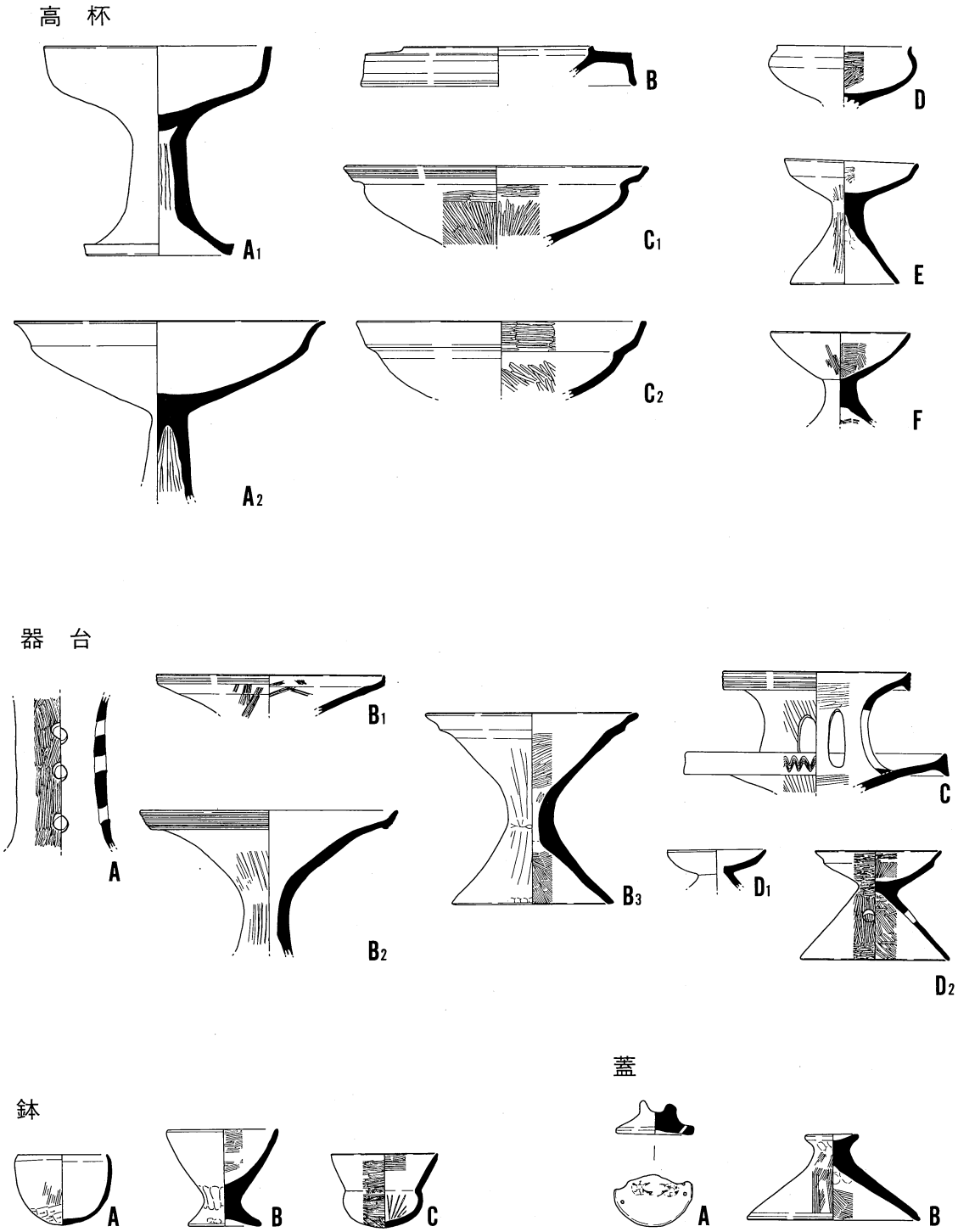
・高杯F　杯部と口縁部の区分が不明瞭で、口縁部が単純に開くもの。

(4)　器台形土器

七日市遺跡においては、IV期以降に顕在となる器種である。受部の形態によって分類する。

・器台A　口縁部と脚部がそれぞれ外方に開く、中空で筒状になった器台である。体部に凹線文を施し、円孔をもつ。口縁端部がわずかに拡張され、そこに擬凹線文を施すものも含める。

・器台B　外反する受部から口縁部が立ち上がる器台である。脚部は「ハ」字状に単純に開く。口縁部の形態によって細分される。



第15図　　土器分類図　3　（高杯・器台・鉢・蓋）

器台B_1　口縁端部を上方につまみ上げ、その外面に擬凹線文を施す。

器台B_2　口縁端部を上下に拡張させ、広い面に擬凹線文を施す。

器台B_3　口縁部が発達して上方にのび、端部は丸くおさまる。口縁外面には擬凹線文を施さないものである。

・器台C　器台B_2の受部にさらに同じ手法で、口径の小さな受部を重複させる装飾器台である。受部

のいずれにも、擬凹線文を施す。上段の受部には、楕円形もしくは水滴形の透孔をもつ。

・器台D　浅く内湾した受部と、大きく単純に開く脚部をもつ。中空のものと、中実のものがある。

器台D_1　浅い皿状の受部をもつもの。

器台D_2　受部が屈曲したのち、外反して開くもの。

(5)　鉢形土器

個体単位の形態差が著しく、器形は変化に富んでいるため、細分は煩雑となる。ここでは大別するにとどめた。

・鉢A　　口縁が内湾するもの。いわゆる台付無頸壺もこの範疇に含む。

・鉢B　　口縁部が単純にのびるものである。脚部を付加するものや、砲弾形で底部を穿孔したものなど変化に富む。

・鉢C　　「く」字状に口縁部が外反するもの。いわゆる小型丸底壺もこの範疇に含める。

(6)　蓋形土器

壺や甕などの蓋である。

・蓋A　　円盤状をなし、中央に突起を付加するものや、浅い笠形でつまみをもつものである。周縁部に小さな孔をもつものが多い。

・蓋B　　やや深い笠形をなし、つまみの部分が拡張して上げ底状を呈する。

(7)　ミニチュア土器

器高や口径が5㎝前後の小型の土器である。個体差が大きいため、文中では個別に触れてゆくことにする。

第2項　　出土土器

(1)　住居跡出土土器（図版61～65）

・**ＳＢ０１**（図版61－１，２）

甕の底部である。１は穿孔をおこなう。

・**ＳＢ０２**（図版61－３～７）

甕B_2の３は外面に叩きを残す。内面は刷毛目で仕上げ、口径は15.0㎝である。高杯Ｆの４、蓋Ｂの５などが伴う。

・**ＳＢ０３**（図版61－８～10）

甕B_1の８と甕B_2の９のほか、上げ底の小さな底部をもつ鉢10が出土している。

・**ＳＢ０７**（図版61－11～15）

11の壺A_1は口縁内面に扇形文を施す。口径は19.1㎝。15は高杯の脚部である。小型の鉢12や蓋Ｂのつまみ部13が出土している。

・**ＳＢ０８**（図版62－33）

甕の底部が出土している。

・ＳＢ１１（図版62－30～32）

30は器台B_2の受部である。内面はヘラ磨きを行い、口径は20.1cmである。平底の底部には、穿孔を施したものもある。

・ＳＢ１２（図版61－16～20）

外面に刷毛目を残す甕B_1の16と、叩きを残す甕18がある。16は口径は20.5cm。19は上げ底の底部である。高杯Ａもみられる。

・ＳＢ１３（図版61－21）

21は高杯の脚部である。内面はヘラ削り。

・ＳＢ１４（図版61－22～29）

22、23、24は甕B_1で、内面はへら削りを行う。23は外面に叩きを残している。27は口縁部が肥厚して、わずかに屈曲している。25は甕Ｄである。端部を丸くおさめる甕もみられる。28は高杯C_2で、発達した口縁部には擬凹線文が消失している。内面は丁寧なヘラ磨きを行う。口径は26.6cmである。

・ＳＢ１９（図版62－43）

上げ底の脚部である。

・ＳＢ２２（図版62－34，35）

34は鉢Ａである。外面には竹管文を加えている。口径は26.6cm。35はわずかに平底を残し、内面はヘラ削りを行っている。

・ＳＢ２４（図版62－36）

壺Ｆが出土している。外面をヘラ磨きを施し、体部には焼成後の穿孔を行ったものである。中央坑から出土したものである。口径は14.1cm、体部最大径は20.4cmである。

・ＳＢ２５（図版62－44）

上げ底状の底部が出土している。

・ＳＢ２６（図版62－46～54）

46は単純に口縁が外反する壺Ａである。47は口縁部は甕B_1であるが、丸底のものである。調整は不明。口径は15.8cm、器高は18.3cmである。口縁端部が拡張された甕$C_2$48は、擬凹線文をもたない。口径は16.8cm。49も甕C_2である。口径は13.8cm、器高は13.0cm。高杯には$C_2$50とＤ51が伴う。52は蓋Ｂである。径は13.9cm、器高は7.3cmである。

・ＳＢ２７（図版62－37～42）

37は口縁内面に扇形文を施した壺A_1である。口径は25.6cmである。39は小型の甕C_2で、口径11.8cm、器高は10.0cmである。このほかに蓋Ｂ38、鉢Ａ41が伴う。42の鉢Ｃは口縁内面に刷毛目を施している。口径は8.7cm、器高は9.1cmである。

・ＳＢ２８（図版62－45）

高杯Ａが出土している。口縁部の外面は、横方向のヘラ磨きを施す。口径は25.6cm。

・ＳＢ３１（図版63，64－55～96）

比較的多くの遺物が得られている。

壺は、拡張した口縁部に凹線文をもつ$A_4$55や、擬凹線文をもつ$A_5$56のほかに、Ｃが出土している。壺Ｃは長い頸部と扁平な体部からなる57や、頸部の基部が太い60などがある。61は口縁部に擬凹線文を施し、形態は壺D_2に近い。口径は16.2cmである。口縁が単純に開く壺Ａ62、63もある。甕にはB_1、B_2、

B_3、B_4がある。66と67、68は外面に叩きを残している。70は口縁端部に擬凹線文を施した甕B_4である。蓋はいずれもBである。高杯は、口縁部が外反してのびるA_2である。75の外面は、丁寧なヘラ磨きが施されている。79は器台D_2であるが、埋土の最上層から出土したもので、住居跡に確実に伴う資料ではなかろう。口径は11.5cm、器高は10.1cmである。鉢はBとCがあり、形態は変化に富む。90は器台の脚部であり、長い筒部がわずかに膨らむ。95と96は体部の下半であるが、高台を付加したように上げ底になる。

・**ＳＢ３２**（図版65－97，98）

鉢Cと底部が出土している。97の口径は8.9cmである。

・**ＳＢ３３**（図版65－99～104）

99は甕B_3である。拡張された口縁端部には、凹線文が施される。口径は16.4cm、体部最大径は22.1cmである。101は壺か鉢か不明である。高杯は、A102とC100がある。102は、柱脚部に櫛描直線文を５条めぐらせている。口径は21.0cm、器高は19.9cmである。

・**ＳＢ３４**（図版65－105～107）

105は甕B_1である。口径は17.6cm。106は甕B_2である。

・**ＳＢ３６**（図版65－108～112）

108は甕C_1である。拡張された口縁部には、広く擬凹線文が施され、内面のヘラ削りは頸部に及ぶ。口径は18.2cmである。110は器台B_2で、口縁端部は櫛描波状文で飾られる。

・**ＳＢ４３**（図版65－113，114）

脚部と底部が出土している。

・**ＳＢ４６**（図版65－115）

底部が出土している。

・**ＳＢ４９**（図版65－116～122）

116は甕Eである。口縁体部を屈曲させて、口径は16.6cmである。117は高杯Eである。口径は16.5cm。118は浅い鉢Aである。そのほかに、脚部と底部が出土している。

(2)　土壙出土土器(図版66～71)

・**ＳＫ０１５**（図版66－123）

甕B_2である。外面は刷毛目、内面は指押えが認められる。20.3cmである。

・**ＳＫ０１８**（図版66－124）

内外面に刷毛目を施す底部である。

・**ＳＫ０３４**（図版66－125）

底部が出土している。

・**ＳＫ０４４**（図版66－126～128）

高杯が３点出土している。126と127は高杯Dである。126は口縁端部が湾曲し、口径は11.6cm。127は内外面に丁寧なヘラ磨きを行うもので、口径は12.0cmである。128はA_2で、杯部の屈曲部に突帯をめぐらせている。口径は16.7cmである。

・**ＳＫ０４８**（図版66－129）

底部が出土している。

・**ＳＫ０４９**（図版66－130）

底部が出土している。

・**ＳＫ０６０**（図版66－131～139）

壺と高杯が出土している。131、132、133、134は壺A_3である。131と133は口縁部端面と頸部に凹線文を施している。132は頸部に凹線文をもち、口縁部端面は櫛描波状文を飾る。口径は18.4cmである。134は凹線文をもたず、外面を刷毛目で調整する。135と136は壺A_4である。135は口縁内面に扇形文、口縁端面に棒状浮文を飾る。136は頸部を刷毛目の後に櫛描の直線文と波状文を交互に配し、口縁端部に円形浮文を施している。口径は19.8cmである。137は高杯Ｂで、口縁端部は大きく垂下している。138と139は壺の体部である。138は内面をヘラ削りを行うが、139は内外面に刷毛目を残している。

・**ＳＫ０６１**（図版67－140～144）

高杯脚部と、底部が出土している。

・**ＳＫ０６４**（図版67－145）

口縁部が単純に開く壺が出土している。口縁部内面は強いよこなでによってくぼんでいる。口径は16.0cmである。

・**ＳＫ０７１**（図版67－146）

壺の口縁部である。端部は凹線文を施した後に、ヘラ状工具によって刻み目を加えている。口縁内面は櫛描波状文と２条の扇形文を飾る。口径は36.4cm。

・**ＳＫ０７６**（図版67－147～149）

甕Ａが出土している。147は口径22.7cm、体部最大径は22.5cm、148は口径23.6cm、体部最大径は24.0cmである。149は、甕底部である。

・**ＳＫ０８６**（図版67－150）

長頸壺である。外面を４条１単位の櫛描波状文を３単位、同じく波状文を２単位施している。口径は8.9cmである。

・**ＳＫ０８７**（図版67－152）

完形の壺A_1である。円形に近い体部から明瞭な区分をもたずに頸部がのび、口縁部にいたる。外面は刷毛目調整の後に、頸部と体部上半を８条の櫛描波状文で加飾している。口縁端部は斜格子文を施す。口径は23.5cm、器高は35.0cm、体部最大径は23.5cm、底径は8.4cmである。

・**ＳＫ０８８**（図版67－151）

底部が出土している。

・**ＳＫ０９３**（図版68－153）

底部が出土している。

・**ＳＫ０９４**（図版68－154）

口縁端部にヘラ状工具による刻み目を施した甕Ａである。内外面ともに条痕を残すことが大きな特徴である。形態や手法からみて在地のものとは考えられない。口径は23.8cmである。

・**ＳＫ０９６**（図版68－155）

壺A_2である。わずかにつまみあげられた口縁は、端部に刻み目が加えられる。頸部下端は２条以上の貼りつけ突帯をもち、口径は22.2cmである。

・ＳＫ０９７（図版68－156，157）

甕B_1が出土している。156は口径19.6cm、157は17.8cmである。

・ＳＫ１０５（図版68－158）

脚部もしくは底部である。

・ＳＫ１０６（図版68－159，160）

159は細頸壺である。口径は5.7cm、灰白色の胎土を用いている。160は口径38.8cmの大型の壺である。頸部下端には指頭圧痕を施した突帯をめぐらせている。

・ＳＫ１０７（図版68－161）

口縁端部を丸くおさめる甕である。口径は17.5cm。

・ＳＫ１１０（図版68－162）

甕Ａである。外面は刷毛目調整の後に、７条１単位の櫛描直線文を施している。南面には指押えの痕跡を残している。口径は23.6cmである。

・ＳＫ１１３（図版68－163）

円板の中央につまみを作り出した蓋である。上面は放射状に櫛描直線文と波状文を交互に配している。端部には２個一対の穿孔を施している。径は6.9cmと小型の蓋である。

・ＳＫ１１５（図版68－169）

壺Ｂの口縁部である。口縁外面に斜格子文を加え、口径は23.3cmである。

・ＳＫ１１７（図版68－167，168）

167は高杯の脚部である。内外面ともにヘラ磨きを丁寧に行う。168は甕B_1である。内外面は刷毛目で調整している。

・ＳＫ１１８（図版68－164～166）

164は口縁端部をなでて波状にした鉢である。口縁の一部を外に屈曲させて口を作り、その対面には２個一対の穿孔を行う。口径は14.0cm。165は甕Ａで、口径は24.0cmである。底部も出土している。

・ＳＫ１１９（図版69－170，171）

壺Ａである。170は口縁端部をわずかに拡張し、突出した端部に刻み目を施す。171は端部を丸くおさめ、刻み目を施す。頸部に櫛描直線文を加える。口径は18.6cmである。

・ＳＫ１２９（図版69－172～174）

172と173の甕は屈曲した口縁端部に刻み目を施し、さらに３方向を指頭で押えて部分的に波状部を形成している。174は壺A_1である。口径は11.9cm、器高は23.7cmである。

・ＳＫ１３１（図版69－177）

発達した口縁端部を形成し、擬凹線文を施さない甕Ｃである。内面下半は縦方向、上半は横方向のヘラ削りを行い、外面は板状工具による不定方向のなでを施す。口径は15.6cmである。

・ＳＫ１３５（図版69－175，176）

底部と体部が出土している。

・ＳＫ１３６（図版69－179）

口縁端部が垂下する壺A_4である。端面には櫛描の羽状文を施した後に、円形浮文を付加している。口径は19.2cmである。

・ＳＫ１３７（図版69－178）

壺の体部であり、その最大径は中位より高く19.6cmを測る。体部と頸部の境界には、櫛描直線文をめぐらせている。

・ＳＫ１４０（図版69－180～184）

180と181は内面をヘラ削りを行う甕である。184は口縁端部がわずかにつまみ上げられた甕B_2で、口径は16.4cmである。182は鉢で、単純に開く口縁部と、高台状に拡張された底部からなる。口径は9.6cm、器高は5.4cmである。183は口縁部に凹線をもつ壺で、口径は16.8cmである。

・ＳＫ１５４（図版70－185～188）

185は大きく開く広口壺で、頸部には４条以上の断面三角形の突帯をめぐらせている。口径は18.4cmである。186は頸部が不明瞭な短頸壺である。体部上半に櫛描直線文を５条施している。口径は17.0cm、体部最大径は33cmを越えると考えられる。187は壺の体部で、上半に櫛描直線文と波状文を配している。体部最大径は18.3cmである。188は大型の壺底部である。内外面を刷毛目で調整している。

・ＳＫ１５５（図版70－189，190）

189は口縁端部をつまみ上げた甕B_2である。内外面を刷毛目で調整し、口径は17.8cmである。190は体部下半である。

・ＳＫ１５６（図版70－191）

甕B_2である。内外面を刷毛目で調整し、口径は32.5cmである。

・ＳＫ１６０（図版70－192）

形態を明らかにしがたい体部である。

・ＳＫ１６２（図版70－193，194）

193は壺A_1である。頸部はゆるやかに開き、口縁端部は丸くおさまる。頸部と体部上半に櫛描直線文をめぐらせる。194は壺A_1の口縁部下端に粘土を付加した後、「Ｕ」字状の刻み目を施す。その外端面は櫛描波状文を飾る。頸部には断面三角形の貼り付け突帯をめぐらせ、その上に３条１単位の棒状浮文を５個所にわたって付加している。

・ＳＫ１９４（図版70－195）

壺A_2である。口縁部は拡張され、肥厚している。口径は13.0cm。

・ＳＫ１９５（図版70－196）

15.0cmの径をもつ大型の底部である。

・ＳＫ２０１（図版71－197）

甕Ａである。口縁下に櫛描波状文を施している。口径は20.0cm。

・ＳＫ２０６（図版71－199）

内外面を刷毛目で調整した底部である。底径は7.7cmである。

・ＳＫ２１１（図版71－198）

内面をヘラ削りした底部である。底径は7.8cmである。

・ＳＫ２１５（図版71－200，201）

200は口縁端部をわずかに肥厚させた壺である。外面は刷毛目を残している。口径は13.1cm。201は壺の底部である。

・ＳＫ２２０（図版71－202～209）

202、203、204は壺A_1である。202は体部内外面を刷毛目を施し、口径は10.4cmである。203は口径が

14.0cm、器高は17.2cmである。体部は外面を刷毛目の後に櫛描直線文を加え、内面は指頭圧痕が顕著である。口縁部内面にも櫛描直線文を施している。205と206は甕Aである。205は口縁端部に刻み目をもつ。口縁下には櫛描直線文を3条、波状文を1条、直線文を3条繰り返している。口径は27.2cmである。206は緩やかに外反する口縁部に刻み目をもち、その下に3条の櫛描直線文を付加している。口径は23.0cm、器高は24.2cm、体部最大径は21.0cmである。その他は底部である。208は底部端部が突出し、209は高台状を呈している。

・**ＳＫ２４０**（図版71－210，211）

210は甕B_2である。口径は27.1cm。211は底部である。

(3) 溝出土土器（図版72～75）

・**ＳＤ０１**（図版72－212）

甕B_2である。口縁端部を強くなでて、わずかにつまみ上げている。口径13.4cm、体部最大径は18.8cmである。

・**ＳＤ０４**（図版72－213，214）

底部が2点出土している。

・**ＳＤ０５**（図版72－215～217）

215は壺A_3である。拡張された口縁端面に凹線文を施し、内面を櫛描波状文で飾る。口径は18.4cmである。216は大型の鉢である。口縁部は拡張され、上面と外面に円形浮文を配する。口径は29.0cmである。217は脚部である。外面を凹線文状の沈線で加飾している。

・**ＳＤ１０**（図版72－218～220）

218は直口壺である。口縁端部外面は断面「U」字状の沈線を施している。口径は9.5cm、器高17.1cm、体部最大径は17.8cmである。219は口縁部が内湾しつつ開く鉢である。口径は17.5cm、器高は5.3cmである。220は高杯の脚部である。脚端部に穿孔を加えている。

・**ＳＤ２１**（図版72－221）

脚部が出土している。

・**ＳＤ２５**（図版72－224～227）

224は甕Eである。外面は細かな刷毛目を残し、内面は横方向のヘラ削りを行う。口縁部は内湾気味に立ち上がり、上端は面をなしている。口径は18.1cmである。225は口縁端部に強いよこなでを施し、端部を薄く仕上げる。口径は16.6cmである。226と227は底部である。

・**ＳＤ２６**（図版72－222，223）

222は口縁端部が内側に拡張され、外面に凹線文を施し、2個の穿孔をもつ播磨地方に通有の鉢である。台が付加される。口径は18.5cm。223は底部で、内面をヘラ削りする。

・**ＳＤ３２**（図版73～74－228～264）

比較的多量の遺物が出土している。

228から238は壺Aである。加飾に富むものが多く、228は口縁端部に刻み目を施した後に円形浮文を配している。口径20.7cmの壺A_1である。229はA_2で、口縁端部に櫛描波状文を行う。230と231は口縁端部に凹線文をもつ。前者の口径は19.0cm、後者のそれは14.5cmである。また後者は、頸部に櫛状工具による刺突を2段にわたって加えている。232は口縁端部と内面に竹管文を付加している。233から236は口縁

端部に凹線文を施し、口縁内面に櫛描波状文をもつ壺A_3である。233は口縁端部に棒状浮文を加え、口径は15.2cm。235も同様に棒状浮文を配し、口径は20.5cmである。234は口縁端部に円形浮文と刻み目を交互に配し、頸部も凹線文で加飾している。また口縁部に2個の穿孔をしていることも特徴である。口径は21.5cmである。237と238は、口縁部が大きく垂下し、頸部に断面三角形の貼り付け突帯をめぐらせた壺である。垂下して外傾する口縁内面に不規則な竹管文を施し、さらに櫛描扇形紋や直線紋を加えている。239から243は、頸部が直線的に開く壺Cである。いずれも口縁部には広い範囲で凹線文を施している。243は球形の体部から単純に頸部が開き、口縁端部がわずかに肥厚した壺である。外面は刷毛目で調整し、内面は下半を縦方向のヘラ削り、上半を指なでで仕上げている。口径は15.5cm、体部最大径は25.0cmである。244は壺Fである。口縁部に凹線文を施し、穿孔を行う。245から248は甕B_2である。246は口縁端部に刻み目を加える。248は大型で、口径は30.8cm、内外面を刷毛目で調整している。249から251は甕B_3である。口縁端部を強いよこなでで仕上げて、上方につまみ上げる。250は口径12.9cm、体部最大径14.5cm、器高12.6cmである。251は口径11.6cm、器高18.0cmである。いずれも体部内面はヘラ削りを行っている。252から254は高杯Aである。253は杯部の内外面を丁寧にヘラ磨きを行う。254は口径20.8cm、器高19.7cmである。255は高杯Bで、口径17.3cm。256から258は鉢Aで、いわゆる台付鉢に属する。いずれも凹線文を施し、256と257は口縁部に穿孔を行う。259は蓋Aである。つまみは明瞭ではなく、口径は13.2cmである。262から264は小型の鉢である。263は穿孔を行った脚部を付加している。ヘラ磨きを丁寧に行い、胎土も精良である。口径は5.9cm、器高は5.8cmである。264は口縁部がわずかに屈曲し、穿孔を行っている。口径は7.9cmである。

・**ＳＤ３３**（図版75－265）

無頸壺である。口縁部に穿孔を施し、刷毛目で仕上げる。口径は7.8cm、器高は15.4cmである。

・**ＳＤ３７**（図版75，267，268）

267は口径23.8cmの大型の甕である。内外面は刷毛目を施している。268は脚部である。6個所に穿孔を行っている。

・**ＳＤ４０**（図版75－266）

甕の底部である。底径は8.0cm。

・**ＳＤ４１**（図版75－269～271）

269は脚部である。脚端部に直線文を配し、長方形の細い透かしを4方に配する。270は壺の体部である。頸部には凹線文を施し、体部上半は櫛描直線文と波状紋を交互に配している。内面下半はヘラ削りを行う。体部最大径は27.0cmである。271は口径38.0cmの甕Aである。口縁部の下に櫛描波状文を3条飾り、その下にヘラ状工具による刺突文を加える。

・**ＳＤ４３**（図版75－273，274）

いずれも底部である。

・**ＳＤ４７**（図版75－275）

壺A_2である。頸部には凹線文が認められる。口径は17.7cmである。

・**ＳＤ６５**（図版75－272）

脚部である。凹線文を配し、内面はヘラ削りを行う。

(4) 旧河道出土土器（図版76～99）

・**旧河道１**（図版76～80－276～373）

276から311は壺Ａである。276は口縁端部は単純に丸くおさまり、口径は18.5cm。277は口縁端部が肥厚している。278は口縁端部をわずかにつまみ上げ、頸部には指頭圧痕文をめぐらせる。279と280は頸部から口縁部が単純に開く壺である。外面には刷毛目を残す。281は口縁内面に２条の突帯と円形浮文を加えている。282は口縁端部が拡張され、頸部に凹線文をもつ。283は口縁端部に斜格子文を加える。284は拡張された口縁端部と頸部に凹線文を飾る。285と287は凹線文を施した口縁部に前者は棒状浮文と刻み目、後者は細い棒状浮文を加えている。286は口縁部下に２個一対の穿孔をもち、外面上半は刷毛目、下半はヘラ磨きを行う。口径は10.7cm、器高は16.0cmである。288は頸部が大きく開き、口縁端部をわずかに垂下させたもので、頸部には指頭圧痕を加えた突帯をめぐらせている。口径は28.9cm。290は口縁端部に斜格子文を加える。291は口縁内面に２条の突帯を設け、下位の突帯には刻み目を加える。口縁端部は刻み目と円形浮文を飾る。292はA_1で、口縁内面に不規則な波状文を残している。293から311は口縁内面に文様をもつ。とりわけ、口縁部が著しく拡張された壺A_4は加飾性が高い。すなわち、293と300、303は扇形文、295は円形浮文、304は刻み目、307は扇形文と円形浮文、309は波状文と扇形文、他は波状文をもつ。口縁端部の加飾も変化に富み、293は刻み目、295と301は円形浮文、303は扇形文をもち、他は凹線文と円形浮文、棒状浮文を組み合わせている。302は頸部と体部の境界が不明瞭で、内外面を刷毛目の後に、櫛描直線文と波状文を交互に加えている。口径は20.9cmである。312から314は壺Ｂである。312は口縁部外面に木目列点文をめぐらせ、その下に凹線文を配する。口径は30.1cmである。313は外面を刷毛目の後、凹線文を加え、口径は18.2cm。314は口縁端部が内側に拡張されたもので、外面は刷毛目、内面は板状工具でなでる。315は長頸の壺Ｃで、口縁端部には幅の広い沈線がめぐる。体部は扁球状で、底部はやや不安定である。口径は7.6cm、器高は17.3cm、体部最大径は13.1cmである。316は二重口縁の壺であろう。口径は26.1cmである。317は器高9.9cmの鉢で、口縁部が緩やかに内湾している。318は口縁端部を強く屈曲させ、垂下させた壺である。頸部に穿孔を行い、口径は7.8cm、器高は13.1cmである。321は脚付の壺である。頸部は凹線文をもち、屈曲して張る体部は、上半を横方向、下半を縦方向のヘラ磨きを行う。319と320は壺の体部で、いずれも櫛描直線文と波状文を交互に配している。322は直線的に開く口縁部と、球形の体部からなる甕で、口径は18.9cmである。323から327は口縁端部を内側につまみ上げた甕B_2である。323は口径は11.0cm、324は31.6cmである。327はつまみ上げた口縁端部の一部を指頭で抑えて、波状部を作り出している。328はC_2である。外面は板状工具によるなで、内面は頸部までヘラ削りを行っている。口径は14.8cm、器高は16.1cmである。329から332は高杯Ａである。329、330、331は口縁部の下を凹線文で飾る。331は口縁上端部にヘラ描直線文を加えている。口径は36.2cmである。333、334、335は高杯Ｂである。杯部は直線的に開き、水平にのびる鍔端部は大きく垂下している。336から341は脚部である。２個一対の穿孔をもつものや、沈線文をもつものなどがある。342と343は大型の脚部で、凹線文と穿孔を施すことで共通している。344と345は底部である。344は穿孔が貫通しているが、345は穿孔途中のものである。346、347、348は鉢であり、脚を付加するものであろう。346は口縁端部が拡張されて面をなし、そこに扇形文を施している。347は口縁端部が内側に拡張され、凹線文を飾った後に穿孔を行う。348は口縁部外面を凹線文を加え、体部との屈曲部に刻み目を施している。口径は28.3cmである。349は口径15.2cmの蓋Ｂである。つまみは上端がくぼみ、裾に２個一対の孔を穿つ。350と351は小型の器台である。350は口径5.4cm、351は4.3cmである。352から364は脚部である。357と362は端部が丸くおさまるが、他の多くは脚端部が肥厚して拡張されたものである。354は斜格子を充塡した鋸歯文、364は半

截竹管文で加飾している。365から373は底部である。366、368、370、372、373は上げ底となる。

・旧河道２（図版81～99－374～776）

374から420は壺Ａであるが、完形を保つものはない。口縁端部は強い横なでで凹凸をもつものが多く、374は波状文、375は棒状浮文、377は鋸歯文、379は刻み目を施している。375は口縁部内面に断面四角形の突帯をめぐらせたものである。383から395は、口縁部が拡張された壺A_2である。383、385、387、389、392、394は口縁端部に凹線文を施し、さらに384と389は円形浮文、385と387は棒状浮文、394は円形浮文と棒状浮文を加えている。頸部に凹線文をもつものは、384、385、387、389、391、393、394がある。388は口縁端部に２条の沈線を施し、さらに櫛描波状文を飾る。口径は21.5cmである。391は口縁端部に波状文、390は綾杉文、395は刻み目を行い、口径はそれぞれ20.3cm、23.9cm、23.4cmである。396から401も口縁を拡張してものである。397は口縁端部に凹線文をもち、全面に刻み目を施した後に円形浮文を縦に３個連ねるものを１単位とした装飾を加えている。さらに口縁内面に断面三角形の突帯を２条めぐらせ、穿孔を行っている。口径は17.8cmである。398と400は口縁部内面の突帯は１条のみである。397は口縁端部に綾杉状に刻み目を加えた後に円形浮文を配している。401は口縁端部が拡張され、さらに大きく垂下したものである。強い横なでで凹凸をなし、一見突帯のようにもみえる。そしてそこに刻み目を配している。口縁内面の外傾した部分には竹管文、その内側には扇形文と直線文を組み合わせて加飾している。頸部には断面三角形の突帯をめぐらせ、口径は26.8cmである。402から420は、口縁内面にも文様を加えた壺である。文様は波状文、扇形文、刻み目文、竹管文からなる。口縁端部も加飾が施され、407、410、412は口縁の端部と内面ともに櫛描波状文である。402は口縁内面に扇形文を２条、口縁端部に円形浮文を配する。口径は20.1cm。403は端部、内面ともに扇形文を施すものである。411も同様で内面端部ともに綾杉状の刻み目を施している。413は口縁内面に波状文と刻み目文を同時に加えている。口径は24.8cmである。414は内面に波状文と扇形文を組み合わせたもので、口縁端部には凹線文を施し、さらに棒状浮文を付加している。口径は26.0cmである。415は内面を飾る波状文が２条となり、端部は414と同様に凹線文と棒状浮文を加えている。口径は25.4cm。416は口縁内面には櫛状工具を使用して綾杉状に刻み目を加え、口縁端部は凹線文にヘラ状工具を使用した縦方向の沈線を施し、さらに円形浮文を付加したものである。口径は25.8cm。417は内面と端部ともに竹管文で飾る。内面は２条、端部は２条の構成単位である。418と419は口縁端部が大きく拡張された壺A_4で、そこに凹線文を配した後に縦方向にヘラ状工具で沈線文を加え、419ではさらに円形浮文が付加される。それぞれ内面は波状文、頸部は凹線文で加飾される。418の口径は24.0cm、419は24.5cmである。420は口縁端部が緩やかに屈曲したものである。外傾する口縁内面には竹管文を施し、その内側に扇形文を加えている。421から430は壺Ｂで、大型のものが多い。直立する口縁部外面に装飾を行うものが多く、口縁端部は拡張されて面をもつものが大半である。421は口縁部外面の上下に太い沈線文を配し、その間隙を波状文で充塡している。内面は刷毛目を施し、口径は41.0cmである。422は口縁部外面の上下に刻み目をもち、口径は29.0cmである。423は口縁外面を斜格子文を加えている。424は口縁部外面の上下に強い横なでを行い、凹線文状の文様を加える。内外面は刷毛目で調整を行い、口径は30.7cmである。425は口縁部外面の上下に刻み目をもち、その間隙を斜格子文で充塡している。頸部には指頭圧痕を施した突帯をめぐらせ、口径は30.7cmである。426は刷毛目調整を行う。427は口縁部外面の上下に竹管文を配し、さらに斜格子文で充塡している。面をなす口縁端部には端面に刻み目、上面には竹管文を加えたものである。口径は33.9cmである。428は口縁部外面を斜格子文、429は凹線文を施す。429は頸部に指頭圧痕を施した突帯を２条めぐらせている。430は口縁部外面の上下

に刻み目をもち、頸部には櫛状工具による刻み目を加えた突帯をめぐらせている。口径は33.5cmである。431から445は壺Cである。431はいわゆる直口壺の口縁端部である。櫛描直線文の下に鋸歯文、さらに櫛描直線文を加え、有軸の綾杉文、そして櫛描直線文と鋸歯文を連続させたもので、きわめて加飾性に富む。胎土に砂粒を含まず、精良なものを選定している。432は口縁部がやや内湾するもので、口縁部外面に凹線文をもつ。433の口縁部は外反気味に、434は直線的に開く壺で、それぞれ凹線文を多用している。435は口縁端部を水平につまみ出し、そこに刻み目を配する。頸部には指頭圧痕を加えた突帯をめぐらせ、口径は19.2cmである。436は口縁端部を上方につまみ上げ、435と同様の手法を講じている。437と438は球形の体部と、直線的に開く頸部からなる。内面は指頭圧痕が顕著である。440と444は長頸壺である。440は肩の張る体部からなだらかに頸部がのびる。外面は刷毛目、内面はヘラ削りを行っている。444は体部と頸部の境界が不明瞭で、外反しつつ口縁部へ続く頸部には列点文と直線文による施文が加えられ、体部内面はヘラ削りを行う。口径は13.3cm、器高は24.9cm、体部最大径は13.0cmである。439、441、442、443は単純に頸部が開く壺である。口縁端部と頸部に凹線文を施すものが多い。443は口径17.9cm、体部最大径24.7cmである。445はいわゆる水差し形土器である。口縁端部外面に凹線文を施し、肩部に把手を付加する。外面は上半を刷毛目、下半をヘラ磨き、内面はヘラ削りを行っている。たたし、体部には焼成以前に径約8cmの円形の穿孔が行われており、器種の名称から推察される機能は否定されるものと思われる。口径は12.2cm、体部最大径は19.5cmである。446から462はいわゆる二重口縁壺である。446、447、448は口縁部は未発達のもので、立ち上がりは短い。446の口径は16.2cmである。449と450は口縁部がわずかに内湾しつつのびるもので、端部は拡張される。口径は449が23.2cm、450が23.9cmである。451は球形に近い体部をもち、口縁部外面は不規則な波状文を配する。外面上半は刷毛目、下半は右上がりの叩きとヘラ状工具によるなでを行い、内面は刷毛目で調整している。口径は13.8cm、器高は23.3cm、体部最大径は21.2cmである。452から456は拡張した口縁部外面に擬凹線文をもつ壺D_2である。452、454は立ち上がる口縁部の屈曲が緩やかである。452、453、456は外面を丁寧なヘラ磨きを行っている。457から462は擬凹線文をもたない壺D_3である。甕の範疇でとらえてよいものも存在するようである。459は口径は12.6cm、器高は11.8cm、体部最大径は12.6cmである。460は内外面を刷毛目で調整し、口径は7.6cm、器高は10.4cm、体部最大径は11.2cmである。461は内外面をヘラ磨きで丁寧に調整し、口径は12.3cm、器高は14.4cm、体部最大径は13.8cmである。463と464は直立する頸部が短い壺Eである。いずれも頸部に穿孔を行い、口径は463が11.0cm、464が10.7cmである。465から473は口縁部が短く屈曲しておわる無頸の壺Fである。465は丸底のもので、口径は5.4cm、器高は8.7cm、体部最大径は9.7cmである。467、468、472は口縁部は屈曲せず、肥厚して終息するものである。口縁部に穿孔を行い、ヘラ磨きを行う。471は短く立つ口縁部の壺である。外面はヘラ磨き、内面はヘラ削りを行い、口径は7.5cm、器高は13.7cm、体部最大径は13.2cmである。473は口縁部下端に断面三角形の突帯を4条めぐらせ、棒状浮文を加える。突帯の下には波状文と斜格子文を施している。口径は19.2cm。474から476は台または脚を付加した壺である。475は強く張る体部からなだらかに口縁部が外反してゆくもので、脚は2個所を穿孔する。口径は8.2cm、器高は22.4cm、体部最大径は14.8cmである。476は体部が扁球形で張り出し、直線的に頸部がのびる壺に脚を付加したものである。頸部は全面を凹線文を施し、体部から脚部の外面は丁寧なヘラ磨きを行う。脚端部は拡張され、3個1単位の穿孔を4個所に行っている。口径は7.4cm、器高は31.7cm、体部最大径は15.6cm、脚端径は10.7cmである。477から483は壺の体部資料である。477は扁平な体部に2条の突帯をめぐらせ、剥離のため調整は識別しがたいが、一部に赤色顔料の痕跡が認められる。最大径は15.3

cmである。478から481は外面を丁寧なヘラ磨きを行っている。482は丸底の壺で、最大径は13.9cmである。483は球形の体部に、丈夫な底部がつく。最大径は22.0cmである。484は甕Aである。口縁部下端を波状文で飾り、口径は19.2cmである。485から540は甕Bである。体部は倒卵形を呈し、その最大径が明らかに口径を下まわるものは487、493、497、505がある。498と500は口径が30cmを越える大型の甕である。いずれも口縁端部を上方にわずかにつまみ上げており、500は内外面ともに刷毛目で調整している。505と510は口縁端部がわずかに拡張されて面をなし、底面はヘラ削りが顕著である。口径は505が14.4cm、510は14.1cmである。512は外面に叩きを残し、口径は15.5cmである。514から520は口縁端部の一部に数回の指頭押圧を加えて部分的な波状口縁を形成した甕である。この部分波状口縁は口縁全面に施されるものではなく、1単位あたりにつき2回から4、5回の押圧を3個所から5個所程度加えたものである。このうち520は内外面を刷毛目で調整したもので、口径は26.2cmである。521から540は口縁端部がつまみ上げられた甕B_2である。内面のヘラ削りが顕著となるが、525、535、537、540などは内外面ともに刷毛目を残している。また、521、524、529の口縁端部には刻み目が施されている。525は口径38.0cmの大型の甕である。口縁端部は肥厚して、面をなしている。523、526、530、531、532、538などは口縁端部のつまみ上げがとりわけ顕著である。541は完形を保つ甕Bである。口縁端部は外傾する面をなし、体部は倒卵形を呈する。底部はわずかに凸状となる。体部外面は叩きと細かい刷毛目を併用し、内面は上半を横方向、下半を縦方向のヘラ削りを行っている。口径は15.3cm、器高は21.3cm、体部最大径は16.4cmである。542、543、546、548、549は肥厚して面をなす口縁端部に擬凹線文を施す甕である。548は口径は19.8cmで、体部最大径は口径を凌駕する。体部外面は粗密の2種の刷毛目を併用している。549は口径31.1cmの大型の甕で、内外面には刷毛目を残している。550から582は口縁端部が拡張されて、立ち上がる甕Cである。550、551、552は口縁端部に擬凹線文をもち、口径はそれぞれ15.6cm、16.6cm、14.6cmである。553と554は擬凹線文を施さず、端部は丸くおさまる。内面のヘラ削りが頸部にまで及ぶものが大半を占めている。が554は刷毛目を残している。568は口縁端部を強い横なでで仕上げたもので、端部は丸くおさまる。外面は縦方向の刷毛目を行い、内面はヘラ削りの後に下半をヘラ状工具でなでている。569から582は口縁部の立ち上がりがさらに発達したものである。口縁部は強いよこなでが施されており、立ち上がりの屈曲部は稜をもたない。578、579、583などはとりわけ口縁部が拡張されもので、擬凹線文を施している。外面は刷毛目、内面はヘラ削りを行うものが大半を占めている。582は口径は24.7cmである。583は口縁部が垂直に近く、かつ長く立ち上がるもので、その屈曲部はよこなでによって突帯のように突出している。口径は8.8cmである。584から588は甕Eである。体部は球形を呈し、口縁端部はわずかに肥厚して内傾する面をもつものがある。588は典型的な布留式甕である。調整は不明であるが、口径は13.5cm、体部最大径は19.2cmである。

589から595は高杯A_1である。杯部から内湾もしくは直立して口縁部が立ち上がり、端部は肥厚して面をなしている。589は口縁部外面に凹線文をもち、口径は18.9cm、590は杯部と口縁部の境界に凹線文を施し、口径は25.2cmである。591は丁寧にヘラ磨きを行っている。594は口縁部外面と、面を形成した端部上面に櫛描扇形文を加飾したものであり、口径は26.1cmである。595は口縁部外面の全体に凹線文を施したものである。596から601は杯部から口縁部が内湾して外に開く高杯A_2である。口径は596は14.2cm、601は31.0cmである。602から609は口縁端部が水平にのびた後に垂下し、口縁内面に断面四角形の突帯をめぐらせた高杯Bである。602と603は口縁端部の垂下は未発達で、外傾した面を保ちつつ拡張されるにとどまる。口縁部内面の突帯は強固である。604から609の口縁端部は大きく垂下している。604、607、

608、609では垂下した口縁部外面に凹線文を施している。606は内外面ともに丁寧なヘラ磨きを行ったものである。610から616は「S」字状に屈曲する口縁部をもち、その広い端面に擬凹線文を施す高杯Cである。610は口縁部が屈曲した後水平にのび、さらに擬凹線文をもつ端部が開き、口径は23.0cmである。611と612は杯部の上位が屈曲して稜をもっている。613と616は擬凹線文を施す口縁端部が広く、内外面をヘラ磨きし、口径は21.7cmと27.8cmである。617から625は高杯Dであるが、口縁部の形態によりさらに細分が可能である。617は短い口縁部が屈曲して開き、口径は12.3cm。618は内湾気味に単純に開く杯部をもち、口縁端部は強いよこなでで仕上げている。619と622は単純に開くものである。619は内外面を刷毛目で仕上げ、口径は12.8cmである。620、621、623、624、625は浅い杯部から明瞭に屈曲して口縁部が直線的に開くものである。623は脚部が単純に広がるもので、口径は12.1cm、器高は11.5cm、脚部径は9.7cmである。外面は縦方向、杯部内面は横方向のヘラ磨きを施している。626から636は脚台部である。緩やかに広がる柱状部と屈曲して大きく開く裾部からなるものである。また635は裾部に穿孔を行っている。631と634は内面にヘラ削りを施している。

637と638は器台Aである。いずれも受部と脚裾部は欠損して不明である。中空の柱状部に、637は3方向に、638は4方向に穿孔を行い、外面は丁寧なヘラ磨きを施している。639から650は外反して広がる受部から口縁部が立ち上がり、脚部は「ハ」字状に単純にひらく器台Bである。639は口縁部の立ち上がりが未発達のB_1で、その端面に擬凹線文を配する。内外面は刷毛目で調整している。口径は21.0cm。640から645は口縁端部が上下に拡張されて、さらに擬凹線文を施したB_2である。640は約3cmにわたる面に擬凹線文をもち、口径は20.0cm、内外面は丁寧なヘラ磨きを施している。643と644は擬凹線文をもつ面がほぼ垂直となり、口径は20.0cmと18.2cmである。642と645は擬凹線文をもつ面が外傾し、口径は24.8cmと23.6cmである。646から650は拡張された口縁端部に擬凹線文を施さないB_3である。649は口縁部は下方にも拡張されるもので、口径は15.9cm、器高は13.1cm、脚裾径は11.3cmである。650は口縁端部を強いよこなでで仕上げたもので、外面は板状工具によるなで、受部内面は横方向のヘラ磨き、脚部内面は刷毛目を残す。口径は19.4cm、器高は17.7cm、脚裾径は15.0cmである。651、652、653は脚部である。651は裾端部を内側に拡張し、外面は凹線文を施す。径3cm程度の円孔を推定7個所に穿っている。脚裾径は28.5cmである。652は径31.0cmの脚裾部である。端部を肥厚し、その上位に細く突出する突帯を3条めぐらせ、その突帯のそれぞれに刻み目を加えた後に太めの棒状浮文を施す。突帯の上方には長方形の透かしを推定4個所配し、それぞれの透かしの間を縦位置に置く有軸の綾杉文を飾る。透かしの設置と文様の描写には、鋭利な道具が使用されたことがうかがえる。654と655は器台B_2の受部にさらに同様の受部を重ねたいわゆる装飾器台で、器台Cとしたものである。654は上方の受部で、口径は16.2cm、精良な胎土を選択していることも特徴的である。楕円形もしくは水滴形の透かしを推定4個所に配する。655は上方受部が径が17.1cm、下方受部が径が24.3cmの器台で、上方口縁端部は擬凹線文、下方口縁端部は櫛描波状文を飾る。また上方受部には5個所もしくは6個所に楕円形の透かしを穿っている。654と同様に精良な胎土を選択しており、内外面ともに丁寧なヘラ磨きで仕上げている。656と657は器台Dである。656は浅い皿状の受部で、中空である。口径は9.0cm。657は受部が屈曲してひらき、口径は8.6cmである。

658から700までは鉢であるが、個体差が大きい。658は直立する口縁外面に凹線文を施し、円形浮文と刷毛状工具による刺突文を綾杉状に配している。659はいわゆる段状口縁を形成する鉢で、口縁部にはヘラ状工具による刺突文を綾杉状に配している。内外面は刷毛目で調整し、口径は30.6cmである。660は器種の判別が困難で、甕との識別が不明瞭である。口縁端部は肥厚してわずかに内側にのび、外傾する面

を形成している。口縁部下には刷毛目調整の後に櫛描直線文と波状文を配し、体部下半は縦方向の密なヘラ磨きを行う。口径は21.5cm、器高は19.5cm、底径は12.5cmである。661と662は内湾しつつ立ち上がる口縁部をもち、その外面には幅広く凹線文を施す。口径は45.1cmと45.6cmである。663と665も同様の口縁形態をもつ。端部は肥厚して面をなしている。663は口縁上端部に沈線をめぐらせ、665は口縁部外面に円形浮文を配する。664は体部が緩やかに屈曲し、口縁部が内側にのびる。また666は口縁部に2条の突帯をめぐらせている。667から670は低い台を付加した鉢である。667は口径が11.1cm、器高は6.5cmである。669は内面に細かな刷毛目を残し、口径が10.1cm、器高は9.0cm、670は外面にヘラ磨きを行い、口径が13.5cm、器高は8.1cmである。671から674は内湾気味に開く体部から口縁部が単純にのびる鉢である。671は小型のもので、口径は8.7cm、器高は7.0cmである。672は外面を刷毛目で調整し、口径は16.9cm、器高は8.8cmである。673は上げ底状を呈し、口径は12.7cm、器高は10.3cmである。674は体部が砲弾形を呈し、わずかに平底を残す。外面は刷毛目、内面は刷毛目とヘラ削りを併用して調整し、口径は15.0cm、器高は13.9cmである。675から677は口縁部が内湾する鉢である。675はヘラ削りによって丸底に仕上げ、口径は8.2cm、器高は6.6cmである。678と679は穿孔を施した底部である。680から686は尖底に穿孔を施し、体部が砲弾形の鉢である。680は平底をとどめたもので、口径は10.5cm、器高は6.7cmである。683は口縁端部に2個一対の刺突を施したもので、外面は板状工具によるなで、内面はヘラ削りを行う。684は口縁部が内湾し、体部最大径は15.2cmで口径は13.6cmを凌いでいる。内面は上半を刷毛目、下半をヘラ削りを行っている。685と686は底部が分厚く仕上げられている。685は口径は15.1cm、器高は13.5cm、686は口径は15.1cm、器高は14.6cmである。687から690は拡張された口縁部が上方に立ち上がる鉢に脚台を付加したものである。687は口縁端部に擬凹線文をもち、口径は14.6cmである。688は外面を刷毛目調整した後にヘラ状工具でなでて仕上げている。689は内外面ともにヘラ磨きを行い、口径は18.0cm。690と691は口縁部が発達し、大きく立ち上がるものである。690は体部の内外面を丁寧なヘラ磨き、脚部内面を刷毛目で調整する。口径は13.5cm、器高は16.6cm、体部最大径は13.8cm、脚部径は10.1cmである。691も丁寧なヘラ磨きを行い、口径は15.0cm、器高は14.2cm、体部最大径は14.0cm、脚部径は9.9cmである。692は脚を付加しない鉢である。手法は脚付きのものと大差ない。口径は18.4cm、器高は11.4cm、体部最大径は17.4cmである。693、694、697はいわゆる小型丸底壺である。693は扁球形の体部から大きく開く口縁部をもち、内面は刷毛目、外面は密なヘラ磨きを施している。口径は9.8cm、器高は6.9cmである。胎土は精良である。697も同様のものである。694は体部最大径が9.2cmで8.0cmの口径を凌いでいる。外面はヘラ磨きを行い、底部には叩きを残している。696と700は短く屈曲する口縁部の鉢である。696は口径9.7cm。700は底部をヘラ削りで丸底に仕上げたもので、口径は13.6cm、器高は10.0cmである。699は把手を付加したジョッキ形の土器である。外面は櫛描直線文と波状文を交互に配している。底部は大きく内湾して上げ底となり、径は8.3cmである。西播磨地方に散見される器種であろう。

701から708は蓋である。701、702、703は小型のもので、径はそれぞれ8.0cm、7.8cm、10.7cmである。いずれもつまみの上部はくぼんでいる。705は径14.8cm、706は12.2cmである。707は端部を強いよこなでを行い凹線を形成する。内外面を刷毛目で調整し、煤の付着が認められる。径は15.6cm、器高は8.0cmである。708は端部に沈線をもち、内面は粗い刷毛目で仕上げられる。径は18.7cm、器高は10.3cmである。

709から725はミニチュア土器である。709、710、711は口縁部が単純に立ち上がり、口径はそれぞれ5.1cm、5.3cm、4.8cmである。なでによる調整を加えたものである。712は口縁部が外反し、口径は6.2cm、器高は4.5cmである。713は平底で、口径は5.6cm、器高は4.6cmである。716、717、718も平底またはわず

かな上げ底になる。714と715は丸底から口縁部が内湾気味に立ち上がる。714は口縁端部に穿孔を施し、口径は5.2cm、器高は4.8cmである。715は口径は6.3cm、器高は4.7cmである。720、722、723は内湾気味に口縁部が開き、短く開く脚台が付加された鉢である。720は口径は7.6cm、器高は5.5cm、722は口径は7.2cm、器高は6.5cm、723は口径は8.9cm、器高は7.1cmである。724は口縁端部が短く水平につまみ出され、脚台を付加する。内面はヘラ削りを行い、外面は指押えの痕跡が明瞭である。口径は6.7cm、器高は5.1cmである。725は不整形な体部と内湾して立ち上がる口縁部からなり、内外面ともに丁寧で密なヘラ磨きで仕上げる。口径は6.5cm、器高は10.1cmである。

726から767は脚台部である。726、727、728は端部を拡張させた高杯脚部であり、726は穿孔、727は鋸歯文と直線文と未貫通の三角形透孔、728は直線文と未貫通の三角形透孔がみられる。729は凹線文と穿孔が認められる。730は端部に穿孔したもので、脚径は13.0cmである。731と732は比較的低い脚台で、刷毛目調整を行っている。径は731が9.5cm、732が10.5cmである。733は端部に竹管文を配し、体部との境界に断面三角形の突帯をめぐらせている。734は端部に穿孔を加え、上部に凹線文をめぐらせる。充填された円板は剥離している。735の脚柱部は長く、外面は刷毛目の後に一部をヘラ磨きを行い、内面はヘラ削りである。736は脚上端部に穿孔が認められ、径は12.6cmである。737は拡張された脚端部にヘラ状工具による沈線文が施され、径は11.0cmを測る。743から757は内湾して開く脚部である。744は３個所に円孔を穿ち、径は10.5cm。745は穿孔の上部に段を形成している。径は15.7cmである。754は外面をヘラ磨きを行い、内面は横方向の刷毛目、そしてしぼりの痕跡が明瞭である。径は17.7cmである。758は低い脚部で、４個所に円孔を穿つ。759、760、761は外湾して開く脚部で、径はそれぞれ12.0cm、13.4cm、14.7cmである。762から767は低い脚台部である。

768から776は壺や甕の底部である。770は底部外面にも刷毛目が及び、径は5.0cmである。772では木葉痕をとどめている。774と775は小さな平底をわずかに残すもので、体部は内湾してのびる。

(5) 柱穴出土の土器（図版100～102）

777から792は壺である。777は口縁部が短く屈曲し、端部に斜格子文を施している。口径は16.4cmである。778は外面は刷毛目、内面はヘラ磨きで仕上げ、口径は14.6cmである。779は口縁端部をわずかに上方につまみ上げ、３個１単位の穿孔を４個所に設ける。外面は刷毛目である。780は口縁端面に１条の沈線文をめぐらせ、そこに刻み目を加える。口径は21.4cmである。781は体部と頸部の境界に断面三角形の突帯を１条配している。782は器壁の厚い壺で、肥厚した口縁端部はヘラ描きの斜格子文を飾る。体部と頸部の境界には指頭圧痕を加えた突帯をめぐらせ、口径は27.2cmである。783と784は口縁端部を拡張して凹線文を加飾した壺で、783は体部と頸部の境界に指頭圧痕を加えた突帯をめぐらせ、784は頸部下半に凹線文そして口縁部に円形浮文を施している。口径は15.6cmと23.8cmである。785は肥厚した口縁端部に櫛描波状文を配し、口径は22.0cmである。786は口縁部が垂下し、端部は拡張される。口縁部内面に断面三角形の突帯を２条、さらに頸部にも突帯をめぐらせている。口縁端部は斜格子文を配した後に円形浮文を加え、口径は21.0cmである。787は体部と頸部の境界に断面三角形の突帯を２条めぐらせる。口縁端部は刻み目、内面は櫛描扇形文を２条並べ、さらに穿孔を施している。788は口縁内面に扇形文を施すもので、口径は22.0cmである。789は無頸壺もしくは大型の鉢である。口縁部は内傾してのび、外面に断面三角形の突帯を３条設け、突帯と突帯の間隙を刺突文を配する。また口縁上端面にも刺突文を加えており口径は23.6cmである。790は無頸壺である。口径は6.8cm、器高は16.9cm、体部最大径は11.5cm、底径

は5.2cmである。791と792は体部および底部である。791は21.9cmの体部最大径を中位にもち、そこに櫛描直線文を加えている。792は底径7.8cmの大型の底部で、内外面ともに刷毛目で仕上げている。

793から801は甕である。793は体部に綾杉状の列点文を配したもので、口径は16.2cmである。794は口縁端部に刻み目を施し、その下には櫛描直線文を配する。795は甕Aで、口径は15.7cm。796、797、798も口縁端部に刻み目を施し、796は櫛描直線文と波状文、797と798は櫛描直線文を加える。802は大型の鉢である。直線的に開く体部から屈曲して口縁部にいたり、把手を付加している。口径は33.0cmである。801は口縁部が肥厚したもので、端部に櫛状工具を押し引いた痕跡をとどめる。799は球形の体部と端部をつまみ上げた口縁部からなる。内外面を刷毛目で調整し、口径は10.6cmである。800は口縁部が拡張されて立ち上がるもので、外面は刷毛目の後にヘラ状工具でなでを行う。口径は16.4cmである。

803から806は高杯である。803は浅い杯部から口縁部が外反して立ち上がり、脚部は内湾して開く。剝離のため調整は不明であり、口径は13.3cm、器高は13.2cm、脚径は14.2cmである。804と805は内湾して立ち上がる口縁の杯部で、口径は804が16.4cm、805が10.8cmである。808は脚部であり、径は13.9cm。

805は台付きの小型の鉢である。口径は10.8cm、器高は6.8cm、脚径は5.4cmである。807は脚部で、径は6.6cmである。

809から811は底部に穿孔を行ったものである。いずれも焼成前に穿孔を行い、811の底径は5.9cmである。

812と813は鉢である。口径は812が10.2cm、813が7.6cmである。816は単純に開く鉢で、体部には穿孔を行い、底部にも5個所の孔を穿つ。その穿孔は外側から内側に施されたものである。口径は6.2cm、器高は5.6cmである。817は脚付の鉢で、口径は8.2cm、器高は5.7cmである。

814と815は蓋である。814はつまみ径5.2cm、器高5.5cm、裾径12.5cmで、内外面を刷毛目で調整している。815は小型の蓋で、器高3.2cm、裾径5.4cmである。指押えの痕跡が顕著である。

818から832は脚台部である。818から826は脚端部が肥厚して、上下に拡張されたものである。内面はヘラ削りを行うものが多い。827と828は屈曲して開く脚部であり、脚径は827が10.5cm、828が11.4cmである。829から832は短い脚部である。穿孔を施すものとそうでないものがある。

833から839は底部である。いずれも平底をなし、外面は刷毛目、内面はヘラ削りを行うものが多い。840の底径は6.8cmである。

(6) その他の土器（図版103～106）

遺構から遊離した土器のうち、特徴的なものを抽出して述べる。

841から859は壺である。841は口縁端部と口縁内面に竹管文を飾り、口径は19.7cmである。842は口縁端部に擬凹線文を施し、内外面を刷毛目で仕上げる。口径は15.6cmである。843、844、845は文様をもたない壺で、口径は843が15.5cm、844が14.0cmである。845は口径10.9cm、器高20.6cm、体部最大径15.9cmである。846は口縁端部に刻み目、内面に列点文を加え、口径は16.6cm。847は口縁部がわずかに肥厚し、内面を扇形文で飾る。口径は19.4cmである。848は口縁端部が単純に開き、端部が丸くおさまる壺である。口縁内面には、棒状浮文を放射状に配し、さらに水平に棒状浮文を付加している。口径は21.4cmである。849は口縁端部と内面に扇形文を飾り、口径は29.6cm。850は拡張して垂下する口縁端部に、凹線文を施した後に円形浮文を配し、内面は扇形文で飾っている。口径は20.8cmである。851は口縁端部に刻み目、内面はヘラ状工具で有軸の綾杉文様を描く。852は口縁端部が外傾して垂下し、端面の上半に扇形文、下

半に刻み目を配し、口縁外面は竹管文と扇形文を飾る。口径は16.4cmである。853は口縁端部と内面に櫛描波状文を、854は同じく竹管文を施し、口径はそれぞれ15.0cmと19.3cmである。855は口縁端部と頸部下半に凹線文を配し、口縁内面は扇形文を加える。内外面は刷毛目で調整し、口径は21.1cmである。856は直口壺に把手が付加されたもので、いわゆる水差形土器である。口縁外端部には1条の凹線文を配し、外面は刷毛目で調整している。857は口径20.8cm、体部最大径34.8cmの大型の無頸壺である。内傾してのびる体部から、肥厚して外に突出する口縁部となる。体部の中位には4条の沈線を加え、内外面ともに丁寧なヘラ磨きを行う。精良な胎土が選定されており、外面には赤色顔料が塗布されていた痕跡もかろうじて認められる。858はいわゆる二重口縁壺である。口径は17.7cm。859は頸部に櫛状工具で圧痕を加えた突帯を配する大型の壺である。

860から865は甕である。860は屈曲する口縁が水平に近くのび、端部には刻み目を施す。861は口縁端部がわずかに肥厚し、口径は17.0cmである。862は外面に細かい刷毛目を施しており、口径は18.2cmである。863は肥厚した口縁端部に凹線文を配し、屈曲部には指頭圧痕を加える突帯をめぐらせている。内外面ともに刷毛目で仕上げ、口径は31.7cmである。864は外半する短い口縁部と長い体部、上げ底状の小さな底部からなる。外面は板状工具によるなで、内面はヘラ削りを行っている。865は口径32.0cm、体部最大径39.0cmの大型の甕である。つまみ上げられた口縁端部は、1条の沈線文を挟んで上下に刻み目を加えている。内面上半は刷毛目、下半はヘラ削りを行っている。

866は高杯Aである。口縁外端部と屈曲部に凹線文を配し、外面はヘラ削りを施している。口径は37.8cmである。867は拡張されて立ち上がる口縁部に幅広く擬凹線文を加える高杯Cである。口径は19.6cmを測る。

868と869は口縁部が垂直にのびる鉢である。868は外面に凹線文を施し、さらに綾杉状に刻み目を加えた後に円形浮文を配する。口径は22.4cmである。869は口縁外面に断面三角形の突帯を2条めぐらせ、その突帯と口縁外端部に刻み目を施し、突帯の下は櫛描波状紋を加飾している。口径は23.2cmである。

870は裾部を欠損した蓋である。つまみ部には垂直方向と水平方向の穿孔が加えられている。871は双頭のつまみを配した蓋である。裾部には2個一対の穿孔を2個所に行い、径は6.6cmを測る。872から874は脚部である。872と873は穿孔を加え、径はそれぞれ13.1cmと11.9cmである。874は単純に開く脚で、端部に刻み目と細かい半截竹管文を飾る。径は22.3cmである。

875から886は底部である。879は外面をヘラ磨き、内面は板状工具によるなでを行っている。882は内外面を刷毛目で仕上げ、体部最大径は24.8cmである。883は壺の体部で、最大径は26.6cm、底径は8.4cmである。外面は刷毛目で仕上げるが、叩きの痕跡も認められる。885は上げ底を呈し、端部は高台状をなす。径は8.5cmである。

第3節　石　　器

出土した石器には、打製石器・磨製石器・礫石器がある。打製石器には石鏃・石錐・石剣・不定形石器があり、磨製石器には石庖丁・石鏃・石剣・石斧類（太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・小型ノミ形石斧）がある。礫石器は、石錘・砥石・敲石・磨石を含む。

遺構に伴うものは比較的少ない。このため以下の分類にしたがって、各器種別に記述をすすめてゆく

ことにする。

第１項　　石器の分類

石器を想定される機能によって、農具、工具、狩猟具・漁撈具・武器、食物調理加工具、祭器に大別する。それぞれの細別は次のとおりである。さらに、個別の器種についても細分を試みている。

- **農　　具**
  - ○石庖丁
    - Ⅰ類　直線刃半月形
    - Ⅱ類　外湾刃半月形
    - Ⅲ類　外湾刃杏仁形
    - Ⅳ類　楕円形
    - Ⅴ類　内湾刃半月形
    - Ⅵ類　直線刃長方形
    - (石庖丁未製品)
- **工　　具**
  - ○石　斧
    - Ⅰ類　太型蛤刃石斧　〔伐採石斧〕
    - Ⅱ類　柱状片石斧　〔加工石斧〕
    - Ⅲ類　扁平片刃石斧　〔加工石斧〕
    - Ⅳ類　小型ノミ形石斧〔加工石斧〕
    - (石斧未製品)
  - ○石　錐
    - Ⅰ類　幅がほぼ一定した棒状のもの
    - Ⅱ類　頭部と細長い錐部を作り出すもの
    - Ⅲ類　涙滴状の分厚い作りのもの
  - ○不定形石器
    - Ⅰ類　相対する縁片にツブレ状の刃部をもつもの
    - Ⅱ類　つまみをもつもの
    - Ⅲ類　平面形態が長方形を呈するもの
    - Ⅳ類　連続した調整加工が施されたもの
  - ○砥　石
- **狩猟具・漁撈具・武器**
  - ○打製石鏃
    - Ⅰ類　平基式石鏃
    - Ⅱ類　凹基式石鏃
    - Ⅲ類　凸基無茎式石鏃（円基）
    - Ⅳ類　凸基無茎式石鏃（尖基）
    - Ⅴ類　凸基有茎式石鏃
  - ○打製石剣
  - ○石　錘
- **食物調理加工具**
  - ○敲　石・磨　石
- **祭　　器**
  - ○磨製石鏃
    - Ⅰ類　無茎式石鏃
    - Ⅱ類　有茎式石鏃
  - ○磨製石剣
    - Ⅰ類　「鉄剣形石剣」
    - Ⅱ類　銅剣形石剣

・その他

第2項　出土石器

(1) 農　具

石製の耕作具は出土しておらず、ここでは穂摘具としての石庖丁のみをとりあげる。

・石庖丁（図版107～116－1～63）

すべて磨製石庖丁であり、打製のものはない。破片を含めて、300点出土しており、うち183点が製品で、2点がいわゆる大型石庖丁、残る115点が未製品である。実測図を掲載したものは、そのうち製品が56点、大型石庖丁が1点、未製品が6点である。

形態は基本的には直線刃半月形であるが、一部には52に顕著なように刃部が外湾ぎみで杏仁形に近いものもある。また、使用と再研磨によってかなり形状が変化したものもあり、刃部が内湾したものも散見される。分類に耐えうる49点の資料のうち、直線刃半月形のⅠ類は21点、外湾刃半月形のⅡ類は2点、外湾刃杏仁形のⅢ類は5点、楕円形のⅣ類は2点、内湾刃半月形のⅤ類は11点であった。直線刃長方形としたⅥ類は8点認められるが、平面形態が不定形で、長軸に沿って両端部を打ち欠いた結果、長方形を呈するものである。ただし両端部の打ち欠きには、41、43、47のようにそれが明瞭なものと、5、30、32などのようにわずかな欠損によるものと考えられるものがある。Ⅲ類に比定した52とⅠ類に比定した55は欠損部がなく、使用痕や双孔の紐ずれも確認できない。いずれも両刃の形態を保っている。製作直後の未使用のままの形態をとどめるものかもしれない。

実測図と写真は便宜上、刃部の鎬を形成する面（A面）を左に、そうでない面（B面）を右にして縦位置に配置した。ただし、片刃のものが大半であるが、両刃のものも6点確認できる。紐孔は例外なく認められるが、その位置が中央にくるものはないとみてよい。そのように配置したとき紐孔が長軸の中位より下に位置するものを石庖丁a形態、中位より上に位置するものを石庖丁b形態と分類する。破片となって分類が不可能なものや36、46のように穿孔が3個所以上に施されて判別の困難なものを除くと大半はa形態に所属し、b形態は43と44の2点のみに限定される。全体に占めるb形態の割合は約3.6%である。

紐孔はすべての資料で両面から穿孔しているが、その周辺部に紐ずれの痕跡を明瞭にとどめるものもなくはない。先に示したように配置したとき、鎬が確認できる面（A面）では双孔を結ぶように刃部に平行する痕跡が確認される。そして鎬のない面（B面）では、それぞれの紐孔から背に向かう痕跡となって現れる。20、23、28、34、42、43、50、53、56などで顕著に認められる。

石材は黒色粘板岩を用いるものが大半であるが、すべてではない。55は珪質頁岩を利用したものである。

いわゆる大型石庖丁は2点出土しており、うち1点を57に図示した。全長は知りえないが、刃から背までの幅は8.8cmである。

未製品は115点出土している。剝片の縁辺に剝離が加えられるものや、調整剝離が全体に施され整ったもの（a工程）、部分的に粗い研磨を行うもの、全面に研磨が及ぶもの（b工程）、穿孔を施しつつあるもの（c工程）が確認され、石庖丁製作にかかる工程を復元することが可能である。また、調整剝離を施す段階ですでに長軸に沿った両端を切り取る工程を加えるものもある。58と59はa工程が完了した資

料である。刃と背に細かな調整剝離が施されて、全体の形態が整ったものである。60と61はｂ工程を示すものである。60は刃部に研磨が加えられるのみであるが、61の研磨はほぼ全面に行われている。61は、穿孔が施されたならばII類の製品となる。62と63はｃ工程の資料である。62は丁寧な研磨が終了した後、両側から穿孔を試みるが貫通するものではない。63はＩ類の完成直前のものである。

さらに、製作工程で生じた剝片も多数出土している。

(2) 工　　具

木材の伐採用と加工用の石斧類と、穿孔具の石錐がある。便宜上、不定形石器と砥石もこの範疇に含める。道具を作る道具の総称と考えてよい。

・石　斧（図版117～130－64～113）

Ｉ類とした太型蛤刃石斧は、伐採用石斧である。刃部の破片を含めて、62点出土している。強い打撃を受けて刃こぼれしたものや、基部が破損したものが多い。長さが13cm以下で、刃部幅が７cm以下の小型のものと、長さが13cm以上で、刃部幅が７cm以上の大型のものに大別が可能であるが、厚さが５cmを越えるものはなく、また軽量なものが多い。図示していないが、最長のものは15.7cmを測る。着柄の便をはかるために、基部に加工を施したものもある。

また82と83は、厚さ４cm以下の扁平な両刃の石斧である。とりわけ82は全長13.5cm、幅5.8cmにもかかわらず、最大厚は2.3cmときわめて扁平である。「太型」と呼ぶことには躊躇を覚える。さらに、長さ12cm前後で断面が楕円形を呈する、乳棒状の石斧もみられる。

84から87は石斧未製品である。84は敲打によって整形され、刃部の研磨のみが施されていない。85は先端を欠損するが、同様に未製品と考えられる。86と87は剝片を敲打したもので、研磨は施されてはいない。いずれも断面は不整な菱形を呈し、厚さは３cm以下で比較的薄い。扁平なタイプの未製品であろう。ただし、これらは刃部幅に比べて基部幅が狭くなっており、あるいは「石鍬」の完成品として使用されたものかもしれない。

一般にＩ類の石材は、主に安山岩や蛇紋岩などが用いられている。

II類の柱状片刃石斧は７点出土しているが、抉をもつものはない。そのうち４点を図示している。完存する91は、長さ11.6cm、幅3.7cm、厚さ3.9cmである。断面形は、隅の丸い正方形である。なお、図示していないが、断面は方形であるが両刃を形成するものも１点みられる。

石材は、珪質頁岩が選択されている。

III類の扁平片刃石斧は27点出土している。刃部幅によって３cm前後のＡ、3.5～5.5cmのＢ、８cm以上のＣに細分が可能である。刃幅の確認できる資料では、Ａが７点、Ｂが18点、Ｃが１点であり、なかでも長さ６cm前後、刃幅５cm前後のＢが一般的である。このＢは、法量が一定しており、規格性をもつようである。全面を丁寧に研磨するものが多い中で、107は扁平な河原石の先端だけを加工して刃部を形成している。小型のＡは４点出土している。刃幅の狭さに比例して薄く仕上げられており、厚さが１cmを越えるものはない。１点のみ出土したＣに属する109は、長さ14.1cm、幅7.7cmの大型の石斧である。

こうした石斧はすべてが片刃とは限らず、102などのように両刃とみなさなければならないものも存在する。本来両刃として製作されたものか、もしくは刃を研ぎ直した結果であるかは断定できない。93と106は明らかに石庖丁を転用したものである。石庖丁の刃を再利用したものではなく、その長軸を裁断して刃を作り出している。このほか、定形の扁平片刃石斧に含まれないものもある。

110から113は未製品である。110は縁辺に細かな敲打を加えている。また111は両端部に敲打を施し、側縁部は未加工である。112と113は敲打を行った後に研磨を加えているが、刃部を形成するまでにはいたらない。

石材は、珪質頁岩、安山岩、ハンレイ岩、粘板岩が用いられている。

IV類とした小型ノミ形石斧は、長さ2.9cm、刃幅0.5cm、厚さ0.5cmの非常に小型の石斧である。側面に丁寧な面とりの研磨を加えている。刃部は、両刃の形態をとっている。実用に耐えうるか疑問である。石材には、粘板岩を使用している。

・石　錐（図版141－232～249）

20点出土しており、うち18点を図示した。石材は、すべてサヌカイトである。棒状のⅠ類は2点、頭部をもつII類は8点、涙滴状のIII類は10点である。Ⅰ類の最大回転痕径は6～8㎜で、堅牢なつくりである。細部調整は錐部の全面に施される。II類は、頭部は小型で左右に拡張されたA、比較的大きな頭部もつBに細分が可能である。Aは234と236、そしておそらく238が該当する。Aの最大回転痕径は6㎜前後である。錐部の細部調整は丁寧である。Bの最大回転痕径は5㎜前後と小さくなる傾向にある。頭部の大きな241では、細部調整の簡略化が認められる。Ⅰ類とII類の最大回転痕径から考えて、穿孔の対象は石庖丁であった可能性が高い。III類は、平面形態は逆三角形のものや涙滴形のもの、菱形や不定形のものなど変化に富む。細部調整は、全面に施されるものや、縁辺のみにとどまるものがある。

剥離面からみて、横長剥片を素材としたものが大半を占めている。

以上の石錐は、穿孔を行う対象物の材質や形状、そして作業の工程に応じて適宜選択されたのであろう。

・不定形石器（図版134～138－124～167）

剥片素材の打製石器で細部調整を施すもの一括した。88点出土したうち、44点を図示している。石材は、すべてサヌカイトである。

Ⅰ類は楔形石器で、36点出土している。刃部は上面からみるとジグザグ状となり、階段状剥離痕、あるいは、反対側の刃部にまで達する剥離痕が顕著に認められる。大きさは3㎝前後の小型のものが主体であるが、5㎝を越えるような大型のものも存在する。側面には使用に伴うと考えられる折れ面が認められるものが多く、使用の激しさを物語っていよう。また、125のように裁断面を有するものも認められる。

II類は石匙である。165の1点のみが出土している。長さ10cmを越える大型の縦長剥片を素材とし、打面側に抉り状の二次加工を施すことにより、つまみ部を作り出している。刃部の二次加工は両側縁のみに限られ、末端は斜めの鋭い縁辺がそのまま残されている。二次加工は、主に背面側から施されている。

III類は4点出土している。161から164が該当する。すべて破損しており、完形のものは無い。素材はかなり幅の広い横長剥片で、打面側および末端側の背腹両面に二次加工を施し、ほぼ長方形の平面形態をとるものである。二次加工は平坦剥離が多用されているが、打面側のほうがやや粗く、加工度が大きい。161は刃部側と考えられるほうの背面に磨製石包丁に見られるような、刃部と平行する方向の研磨痕が見られる。

IV類は47点出土している。剥片の1側縁あるいは2側縁に連続した二次加工を施すもので、平面形態は素材剥片の形態に左右されるため多様である。二次加工はおもに平坦な剥離が施されており、比較的なめらかなスクレイパーエッヂが形成されているが、150のように急角度の加工が施されたり、156や166

のように、抉り入り状の二次加工により鋸刃状の刃部を形成しているものもある。また、二次加工は背腹両面から施されており、片側のみのものは156や158などわずかである。腹面側への二次加工は、末端が階段状となる傾向がある。素材剥片をみると、打面部分が残っているものには、すべて、平坦な打面が認められ、線状打面や点状打面となるものはない。

なお、これらの不定形石器すべてを工具とみなすことには無理がある。一部には、スクレイパーのように使用して、むしろ食物調理加工具に属するものもあると思われる。

・砥　石（図版131～133－114～123）

総数132点出土しているが、すべてが弥生時代から古墳時代にかけての資料とは限らず、奈良・平安時代に使用された砥石も含まれていると考えられる。大型のものと、おそらくは携帯用の小型のものが存在する。115や118は小型の部類に含まれる直方体の砥石で、使用頻度がきわめて高いため各面は磨滅が著しく、大きく湾曲している。120は柱状片刃石斧を砥石に転用したものであろう。この１点のみ、石材は珪質頁岩を選定している。その他は砂岩が多い。

(3)　狩猟具・漁撈具・武器

・打製石鏃（図版139～141－168～229）

実用の狩猟具であり、後にその対象が動物から人に変化したと想定されている。

108点出土しているが、形態が知られるものは83点である。内訳は平基式のⅠ類が29点、凹基式のⅡ類が16点、凸基無茎式（円基）のⅢ類が14点、凸基無茎式（尖基）のⅣ類が12点、凸基有茎式のⅤ類が12点である。

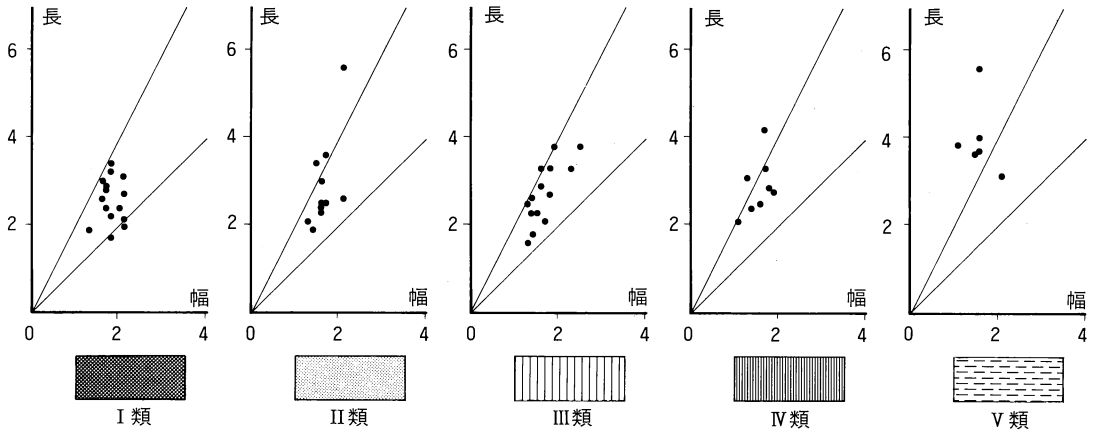
Ⅰ類は側縁が直線のものと、内湾するものがある。平面形態も、169や175のようにほぼ正三角形を呈するものや、188のように細長いものなど変化に富む。長さの知りうるもののうち最長の資料は187で、3.4cmを測る。先端部を欠損する188は、現存長3.9cmであり、復原すれば４cmを越える大型品であることは確実である。229は石鏃とすればⅠ類に帰属する大型の鏃となるが、疑念も残る。欠損部のほとんどない資料によれば、重量は２ｇ以下のものが17点、２ｇ以上のものが６点である。188は3.5ｇで最も重いが、189は現存重量が4.2ｇで、完存すれば５ｇ前後の重量になると考えられる。また、179は先端部が錐として転用されたもので、回転による擦痕が認められる。

Ⅱ類は192のように長さが２cmに満たない小型のものもあるが、2.5cm前後のものと3.5cm前後のものが大半である。201は最長のもので、3.6cmを測る。ただし、特別に長大な227も存在しており、長さ5.6cm、幅2.1cm、重量8.0ｇを測る。幅は２cmを越えるものは198と227のみで、他はいずれも２cmに満たない。また、200と201は長さに比べて幅が小さいため、細長いものとなっている。重量の判別するものでは、227の大型品を除いてすべてのものが２ｇ未満である。総じてⅡ類の調整は丁寧であることがうかがえる。

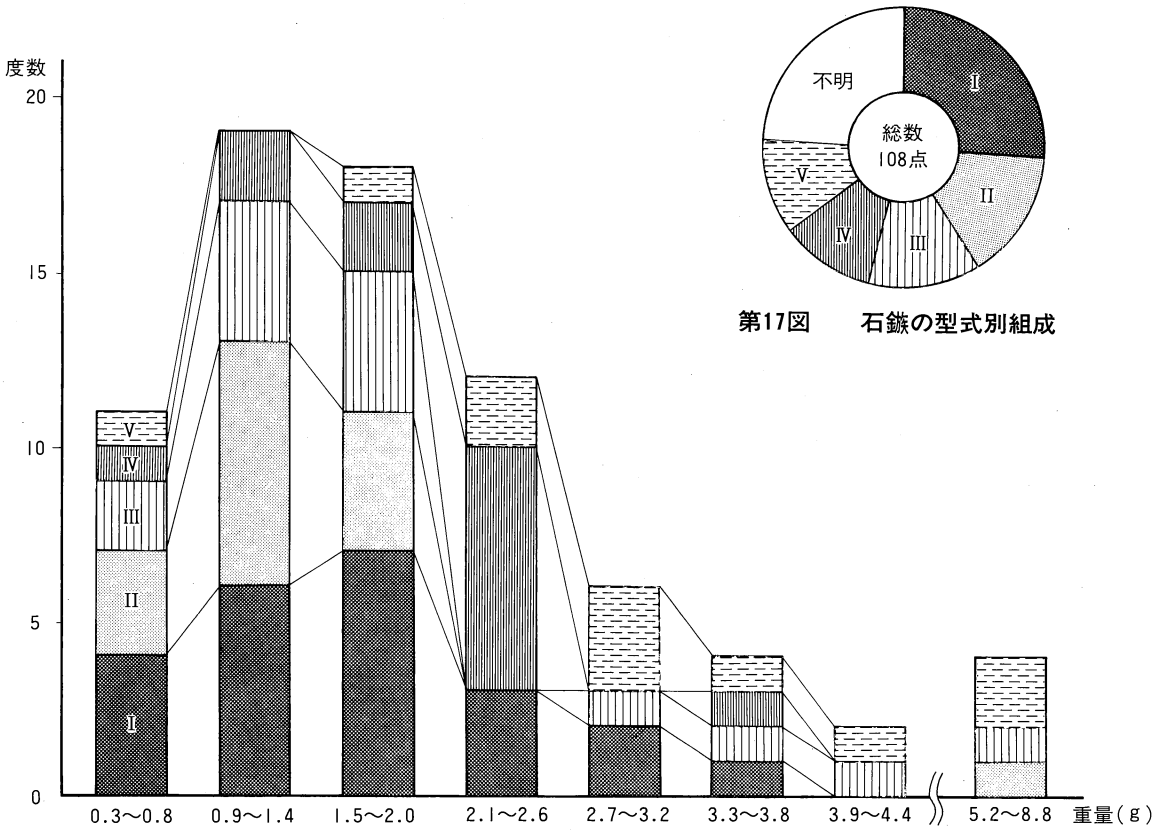
Ⅲ類は縁辺が直線のものと外湾するものがある。長さは202が1.8cmで最小となり、209と210がともに3.8cmで最大となる。重量は２ｇ以下のものが10点、２ｇ以上のものが４点である。全体に粗雑な作りで、とくに209は側辺部に調整剥離が加えられているのみである。

Ⅳ類は側辺部が直線のものと外湾するものがある。また、逆刺が角をなすものと、角をなさず柳葉形を呈するものの区分、さらに基辺部も直線のものと外湾するものの区分が可能である。長さは214の4.2cmを最長とするが、多くは２cmから3.5cmの範囲に収まる。重量は２ｇ以下のものが５点であるが、2.1ｇから2.6ｇのものが７点で出現頻度が高い。

Ⅴ類は逆刺が角をなすものと、角をなさずなだらかで茎の抉りがゆるやかなものがある。長さは3㎝を下まわるものはなく、他の類型のものに比べて大型である。とりわけ228は現存長5.5㎝を測る大型の石鏃で、調整剥離も丁寧に施されており、中央には鎬状に縦の稜線が認められる。大型であるがゆえに重量も重く、2ｇ以下のものは2点にすぎないが、9点が2ｇ以上、そのうち2点が5ｇ以上の石鏃である。226はチャート製のもので、長さ4.0㎝、幅1.7㎝を測り、調整剥離がとりわけ丁寧に行われている。このため、身の中央には鎬状に縦の稜線が形成され、茎も丁寧に作り出されている。



第16図　型式別石鏃の長さと幅　（単位：㎝）



第17図　石鏃の型式別組成

第18図　石鏃重量の単純度数分布

石材はサヌカイトに統一されるが、226の１点のみチャートを使用している。

・**打製石剣**（図版141－230～231、図版143－265～267）

５点出土している。230と231は先端を欠損しているが、いずれも鋒の破片である。230は片面に石材の自然面を残している。265から267は完形をとどめる資料である。265は長さ8.9㎝、ほぼ中位が突出してそこが最大幅となり3.8㎝を測る。粗雑なつくりであり、未製品である可能性も考えられる。266は全長12.4㎝で、身と基部の境界は明瞭ではない。身には工程の一部である研磨の痕跡が認められるが、鎬をもつものではない。これは、剥片を調整剥離した後研磨によって形を整え、さらに剥離を加えて仕上げる工程の痕跡である。このため、身の剥離は刃部を形成するために側縁部のみに施されている。267は全長13.3㎝である。266と同様に、身の中央には研磨の痕跡をとどめている。基部は一方が横方向にわずかに張り出して、把頭状を呈している。また、下半部側縁は、研磨を行って刃をつぶし、把握の便を得ている。

・**石　錘**（図版145－274～275）

２点出土している。274は扁平な自然礫の長軸に沿った両端部を、敲打によるわずかな欠損を加えたものである。重量は87.1ｇである。275はほぼ円形の扁平な自然礫である。両端部にわずかな切れ目を設けている。重量は47.8ｇである。

(4)　食物調理加工具

・**磨石・敲石**（図版144,145－272～273）

27点出土している。同一個体で、磨石の用途と敲石の用途を併用するものが大半である。268と269は円形で扁平な礫を使用したものである。全面に敲打の痕跡をよくとどめるが、縁辺部が特に著しい。268は研磨の痕跡も認められる。270と271はやや長大な礫で、断面はほぼ円形を呈する。いずれも両端部に著しい敲打の痕跡が認められる。272は円柱状の敲石である。幅の大きい下端部にのみ、敲打の痕跡が激しい。273は、長さ4.9㎝の小型の円礫を使用したものである。縁辺部に細かな敲打の痕跡を残している。

(5)　祭　器

磨製石鏃と磨製石剣を祭器の範疇に含めたが、確証はない。打製石鏃や打製石剣と比較して、製作技術はもちろんのこと、材質や形態の点で差異は大きく、機能と性格も同様に異なると考えられるため、あえて分離を試みた。

・**磨製石鏃**（図版142－250～255）

６点のうち、無茎のＩ類は３点、有茎のII類は３点でである。Ｉ類は、作りは粗雑であるが、鎬は明確に残す傾向にある。一方II類は、茎は丁寧に調整するが、鎬を研ぎ出すものは少ない。250は長さ2.3㎝、255は長さ4.2㎝である。すべて黒色粘板岩を用いている。

・**磨製石剣**（図版142,143－256～264）

銅剣を模倣して、溝状の樋を形成して銅剣の翼を志向したものをII類の銅剣形石剣とし、それ以外のものを補集合の総称として仮にＩ類としておく。Ｉ類は適当な名称とはいえないが、慣例に従って「鉄剣形石剣」と仮称しておく。総数では11点出土したが、II類は260の１点のみで残りはすべてＩ類である。鋒や基部の破片が多いが、259と264は全体を知りうる資料である。259は石剣と認定するには全長が7.9㎝とあまりに短い。中位以下を面とりを行い、刃つぶしをしている。264も全長は11.2㎝と短く、短剣と

呼ぶべきかもしれない。基部の側面に刃つぶしを施し、把握の便を得ている。261は鋭利な鎬をもつが、刃部は面とりされている。鋒と茎を欠損したもので、全体に粗雑な擦痕がはしり、石剣としての機能が廃棄された後に砥石として再利用されたのであろう。II類とした260は幅の広い樋を特徴とする。下方には、刳込の突出部を強調した痕跡がかろうじて観察できる。粗雑な擦痕がはしり、261と同様に砥石として再利用されたようである。すべて黒色粘板岩を用いている。

(6) その他（図版146－276～280）

器形を特定できないものと、既述の範疇に属さないものを一括する。

276は直径8.8cm、高さ4.1cmの低い円柱状の石器である。上下の面は研磨によって光沢を帯び、側面は敲打が加えられている。敲石と認定してよい資料かもしれない。277は下底径が9.8cmの截頭円錐形のものである。底部の中央には円孔が穿たれているが、上部に貫通するものではない。重量は550ｇである。278は先端部を欠損するが、ほぼ直方体を呈する。側面すべてに研磨による凹部を形成している。279は直線的な刃部をもつ扁平な石器である。石材は砂岩系統を使用しており、明らかに石包丁のそれとは異なっている。玉生産の段階で使用される、施溝具であろうか。280は縁辺に敲打を加えて円形に整形した石器である。環状石斧の未製品であろう。直径は11.9cm、重量は570ｇである。

第3表　出土石器一覧表

・石庖丁

番号	出土地区	遺構	分類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
1	R区	柱穴	－	3.2	3.7	0.6	10.5	
2	I区	包含層	－	3.0	3.5	0.5	6.3	
3	O区	包含層	VI	5.0	3.3	0.8	18.8	
4	M区	ＳＤ３７	I	5.6	3.5	0.7	16.2	
5	O区	旧河道２	VI	5.7	2.8	0.8	19.0	
6	N区	包含層	VI	5.3	3.9	0.8	27.3	
7	T区	包含層	－	5.0	4.1	0.6	20.7	
8	H区	旧河道１	VI	4.9	5.0	0.4	16.1	
9	N区	柱穴	－	5.3	4.4	0.6	20.8	
10	I区	旧河道１	－	7.1	3.5	0.7	20.2	
11	U区	柱穴	I	5.1	4.6	0.7	18.8	
12	M区	旧河道１	IV	5.8	4.5	0.6	24.9	
13	N区	ＳＤ４１	II	6.3	3.7	0.5	12.8	
14	P区	旧河道２	III	6.6	4.6	0.6	17.3	
15	X区	包含層	－	6.5	4.5	0.7	29.2	
16	U区	旧河道２	－	6.9	4.4	0.8	29.7	
17	N区	ＳＫ９４	I	6.4	5.1	1.0	34.8	
18	N区	ＳＤ４１	IV	7.1	4.5	1.0	40.1	
19	U区	旧河道２	I	7.0	3.5	0.5	20.2	
20	O区	柱穴	I	7.2	4.2	0.6	31.8	
21	N区	柱穴	VI	6.6	5.2	0.9	41.3	
22	N区	包含層	I	7.8	5.1	0.9	55.2	
23	U区	旧河道２	V	7.7	4.1	0.7	30.7	
24	U区	旧河道２	VI	7.8	4.6	0.7	43.2	
25	U区	旧河道２	I	7.5	5.8	0.7	44.2	

26	G区	包含層	I	8.4	4.8	0.7	33.2	
27	O区	旧河道２	V	8.8	4.0	1.0	44.5	
28	N区	柱穴	V	8.5	4.0	0.9	37.2	
29	H区	包含層	I	8.3	4.1	0.8	37.5	
30	U区	旧河道２	I	9.1	3.9	0.9	34.0	
31	I区	旧河道１	III	8.3	5.0	0.7	20.2	
32	N区	ＳＤ４５	II	9.7	4.2	0.9	55.2	
33	U区	旧河道２	V	8.9	4.2	0.7	37.8	
34	U区	旧河道２	I	10.1	3.8	0.7	44.8	
35	V区	旧河道２	I	10.4	4.2	0.6	46.3	
36	V区	旧河道２	I	10.9	4.3	0.8	47.8	
37	O区	旧河道２	I	9.3	5.6	0.9	67.3	
38	I区	包含層	V	8.8	5.6	0.7	49.9	
39	U区	旧河道２	I	11.3	5.0	0.8	55.3	
40	N区	柱穴	V	11.7	4.0	0.8	60.1	
41	V区	旧河道２	I	11.6	4.2	0.9	63.9	
42	V区	旧河道２	V	11.0	4.6	0.9	59.9	
43	N区	ＳＫ１１８	VI	11.9	3.9	0.8	51.8	b形態
44	O区	旧河道２	III	11.6	4.3	0.9	61.8	b形態
45	U区	包含層	V	12.2	4.0	0.9	68.0	
46	V区	旧河道２	III	12.5	4.6	0.8	63.7	
47	U区	旧河道２	VI	11.8	4.4	0.8	60.2	
48	U区	旧河道２	I	12.0	5.4	0.8	76.0	
49	P区	旧河道２	I	12.0	3.9	0.7	46.0	
50	M区	包含層	V	12.4	4.6	0.7	59.6	
51	U区	旧河道２	V	13.2	4.1	0.7	65.3	
52	V区	旧河道２	III	13.4	4.7	0.6	55.8	
53	U区	旧河道２	V	14.7	3.9	0.7	61.8	
54	U区	旧河道２	I	13.9	4.0	0.7	58.3	
55	M区	柱穴	I	15.0	5.5	1.0	108.0	
56	V区	旧河道２	I	15.8	3.9	0.7	67.9	
57	U区	包含層	—	10.7	8.8	0.6	80.2	大型石庖丁
58	M区	包含層		14.4	6.4	1.3	126.2	未製品　工程１
59	U区	包含層		9.3	5.6	1.3	80.3	未製品　工程１
60	U区	ＳＤ６７		11.8	6.5	0.8	81.4	未製品　工程２
61	N区	ＳＤ４１		12.4	4.7	1.0	60.0	未製品　工程２
62	V区	旧河道２		9.7	5.5	0.9	71.7	未製品　工程３
63	M区	柱穴		13.6	4.4	0.9	65.8	未製品　工程３

・石　斧

番号	出土地区	遺　　構	分類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
64	U区	柱穴	I	8.2	3.9	2.9	128.2	
65	N区	柱穴	I	10.7	4.7	2.3	165.1	
66	P区	旧河道２	I	9.9	4.3	3.1	212.6	
67	T区	柱穴	I	11.2	6.3	3.8	471.4	
68	M区	ＳＤ３７	I	11.1	5.1	3.4	289.0	
69	U区	ＳＤ	I	11.0	5.2	3.7	365.3	
70	N区	ＳＫ１０３	I	12.7	6.8	3.9	582.0	
71	O区	旧河道２	I	12.2	6.1	4.5	539.4	
72	P区	旧河道２	I	11.3	6.8	4.4	577.2	
73	V区	旧河道２	I	12.0	6.6	4.4	578.2	
74	H区	旧河道１	I	9.8	4.8	3.2	235.5	
75	O区	旧河道２	I	7.6	5.1	3.7	237.9	
76	V区	旧河道２	I	9.9	7.1	5.4	630.8	
77	N区	ＳＤ３７	I	4.8	7.6	3.7	158.2	
78	O区	包含層	I	9.2	7.3	4.7	508.0	

79	N区	包含層	I	12.3	6.4	4.2	495.2	
80	U区	包含層	I	12.4	5.7	4.9	570.0	
81	M区	旧河道１	I	10.7	6.0	4.0	411.9	
82	H区	ＳＤ３２	I	13.5	5.8	2.3		
83	N区	ＳＤ３２	I	13.5	7.7	3.9		
84	O区	ＳＫ１９５		10.6	4.7	4.0	330.0	未製品
85	U区	包含層		13.8	5.8	4.2	541.0	未製品
86	M区	ＳＤ３２		13.2	6.7	3.0	296.0	未製品
87	M区	ＳＤ３７		11.5	7.0	2.7	204.0	未製品　石鍬か？
88	O区	柱穴	II	10.5	3.2	3.1	197.1	
89	O区	柱穴	II	8.8	1.5	2.7	76.8	
90	U区	旧河道２	II	6.2	2.6	2.4	68.3	
91	U区	ＳＤ	II	11.5	3.5	3.7	296.7	
92	O区	包含層	IV	2.9	0.6	0.5	1.3	
93	O区	包含層	III	4.1	2.4	0.3	5.7	石庖丁を転用
94	V区	旧河道２	III	4.6	2.7	0.5	10.8	
95	P区	旧河道２	III	5.6	2.5	0.8	22.8	
96	K区	包含層	III	5.1	3.0	0.9	28.9	
97	N区	柱穴	III	4.3	4.5	1.0	39.3	
98	M区	ＳＤ３５	III	4.3	4.0	1.2	47.4	
99	M区	旧河道１	III	5.5	3.8	0.9	32.0	
100	M区	包含層	III	5.2	4.1	1.1	51.3	
101	M区	ＳＤ３５	III	5.0	4.2	1.0	42.6	
102	M区	旧河道１	III	4.4	3.7	0.9	23.9	
103	P区	旧河道２	III	5.3	4.2	1.2	48.1	
104	U区	柱穴	III	7.2	5.0	1.4	91.7	
105	P区	旧河道２	III	6.7	4.5	1.3	60.9	
106	O区	旧河道２	III	6.5	3.7	1.0	34.8	石庖丁を転用
107	H区	旧河道１	III	4.9	3.7	0.6	18.4	
108	I区	ＳＤ０５	III	6.6	4.1	0.8	28.6	
109	T区	柱穴	III	14.0	7.8	1.4	330.0	
110	M区	包含層		5.0	4.0	1.1	26.3	未製品
111	U区	ＳＤ６５		5.7	3.9	1.5	41.5	未製品
112	M区	柱穴		6.7	5.7	1.6	77.8	未製品
113	I区	旧河道１		6.5	5.4	1.6	106.0	未製品

・石　錐

番号	出土地区	遺　構	分類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　考
232	M区	ＳＤ３７	I	2.2	1.2	0.6	1.4	サヌカイト
233	T区	包含層	I	3.2	0.9	0.6	1.7	サヌカイト
234	G区	ＳＤ２５	II	3.4	1.3	0.4	1.4	サヌカイト　Ａタイプ
235	N区	掘立柱建物跡	II	3.6	0.9	0.4	1.2	サヌカイト　Ｂタイプ
236	N区	掘立柱建物跡	II	3.2	2.0	0.7	2.2	サヌカイト　Ａタイプ
237	O区	包含層	II	2.1	1.3	0.5	1.1	サヌカイト　Ｂタイプ
238	N区	柱穴	II	3.4	1.2	0.4	1.2	サヌカイト　Ａタイプ
239	O区	旧河道２	II	3.2	1.2	0.8	3.3	サヌカイト　Ｂタイプ
240	M区	柱穴	II	3.8	1.4	0.5	1.8	サヌカイト　Ｂタイプ
241	N区	柱穴	II	5.2	1.7	0.7	3.9	サヌカイト　Ｂタイプ
242	O区	柱穴	III	2.7	1.6	0.5	1.6	サヌカイト
243	O区	ＳＫ１３８	III	2.5	1.7	0.5	2.1	サヌカイト
244	C区	ＳＢ０８	III	2.9	1.6	0.8	2.6	サヌカイト
245	O区	旧河道２	III	3.1	1.3	0.5	1.6	サヌカイト
246	O区	旧河道２	III	5.0	2.1	0.8	6.2	サヌカイト
247	M区	柱穴	III	3.1	1.9	0.5	2.9	サヌカイト
248	G区	柱穴	III	3.1	1.5	0.5	1.9	サヌカイト
249	M区	ＳＢ１３	III	2.8	1.6	0.5	1.5	サヌカイト

・不定形石器

番号	出土地区	遺　　構	分類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
124	M区	柱穴	I	3.0	1.3	0.5	1.9	サヌカイト
125	O区	旧河道２	I	2.2	2.0	0.7	3.9	サヌカイト
126	M区	ＳＤ３７	I	1.9	2.3	0.8	4.0	サヌカイト
127	O区	旧河道２	I	1.8	2.4	0.7	3.6	サヌカイト
128	M区	旧河道１	I	1.9	2.6	0.6	2.3	サヌカイト
129	O区	柱穴	I	2.4	2.9	0.5	3.2	サヌカイト
130	I区	旧河道１	I	2.4	2.4	0.8	3.9	サヌカイト
131	T区	柱穴	I	2.8	2.7	0.7	3.8	サヌカイト
132	B区	柱穴	I	2.9	2.7	0.6	4.8	サヌカイト
133	M区	柱穴	I	2.5	2.4	0.5	3.8	サヌカイト
134	O区	旧河道２	I	3.1	2.5	0.8	6.9	サヌカイト
135	U区	ＳＢ４９	I	2.5	3.5	0.7	5.9	サヌカイト
136	U区	ＳＤ４１	I	2.7	3.0	0.6	6.9	サヌカイト
137	P区	旧河道２	I	3.6	2.9	0.7	6.3	サヌカイト
138	O区	旧河道２	I	3.1	3.1	0.9	7.2	サヌカイト
139	V区	旧河道２	I	2.5	3.7	0.6	5.9	サヌカイト
140	N区	ＳＫ９７	I	2.6	3.7	0.4	4.8	サヌカイト
141	N区	柱穴	I	2.6	3.7	0.8	8.9	サヌカイト
142	M区	ＳＤ３７	I	3.0	3.7	0.8	8.9	サヌカイト
143	N区	ＳＫ８２	I	2.8	3.9	0.7	5.6	サヌカイト
144	U区	ＳＤ６５	I	2.6	4.5	0.7	10.6	サヌカイト
145	U区	柱穴	I	3.1	3.7	1.0	15.0	サヌカイト
146	M区	ＳＤ３２	I	4.3	5.0	1.1	26.2	サヌカイト
147	U区	旧河道２	I	6.2	5.9	1.5	63.8	サヌカイト
148	U区	包含層	IV	3.0	3.0	1.1	7.8	サヌカイト
149	M区	柱穴	IV	3.7	3.5	0.9	9.8	サヌカイト
150	O区	ＳＤ５４	IV	4.3	2.7	0.7	8.9	サヌカイト
151	V区	旧河道２	IV	5.2	2.9	0.9	11.8	サヌカイト
152	I区	旧河道１	IV	6.0	3.2	0.8	14.8	サヌカイト
153	U区	柱穴	IV	5.2	3.8	1.3	22.6	サヌカイト
154	O区	旧河道２	IV	5.2	4.6	0.9	23.9	サヌカイト
155	M区	ＳＤ３５	IV	6.1	4.9	1.7	51.8	サヌカイト
156	T区	包含層	IV	6.3	3.7	0.7	17.7	サヌカイト
157	O区	柱穴	IV	5.8	5.9	1.6	42.6	サヌカイト
158	O区	旧河道２	IV	7.4	4.3	1.2	32.8	サヌカイト
159	O区	包含層	IV	9.0	3.5	1.1	27.3	サヌカイト
160	O区	柱穴	IV	7.8	7.5	1.6	75.0	サヌカイト
161	U区	包含層	III	4.0	5.0	0.9	21.5	サヌカイト
162	N区	ＳＤ４２	III	6.1	4.0	1.0	28.4	サヌカイト
163	M区	ＳＤ３２	III	7.1	4.7	0.9	30.8	サヌカイト
164	O区	ＳＫ１６７	III	8.0	4.6	0.8	38.0	サヌカイト
165	N区	ＳＫ１１８	II	10.3	5.5	0.9	42.8	サヌカイト
166	M区	包含層	IV	8.8	6.9	1.3	66.1	サヌカイト
167	K区	包含層	I	6.6	10.5	1.4	92.7	サヌカイト

・砥石

番号	出土地区	遺　　構	分類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
114	O区	旧河道２		13.5	8.1	4.9	600	
115	M区	旧河道１		7.1	3.0	2.6	58	
116	C区	ＳＢ０６		4.7	3.5	1.7	41	
117	C区	ＳＢ０６		10.0	5.3	5.1	290	
118	O区	ＳＢ３４		10.1	5.5	3.4	143	
119	O区	柱穴		10.7	6.4	6.4	690	
120	N区	ＳＫ２０		11.4	4.0	2.6	191	
121	N区	柱穴		11.4	12.0	5.8	1170	
122	B区	包含層		15.4	9.8	4.0	600	
123	M区	旧河道１		15.0	9.6	5.4	770	

・打製石鏃

番号	出土地区	遺　　構	分類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
168	O区	包含層	I	1.7	1.5	0.2	0.5	サヌカイト
169	G区	ＳＤ０７	I	1.7	1.7	0.3	0.7	サヌカイト
170	O区	柱穴	I	1.7	1.9	0.3	1.1	サヌカイト
171	O区	包含層	I	2.2	1.5	0.2	0.7	サヌカイト
172	M区	包含層	I	1.9	1.3	0.3	0.9	サヌカイト
173	H区	旧河道１	I	2.0	1.3	0.2	0.7	サヌカイト
174	V区	旧河道２	I	2.3	1.5	0.4	1.3	サヌカイト
175	O区	旧河道２	I	1.7	1.7	0.4	1.2	サヌカイト
176	N区	ＳＫ１２１	I	2.0	2.1	0.3	1.3	サヌカイト
177	O区	旧河道２	I	2.2	1.8	0.3	1.4	サヌカイト
178	N区	柱穴	I	2.6	1.3	0.5	1.6	サヌカイト
179	U区	柱穴	I	2.4	1.7	0.3	1.1	サヌカイト　錐に転用
180	N区	柱穴	I	2.6	1.6	0.3	1.6	サヌカイト
181	U区	ＳＤ６５	I	2.8	1.7	0.4	1.7	サヌカイト
182	G区	ＳＢ１２	I	2.9	1.7	0.6	2.3	サヌカイト
183	N区	ＳＫ７５	I	3.0	1.6	0.3	1.6	サヌカイト
184	O区	柱穴	I	2.7	2.1	0.3	2.4	サヌカイト
185	C区	柱穴	I	3.2	1.8	0.5	2.7	サヌカイト
186	M区	旧河道１	I	3.1	2.1	0.4	2.3	サヌカイト
187	M区	旧河道１	I	3.4	1.8	0.5	3.1	サヌカイト
188	T区	包含層	I	3.9	1.6	0.6	3.5	サヌカイト
189	C区	包含層	I	3.5	2.5	0.6	4.2	サヌカイト
190	M区	包含層	II	1.4	1.3	0.3	0.9	サヌカイト
191	O区	柱穴	II	1.8	1.7	0.4	1.2	サヌカイト
192	M区	柱穴	II	1.9	1.4	0.2	0.6	サヌカイト
193	M区	包含層	II	2.1	1.3	0.3	0.7	サヌカイト
194	N区	包含層	II	2.4	1.6	0.2	1.0	サヌカイト
195	M区	旧河道１	II	2.4	1.6	0.4	1.2	サヌカイト
196	O区	柱穴	II	2.5	1.7	0.3	1.0	サヌカイト
197	T区	包含層	II	2.4	1.6	0.3	1.0	サヌカイト
198	M区	包含層	II	2.6	2.1	0.6	2.0	サヌカイト
199	N区	掘立柱建物	II	3.0	1.6	0.4	1.7	サヌカイト
200	N区	包含層	II	3.4	1.5	0.4	1.5	サヌカイト
201	N区	ＳＢ２０	II	3.6	1.7	0.4	1.9	サヌカイト
202	N区	柱穴	III	1.8	1.4	0.3	0.8	サヌカイト
203	O区	ＳＢ４２	III	2.5	1.3	0.4	1.0	サヌカイト
204	P区	旧河道２	III	2.6	1.4	0.2	1.0	サヌカイト
205	I区	旧河道１	III	2.9	1.6	0.5	1.8	サヌカイト
206	M区	柱穴	III	3.3	1.6	0.5	3.6	サヌカイト
207	I区	旧河道１	III	2.7	1.8	0.3	2.0	サヌカイト
208	O区	柱穴	III	3.4	1.8	0.3	2.0	サヌカイト
209	M区	ＳＤ３３	III	3.8	1.9	0.4	3.2	サヌカイト
210	G区	柱穴	III	3.8	2.5	0.6	6.0	サヌカイト
211	M区	ＳＤ３３	IV	2.4	1.4	0.3	1.3	サヌカイト
212	U区	柱穴	IV	2.5	1.6	0.4	1.7	サヌカイト
213	T区	柱穴	IV	2.9	1.8	0.4	2.4	サヌカイト
214	M区	包含層	IV	4.2	1.7	0.4	2.3	サヌカイト
215	R区	柱穴	IV	3.3	1.7	0.5	2.3	サヌカイト
216	O区	柱穴	IV	3.1	1.3	0.4	1.5	サヌカイト
217	M区	ＳＤ３７	IV	3.2	1.4	0.6	2.5	サヌカイト
218	M区	ＳＤ３７	IV	3.7	1.5	0.7	3.7	サヌカイト
219	M区	包含層	V	2.7	1.1	0.5	1.2	サヌカイト
220	B区	ＳＢ０３	V	3.3	1.7	0.5	2.9	サヌカイト
221	N区	包含層	V	3.7	1.6	0.4	2.3	サヌカイト
222	U区	包含層	V	3.8	1.1	0.6	2.0	サヌカイト
223	M区	柱穴	V	4.5	2.8	0.6	8.3	サヌカイト
224	U区	旧河道２	V	3.5	1.3	0.6	2.8	サヌカイト
225	N区	ＳＫ１０５	V	3.6	1.5	0.4	2.2	サヌカイト
226	V区	旧河道２	V	4.0	1.7	0.6	3.9	チャート
227	C区	ＳＤ０５	II	5.6	2.1	0.7	8.0	サヌカイト
228	G区	ＳＢ１５	V	5.5	1.5	0.6	5.2	サヌカイト
229	U区	旧河道２	I	5.5	2.3	0.9	9.1	サヌカイト

・石錘

番号	出土地区	遺　　構	分類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
274	O区	ＳＢ３２		9.0	5.8	1.2	87.1	
275	C区	包含層		5.4	4.9	2.0	47.8	

・打製石剣

番号	出土地区	遺　　構	分類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
230	O区	ＳＤ５８		5.5	3.1	1.3	25.0	サヌカイト
231	O区	旧河道２		6.3	2.6	1.2	21.7	サヌカイト
265	M区	旧河道２		8.9	3.8	1.3	37.5	サヌカイト
266	U区	ＳＫ２３９		12.4	2.6	1.2	54.1	サヌカイト
267	N区	ＳＤ３７		13.3	3.2	1.1	59.4	サヌカイト

・磨石／敲石

番号	出土地区	遺　　構	分類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
268	P区	旧河道２		8.7	7.2	3.6	331.0	
269	N区	ＳＫ		10.0	9.4	5.8	870	
270	P区	旧道２		12.5	9.4	7.7	1250	
271	U区	ＳＤ		11.7	8.6	7.1	980	
272	H区	ＳＤ		10.2	6.4	5.4	550	
273	B区	柱穴		4.9	4.2	2.4	68.1	

・磨製石鏃

番号	出土地区	遺　　構	分類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
250	N区	ＳＢ２２	II	2.3	1.0	0.2	0.4	
251	O区	柱穴	I	2.7	1.3	0.3	1.1	
252	O区	包含層	I	2.8	1.3	0.3	1.3	
253	R区	柱穴	I	3.3	1.5	0.3	1.8	
254	N区	柱穴	II	3.5	2.1	0.4	3.9	
255	M区	ＳＫ６４	II	4.2	2.2	0.4	2.8	

・磨製石剣

番号	出土地区	遺　　構	分類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
256	N区	ＳＤ４１	I	4.2	1.8	0.7	5.4	
257	T区	柱穴	I	5.0	2.5	0.7	8.4	
258	O区	柱穴	I	7.9	2.9	0.7	19.4	
259	B区	包含層	I	7.9	2.9	0.8	26.1	
260	N区	柱穴	II	10.8	3.1	1.2	54.2	砥石に転用
261	O区	柱穴	I	9.4	3.4	1.0	46.0	砥石に転用
262	I区	旧河道１	I	4.6	3.0	0.7	10.3	
263	O区	包含層	I	6.0	3.3	0.7	16.8	
264	V区	旧河道２	I	11.2	3.2	0.8	42.7	

・その他

番号	出土地区	遺　　構	分類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	備　　考
276	N区	掘立柱建物		8.7	8.8	4.1	560	
277	P区	旧河道２		9.8	9.7	4.4	550	底部に穿孔
278	C区	ＳＢ０６		8.9	6.4	4.6	460	
279	B区	ＳＢ０３		5.5	3.8	0.7	23.0	玉生産の施溝具か
280	M区	旧河道１		11.0	12.3	3.1	570	環状石斧の未製品か

第4節　玉　　類

(1)　ガラス玉（図版147－1～4）

4個体出土している。1は不整三角形をなす、水色のガラス小玉である。長さ4.2㎜、径6.1㎜、孔径は0.6㎜と1.4㎜で両方穿孔である。木棺墓ＳＫ195から出土したもので、28から83までの56個の管玉が共伴している。2は円柱状の水色のガラス小玉である。長さ3.9㎜、径3.3㎜、孔径は1.4㎜である。表面採集の遺物である。3は扁平なガラス小玉で、水色を呈する。長さ3.2㎜、径4.9㎜、孔径は1.7㎜である。木棺墓ＳＫ217から出土したもので、90の管玉が共伴している。4はコバルト・ブルーのガラス玉である。長さ4.8㎜、径4.8㎜、孔径は1.6㎜である。ＳＢ06から出土した。

(2)　臼　玉（図版147－5～7）

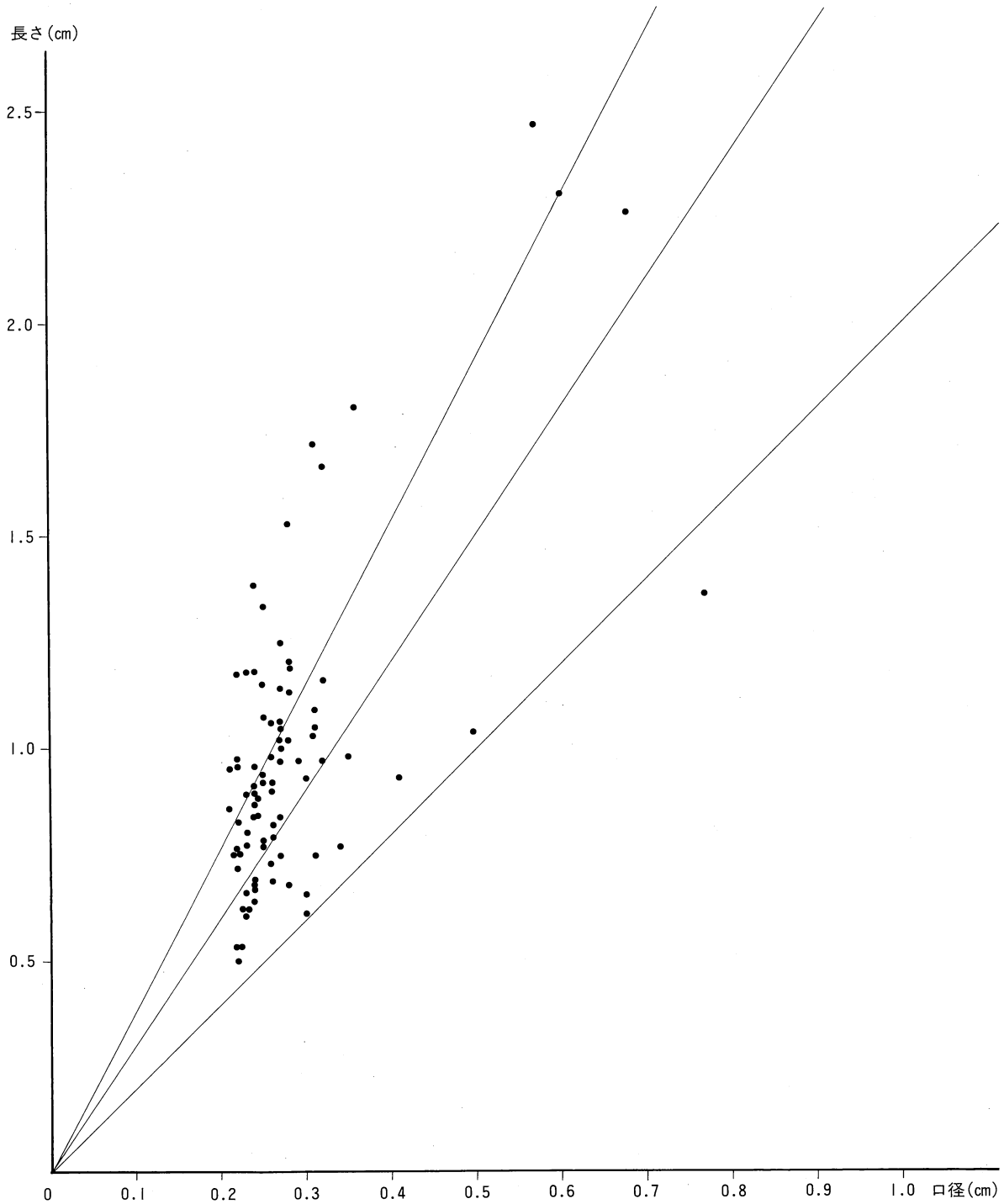
3個体出土している。5は滑石製でＳＫ204の底面から検出された。長さ3.2㎜、径5.5㎜、孔径は2.3㎜である。6と7はＳＢ34から出土した臼玉で、いずれも滑石製である。6は長さ2.6㎜、径4.1㎜、孔径は1.8㎜、7は長さ3.1㎜、径4.8㎜、孔径は2.3㎜である。

(3)　勾　玉（図版147－8～12）

5個体出土している。8と9は翡翠製で、ＳＫ181から出土したもので、13から27の15個の管玉と共伴した勾玉である。8は長さ12.3㎜、孔径は2.3～3.0㎜で片方穿孔、9は長さ12.0㎜、孔径は2.7㎜で両方穿孔である。10は翡翠で、表面採集の資料である。長さ14.8㎜、孔径は2.3～3.9㎜で両方穿孔である。11はＳＢ26から出土したもので、灰白色の硬質の石材が使用されている。長さ17.5㎜、孔径は2.6～2.7㎜で両方穿孔である。12は旧河道2出土の翡翠製勾玉である。長さ18.3㎜、孔径は1.3～4.0㎜で片方穿孔である。

(4)　管　玉（図版147－13～98）

86個体出土している。すべて碧玉製である。13から27までの15個体はＳＫ181から出土したものである。長さは、7.5㎜を最小として12.0㎜を最大とする。径は、2.2㎜を最小として3.1㎜を最大とする。28から83までの56個体はＳＫ195から出土したものである。長さは、5.0㎜を最小として18.0㎜を最大とする。平均は9.66㎜で、56個すべてを繋げば541.0㎜となる。また、総重量は45.6ｇである。径は、2.2㎜を最小として3.6㎜を最大とする。84、85、88、89、94、95は掘立柱建物の柱穴から出土したものである。86はＳＢ19、87はＳＢ01から出土している。90はＳＫ217、91はＳＫ142、92はＳＫ92から出土している。93は表面採集の資料である。96はＳＤ33から出土した管玉で、長さ13.6㎜、径7.7㎜、重さ1.29ｇである。97はＳＢ34から出土したもので、長さは24.6㎜である。半分に截断されており、両側からの穿孔が明瞭である。97は表面採集資料で、これも両側からの穿孔が明瞭である。



第19図　管玉の長さと口径

第4表　管玉計測値一覧表

No.	長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	穿孔	重量 (g)	出土地	No.	長さ (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	穿孔	重量 (g)	出土地
13	0.75	0.22	0.09	片方	0.04	SK181	56	0.87	0.24	0.12	両方	0.07	SK195
14	0.83	0.22	0.08	両方	0.05	SK181	57	0.95	0.21	0.10	片方	0.05	SK195
15	0.84	0.24	0.10	両方	0.05	SK181	58	0.98	0.26	0.11	両方	0.09	SK195
16	0.87	0.24	0.12	両方	0.06	SK181	59	0.92	0.25	0.10	両方	0.08	SK195
17	0.92	0.26	0.13	片方	0.07	SK181	60	1.02	0.27	0.08	片方	0.12	SK195
18	0.89	0.23	0.12	片方	0.06	SK181	61	0.97	0.22	0.07	片方	0.07	SK195
19	0.94	0.25	0.12	両方	0.08	SK181	62	0.96	0.22	0.08	片方	0.06	SK195
20	0.90	0.26	0.13	両方	0.08	SK181	63	0.97	0.29	0.08	片方	0.12	SK195
21	1.00	0.27	0.15	両方	0.08	SK181	64	1.06	0.27	0.12	片方	0.10	SK195
22	0.98	0.26	0.15	両方	0.10	SK181	65	0.96	0.24	0.09	両方	0.09	SK195
23	1.02	0.28	0.13	両方	0.10	SK181	66	1.07	0.25	0.10	両方	0.08	SK195
24	1.09	0.31	0.12	両方	0.15	SK181	67	0.93	0.30	0.09	片方	0.12	SK195
25	1.19	0.28	0.12	片方	0.13	SK181	68	1.03	0.31	0.09	片方	0.12	SK195
26	1.13	0.28	0.12	片方	0.13	SK181	69	1.05	0.27	0.08	片方	0.11	SK195
27	1.20	0.28	0.13	両方	0.13	SK181	70	0.97	0.32	0.08	片方	0.15	SK195
28	0.50	0.22	0.11	片方	0.04	SK195	71	1.14	0.27	0.09	片方	0.11	SK195
29	0.64	0.24	0.08	片方	0.05	SK195	72	1.16	0.32	0.12	両方	0.17	SK195
30	0.68	0.24	0.13	片方	0.05	SK195	73	1.18	0.24	0.07	両方	0.09	SK195
31	0.62	0.23	0.11	片方	0.04	SK195	74	1.17	0.22	0.11	両方	0.10	SK195
32	0.69	0.26	0.08	片方	0.07	SK195	75	1.18	0.23	0.08	片方	0.07	SK195
33	0.68	0.28	0.08	片方	0.08	SK195	76	1.15	0.25	0.11	両方	0.08	SK195
34	0.67	0.24	0.09	両方	0.06	SK195	77	1.25	0.27	0.10	片方	0.11	SK195
35	0.62	0.23	0.08	片方	0.05	SK195	78	1.38	0.24	0.09	両方	0.12	SK195
36	0.69	0.24	0.08	片方	0.05	SK195	79	1.33	0.25	0.09	片方	0.12	SK195
37	0.75	0.27	0.09	片方	0.07	SK195	80	1.52	0.28	0.08	両方	0.14	SK195
38	0.73	0.26	0.09	片方	0.06	SK195	81	1.71	0.31	0.09	両方	0.21	SK195
39	0.76	0.22	0.08	片方	0.05	SK195	82	1.66	0.32	0.08	両方	0.22	SK195
40	0.76	0.22	0.08	片方	0.05	SK195	83	1.80	0.36	0.12	両方	0.38	SK195
41	0.77	0.25	0.10	片方	0.06	SK195	84	0.53	0.22	0.12	両方	0.03	掘立柱建物
42	0.72	0.22	0.07	両方	0.04	SK195	85	0.66	0.30	0.17	片方	0.07	掘立柱建物
43	0.77	0.23	0.07	片方	0.05	SK195	86	0.61	0.23	0.11	片方	0.02	SB19
44	0.78	0.25	0.13	両方	0.06	SK195	87	0.81	0.27	0.11	片方	0.07	SB08
45	0.79	0.26	0.09	片方	0.06	SK195	88	0.75	0.31	0.18	片方	0.07	掘立柱建物
46	0.82	0.26	0.11	片方	0.08	SK195	89	0.77	0.34	0.15	両方	0.12	掘立柱建物
47	0.86	0.21	0.13	両方	0.04	SK195	90	0.80	0.23	0.11	片方	0.05	SK217
48	0.84	0.24	0.09	片方	0.07	SK195	91	0.66	0.23	0.12	両方	0.04	SK142
49	0.84	0.27	0.08	両方	0.08	SK195	92	0.61	0.30	0.15	片方	0.07	SK92
50	0.88	0.24	0.09	両方	0.07	SK195	93	0.98	0.35	0.18	両方	0.06	表面採集
51	1.05	0.31	0.09	片方	0.13	SK195	94	0.53	0.22	0.09	両方	0.02	柱穴
52	1.06	0.26	0.14	片方	0.07	SK195	95	0.93	0.41	0.21	両方	0.22	柱穴
53	0.97	0.27	0.10	片方	0.09	SK195	96	1.36	0.77	0.26	両方	1.36	SD33
54	0.90	0.24	0.08	両方	0.08	SK195	97	2.46	0.57	0.32	両方	0.75	SB34
55	0.91	0.24	0.09	片方	0.07	SK195	98	2.26	0.68	0.33	両方	0.77	表面採集

第5節　土　製　品

(1)　剣形土製品（図版148－1）

長さ5.9cm、厚さ1.5cmの土製品である。片面に線状に描かれた2条の樋と、太い茎によって剣を模倣したものであることが知られるが、著しく矮小化されたものである。精良な胎土を選択している。M地区の包含層から出土したものであるが、詳細な時期を決定することはできない。

(2) 土製勾玉（図版148－2）

体部が「C」字形に湾曲した勾玉である。長さ3.7cm、身の中央は断面はほぼ円形を呈している。頭部の円孔は径が3.5mmで、焼成前に施されたものである。重量は、7.48gを測る。O地区の柱穴から出土している。帰属時期は不明である。

(3) 土　玉（図版148－3）

ほぼ球形の丸玉である。直径は1.4cm、高さ1.5cmで、円孔は焼成前に施されたものである。表面は丁寧な磨きが行われており、光沢を帯びている。重量は、2.78gを測る。胎土には砂粒を含まず、精良なものが選択されている。表面採集の遺物で、帰属時期は不明である。

(4) 土　錘（図版148－4）

SB32から出土した。長さは5.7cm、径は2.6cm、孔径は1.3cmである。重量は49.8gを測る。

胎土には砂粒を含まず、精良なものが選択されている。

(5) 陽物状土製品（図版148－5）

男根を極めて写実的に表現した土製品で、陰茎部が長さ6.5cm残存したものである。貫通はしていないが、尿道も表現されている。亀頭部で幅4.1cm、厚さ3.7cm、陰茎部で幅4.0cm、厚さ3.4cmを測る。裏面は丁寧にヘラ磨きを行い、光沢を有している。胎土は精良で、焼成も良好である。G地区SB10から、床面からわずかに浮いた状態で出土してものである。

木製品や石製品で男根を模倣したものは少なくないが、本例は土製品であることと、法量や表現が写実的であることが特筆されるのであって、他に類例を知らない。

(6) 土製円板・紡錘車（図版149－1～10）

土器片を再利用した土製円板である。平面形はほぼ円形で、穿孔が途中で放棄されたものもある。縁辺部を研磨するものもある。土製紡錘車の未製品であろう。

紡錘車は、土器片の縁辺部を打ち欠いたものと、打ち欠いた後に側面を研磨するものがある。中央には0.5cm前後の円孔が穿たれている。6の穿孔は両面から行われたことが明瞭である。3や8は土器の表面を飾っていた刷毛目を、そのまま残しているものもある。

第5表　土製円板・紡錘車計測値一覧表

No.	外径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	出土地	No.	外径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	出土地
1	3.1×3.3	—	6.3	SB22	5	3.1×2.9	0.4×0.4	4.6	T地区
2	4.4×4.2	—	9.7	U地区	6	3.6×3.2	0.5×0.4	12.2	O地区
3	3.1×3.0	0.4×0.4	4.9	T地区	7	3.8×3.8	0.5×0.5	8.3	旧河道
4	3.4×3.3	0.5×0.4	8.1	T地区	8	4.3×4.0	0.4×0.4	9.2	T地区

第6節　金　属　製　品

(1)　鉄製品（図版149－１～９）

鉄斧、鉄鑿、鉈などがある。

１は長さ8.7cm、幅4.2cm、旧河道２から出土した鉄斧である。袋部の一部を欠損している。ただし、弥生時代の所産であると断定はできない。２は板状の鉄斧である。長さ9.2cm、刃幅4.5cm、厚さは1.6cmである。遺構から遊離して出土したため、帰属時期を特定できない。３は板状の鉄器であるが、斧であるか否かは不明である。長さ5.6cm、幅3.3cmで、ＳＤ31から出土したものである。4は扁平な楔状の鉄器である。上端部は厚く仕上げられるが、先端部は鋭利である。長さ5.4cm、幅2.0cmで、Ｕ地区の柱穴から出土したものである。５は鑿状の鉄器である。長さ7.0cm、幅1.6cmで、断面は長方形をなし、先端部が斜め方向に切り落とされた形態となる。Ｃ地区のＳＢ06から出土した。６も鑿状の鉄器である。上端部は半円形に突出し、断面形態はほぼ方形となる。長さ8.1cm、幅1.5cmで、Ｏ地区のＳＤ59から出土したものである。７は長さ16.5cmを測る、不明鉄器である。上端部は幅が2.7cmと広く、先端に近づくにつれ細くなってゆく。断面は中位では長方形となる。Ｓ地区の包含層からの出土のため、帰属時期を限定することは困難である。８はＳＢ14から出土した鉈である。先端部をわずかに欠損するが、長さは11.1cmを測り、わずかに湾曲している。中位では幅0.8cm、厚さ0.6cmである。基部は幅0.6cm、厚さ0.2cmの長方形をなしている。９も鉈であろう。丸く仕上げられた先端部を残すのみであり、長さ3.1cm、幅1.5cmである。Ｃ地区のＳＢ06から出土した。

(2)　銅製品（図版149－10）

銅鏃がＯ地区の柱穴から出土している。有茎の鏃で、基部は内湾している。現存長3.8cm、最大幅1.5cm、最大厚は鋒から１cm下にあり４mmを測る。銅質は良好で、鋳上がりも良い。

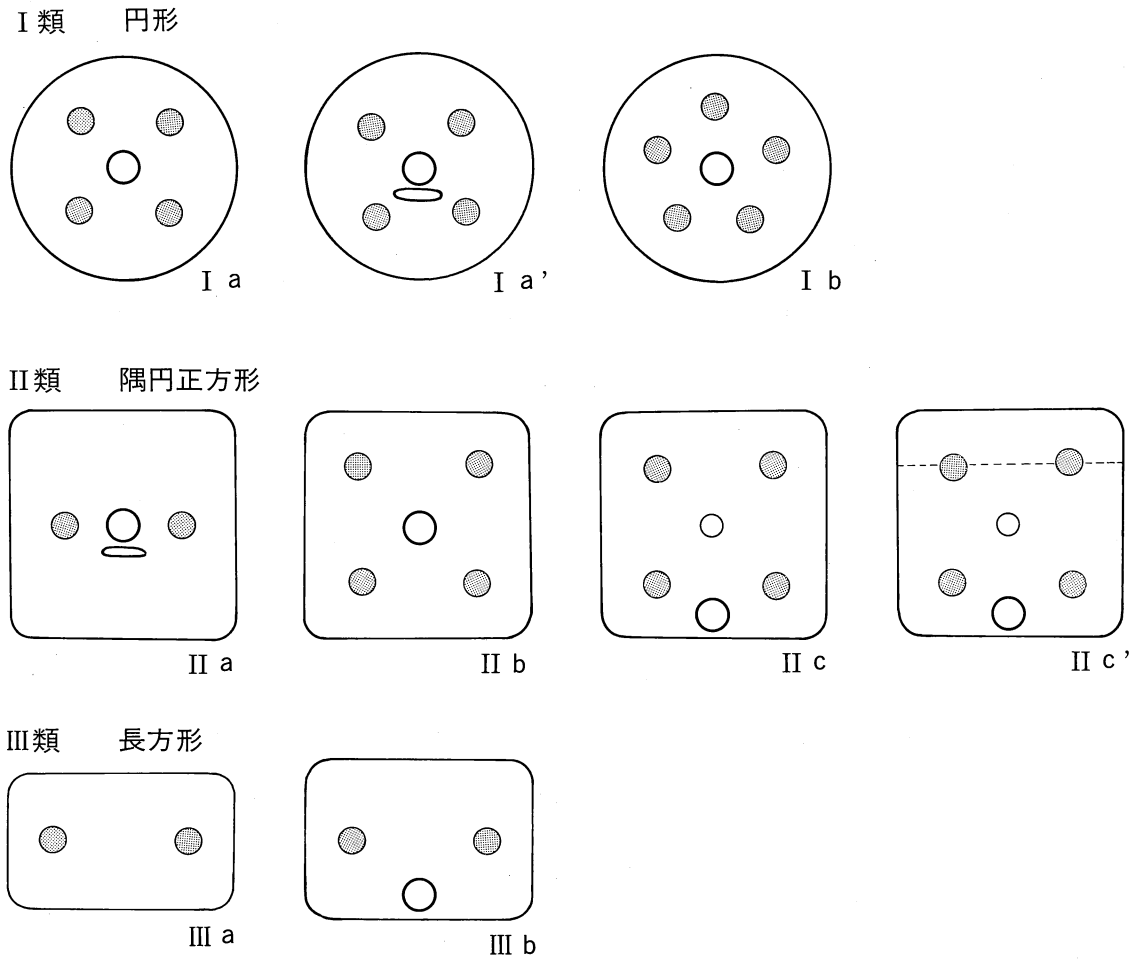
第5章　ま　と　め

第1節　遺　　構

第1項　住居址について

(1)　住居址の分類

住居址は、周壁または周壁溝が確認されたものは50棟であった。残存する遺構の密度を考慮に入れれば、周壁または周壁溝が削平されたにもかかわらず、深度の深い中央坑や柱穴のみが残された住居址も数多く存在することは容易に想像できるのであるが、そうした住居址の位置はもちろんのこと、形態や規模、内容についての詳細に触れることは困難である。そのため、第3章に記載した住居址の説明にのみ終始することを明記しておきたい。ただし、50棟について資料操作する時、それは統計上の母数としては信頼性が欠如するものではなく、大要においては大きな支障はないものと考えてよかろう。



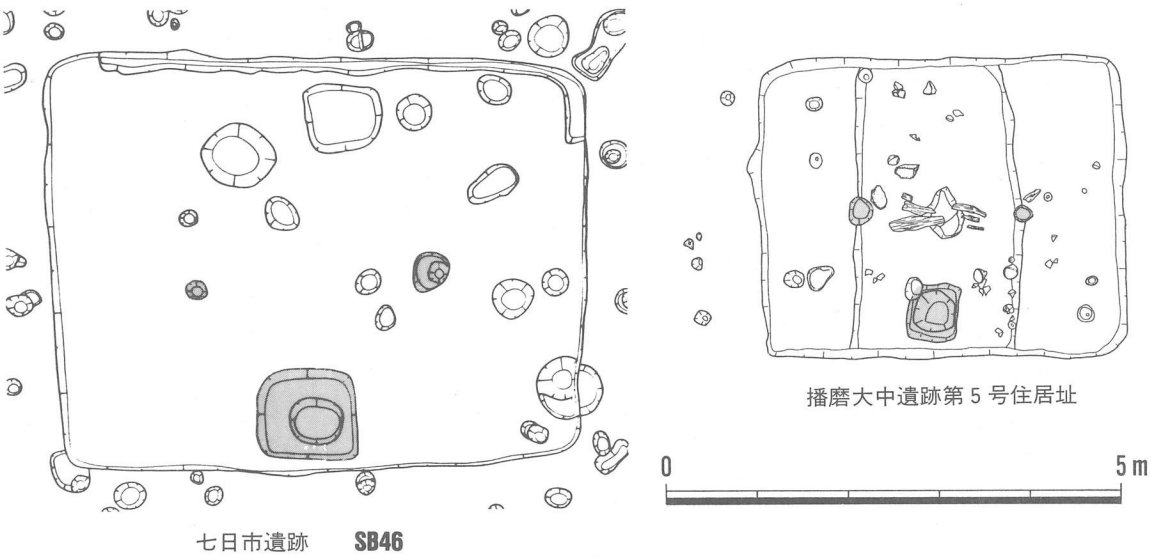
第20図　住居址の平面形態による分類

さて、七日市遺跡で検出された住居址のうち平面形態の明らかなもの、または残存する周壁か周壁溝から住居址と判明して平面形態が推定できるものは、円形住居址18棟(36%)、隅円正方形住居址25棟(50%)、長方形住居址３棟（６%)、不明４棟（８%）の合計50棟である。まず平面形態から、円形住居址をⅠ類、隅円正方形住居址をⅡ類、長方形住居址をⅢ類と呼称し、さらに主柱穴の数や中央坑の位置、また長楕円形土壙やいわゆるベッド状遺構などの付属施設の有無によって細分してゆく。

円形のⅠ類は、主柱穴が４本のⅠａと主柱穴が５本のⅠｂがある。Ⅰａは中央坑に接して長楕円形土壙が敷設される住居址をⅠa'とする。18棟の円形住居址のうち、Ⅰa'はＳＢ20とＳＢ42、ⅠｂはＳＢ22が該当し、残る15棟はⅠａの範疇に属する。

隅円正方形のⅡ類は、主柱穴が２本で中央坑に接して長楕円形土壙が敷設されるⅡａ、主柱穴が４本のⅡｂ、主柱穴は４本であるが中央坑は浅くかつ赤変し、さらに縁辺に接して土壙を敷設するⅡｃに分けられる。Ⅱｃに属する住居址のうち、いわゆるベッド状遺構を設けるものをⅡc'とする。検出された住居址のうち、Ⅱ類は半数の25棟を占め、ⅡａはＳＢ24の１棟、ⅡｃはＳＢ14、ＳＢ34、ＳＢ35、ＳＢ49の４棟が該当する。そしてＳＢ11とＳＢ32は未掘部分を残したり、他の遺構と重複する部分が多いため確証は得られないが、Ⅱｃに属すると考えられる。Ⅱc'はＳＢ26の１棟だけで、残る17棟がⅡｂに帰属することになる。

長方形のⅢ類は、ＳＢ02、ＳＢ37、ＳＢ46の３棟が該当する。前二者は削平が著しく、詳細について把握しえない点を残すが、おおよそ２本柱をもつⅢａと考えられる。中央坑の存在については確認できなかった。後者は２本柱で、土壙が長辺の中位に接した位置にあるⅢｂである。なかでもⅢｂは、短辺の両側にいわゆるベッド状遺構が付加されたなら、北部九州に類例の多い長方形住居址と近似することになる。播磨町播磨大中遺跡[1]では、長方形プランでベッドをもつ、２本柱の住居址で、「上部方形下部円形ピット」を備えるものが５棟検出されており、後に「室岡型」住居址[2]と呼ばれるようになる。七日市遺跡のＳＢ46は、「室岡型」住居址として必須の要素であるベッド状遺構を付設していないため、その範疇に含めることには躊躇せざるをえないが、残りの要素は完備されており、何らかの関連を否定することはできまい。今後類例の増加が待たれることになろう。



第21図　長方形住居址の比較

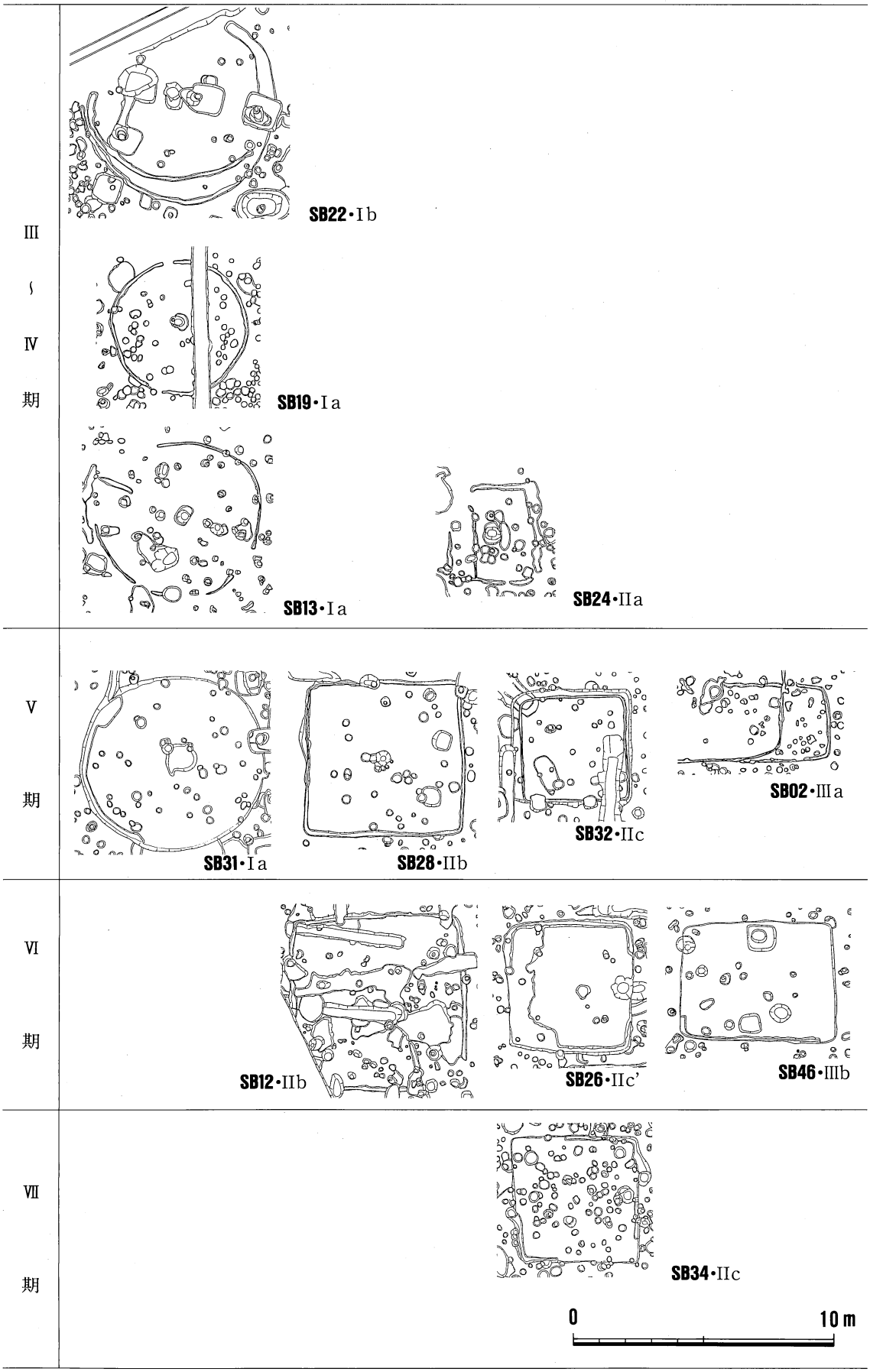
(2) 住居址の時期と変遷

さて、七日市遺跡で検出された住居址は50棟である。しかしながら、個別の住居址の帰属時期を限定することには大きな困難が伴うことも事実である。第３章でも触れたように、周壁溝の一部にまで削平を被る住居址が大半であり、住居址の時期を決定するための最も重要な資料とも言える床面に密着した土器資料にほとんど恵まれなかったことと、周壁を残存する住居址においても、それと重複する遺構との前後関係を明確にする切り合いが、いずれも埋土が同じ黒ボク土であるために判別できないこと、の二つの点がその理由である。とは言え、残された数少ない状況証拠から住居址の帰属を決定して、その変遷について概観しておきたい。なお、出土土器からみた相対的な年代については次節で詳述することになる。ここで触れるＩ期、II期、……は、概ね第Ｉ様式、第II様式、……にほぼ相当することになる。

まず、Ｉ類の円形住居址のうち時期を限定できるものを提示しておこう。ＳＢ07から出土した壺Ａや内面ヘラ削りを施した高杯脚部はIII期からIV期にかけての所産であり、少なくともＶ期に下るものではない。また、ＳＢ13から出土している土器は、内面をヘラ削りを行った脚部であり、IV期の典型的な器形と手法を保持しているものである。さらに、ＳＢ22出土の鉢とＳＢ27の主柱穴から出土した壺Ａも、III期からIV期にかけての時期に特徴的な形態の土器のひとつである。こうした円形住居址の時期は、III期からIV期にかけての所産であることは確かである。このことは、共伴した石器からも例証される。すなわち、ＳＢ07では石庖丁・石斧・砥石、ＳＢ22では石庖丁・磨製石鏃が出土しており、石器使用の最盛期と合致している。さらに、土器こそ出土していないため時期は明らかではないが、その他の円形住居址からも石器の出現頻度は高い。例えば、円形プランをもつＳＢ04、ＳＢ13、ＳＢ15、ＳＢ20、ＳＢ42でもいずれかの石器が出土しているのであって、これら住居址がＶ期にまで下る根拠を少なくするものである。ただし、II期以前に遡る住居址は確認されない。一方、他の円形住居址は、時期が下るものである。遺存状態の良好であったＳＢ31の土器のうち、とりわけ床面直上の資料は、擬凹線文が発達した壺や長頸壺、内面ヘラ削りが広範囲に及んだ甕、口縁部の外反の度合いの大きい高杯Ａなど、いずれもＶ期のものと判断してよい。同じく中央坑と主柱穴から出土した土器も、その時期と矛盾を示すものではなかろう。また、ＳＢ33の床面直上資料である甕もＶ期の指標と考えられる土器であり、ＳＢ36の土器も同様の時期に所属する。以上の事実から、Ｉ類の帰属時期は、III期からIV期を経てＶ期にいたる時間幅をもつことが明らかである。

次に、II類隅円正方形の住居址をみてみよう。III期以前に遡るものは確認することができないが、遅くともIV期に含めることが許される住居址はＳＢ24である。その中央坑から出土した壺Ｆは、外面に丁寧なヘラ磨きが施された無頸壺で、土器の形態や手法からみてIV期に帰属するものとして大過なかろう。七日市遺跡におけるII類に属する住居址の中では古式の例として挙げられるが、１棟のみ検出された主柱穴が２本確認される小型のIIａの住居址であり、若干特異な例であることは否めない。

さて、典型とも言える４本柱のIIｂは、Ｖ期以降の築造と考えられる。例えば、ＳＢ28から出土した土器はＶ期の特徴をよく示すものであり、七日市遺跡における当該資料の中では最も古い例となろう。ひき続きVI期にかけても、ＳＢ12などのように継続して営まれてゆく。IIｃもＶ期には築造されていると考えられる。例えば、主柱穴が復元できないもののＳＢ11はＶ期の土器を、またＳＢ32はＶ期からVI



第22図　住居址の変遷模式図

期にかけての土器を出土している。このⅡｃも、Ⅴ期以降Ⅶ期にかけて継続して営まれてゆくことになる。ＳＢ14、ＳＢ49からはⅥ期からⅦ期にかけての土器、そしてＳＢ34からはⅦ期の土器が検出されていることも、その傍証となろう。また、１棟のみ確認されたⅡc'はⅥ期からⅦ期にかけてのものと推定され、Ⅱｃの系譜の一貫として理解されるのである。

さて、Ⅱ類の住居址をⅠ類の住居址と比較した場合、土器以外の出土遺物で特徴的な点を見出すことができる。Ⅰ類を検討した際、各種の石器が出土する点を指摘して、それらがⅢ期からⅣ期にかけての時期に帰属する一つの根拠とした。Ⅱ類の住居址をみるとき、ＳＢ03、ＳＢ26、ＳＢ32、ＳＢ43などで石器が出土しているが、それらの多くは他の遺構との切り合いや流入などによって生じた夾雑物とみなしてよいものであろう。こうした石器以外に目を転じると、Ⅱ類の住居址が所有していた遺物で特色を示すものは、ひとつは鉄器である。例えば、ＳＢ06では鑿状鉄器と鉈が出土し、ＳＢ14からは鉈が出土している。また、形態は明らかにしがたいが、ＳＢ49からも鉄片が検出された。いずれもⅡ類の住居址であり、Ⅰ類の円形住居址から鉄器が出土した例は確認されない。ふたつめはⅡ類の住居址からは玉類や用途を限定できない祭祀遺物などが検出されたことが特徴として挙げられる。例えば、ＳＢ06ではガラス小玉、ＳＢ08では管玉、ＳＢ10では陽物状土製品、ＳＢ26では勾玉、ＳＢ34では臼玉と管玉が出土しているのである。Ⅰ類の住居址からもＳＢ19から管玉が確認されるが、この１例のみであり、Ⅱ類が圧倒的多数であることには変わりはない。さて、Ⅱ類の住居址の出土遺物はⅠ類のそれと異なり、質・量ともに豊富であることを述べたが、このことは両者の内容に格差があるものとは考えない。むしろ、遺物の内容は両者に時間差が介在することを明示しているのであって、Ⅰ類からⅡ類へと変遷してゆく過程を説明する際の証左となろう。

Ⅲ類の長方形住居址は資料数が限定されるが、Ⅲａに属するＳＢ02はⅤ期からⅥ期にかけての時期を想定することができる。ＳＢ37も同じ類型の住居址であるが、時期を決定できる土器の出土はみられなかった。また、ＳＢ46はⅢｂに属する住居址である。図示していないが、出土遺物の中で甕の細片を観察すればⅥ期に比定してよいものと考えられる。このように、Ⅲ類の住居址はⅡ類の住居址と時期をほぼ並行して存在することが明らかである。

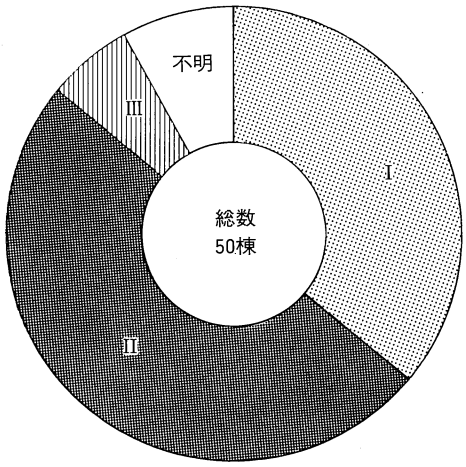
以上のような住居址の時期と変遷を具体的に模式で示したものが第22図である。

(3) 住居址の形態と規模

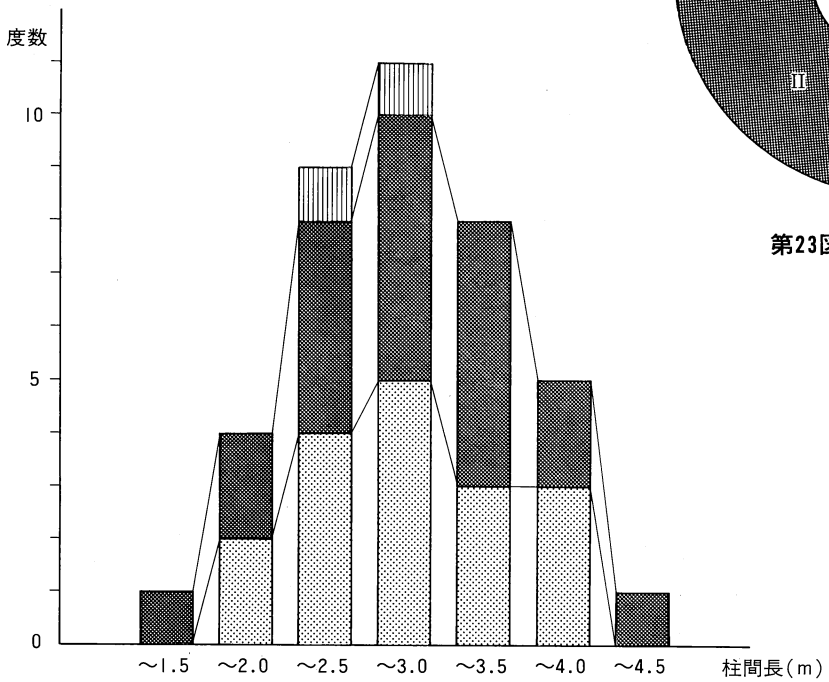
住居址の平面形態によって分類したそれぞれの類型について、特に床面積と柱間長を中心として規模について触れる。

Ⅰ類は、最大床面積をもつ住居址はＳＢ27で48.3m²、最大柱間長も同じくＳＢ27で3.60mである。最小床面積をもつ住居址はＳＢ36で14.4m²、最大柱間長も同じくＳＢ36で1.98mである。床面積の平均はＩａとＩa'を合わせて30.8m²、同じく柱間長の平均は2.78mである。Ｉｂを含めたⅠ類住居址18棟の床面積平均は31.5m²、同じく柱間長の平均は2.78mである。

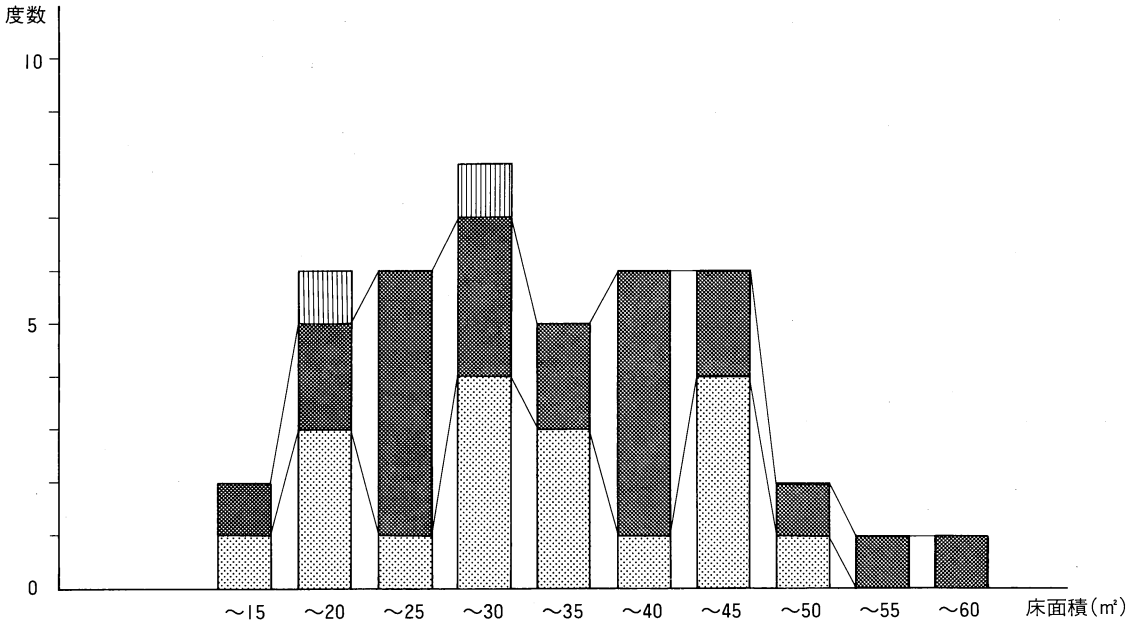
Ⅱ類では、最大床面積をもつ住居址はＳＢ06で58.4m²、最大柱間長も同じくＳＢ06で4.45mである。最小床面積を示す住居址はＳＢ24で13.4m²、最大柱間長も同じくＳＢ24で1.40mである。ⅡａはＳＢ24の１棟であり、Ⅱ類の中のみならず、検出されたすべての住居址の中でも最小値を示している。Ⅱｂは最大床面積と最大柱間長のいずれもＳＢ06がもっている。その値はⅡ類の中のみならず、検出されたす



第23図　住居址の組成



第24図　住居址の単純度数分布

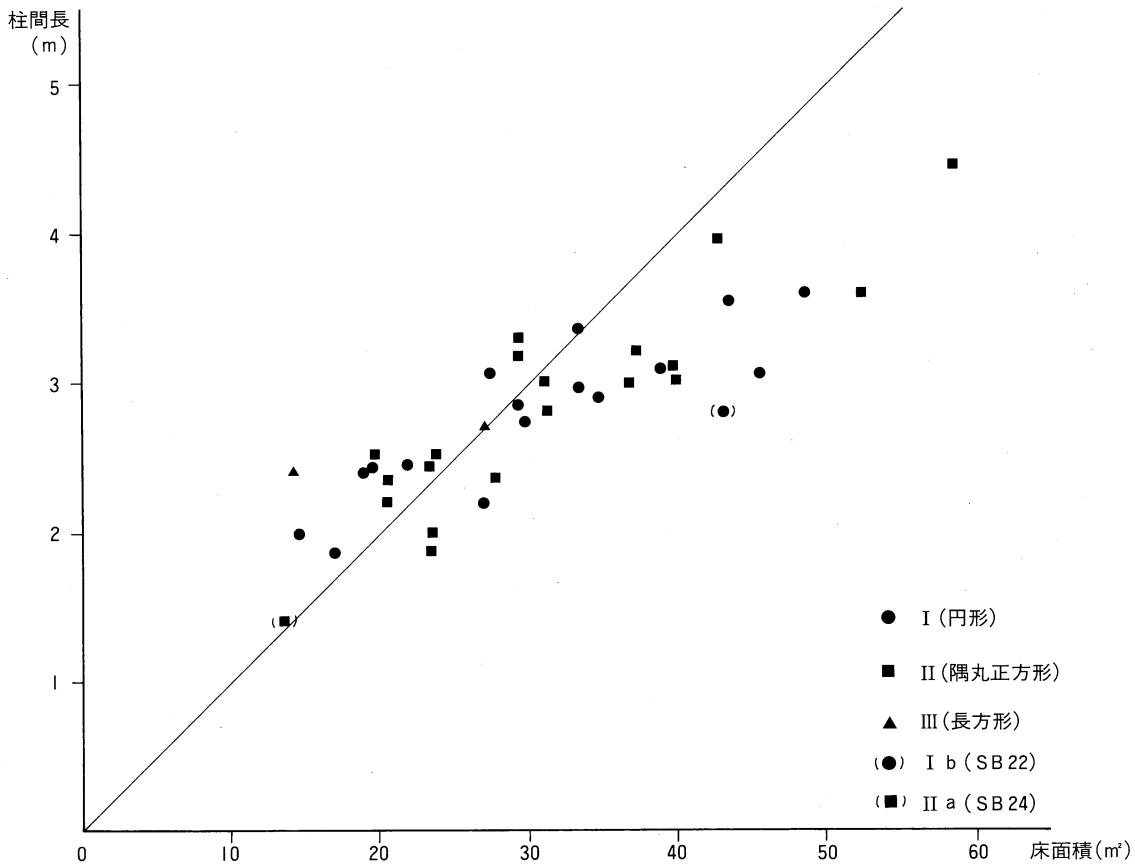


第25図　住居址床面積の単純度数分布

べての住居址の中でも最大値を示している。IIbの中の最小床面積は、推定復元部分が50%を越えるSB25とSB41を除去すれば、22.8m²を示すSB08の拡張前の数値がそれである。同じく最小柱間長は、2.36mのSB05である。17棟のIIbのうち、床面積平均は34.7m²、同じく柱間長の平均は3.16mである。IIcとIIc'を含めた7棟では、最小床面積は不確実なSB14を除き、SB34の20.1m²、最小柱間長は不確実なSB49を除き、SB34の2.00mである。IIcとIIc'の床面積平均は29.8m²、同じく柱間長の平均は2.54mである。また、法量の明らかなすべてのII類の住居址の中では、床面積平均は32.2m²、同じく柱間長の平均は2.87mである。

III類は、3例のうち法量の明らかなものは、IIIaのSB37と、IIIbのSB46の2例のみである。この2棟の平均値は、床面積20.2m²、柱間長2.55mである。

次に、住居址の床面積と柱間長の関係について簡単に述べておく。床面積については5m²単位、柱間長については50cm単位を横軸に設定して、単純度数分布を示したものが、第24図と第25図である。まず柱間長の図から明らかなように、I類は2.5～3.0mで、II類は2.5～3.5mで出現度数のピークを示し、さらに全住居址を通じても2.5～3.0mの柱間長が出現頻度が最も高く、単純度数分布は整った三角形をなしている。一方、床面積の図では、全体を通じて25～30m²で度数の頂点を迎えるものの、I類とII類で出現頻度に相関は認めることができない。むしろ、少なくとも15～45m²の間では度数の変化は乏しい。このことは、床面積と柱間長の相関を確認すれば明確となろう。つまり、第25図をみるとき、床面積35m²以下、柱間長3.5m以下の場合、両者はほぼ比例してゆくが、それ以上の数値のとき、比例相関は崩れ



第26図　住居址の床面積と柱間長の相関

てゆく。床面積が35㎡を越える住居址は16棟認められるが、柱間長が3.5mを越える住居址は6棟を数えるにすぎない。すなわち、それぞれの住居址は、必要に応じてさまざまな床面積を保有しているが、柱間長に関しては限界値が存在するようである。さらに言えば、柱間長が主柱穴の上位に架けられた桁の長さを示すものであるとすれば、桁として使用される木材の長さの限界点が、このあたりに存在するのかもしれない。桁の数値がある程度で停滞するとしても、必要な床面積を確保しなければならない場合は、主柱穴の数量を増すことによって各柱間長距離を減じるか、もしくは垂木の接地点を住居址の中心から遠くに設けて、面積の拡張を図らなければならないであろう。そのことによって、垂木の長さがあまりに長くなる場合は、周堤を高く盛り上げることによって回避することも可能となるかもしれない。

第2項　木棺墓について

(1) 木棺墓の分類

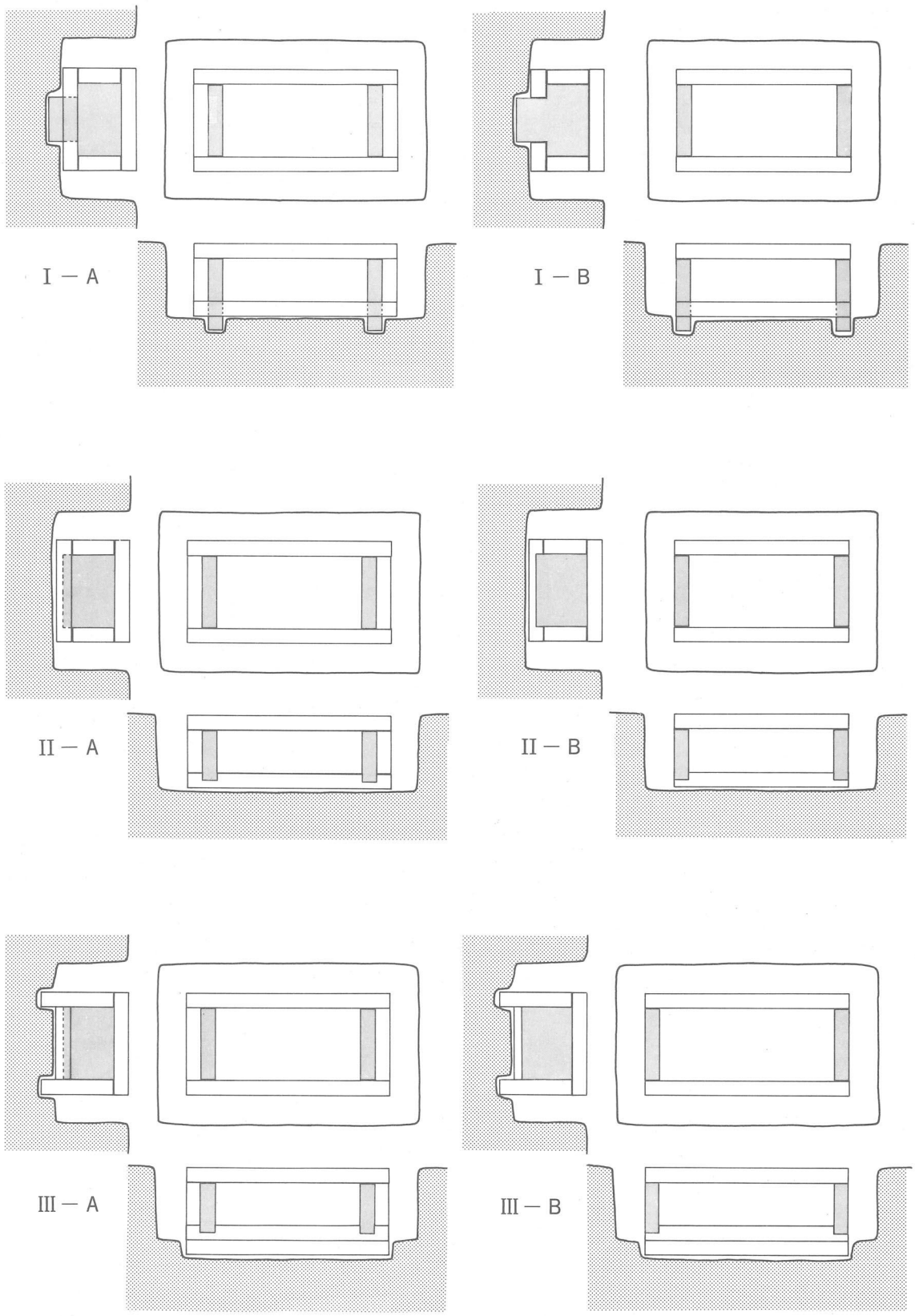
木棺墓のうち棺体の痕跡が認められるものについて、小口と側板の形態と特徴の視点から分類を試みる[(3)]。

まず、小口の様相から、木棺を大きく二分する。すなわち、小口はほぞ穴を加工した底板を貫通して立てかけられ、さらに壙底に溝状の穴を設けて、小口の固定をより強固にしたⅠ類と、小口は壙底はもちろん底板も貫通しないⅡ類である。

Ⅰ類は、小口が側板に挟みこまれて内に入り、側板が長軸方向に突出して、遺構検出時の平面プランが「H」状を呈するⅠa類と、小口と側板の四隅がそれぞれ接して箱形をなすⅠb類に細分が可能である。ただし、棺体検出時に棺内と裏込めの土層の相違から「H」状を呈している場合は、Ⅰa類である場合の他に、後に触れるⅡa類やⅢa類である可能性もあり、壙底の状況を知るまで判断はできない。またⅠa類とⅠb類以外にも、小口が側板を挟みこんで小口が短軸方向に突出する類型などを想定することもできるが、棺材が遺存していないために想像の域を出るものではない。Ⅰ類は、壙底を精査すれば、いずれも小口を挿入していた溝状の痕跡を明瞭にとどめているため容易にそれと知られるのであるが、遺構検出時に棺内と埋土の相違が明らかでない場合は、Ⅰa類とⅠb類の識別はにわかには判じがたい。なお、Ⅰa類を特定することはできないが、典型としてはSK115などがある。Ⅰb類の典型としてはSK126が挙げられる。

小口が底板にのるⅡ類も、Ⅰ類と同様にaとbに細分が可能である。棺体検出時に「H」状を呈するⅡa類と、同じく長方形の箱形を呈するⅡb類である。残存状況が悪く、削平が進んでいる場合には棺底の埋土の相違が長方形の箱形を呈するものがあるが、それが底板のみを検出したものであるならば、Ⅱa類であるかⅡb類であるかは識別が困難となる。完掘後の壙底には、溝状の痕跡がないことは言うまでもない。なお、Ⅱa類にはSK65、SK146、SK147、SK168、SK170、SK199がある。また、Ⅱb類の典型にはSK69、SK116、SK145、SK149、SK181、SK190、SK195があげられる。勾玉や管玉などの副葬品を大量に保有していたSK181とSK195は、いずれもⅡb類に帰属する木棺墓であった。

Ⅲ類とする木棺墓はやや特殊な事例である。これは側板が底板を挟みこんだもので、さらに側板を固定するために壙底に溝状の遺構を形成する。Ⅰ類では小口を固定する溝状遺構は墓壙の短辺に平行して



第27図　　木棺墓の分類模式図

認められたが、III類の場合では側板を固定するために溝状遺構は墓壙の長辺に平行して認められることになる。また、Ⅰ類とII類でみてきたようにａとｂに細分することができると考えられるが、識別は不可能であった。事例は少なく、ＳＫ194の１例を数えるのみである。

七日市遺跡で検出された木棺墓は、棺体が明らかなものが19基、また棺体が検出されないために類型が判別できないものや、墓壙の形態から木棺墓と推定されるものが27基であった。棺体が明らかなもののうち、Ⅰ類は５基、II類は13基(うちIIａ類６基、IIｂ類７基)、III類１基である。その占める比率は、総数46基に対しては、Ⅰ類は10.9%、II類は28.2%（うちIIａ類13.0%、IIｂ類15.2%)、III類2.2%となり、また棺体が明らかな19基に対しては、Ⅰ類は26.3%、II類は68.4%（うちIIａ類31.6%、IIｂ類36.8%)、III類5.3%となる。

(2) 木棺墓の時期

木棺墓の時期を決定できる土器はほとんど出土していない。例えばＳＫ119からはⅠ期からII期の土器、ＳＫ76、ＳＫ107、ＳＫ115、ＳＫ162、ＳＫ195からはわずかにIII期からIV期の土器が検出されているが、いずれも混入と判断しておく方が無理のない状況である。木棺墓の時期については、推定の域を出るものではないが、III期からIV期にかけては遺跡の北方に方形周溝墓群が形成されていること、そしてわずかに残されたガラス小玉や勾玉、管玉などは概ねＶ期からVI期にかけての所産であることから判断して、Ｖ期からVI期にかけて構築されたと想定しておく。

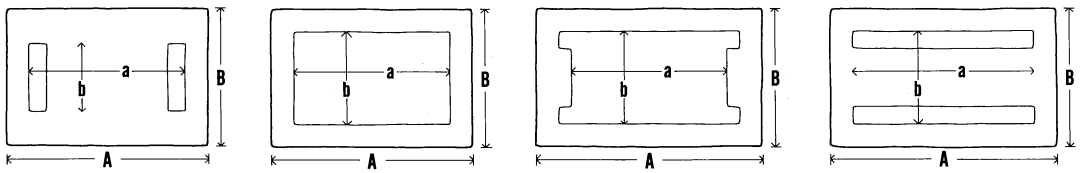
(3) 木棺墓の規模

検出された木棺墓の墓壙と棺体の法量を比較することにする。

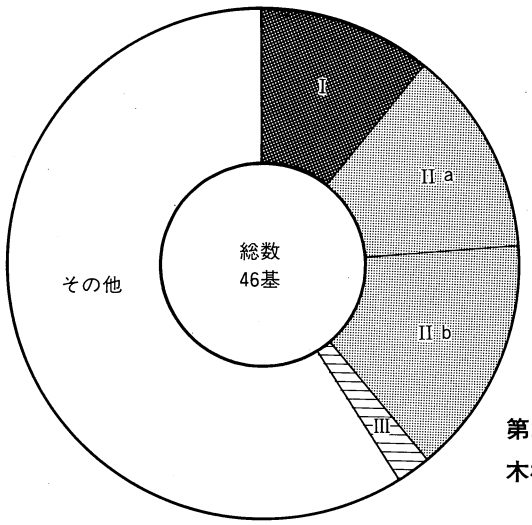
墓壙は、長方形の長軸の長さをＡ、短軸の幅をＢとする。また棺体は第28図のように測定し、長軸の長さをａ、短軸の幅をｂとする。ただし、後者の場合、厳密には棺体の内法を示すものではないし、先に触れたように小口と側板の組み合わせ如何によっては正しい数値を提示するものではない。いずれにしても、棺体の規模を考慮する上では大きな影響はないものとみなし、以下この数値を援用して検討を加えることにしよう。

まず、Ⅰ類の法量は墓壙と棺体ともに比較的まとまりを示していることが特徴である。墓壙の規模は長さ1.60mから2.35mの範囲に、幅は0.55mから1.30mの範囲におさまり、ＳＫ71を最小として、ＳＫ126を最大としている。棺体は計測可能な４例をみれば、長さは1.35mから1.70mにおさまる。一方、幅に関してはすべて0.50mを計った。

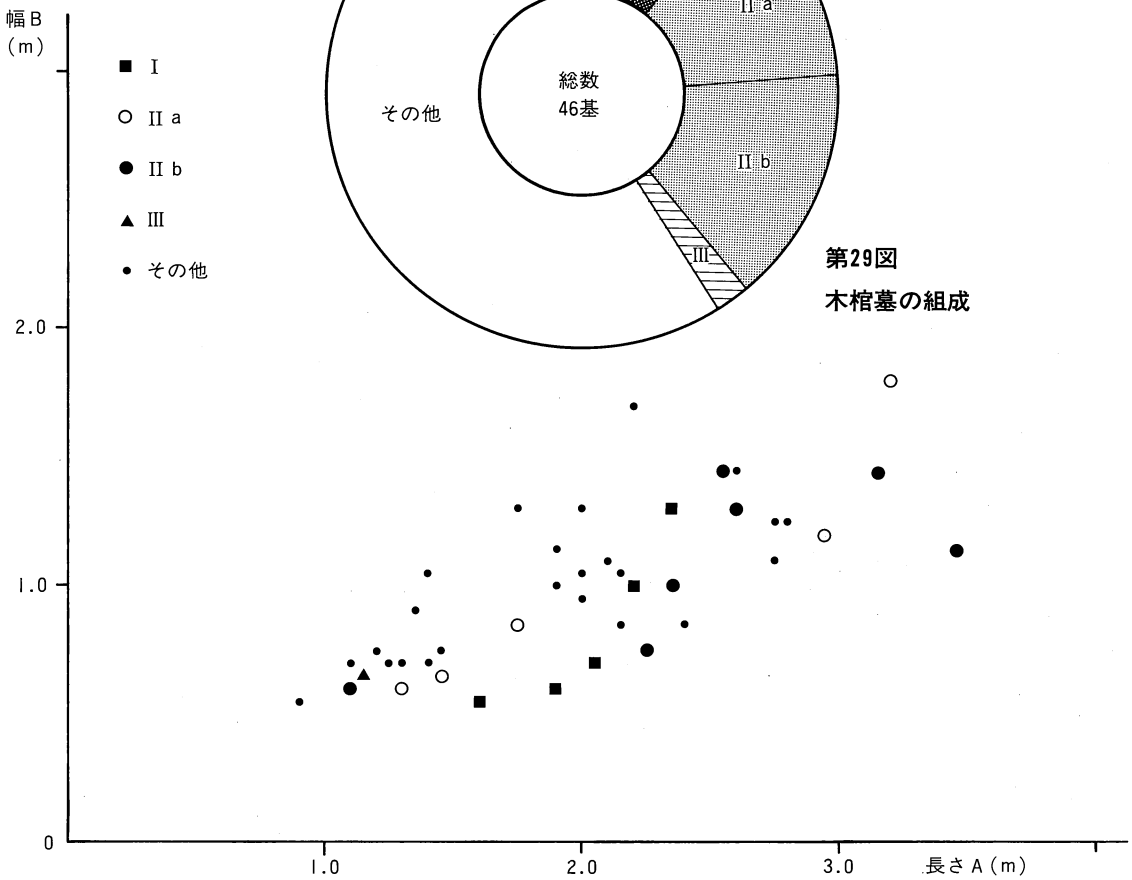
II類は法量のばらつきが著しい。墓壙については長さは1.10mから3.45mの範囲に、幅は0.60mから



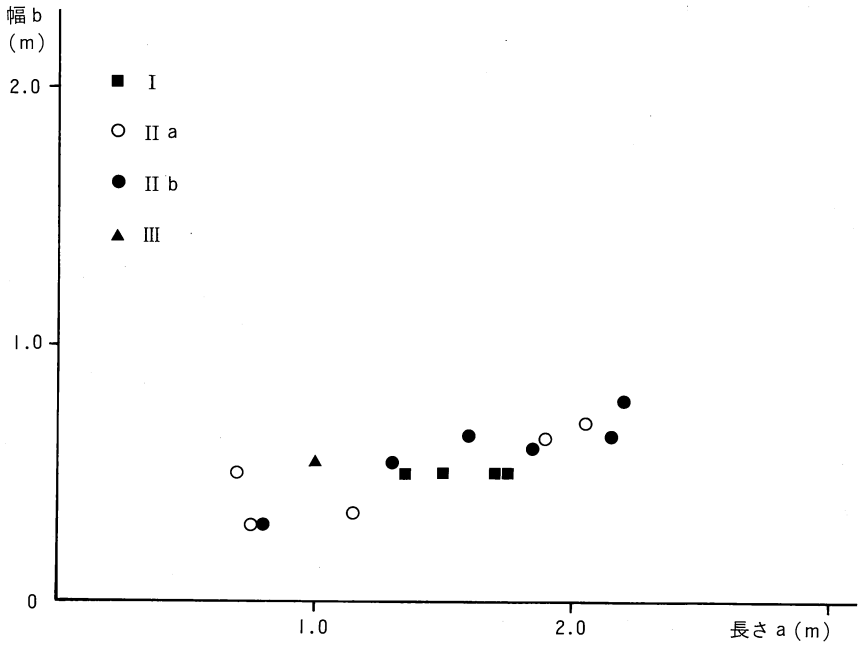
第28図　木棺墓の法量計測位置



第29図
木棺墓の組成



第30図　墓壙の長さと幅



第31図　棺体の長さと幅

1.80mの範囲にある。これはII類の示す墓壙の法量が、計測されたI類の分布領域をとりこむ形で広い範囲に、かつ散漫に存在することを表している。また法量に関してはIIa類とIIb類に独自の特徴を見出すことはできず、両者の相関も認められない。棺体の法量に関して、長さの数値は0.70mから2.20mの範囲にあり、ばらつきが大きく、墓壙の数値と同様の傾向を示していることがうかがえる。一方、幅は0.30mから0.80mの範囲におさまり、数値の振幅が大きいとは言えない。つまり、棺体の数値は長さについては変動があるが、幅については格差はさして大きくないことを示していると推定することが許されるのかもしれない。

III類については、SK194の1例のみであり詳述はできない。ただしその数値は、I類とII類の法量分布の中で比較すれば、墓壙・棺体ともに小型の範疇に入ることは確実である。

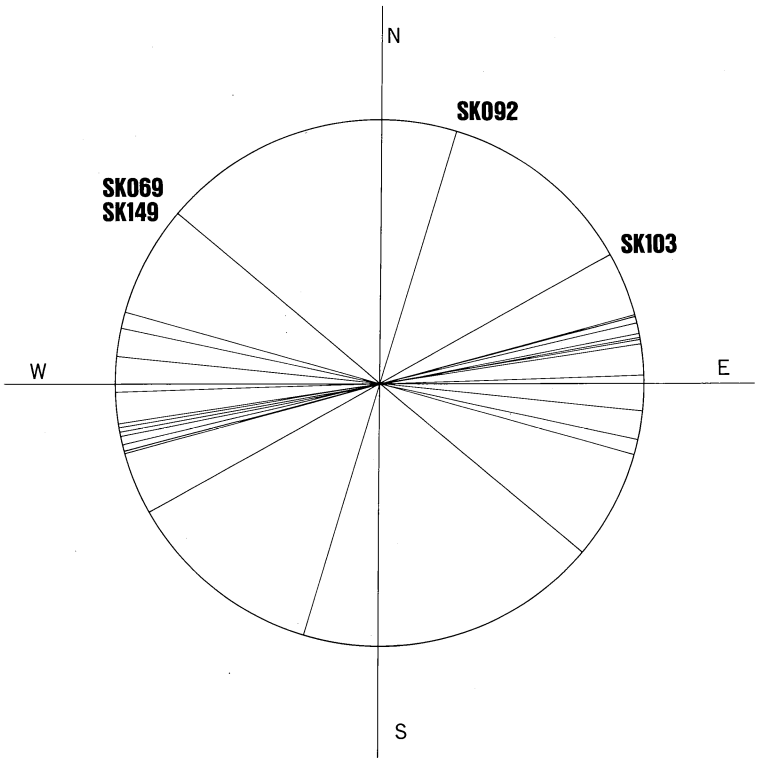
さて、以上のように木棺墓の規模を比較した場合、墓壙の法量よりも、棺体の法量にわずかながらの規則性を知ることができる。すなわち、棺体の法量は幅（b）の変動は小さく、長さ（a）の変動が大きいのであって、この棺体の長さをもって木棺墓の規模の大小を検討することができると想定される。棺体は、直接的に埋葬される遺体を覆う施設であり、その遺体の大小によって棺体の規模が決定されることは当然のことである。換言すれば、先に想定したように木棺墓の規模が棺体の長さによって表現されるものであるならば、それは被葬者の身長を反映したものに相違ないと考えられる。

そこで木棺墓の規模を比較する場合、棺体の長さが1.20mをもって一応の指標としておきたい。もちろんこの数値以上が大人で、以下が小児と単純に分離できるほど問題は容易ではない。ここでは大型と小型を分けるための仮の基準とする。同様に木棺墓の墓壙をみたとき、その長さが1.80mをもって大型と小型に分離することが可能であり、小型の棺体は小型の墓壙に、そして大型の棺体は大型の墓壙に対応している。至極当然のことのようではあるが、大型の墓壙に小型の棺体を葬ることはないのである。また、大型の墓壙の規模は数値の差異が大きいが、そこに埋葬される棺体については数値のばらつきは墓壙のそれに比べて大きくない。このとは、棺体の規模には格差が比較的少ないとした先の結論の傍証ともなりえよう。

(4) 木棺墓の主軸方位

棺体が検出された19基の木棺墓について、その埋葬主軸方位に関して若干触れておくことにする。

その際の主軸方位とは、小口の中点をそれぞれ結んだ直線が磁北に対してなす角度をさす。ただし、頭位については、人骨が残存していないため明確にしがたい。副葬品の位置によって頭位を類推でき



第32図　木棺墓の埋葬主軸方位

たものは2基を数えるのみであった。

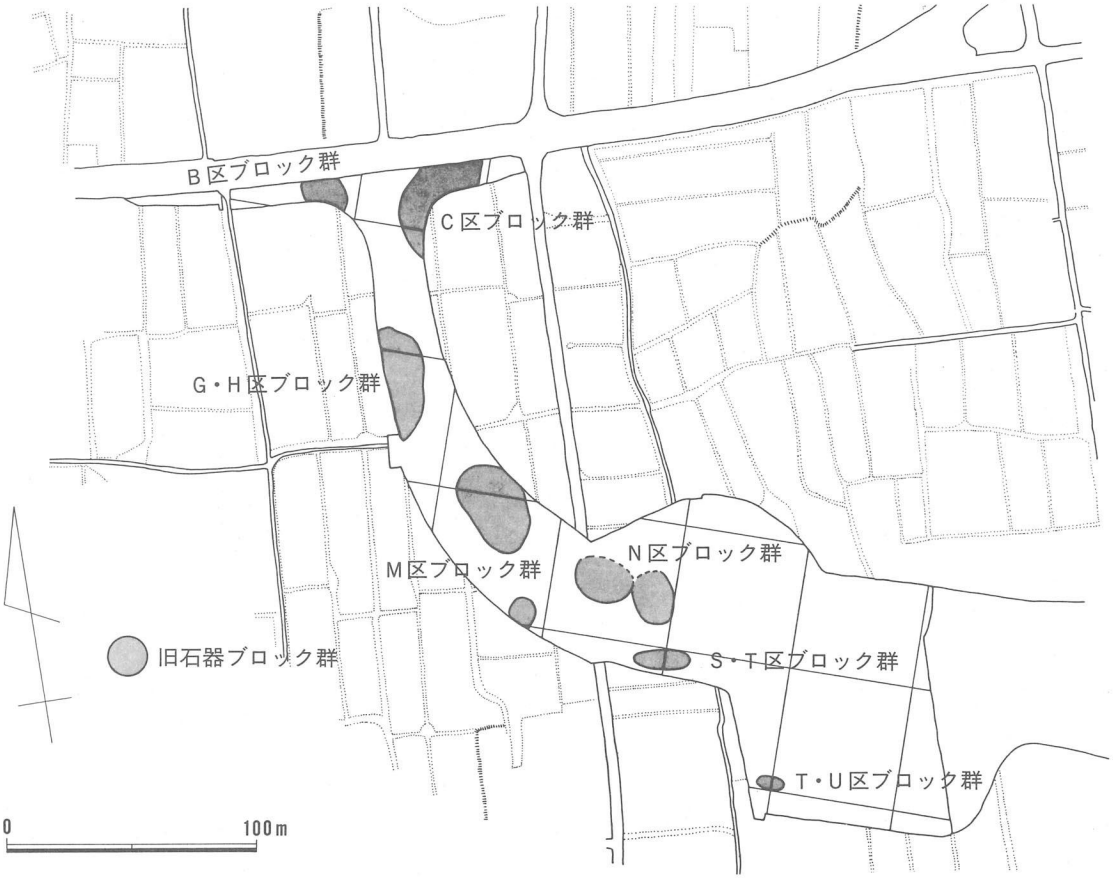
そのようにして設定した主軸方位を図化したものが、第32図である。これからうかがえることは、ＳＫ69、ＳＫ92、ＳＫ103、ＳＫ149を除く15基の木棺墓の主軸方位は、ＳＫ147のように東から16°北偏する方向と、ＳＫ126のように東から16°南偏する方向に収束することが明らかである。つまり、19基の木棺墓のうち79％に相当する15基の木棺墓の主軸方位は、南北へ32°の振幅をもつものの、ほぼ東西方向を示すことになる。

さて、埋葬頭位については結論は差しひかえたい。副葬品から頭位を推定できた木棺墓のうち、ＳＫ181はＮ－81°－Ｅを示し、ＳＫ195はＮ－78°－Ｅを示している。いずれも、方位はおおよそ東西方向に持つ木棺墓である。しかし、前者は西に、後者は東に頭位を想定することが可能であり、このことは主軸を同じくする木棺墓であっても、頭位は一定ではないことを表しているのであろう。

第３項　　遺構の変遷

次に、時期別の遺構の平面的な変遷について概観しておきたい。

七日市に生活の足跡が刻まれたのは、旧石器時代にさかのぼる。この時期の遺構と遺物が認められる地区は、調査区の西部、扇状地および埋没段丘Ⅳにあたる。このうち埋没段丘Ⅳは遺跡地のほぼ中央部にあたり、南から張り出した舌状にのびる微高地に該当する。この段丘からは、Ｎ区ブロック群、Ｓ・Ｔ区ブロック群、Ｔ・Ｙ区ブロック群が検出されている。さらに、Ｍ区では埋没している開析谷を避けて、Ｍ区ブロック群が広がる。こうした埋没段丘に位置するブロック群の西には扇状地が形成され、比



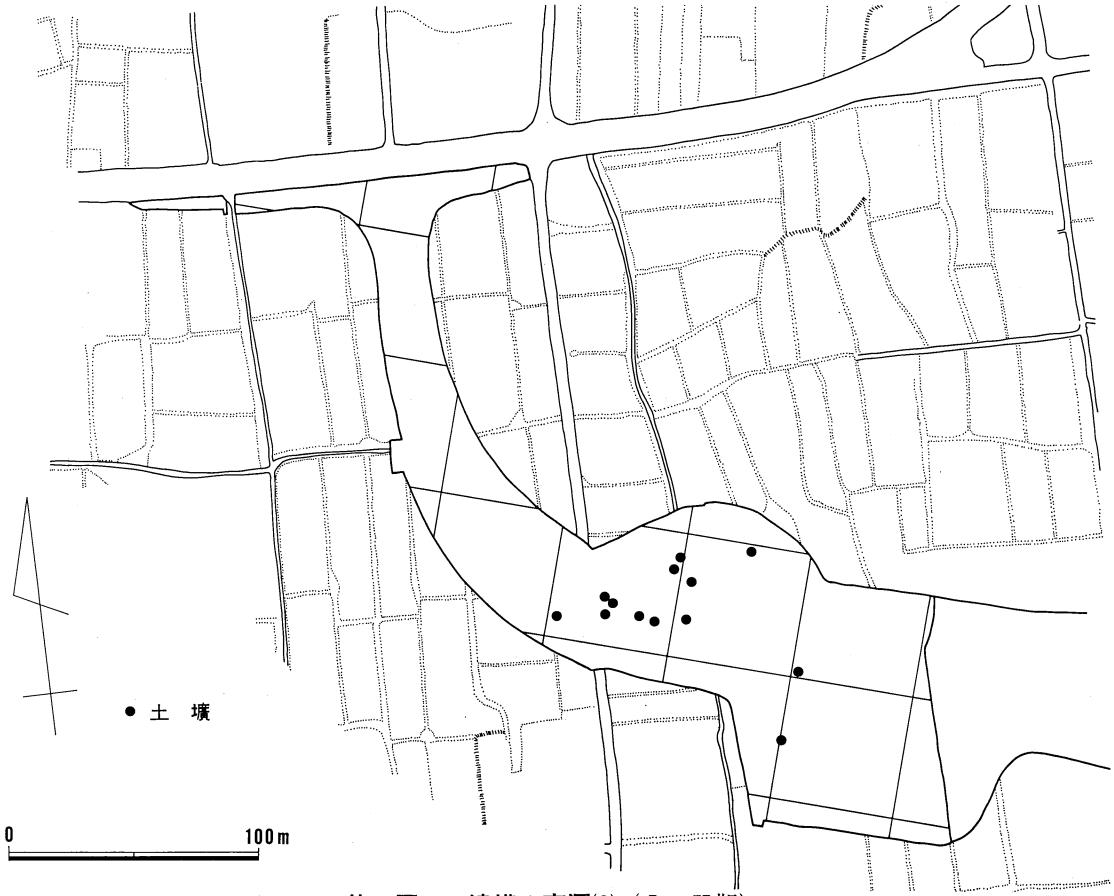
第33図　　遺構の変遷(1)（旧石器時代）

較的微起伏に富んでいる。この中には、埋没微高地が点々と確認されるが、旧石器時代の遺物はこの埋没微高地の上にのることになる。すなわち、B区ブロック群、C区ブロック群、G・H区ブロック群がそれに該当する。そして、この旧石器遺物包含層を被覆するように、姶良Tn火山灰が降灰しているのである。

その後、有舌尖頭器の出土が確認されるものの、当該期の遺構は何ら検出されてはおらず、七日市遺跡では縄文時代の空白期を迎える。

再び遺跡地に遺構が構築され、遺物が残されるのは、弥生時代に入ってのことである。この時期の遺構の変遷を追求するためには、時間区分をより細分してその変化を確認する方法が最良であることは論を待たない。しかし繰り返し述べたように、七日市遺跡では遺構の時期を厳密に比定することは困難であるため、Ⅰ～Ⅱ期、Ⅲ～Ⅳ期、Ⅴ期、Ⅵ～Ⅶ期と大別して、遺構の変遷を辿ることにしたい。それぞれの時期は、Ⅰ～Ⅱ期が弥生時代前期から中期初頭にかけて、Ⅲ～Ⅳ期が中期中葉から中期末にかけて、Ⅴ期が後期、Ⅵ～Ⅶ期が古墳時代初頭から前期にかけて、ほぼ該当するものと考えて大過ない。

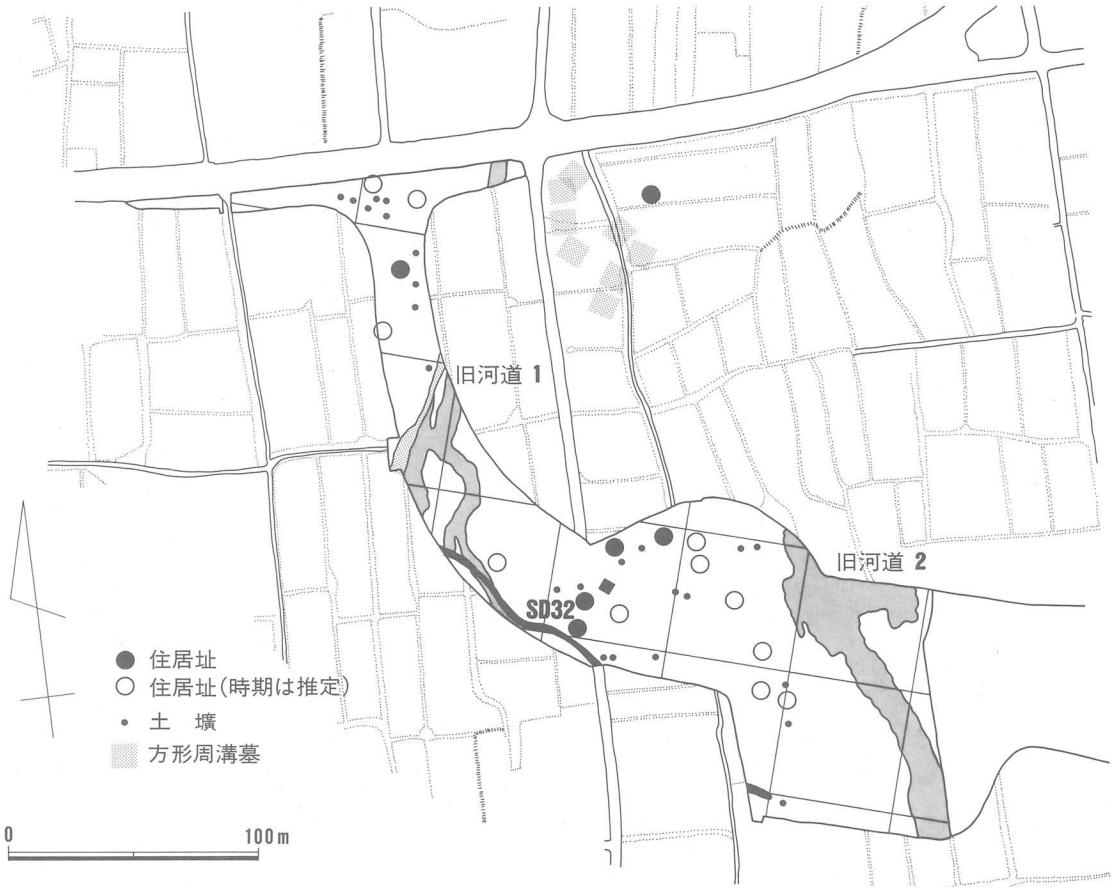
さて、Ⅰ～Ⅱ期にかけての遺構は、N区とO区に集中し、P区、T区、U区にも広がる。調査区のほぼ中央部にあたり、旧石器時代の包含層が存在する埋没段丘Ⅳに該当する。先にも触れたが、この段丘は南からのびる微高地を形成しており、弥生時代前期以降この場所が生活域として選択されたのである。遺跡西部の扇状地には当該時期の遺構は検出されておらず、また東部の旧河道もこの時には形成されていないと考えられる。この時期に形成された遺構はいずれも土壙のみである。ただし、それらの中で確実に墓であると断定できる資料は見当たらない。そうした土壙は比較的散慢な分布状態を示しており、けっして密度が高いとは言えない。また、当該時期に比定できる確実な住居址は、確認されていない。



第34図　遺構の変遷(2)（Ⅰ～Ⅱ期）

集落の立地として好んで微高地が占有されることを考慮に入れるならば、この時期の住居址は調査区のさらに南の舌状にのびる微高地の基部あたりに存在する可能性が高いと想定される。その付近は現地表の標高が85～86mを示し、幅約100m前後の比較的平坦な面が広がっている。住居址を営むとすれば、この場所が最適と考えられるのである。おそらく、この部分が七日市遺跡の中心に位置すると類推され、当該時期以降も、営々と集落が形成されてゆく際の「核」に相当する部分にあたるのであろう。

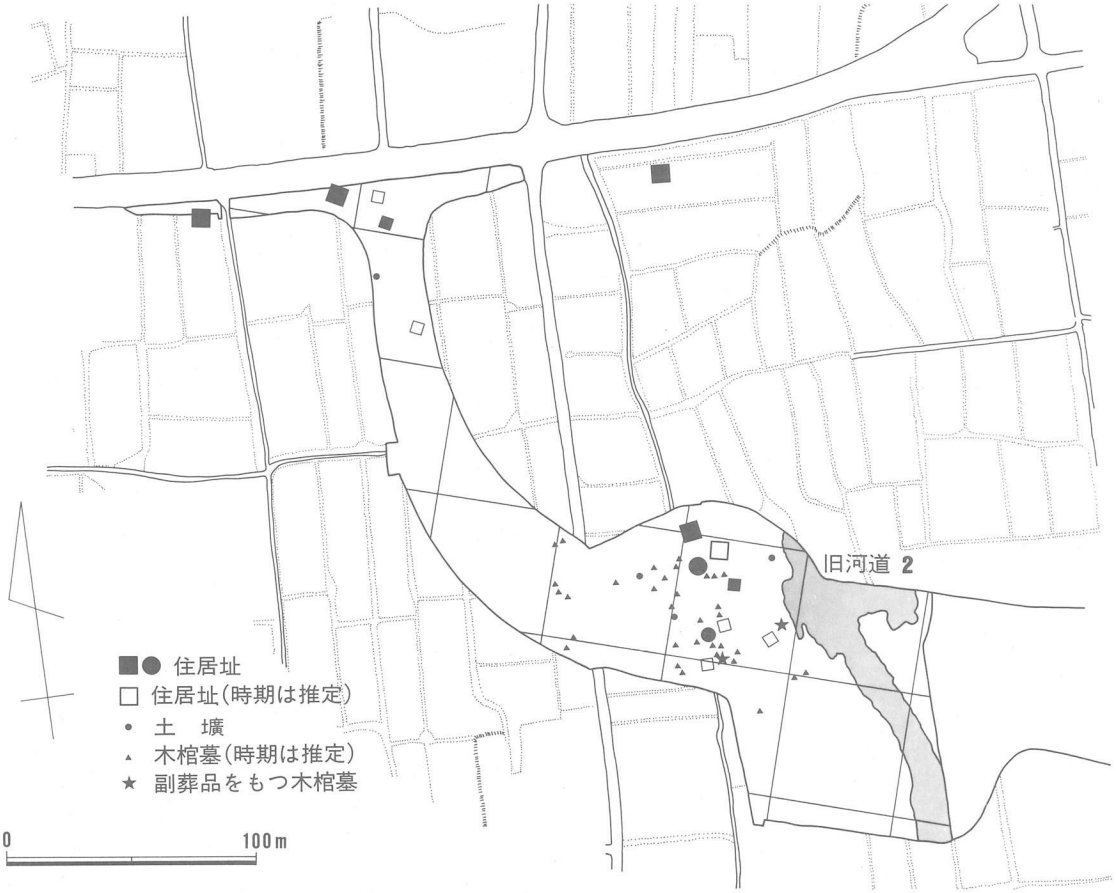
Ⅲ～Ⅳ期にいたり、遺構と遺物は質・量ともに爆発的に増大し、そして面的にも拡大する。集落の中央部を流れる旧河道１と、集落の東を画する旧河道２は、この時期に形成されたものである。なお、旧河道２以東の埋没段丘Ⅴには、遺構・遺物は何ら検出されていないことが、1982年の調査で確認されている。住居址は円形住居址を主として営まれる。埋没段丘Ⅳにあたる調査区中央部のＮ区とＯ区に集中するが、さらに前代には遺構が確認されなかった西部の扇状地にも、旧河道１を越えて住居址が営まれることになる。また、円形住居址どおしの切り合いは、ＳＢ20とＳＢ21で認められるのみであり、その他の住居址では例がない。Ⅲ～Ⅳ期と比較的長い時間軸を設定したにもかかわらず、住居址の密度は高いとみなすことはできず、むしろ間隔を保ちつつ数棟の単位で住居址のまとまりがあったことが想定される。旧河道１は分流しつつ北に流れ、あたかも集落を南北に分断するごとくにみえる。さらに、ＳＤ32も旧河道１に沿うように築かれた、幅1.5～2.0mの大規模な溝である。この溝は調査区南端のＴ区とＷ区の境界にまで延長していると類推されるが、そうであるならば、その規模から考えて集落を区画する意義を認めてもよいかもしれない。いま仮に、旧河道１とＳＤ32を境界として、その西を西部地区、そしてその東を東部地区と呼ぶことにする。次に掘立柱建物跡をみるとき、いずれも西部地域に集中している。もちろん、第３章で述べたように、西部地区では奈良・平安時代の遺構との重複がないた



第35図　　遺構の変遷(3)（Ⅲ～Ⅳ期）

めに、掘立柱建物跡の検出が容易であったという条件が前提として存在することも事実である。このことをもって、東部地区に掘立柱建物跡が構築されなかったと断定するものではないが、とりあえず西部地区でのみ確認できたことを強調しておく。また、これら掘立柱建物跡の帰属時期は、土器が検出されないために不明であると言わざるをえない。しかしその出現の上限を、該期に置くことには問題はなかろう。また、1981年の圃場整備事業に伴う発掘調査では、D区に相当する国道176号線の南で、少なくとも８基以上の方形周溝墓が確認されている。今回の調査では方形周溝墓が検出されていないことを考えると、その位置が方形周溝墓を主体とする墓域であったことが明らかとなるのである。この場所は、南からのびる舌状の微高地の先端部にあたり、ここを墓域と選定していたことがうかがえる。さて、当該時期の土壙のうち木棺墓と推定されるものも、わずかに認められる。それは棺体を検出したものではないが、ＳＫ71、ＳＫ240などは墓壙からⅣ期の土器を検出している。なお、これら以外にも時期の詳細が不明な木棺墓は、いずれも東部地区に限定して発見されていることも大きな特徴と言えるであろう。あえて述べれば、このⅢ～Ⅳ期には方形周溝墓を主体とする墓域をＤ区に選定し、わずかに確認される木棺墓は東部地区に分布するのであって、この時期以降には東部地区を木棺墓を主体とした墓域を形成してゆくことになるのである。

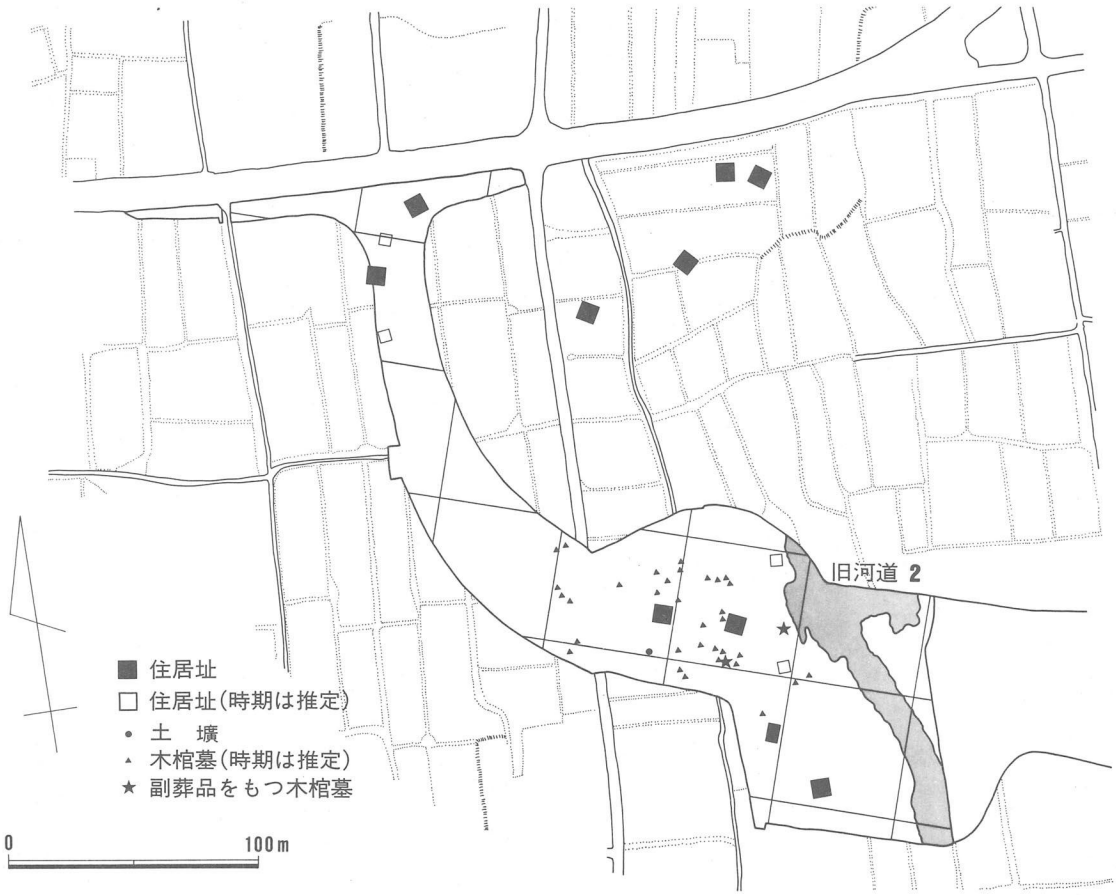
続くＶ期は、住居址は一部に円形のものが存在するが隅円正方形のものが主体を占めるようになる。ただし、住居域は前代と同様の広がりをもっているようであり、そこに差を認めることはできない。なお、前代には方形周溝墓群を形成していたＤ区は、この時期には墓域としては消滅することになる。そして、その地区には当該時期の住居址が拡散していることも看過できない。またここで特徴的な現象は、前代には住居域を分断する役割をもっていた旧河道１とＳＤ32が埋没してしまうことにある。このこと



第36図　　遺構の変遷(4)（Ｖ期）

によって、東部地区と西部地区を区画する障害物は払拭されることになり、旧河道２の西にほぼ一様に住居址が展開することになる。ただし、埋没した旧河道１とＳＤ32の近辺に住居址が築かれることはないようである。木棺墓は前代と同様に、確実に該期に帰属するものを抽出することは困難である。しかし、多くの木棺墓はこの時期に営まれると想定されるため、第36図では推定されるすべての木棺墓を記入している。これによれば、住居域は中央部のみならず北部のＢ区やＣ区にも拡散しているが、墓域は先に東部地区と仮称したＮ区とＯ区に集中して分布している。前代と比較すれば、方形周溝墓から木棺墓への墳墓の形態に変化が認められるだけではなく、墓域も南へ移動していることが判明するのである。たとえ木棺墓の時期を次のⅥ期に比定するとしても、木棺墓と住居址はこの地区で重複して営まれることになり、このことも大きな特徴とも言えよう。すなわち、生活域と墓域の空間的な分化が未発達であり、両者は東部地区で領域を共有することになる。また、管玉やガラス小玉・勾玉などの装飾品を比較的多量に副葬した木棺墓のＳＫ181とＳＫ195がこの時期の所産であるとするならば、住居域と墓域のほぼ南東端に位置することになる。なお、この時期には旧河道２の出土遺物を除き、遺物の量が激減することも指摘しておきたい。

Ⅵ～Ⅶ期は、旧河道２が北流し、その西に遺構が展開している点に関して前代との大きな差は認めがたい。1981年の調査では、方形周溝墓群の近辺にも当該時期の住居址が検出されており、集落としての広がりはかなり大きいものと推測される。ただし、比較的時間幅を長く見積もっているにもかかわらず確認された住居址の数は少なく、１棟あたりの存続時間を考慮すれば、かなり散漫な分布であることは否定できない。なお、この時期の住居址には竈が付設された例は検出されてはいない。竈の出現の直前期に、集落としての機能が廃絶することを物語っている。さて第37図では、前代と同様に木棺墓と想定



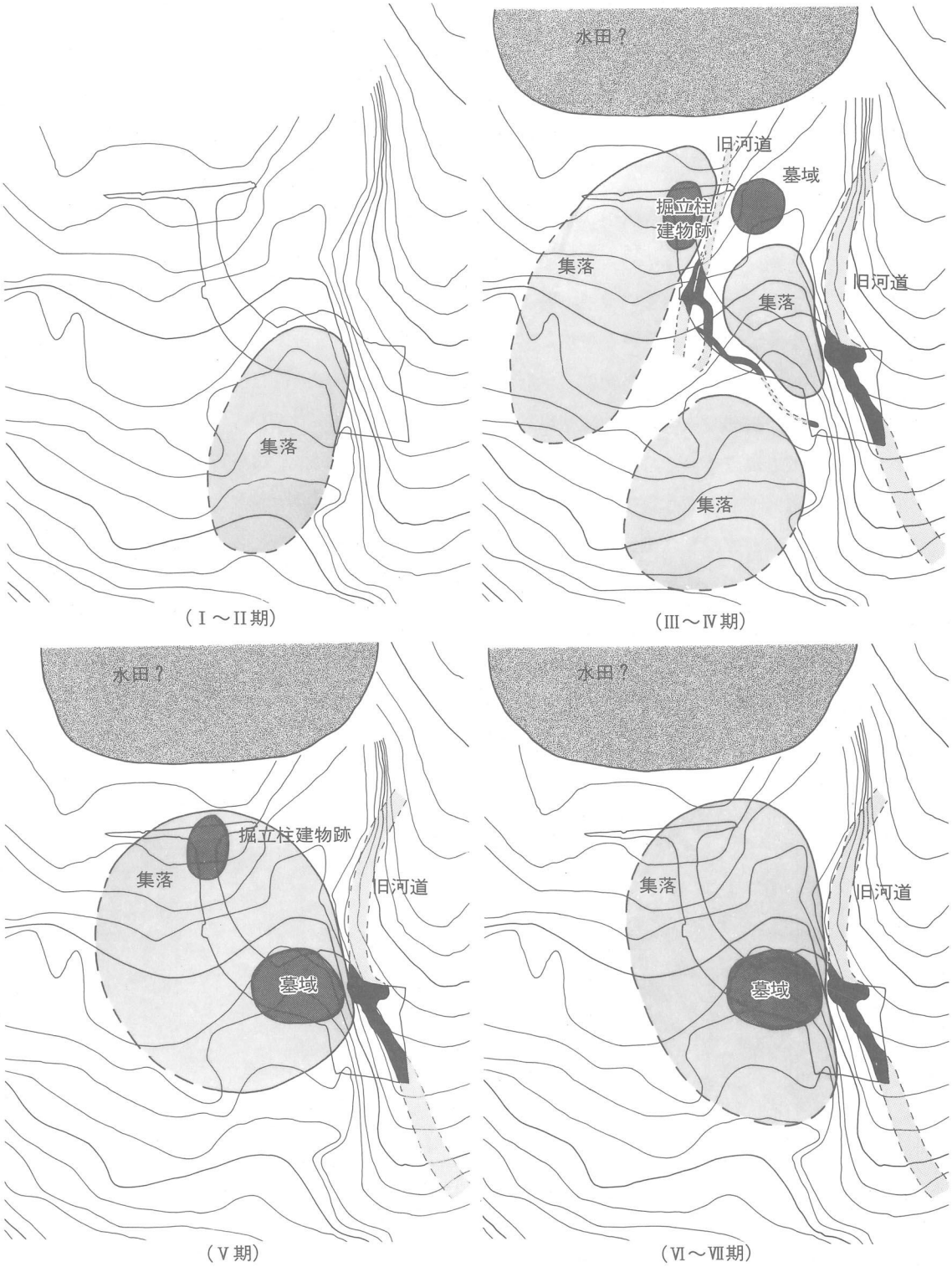
第37図　　遺構の変遷(5)（Ⅵ～Ⅶ期）

される遺構を記入しているが、それらのすべてが当該時期の墳墓であるとは断定できない。先にも指摘したように、西部地区と仮称した位置には木棺墓は築造されないことを確認しておこう。ここで、豊富な副葬品を所有する木棺墓のＳＫ181とＳＫ195をこの時期と仮定すれば、それらは住居域の範囲内に内包されることになる。

この後、須恵器の出現以前に集落は消滅することになる。七日市遺跡ではこの空白期間を経た後、旧河道２から６世紀代の須恵器が検出されるものの、おそらくは流れ込みの資料であって、確実な遺構は確認できない。遺構が検出されるのは、７世紀代に入ってのことであり、確実には奈良時代以降の所産のものである。

奈良・平安時代になって、遺跡は再び盛期を迎えることになる。詳細は『七日市遺跡（Ｉ）第３分冊』において報告されることになるが、この時期の遺構の分布についてのみ簡単に触れておこう。この時期にも、旧河道２は活動を停止していない。新たに、Ｍ区の東に、ほぼ南北方向に流れるＳＤ33と37が開削されることになる。掘立柱建物跡を主体とする当該期の遺構は、ＳＤ33と37と旧河道２の間の空間に立地することになる。この地区は、先に述べた東部地区、すなわち埋没段丘Ⅳに該当する。そして、仮称西部地区には、当該期の遺構・遺物は検出されないのである。今回の調査以外にも、圃場整備事業に伴う調査においても近辺で多くの遺構が確認されている。それによれば、Ⅲ～Ⅳ期にかけて方形周溝墓群が形成された地区でも掘立柱建物跡が検出されているし、また調査区の南部で実施された調査では、総柱の掘立柱建物跡が確認されているようである。こうしたことから、この時期の遺構の広がりは、旧石器時代、弥生時代前期、弥生時代中期の墓域・住居域が立地する舌状の微高地に位置することになり、旧河道２以西の南北に広い地域に広範囲に分布するものと考えられる。

第38図　遺構の変遷(6)（奈良～平安時代）



第39図　　遺構の変遷模式図

第2節　遺　　物

第1項　土器について

(1)　土器の編年試案

くりかえし述べたように、七日市遺跡出土の土器は遺構単位の一括性と共時性を保障することについては難点が多い。また、そのような作業を行うことが可能な遺構出土資料はごく一部に限定されている。このため、共伴関係や層序関係から相対的な編年をおこなうことは危険である。したがって、編年を試みるためには土器の型式学的な検討のみが残された有効な手段となる。

以下では、出土土器をⅠ期からⅦ期に大別し、その様相を概述してゆくことにする。

Ⅰ　期

ほぼ第Ⅰ様式に該当するが、確実な篦描沈線文を施すものは認められない。また出土量はきわめて少なく、実体に迫れるものではない。

出土した器種は、壺と鉢に限られており、甕や高杯などの構成を知ることはできない。器種の分化も未発達であると考えられる。

壺の形態は、頸部が大きく開く壺A_1である。口縁端部は丸くおさまり、頸部に貼り付け突帯を4条めぐらせるものや、広い段の上に多条の篦描沈線文を施すものがある。

鉢は、口縁部が外反する大型のもので、その下方の相対する2方に瘤状の把手を付加している。第Ⅰ様式の後半に発達する器種と言われている。

甕は、如意形を呈し胴のあまり張らない体部から口縁部が短く屈曲するもので、口縁端部にはヘラ状工具による刻み目を施すものがあるが、確実にこの時期に帰属するものとは言えない。

以上は資料の制限は否めないものの、第Ⅰ様式後半以降の時期を与えてよいものと思われる。とりわけ、近辺では貼り付け突帯を施した壺は類例が少なく、今後の位置づけが重要となろう。また、現有の資料のなかには、貝殻施文は認められなかった。

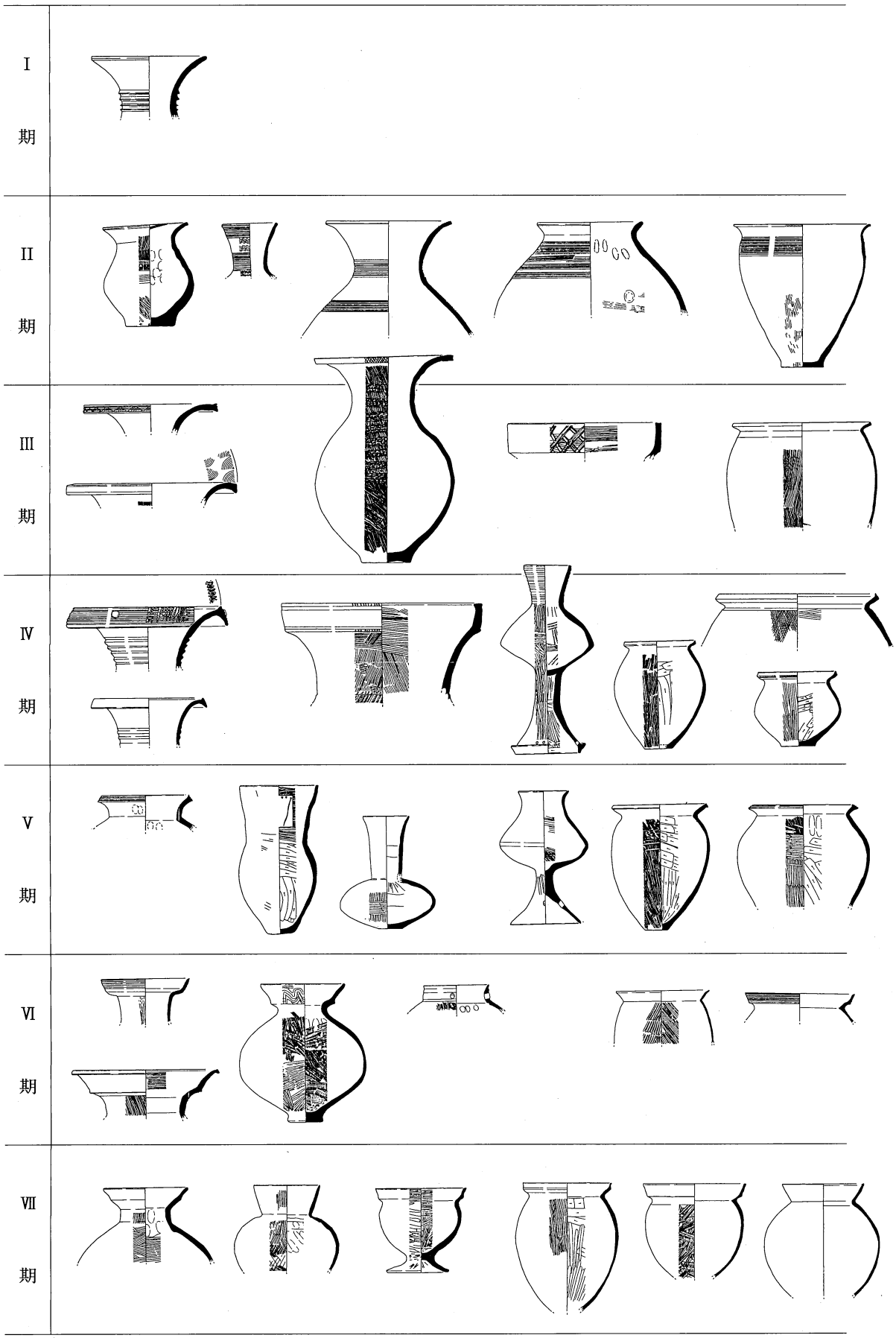
Ⅱ　期

櫛描文を多用することを指標のひとつにおき、第Ⅱ様式に並行すると考えて大過ない。出土量はⅠ期に比べ増加するが、豊富な量とは言えない。

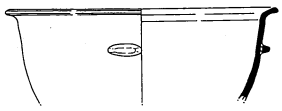
出土した器種は、壺と甕に限られており、高杯や鉢などの構成を知ることができないことはⅠ期の様相と変わりない。

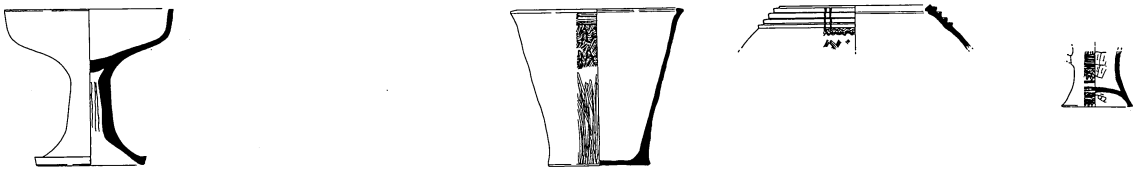
壺は、壺A_1と分類したもののなかに広口壺や短頸壺がある。小型のものと大型のものの2種が認められ、いずれも口頸部境界は不明瞭である。体部の上半部には櫛描直線文と櫛描波状文を施す。口縁端部にヘラ状工具による刻み目を施すものもみられる。また、口頸部に櫛描の直線文と波状文を交互に配する細頸壺もある。

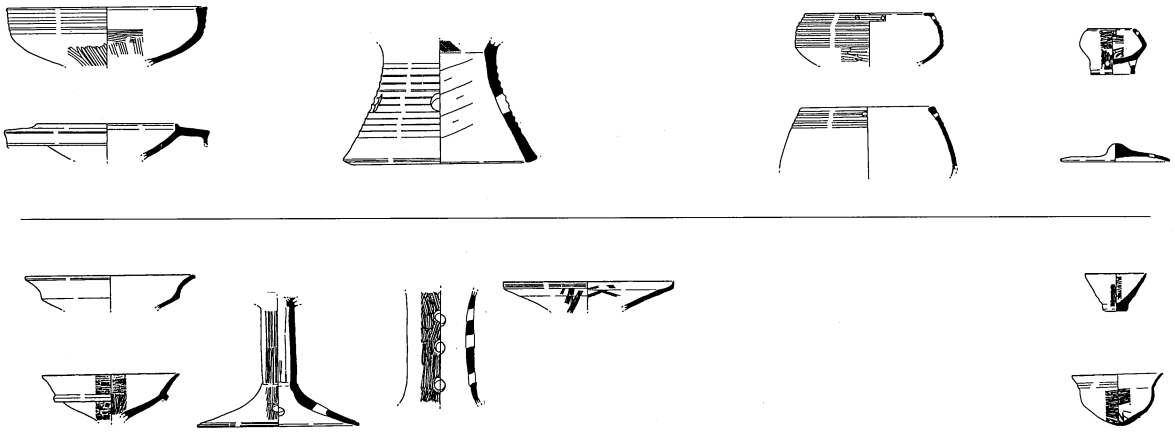
甕は、甕Aと分類したものに限定される。口径はいずれも25cm前後で、器高が知られるものでは24.4

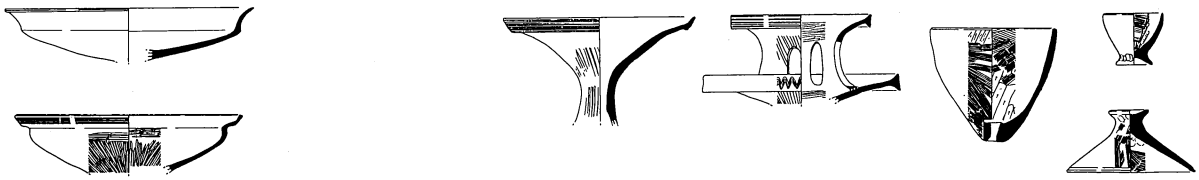


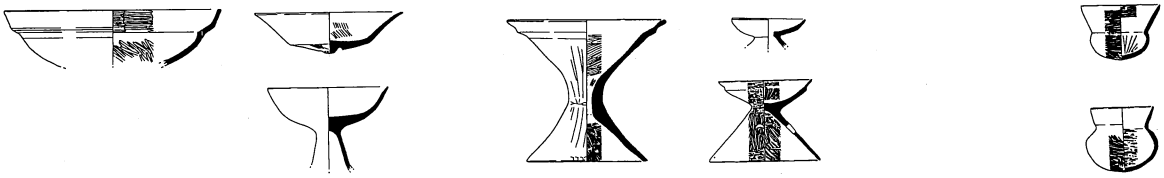
第40図　　土器編年試案











cmである。胴部が張るものは最大径が高い位置にあるが、口径を凌ぐまでにはいたらない。口縁部下を複帯構成の櫛描直線文や櫛描直線文と櫛描波状文で加飾するものが一般的である。また、櫛描文の単体構成のものもあり、その点を指標としてII期を前後に細分することも可能かもしれない。口縁端部にヘラ状工具による刻み目を施すものもみられる。

この時期の甕には、地域性が反映されると説かれるところである。七日市遺跡のII期の甕からうかがえる特徴は、頸部以下を櫛描文で飾ることにあり、播磨・摂津・丹後などに確認されるいわゆる「播磨型」[5]の範疇に含まれるものと思われる。

III 期

ほぼ第III様式に該当するが、そのうちでも凹線文が出現する直前の古相を呈するものを抽出する。この時期から器種の増加や分化がすすみ、出土量も増加してゆく傾向にある。

器種は、壺と甕に鉢と高杯が加わるが、器台はみられない。特殊な器種として、把手付の「ジョッキ」形土器があげられる。

壺は、広口壺の壺Aを主体として、このほかに壺Bと無頸壺に属する壺Fが登場する。壺AはII期の特徴を保持したまま、さらに発達した形態をとどめるもので、球形の胴部から頸部が長く開き、口縁部はA_1の特徴を示すものである。このほかに、壺A_2と壺A_3も確認できる。総じて、器表は刷毛目調整ののちに櫛描文を飾るものが多い。口縁部内面に櫛描波状文で装飾する手法が定着し、口縁端部も扇形文、篦描による格子文や鋸歯文、刻目文、さらに円形浮文が施されるものが散見される。頸部には貼り付け突帯をめぐらせるものがあるが、例は多くない。また、口縁内面に貼り付け突帯をもつものも出現する。播磨地方からの搬入品か、その影響下で製作されたものと考えられる。壺Bは口径が25cm前後で、続くIV期の同種の壺に比べて小ぶりである点が特徴である。立ち上がる口縁外面に格子文を施すものもみられる。壺Fは口縁部に貼り付け突帯を数条めぐらせたのちに、棒状浮文を付加し、さらに櫛描波状文を施すものもある。

甕は、甕Aにかわり口縁部が「く」字状に屈曲する甕Bが主体を占めるようになる。口縁部はB_1に分類されるものと、B_2に分類されるものが混在している。全体に器壁を薄く仕上げる傾向にあり、体部最大径が大きくなるとともに長胴化も進展しつつある。一部のものに櫛描文を残すが、壺と比較して無文のものが多く、器表を刷毛目調整で仕上げたままのものが中心となる。この時期には、口縁部の数個所を押圧して波状を形成する甕が存在することも確実である。

鉢と分類したが、想像される使用方法からは甕とみなしてよい土器もこの時期に帰属するものである。口縁部下には、櫛描直線文と櫛描波状文を丁寧に施したものである。

高杯はまず高杯Aが登場する。口縁端部は単純におさまり、肥厚することはない。口縁外面に扇形文を施すものや、無文のものもある。明らかにこの時期に帰属すると考えられる高杯Bの資料には恵まれなかった。

把手付の「ジョッキ」形土器は、上げ底で丁寧な作りである。器表が櫛描の直線文と波状文で加飾された土器で、播磨西部で散見される器種である[7]。

IV 期

凹線文の段階に相当する。櫛描文と凹線文が併用されるものや、凹線文が退化し、減少してゆく傾向

を示すものも含まれるため、将来は細分されることが予測される。第III様式の新しい様相のものと、第IV様式を包括する時期と考えられる。出土量は最も多くなり、器種の増加と分化はIII期にみられた以上に進み、構成は充実する。

器種は、壺、甕、高杯、鉢、器台、蓋など大半のものが出現する。

壺は、広口壺、直口壺、短頸壺、無頸壺のほかに脚付の細頸壺や、便宜上この範疇に含めた水差形土器などがあり、器種の分化が最も著しい。壺Aでは、A_1とA_2はほとんど消失したようであり、かわってA_3とA_4が主体となる。発達した口縁部には凹線文が施されるようになり、その上から篦描斜線文、棒状浮文、円形浮文を加える。口縁内面を波状文や扇形文、円形浮文などで加飾するものも多く、また口縁内面に貼り付け突帯をもつものも散見される。同種の頸部には、貼り付け突帯を数条めぐらせるものもあるが、凹線文を主体とする一群も認められる。IV期を細分するための指標となるであろう。また、口縁部は発達するものの、櫛描文などの装飾を加えず、無文化の傾向がうかがえる資料もあり、次期への過渡的様相を示している。壺Aは播磨地方の強い影響下にあるものであり、その変遷は当該地方の編年観を適応して追求することが可能である。壺BはIII期よりも大型のものに変化し、口縁部に凹線文をもつものや、頸部に突帯文をもつものが現れる。壺Cは器形の変化に富み、形態の細分が進むことは先に触れた。ただし、直線的にのびる口縁部を凹線文で飾ることに大差はない。壺Fの無頸壺は、口縁端部が段状に突出したものがみられる。

甕は、甕B_2が主体となり、いわゆる「ハネ上げ口縁」を呈するものが多い。口径、器高からみて、大型のものと小型のものに分けられる。体部最大径は口径を凌ぐようになり、その位置も体部の中央まで下がる。内面をヘラ削りで調整するものが確実に存在するが、その範囲は下半部のみにとどまり頸部には達しない。

高杯は出土量が増加し、III期から続く高杯Aのほかに新たに高杯Bが登場する。高杯Aは口縁部を凹線文で飾るものが一般的となる。また、杯部と口縁部の境界のみに凹線文を施すものも少なくない。高杯Bは口縁端部の垂下が未発達のものと、大きく垂下して凹線文を施すものがあり、両者はIV期の中での時期差を示すものであろう。

器台は、脚部が開くAがあるが量は少ない。幅の広い凹線文を施している。

鉢は、量が増加して鉢Aがみられる。内湾する口縁部に凹線文をもつものもある。また、口縁部を内側に拡張して、多条の凹線文を施す台付のものが散見されるが、播磨地方からの搬入と考えて大過なかろう。

蓋は、隆起の少ないつまみをもつAが存在している。ただし、III期に遡上する可能性もなくはない。実例の少ない器種である。

このIV期は、壺Aや鉢Aにみられるように播磨地方の影響が強く及んでいることが明らかであり、さらには摂津地方の影響も看取される。このため、畿内や瀬戸内地方の土器編年を適応させて様式を設定し、かつ共時性を追求することが可能と思われるが、そのような作業が可能であるのもこのIV期を最後とする。

V　期

文様からいえば、壺、甕、高杯、器台などの各器種の口縁部にほぼ普遍的に施される擬凹線文の手法に斉一性が認められる時期で、第V様式に該当する。壺と甕の内面ヘラ削りが頸部にまで及ぶことも大

きな特徴である。出土量は、比較的多い。

器種は、壺、甕、高杯、鉢、器台、蓋など大半のものが認められる。

壺は、広口壺や長頸壺、短頸壺がある。広口壺では壺A_5が主流となり、Ⅳ期に発達した口縁部をもつものは払拭される。長頸壺や短頸壺には装飾を加えないものが一般的となる。扁球形の体部からわずかに外反する口縁部をもつ台付壺なども、この時期に特有のものである。壺Bはこの時期には消失しているようであり、器種の再編がなされたことが想像される。

甕は、口縁部の端面を拡張させて擬凹線文を施す甕B_4が中心となる。体部は倒卵形を呈し、その最大径はほぼ中位にある。底部は丸底ぎみの平底となるものもある。器表に丁寧なヘラ磨きを施すものも増加してゆく。

高杯は、A_1の発展形態であるA_2が出現して主座を占める。杯部と口縁部の境界に突帯を施すものもある。擬凹線文をもち、高杯Cに先行するものも存在すると考えられるが、七日市遺跡では確認できなかった。

器台は、Ⅳ期に引き続きAがみられるが、新たに擬凹線文をもつ器台B_1が現れる。ただし、口縁部の発達は未熟である。

鉢は、A、B、Cの各器種が出揃い、器形の大小や脚の付加など多様な展開を示す。

蓋は、つまみが発達したBが現れる。

擬凹線文に特徴づけられるⅤ期は、器形、文様、技法など広く日本海沿岸部の様相と足なみをそろえている。近年、丹後・京都丹波では当該時期の土器の編年的研究が活発に行われて成果をあげており(7)、その考えを援用すれば、ここで示すⅤ期の資料は第Ⅴ様式の古相を呈するものと考えられる。

Ⅵ　期

この時期は、擬凹線文がさらに発達して、各器種の口縁部を幅広く飾ることに特徴づけられる。二重口縁の定着もこの時期に認められる。また、庄内式の影響を被ったと考えられる器種や技法が散見されることも看過できない。なお器種は豊富であるが、土器の出土量は減少する傾向にある。

器種は、壺、甕、高杯、器台、鉢、蓋などがそろう。

壺は、二重口縁壺のDが主となる。壺D_1は庄内式そのものとみなしてよいものであろう。一方壺D_2は、Ⅴ期にみられた壺A_5の口縁部がさらに成長したもので、上方にのびる口縁外面に幅広く擬凹線文を施したものである。なお確実ではないが、短頸の壺Eもこの時期に帰属する可能性が高いと思われる。

甕は、Ⅴ期の甕B_4の口縁部がさらに上方に拡張されて甕C_1へと変化を遂げる。そして、その口縁部が外傾するものが多くなる。なかには通有のものとは異なる施文具を使用したと考えられる擬凹線文を施す甕C_1が少数認められるが、北陸地方との交流を示唆するものかもしれない。外面は刷毛目調整を行うものが大半を占める。ただし、口縁部の形態にB_1とB_2の特徴を保持したもののなかに叩きを施すものも確認される。内面はヘラ削りを行い器壁を薄く仕上げており、庄内式甕の形態と技法を継承したものである。

高杯は、A_2のほかにC_1が加わる。高杯A_2はⅤ期のものより杯部が浅く、口縁部との境界が甘くなる。高杯C_1は「S」字状に屈曲した口縁部をもつもので、擬凹線文を施す。

器台は、B_1の口縁部を拡張されたB_2に変化し、さらに装飾器台が登場する。

鉢は、底部を穿孔したBが出現するが、AやCもバラエティーに富んだものが存在している。

蓋は、Bのみとなる。笠形は深く、器高が高くなり、つまみも発達する。口径の大小によって分化が進むようである。

このVI期は、日本海沿岸部の特徴である擬凹線文が著しく発達を遂げる時期であり、かつ畿内との交流も確実に存在する時期である。第V様式後半～末から庄内式並行期に該当する時期であり、将来細分されることが予測される。

VII 期

各器種には発達した口縁部の形態をとどめるが、VI期に盛行した擬凹線文が消失することが大きな特徴である。さらに甕Eや小型丸底壺・小型器台が出現し、布留式の影響の傘下に加わる段階である。出土量は少ない。

器種は、壺、甕、高杯、器台、鉢がある。

壺は、VI期にみられた壺D_2から擬凹線文が消失して壺D_3に変化する。V期の壺A_5からVI期の壺D_2をへて壺D_3へ変遷する型式組列を確認することができる。ただし、壺D_1も口縁部の屈曲と端部から鋭利さが失われたものが存在している。球形の体部に直線的に開く口縁部をもつ直口壺も、この時期に帰属する可能性が高い。いずれにしても、装飾性を一切否定したかのごとくである。

甕は、VI期の甕C_1から擬凹線文が消失して甕C_2となる。もはや平底を保持するものはないと思われる。V期の甕B_4からVI期の甕C_1をへて甕C_2へ変遷する型式組列を確認することができる。器高の低い甕C_2のなかには、低い脚を取りつけるものも現れる。口縁端部をよこなでで丁寧に調整し、丸くおさめるものもあるが、擬凹線文の喪失がVI期に遡る可能性を示唆している。また典型的な布留式甕である甕Eと、その影響下に成立した口縁部が「く」字状に屈曲する甕が併存している。いわゆる山陰系の甕も、この時期には確実に存在している。

高杯は、VI期の高杯C_1から擬凹線文が消失して高杯C_2と変化する。ただし類例は乏しい。V期とVI期に普遍的に認められた高杯A_2は、杯部が退化して浅くなり高杯Eへ変化を遂げ、高杯の主流を占めるようになる。

器台は、VI期の器台B_2から擬凹線文が消失して器台B_3と変化する。V期の器台B_1からVI期の器台B_2をへて器台B_3へ変遷する型式組列を確認することができる。一方、小型の器台Dも出現してD_1とD_2が存在している。この時期以降、大型の器台は消失するようである。なお、山陰地方を分布の中心とするいわゆる鼓形器台は確認できなかった。

鉢の範疇に含めたいわゆる小型丸底壺が登場し、畿内で検証されたような体部の大型化に時期差が看取できる形態の変化を示している。

ミニチュアの土器の多くも、この時期の所産であると思われる。

VII期は布留式に並行すると考えて大過ないが、擬凹線文の喪失をすべて当該時期に比定するものではなく、若干は前時期に所属するものもあると思われる。この時期の様相は複雑で、甕を例に挙げれば、搬入されたと考えられる布留式甕とそれを模倣して在地で製作された甕、そして伝統的に製作が継続されてきた甕C_2が混在している状況を呈している。確かに壺、甕、高杯、器台では、少なくともV期以降の型式組列を追認しうる資料が豊富であるが、それらはこの時期で姿を消し、やがて新たに登場した布留式の甕や小型丸底壺などに席巻されてゆく様相が明瞭にたどれる。

なお七日市遺跡では、このVII期を最後に古墳時代後期まで、しばらく空白の時期が存在することになる。

(2) 土器の変遷と動態

土器からみれば、七日市遺跡では弥生時代前期後半に集落の形成が開始され、以後古墳時代前半期まで間断なく営まれたことが明らかとなった。次には、提示した編年観から惹起されるいくつかの問題を指摘し、土器の様相について触れることにしたい。

Ⅰ期の土器は、数量こそ恵まれないものの、当該時期に集落の形成がおこなわれたことを示す確実な資料である。丹後や京都丹波に視点を転じたとき、Ⅰ期の土器に貝殻施文による直線文や羽状文が確認され、日本海沿岸部に特有の文様構成であることが指摘されるが、本遺跡においてその文様を見出すことはできなかった。このことは、七日市遺跡における弥生文化の定着には、日本海からの影響下におかれるのではなく、むしろ瀬戸内や畿内からの流入を考慮することを示唆するが、確証は乏しい。

続くⅡ期とⅢ期は、文様からいえば櫛描文の採用に斉一性を見出せる時期である。とりわけⅡ期は、櫛描直線文と櫛描波状文を交互に配して著しく加飾する手法が開花するが、これは従来播磨地方の影響と考えられてきた。しかし、近年における丹後や京都丹波での類例資料の蓄積は、そうした手法が単に播磨地方にとどまるものではなく、広く近畿北西部に認められることを明らかにしつつある[8]。分布の中心と起源は確かに播磨地方にあるものの、丹後・丹波を包括した広い範囲に共通する文様構成であると把握しておきたい。また、櫛描文の複帯構成と単帯構成の様相は、先学の説くとおりそれが時期差を示すことを傍証する資料も散見され、将来Ⅱ期の細分の指標となると予測される。

Ⅲ期は、Ⅱ期からさらに発展した様相がうかがえる。この時期に器種構成は安定と充実を図り、出土量も増大する傾向にある。このことは、当該時期に遺跡自体も発展を遂げることを意味するのであろう。

凹線文が文様の主流となるⅣ期には、器種・文様・技法などすべての点で瀬戸内や畿内と同様の歩調をとることが知られる。わけても、壺Aの変遷は播磨地方の編年をスムーズに援用することが可能であり、播磨との交流がいかに大きいものであったかを教えている。土器以外の資料を例に挙げれば、播磨を含めて中部瀬戸内に稠密な分布がみられる分銅形土製品は、加古川を北上して西脇市大垣内遺跡[9]や七日市遺跡の北にあたる福知山市ケシケ谷遺跡[10]、久美浜町橋爪遺跡[11]からも出土している。このことを考慮にいれても、七日市遺跡が南北の物流の結節点として果たした役割を過少評価してはなるまい。播磨地方からの影響のみならず、摂津をも含めた瀬戸内と畿内からの物流の波及は多大であったろう。

続くⅤ期には、前代までの様相は一変する。この時期、中部瀬戸内を除いて畿内では回転技術を駆使する施文方法を放棄して、無文化の傾向をもつことは周知のとおりである。七日市遺跡では、Ⅳ期の末には明らかに加飾を否定して無文を指向する土器が存在するが、Ⅴ期にいたり広く山陰や北陸に共通する文様要素としての擬凹線文を導入することになる。換言すれば、技術的に回転力に依存する装飾を否定する畿内と訣別し、いまだ回転技術を使用した擬凹線文を多用することによって汎日本海地域への参入を果たしたとみることができる。この擬凹線文を、同じく回転技術を利用するⅣ期の凹線文を同一の系譜において論じることは慎まなければならない。なぜなら、指やヘラに布や皮をあてて施したと想定される凹線文に比較して、擬凹線文は不確実ながら施文具を使用していると考えられるからである。すなわち、回転力と工具を使用して、描き始めから終わりまで一気に施文する手法は、Ⅲ期に盛行するA種櫛描文以来の手法であるが、言うまでもなく櫛描文と凹線文と擬凹線文とを単純な系譜論で語るにはいまだ根拠は乏しい。

この新たな施文方法を採用することによって、Ⅰ期以降追認しえた諸器種の型式組列が断絶するものも現れる。このため、器種の再編がなされたことも想像に難くないのであって、この時期を境として擬凹線文を採用する壺A_5、壺B_4、器台B_1、そして予想される高杯C_1の先行形態などの器種と、擬凹線文を採用しない器種に大きく二分されることになる。そしてこの時期以降、それぞれが系譜を相違する独立した型式組列を示しつつ変遷し、器種の消長が認められることになる。

このようにみてくると、七日市遺跡に波及した影響力はⅣ期までは「南」からものが強いが、Ⅴ期に一変して「北」からの影響力がにわかに高まり、ついに逆転したことが明確になる。こうした現象を、南北の「浸透圧」が逆転するものと表現したことがあるが(12)、まさに七日市遺跡における最大の画期をこの時期に設定することに異論はなかろう。

こうしてⅥ期には、Ⅴ期に胚胎したいわば擬凹線文を採用した器種（擬凹線文型器種と仮称する）と擬凹線文を採用しない器種（非擬凹線文型器種と仮称する）が錯綜することになる(13)。擬凹線文型器種は、口縁部を拡張して幅の広い施文帯を獲得するという変遷の方向が明らかであり、円滑な組列を構成している。もはや、在地形の土器群と呼んでも差し支えなく、旧国別を単位とする地域性を帯び始めるようである。一方、この時期の非擬凹線文型器種は、二重口縁の壺D_1や叩きとヘラ削りを併用した甕B_2、口縁部が大きく開く高杯A_2など庄内式の様相を色濃く示した土器群である。それぞれの量的比率をみれば、前者を主として、後者は従の関係にある。後者のなかに典型的な庄内式の土器を見出すことはできないが、ここでは畿内色の強い後者が確実に存在する点を強調しておきたい。

Ⅶ期にはいると、擬凹線文型器種には粗雑化がすすみ、その器表からはもはや擬凹線文が消失することになる。非擬凹線文型器種は典型的な布留式の土器群で占められるようになる。それぞれの量的比率をみれば、前者を従として、後者が主の関係にあり、Ⅵ期とは逆転した様相を示す。また単純に数量比で後者が前者を凌いでいるのみならず、例えば甕に顕著なように布留式甕を模倣したことが明らかな土器も確実に認められるのであって、その波及力はきわめて強い。非擬凹線文型器種が擬凹線文型器種を量と質で凌駕する状況は、すなわち布留式が在地型の土器を席巻して、やがてそれらを駆逐してゆく姿と軌を一にした現象と思われる。

第2項　石器について

出土した石器は時期を明確にする土器と共伴した例が少ないため、時期別の変遷や消長をたどることができない。ここでは、諸器種についての若干の観察結果を述べた後、器種構成とその数量を提示して七日市遺跡での石器の保有形態を考え、さらにそれらを他遺跡と比較することにする。

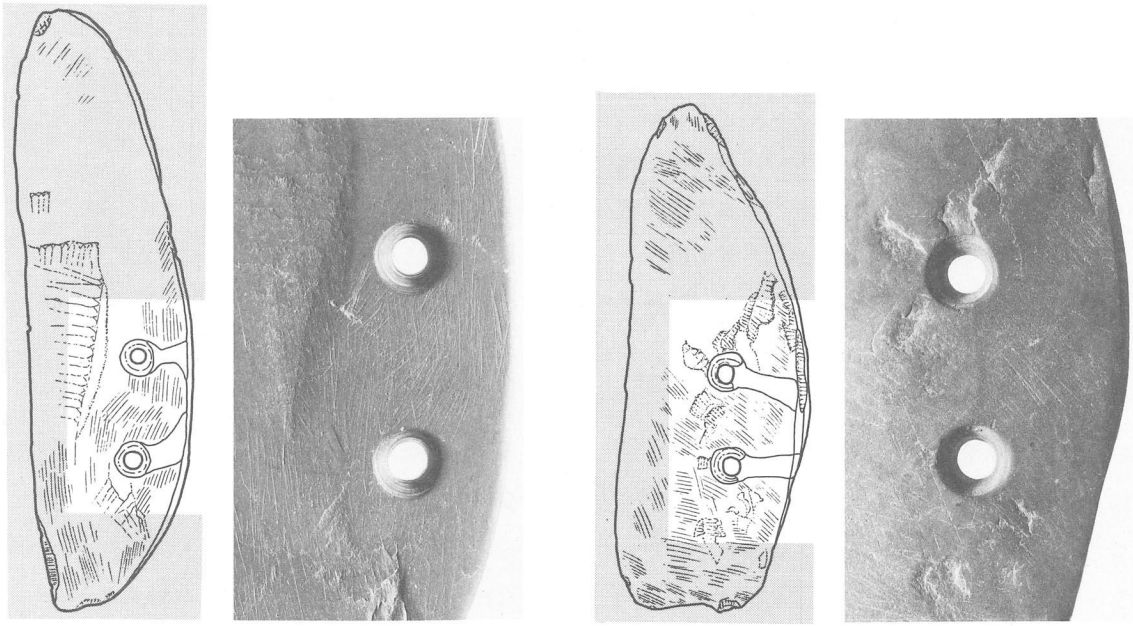
(1)　石器の観察

・石庖丁

使用方法と製作工程について、概観しておく。

石庖丁の機能と使用方法については、対象を稲に限定したうえで穂摘具とみなす意見が主流を占める。ここでは、そうした前提に基づくことにする。

出土した石庖丁の紐孔周辺の磨滅の痕跡には規則性があり、例外は認められなかった。すなわち、片

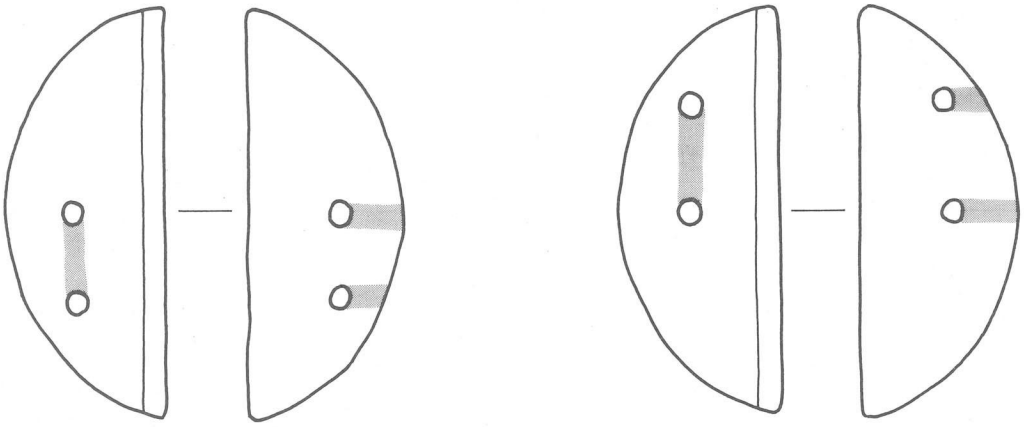


第41図　　石庖丁紐孔の磨滅の痕跡

刃の鎬のみられるＡ面では、双孔に相接するように刃部に平行する痕跡が顕著であり、Ｂ面では個々の孔から背に向けての痕跡が確認されるのである。この痕跡から想定されることは、双孔に通した紐を利用するとき、片刃を下向きにつまりＢ面を上に向けて、右手の掌におさめることになる。いくつかの資料の中には、Ｂ面の右手親指が触れる位置に、著しい磨滅痕が認められるものもあり、長期間の使用が想像できるものもある。こうした使用方法は、木製穂摘具の場合でも確認されるという[14]。さて、そのようにして使用するとき、紐孔の位置が中位より下方にあるａの場合はより上位に幅広い刃部を獲得することができる。しかし、紐孔が中位より上方に位置するｂでは、手前に刃部が延びて、対象物と接する部分には十分な刃部が確保されない。それでは、石庖丁ｂはＡ面とＢ面の表裏を逆転させて、片刃を上向きにして使用したのであろうか。石庖丁ｂに比定される43や44（図版112）を観察するとき、紐孔周辺の磨滅の痕跡はＡ面とＢ面で石庖丁ａと同様の原則は保持されているのであって、つまりＡとＢを逆転して使用したのではないことが判明する。Ｂ面を上向きとして、かつ対象物との接点に刃部を確保するためには、これを左手に装着する以外には考えられない。ただし、紐孔の磨滅痕が一定しない資料も散見され、使用方法が固定化されていたとは断定しかねるが、石庖丁ｂは左利き用の穂摘具である可能性はいちがいに否定できないことが分かるのである。

ただし、残された問題も少なくない。七日市遺跡出土石庖丁のうち形態の判明するものに対する石庖丁ｂは3.6％である。例えば尼崎市田能遺跡[15]では、形態の明らかな108点の資料のうちｂは１点で0.9％の数値を示している。石庖丁ｂの示すこうした比率の意味が、今後検討されなければならない。

もうひとつの問題は、石庖丁は個人所有に帰属するか否かの点である。石庖丁ｂは確かに左利きの人間にとっては使用の便が考慮されているものであって、逆に右利きの人間がこれを装着すれば効率が下がることは想像に難くない。もしそうであるならば、石庖丁ｂは左利き専用の穂摘具として属人的な性格を帯びるのであるが、こうした用具が個人に帰属するか、または集団に帰属するかは論議の分かれる



第42図　石庖丁の2種

ところであり、かつそれはまた別の大きな問題であって、十分な検討が必要とされるのである。

・不定形石器

不定形石器は弥生時代の石器の中では最も顧みられることが少ないもので、その機能、用途については、他の時代の不定形石器と総称される石器と同様、ほとんど解明されていない。本報告においては、楔形石器や石匙など、定型的な石器とすることができるものについても不定形石器のなかに含めているのも、後述のようにいくつかの問題点があるためである。今後、技術形態学的、あるいは機能的にまとまりが抽出できるものは不定形石器からは分離していくべきであろう。

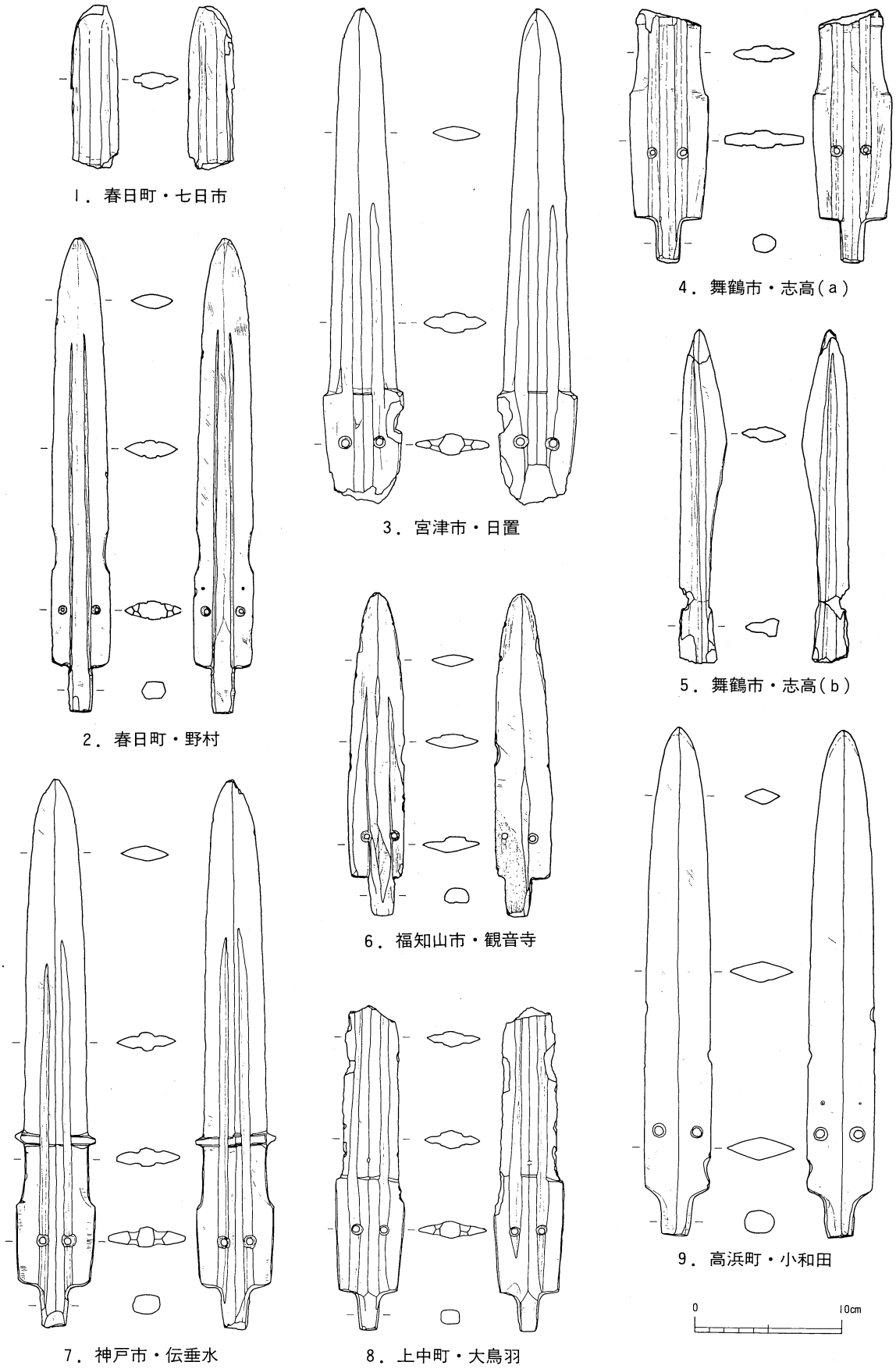
Ⅰ類とした楔形石器は、弥生時代はもとより前期旧石器時代～古墳時代にいたるまで、その存在が確認されているもので、機能には諸説があるが、「何かを割るためのクサビ」とみるのが有力であろう。

ところで、七日市遺跡出土のサヌカイト製の剥片は、不定形石器Ⅳ類の素材となっているものを除いて、平坦な打面をもたず線状打面となっていたり、打面部がハジケ飛んでいるものがほとんどである。こうした特徴を持つ剥片が通常のフリーフレイキングで剥離されることは少なく、剥片生産の段階において、何らかの異なる手法が用いられている可能性がある。このことは、七日市遺跡ではサヌカイト製の石核がほとんどと言ってよいほど存在しないことからも想定される。

これに対して、楔形石器に認められる反対側の刃部にまで達するような剥離痕をみると、石器の大きさに近い、薄手の剥片が生じていることが考えられ、また、打面がハジケ飛んだり、線状打面となることも充分考えられる。楔形石器に見られるような両極打法の剥片生産技術としての有効性には否定的な見解が出されており[16]、剥片や狭義の石器との対応関係も今回は分析することができなかったため、早急な結論は控えねばならないが、今後、楔形石器の一部が、石核である可能性も考慮して分析を行い、器種の分類をする必要があろう。また、こうした視点は弥生時代における剥片生産技術の分析においても重要であると考えられよう。

・磨製石剣

Ⅰ類のいわゆる「鉄剣形石剣」が7点と、Ⅱ類の銅剣形石剣が1点出土している。銅剣形石剣は、鋒



第43図　近辺出土の銅剣形石剣

と基部を欠損したもので、砥石として再利用した後にO区の柱穴に投棄されたものである。このほかに、圃場整備事業に伴う調査においても、銅剣形石剣の破片が1点出土している。また七日市遺跡の南にあたる野村から、完形の銅剣形石剣が出土したことはよく知られている[17]。野村は七日市遺跡の南端にあたり、検出された旧河道2の上流部に想定されるため、広義の七日市遺跡とみなしてよかろう。このように七日市遺跡では、合計3点の銅剣形石剣が出土していることになる。

銅剣形石剣については、かつて分類と編年を試みたが[18]、それによれば七日市遺跡の破片は2点ともII式中段階に、野村出土石剣はII式新段階に比定できる。銅剣を模倣する意識は認められるものの、断面形態をみれば翼を形成するのではなく、2条の樋を研ぎ出して脊を表現する型式である。今回出土した銅剣は、樋の幅が広く、そして刳込の節帯が強調されたものである。刳込を省略した宮津市日置石剣[19]や上中町大鳥羽石剣[20]に近似するものか、とりわけ節帯を誇張する尼崎市田能石剣[21]や神戸市伝垂水石剣[22]に近似するものか判然としないが、II式の範疇にはおかれる石剣である。一方野村石剣は、樋は細く条線状に退化し、刳込は表現されるものの刃部を円弧状に削りとっただけのもので、退化が著しい。元部に面とりを行わないことも銅剣から得られる情報が乏しいことを反映したもので、いわゆる有樋のII式の中でも新段階の石剣である。これらII式銅剣形石剣は、他の遺跡での事例によればIII期からIV期に帰属するものであって、V期までは残存しない。また銅剣形石剣は、剣形青銅祭器である銅剣を模倣したものであり、あくまで祭器として使用されたものである。

このように、七日市遺跡では祭器である銅剣形石剣を、わずかな時期差を示しつつ、少なくとも3点保有していたことが明らかとなった。銅剣形石剣の時期は、野々間遺跡[23]から出土した外縁付鈕式銅鐸や扁平鈕式銅鐸の帰属時期と重複することが予想される。これらの銅鐸を保有していた母集落は、七日市遺跡をおいてほかには考えられないことから、七日市遺跡では銅剣形石剣と銅鐸を同時に取得していた蓋然性はきわめて高いといえよう。

(2) 石器の器種構成

七日市遺跡から出土した石器の数量は、第6表のとおりである。

この石器の組成のうち、石庖丁と石斧に着目して、地域の様相と労働内容の相違に言及した酒井龍一氏の研究方法[24]に則して考えてみよう。氏は、石庖丁を穂摘具、太型蛤刃石斧を伐採具と労働の内容を確認し、出土する石器の数量は労働量を具現するとみなす。そして、西日本における代表的な拠点集落の石器組成を分析し、次のモデルを設定している。すなわち、石庖丁の組成が80%を占め、穂摘活動量が最も大きな畿内（瀬戸内海）型、石斧類が90%前後を占め、樹木の伐採活動が盛んな伊勢湾型、最後に石庖丁は40%前後であるが、太型蛤刃石斧も同数程度を占める北九州型の諸モデルである。そして、それぞれのモデルは当該地域の一般的な活動内容を示していると説く。

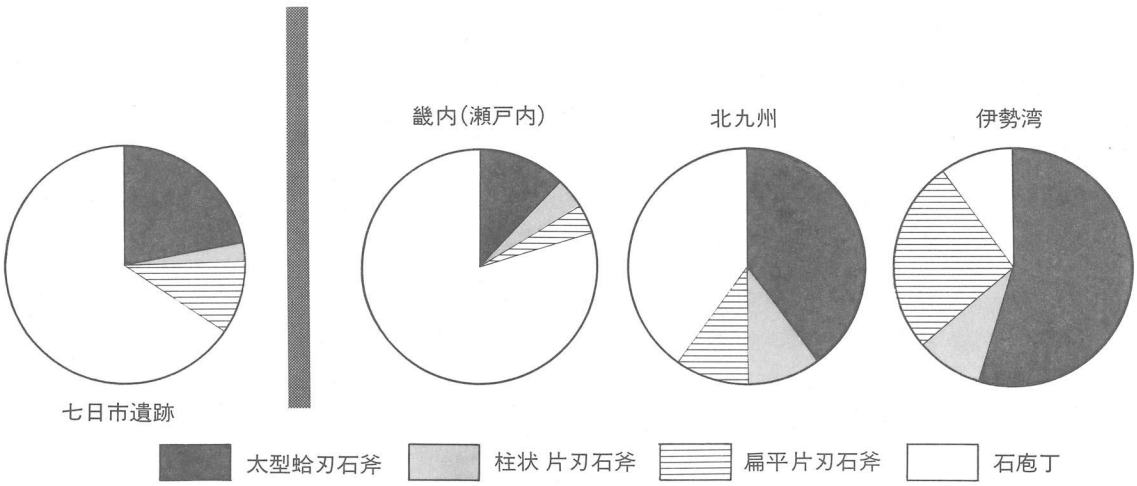
そこでこの方法論に沿って、七日市遺跡の石器組成を検討してみよう。対象となる石庖丁は183点、石斧は96点でその内訳は、太型蛤刃石斧が62点、柱状片刃石斧が7点、扁平片刃石斧が27点である。それぞれの組成率は、石庖丁65.6%、石斧は34.4%を占め、内訳は太型蛤刃石斧が22.2%、柱状片刃石斧が2.5%、扁平片刃石斧が9.7%である。調査面積は約16,780m²であるから、単位面積あたりの出土数は、石庖丁が1.09点／100m²、太型蛤刃石斧が0.36点／100m²、柱状片刃石斧が0.04点／100m²、扁平片刃石斧が0.16点／100m²の数値を得る。また、石庖丁に対する太型蛤刃石斧の占める割合は、33.9%となる。こ

第6表　出土石器数量一覧

分類	器種	型式	小計	小計	合計
農具	石庖丁	I	21		
		II	2		
		III	5		
		IV	2		
		V	11		
		VI	8		
		不明	134	183	
		大型	2	2	
		未製品	115	115	300
工具	石斧	I	62		
		II	7		
		III	27		
		IV	1		
		未製品	42	139	
	石錐	I	2		
		II	8		
		III	10	20	
	不定形石器	I	36		
		II	1		
		III	4		
		IV	47	88	
	砥石		132	132	379
狩猟具・漁撈具・武器	打製石鏃	I	26		
		II	15		
		III	11		
		IV	11		
		V	10		
		不明	35	108	
	打製石剣		5	5	
	石錘		2	2	115
加工具・食物調理	敲石・磨石		27	27	27
祭器	磨製石鏃	I	3		
		II	3	6	
	磨製石剣	I	7		
		II	1	8	14
					835

の比率は、石庖丁が優位を占めることを明らかに示しているが、畿内型とされる80%に及ぶものではない。伊勢湾型ほど小さくはないが、畿内型と北九州型のほぼ中間の数値となる。さらに、石庖丁に対する太型蛤刃石斧の占める割合は、畿内型ほど小さいものではないが、両者が同数になる北九州型に及ぶものでもない。つまり、七日市遺跡の石器組成率は、「穂摘活動主体型」と「穂摘・伐採両活動型」の中間形態を示していると考えられる。このことはとりもなおさず、畿内周辺部における可耕地がさほど広い範囲で獲得できない集落での活動内容、すなわち完全に水田耕作に依存することなく、樹木の伐採活動をも取り入れた活動内容を示すものともいえよう。

次に、峰屋晴美氏の分析方法[25]に沿って検討を加えてみよう。氏は、畿内の主要集落遺跡の石器の分析を通じて各遺跡の性格を論じ、さらに石器・石材の管理・所有・流通形態について考察している。その方法を七日市遺跡に敷衍すれば、打製石器の占める割合が31.0%でありBタイプの遺跡と定義づけられよう。打製石器が85%以上を占めるAタイプの遺跡と対峙することになる。また七日市遺跡では、比較的多量のサヌカイト剥片が出土しているため、遺跡内で使用する石器をほぼ自給自足していたものと考えられる。すなわち、氏の規定によるB－Iタイプに相当することになろう。さらにその中で、「石庖丁1個を生活の単位と仮定して」遺跡の比較を行っている。七日市遺跡では、石庖丁1個あたりの「打製尖頭器」数は0.6個、石錐は0.1個とな



第44図　石器組成比率の対比（酒井論文を一部改変）

り、その数値はかなり低いものである。このことは、もちろん遺跡自体の物理的な削平の程度や発掘にあたっての石器の回収率を十分考慮しなければならないが、打製石器の生産が小規模であったことを示すものと評価しておきたい。

〔註〕

（1）播磨町教育委員会・播磨町郷土資料館　『播磨大中遺跡の研究』　1990年

（2）石野博信　「播磨の中の出雲と筑紫」『兵庫史の研究』　松岡秀夫先生傘寿記念論文集　1985年

（3）福永伸哉　「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』　第32巻第1号　1985年

（4）京都府埋蔵文化財調査研究センター　『京都府弥生土器集成』　1989年

（5）佐原　眞　「近畿地方」『弥生式土器集成　本編II』　1968年

（6）例えば、龍野市尾崎遺跡や赤穂市野田遺跡などで出土している。
龍野市教育委員会　『尾崎遺跡』　1977年
松岡秀夫　「野田遺跡」『赤穂市史　第4巻』　1984年

（7）京都府埋蔵文化財調査研究センター　『京都府弥生土器集成』　1989年

（8）前掲註7に同じ

（9）兵庫県教育委員会　『西脇市大垣内高島遺跡　発掘調査現地説明会資料』　1987年

（10）京都府埋蔵文化財調査研究センター　「ケシケ谷遺跡」『京都府遺跡調査報告書　第10冊』　近畿自動車道舞鶴線関係遺跡　1988年

（11）京都府教育委員会　「橋爪遺跡」『埋蔵文化財発掘調査概報　第2分冊』　1981年

（12）種定淳介　「加古川と由良川－モノの移動について－」『生産と流通の考古学Ⅰ』　横山浩一先生　退官記念論文集　1989年

（13）土器の器種が特定の文様の有無によって区分されることを構造的に把握する方法は、桑原久男氏によりすでに提示されている。
桑原久男　「畿内弥生土器の推移と画期」『史林』　第72巻第1号　1989年

（14）工楽善通　「木製穂摘具」『弥生文化の研究』　第5巻　1985年

（15）尼崎市教育委員会　『田能遺跡発掘調査報告書』　1982年

(16) 阿部朝衛 「バイポーラーテクニックの技術的有効性について」『考古学論叢Ⅰ』 芹沢長介先生 還暦記念論文集 1983年
(17) 余田邦夫 「丹波春日町出土の磨製石剣」『考古学雑誌』 第54巻第4号 1969年
(18) 種定淳介 「銅剣形石剣試論(上)、(下)」『考古学研究』 第36巻第4号、第37巻第1号 1990年
(19) 梅原末治 「日置発見ノ石剣」 『京都府史蹟勝地調査会報告』 第12冊 1923年
(20) 上中町教育委員会 『大鳥羽遺跡Ⅰ』 上中町文化財調査報告第3集 1984年
(21) 前掲註15に同じ
(22) 村川行弘 「兵庫県神戸市垂水付近出土有樋式石剣」 『考古学雑誌』 第54巻第4号 1969年
(23) 春日町 『野々間遺跡－兵庫県氷上郡春日町野上野所在銅鐸出土地－』 1990年
(24) 酒井龍一 「石器組成からみた弥生人の生業行動パターン」『文化財学報』 第4集 1986年
(25) 蜂屋晴美 「終末期石器の性格とその社会」『藤澤一夫先生古稀記念 古文化論叢』 1983年